
バカとキセキと真・恋姫†無双

和尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとキセキと真・恋姫†無双

【Nコード】

N4487T

【作者名】

和尚

【あらすじ】

『バカとテストと召喚獣』と『真・恋姫†無双』のクロスオーバーです。

不慮の（？）事故により、『真・恋姫†無双』の世界に飛ばされてしまった明久達。古代中国を舞台に、三国志世界の壮絶な戦いに巻き込まれていく……はずだったんですが、時代や世界が変わったくらいじゃ、彼らのバカは止められない。バトルもシリアスも死亡フラグも……お構いなしに突っ走る！！

いろんな意味で行く末が心配なこの外史、はたして無事に終わるのか！？

「それは物語が？ それとも僕の命が？」 b y 主人公

……未熟者の拙い文章ですが、暇つぶしにでもどうぞ。

第1話 バカとワープと流れ星（前書き）

初見の方は初めまして。『バカ恋』でごひいきにしていたいただいた方はお久しぶりです。和尚です。ようやく帰ってきました。な、長かった……。

本作品は『バカテス』と『真・恋姫』のクロスです。

前作・『バカとキセキと恋姫＋無双』とのつながりは特にありません。

基本バカ、時々シリアスで行きます。その他、基本方針は『バカ恋』と変わりません。

あと……忙しさがパないので、更新は前よりは遅くなるかも……。

ブランクが長いので、内容的にも若干不安ですが……生暖かい目で見守っていただければと。

では……どうぞ。

バカとキセキと真・恋姫＋無双、はじまります。

第1話 バカとワープと流れ星

夏の終わり。残暑……と言っているくらい時期。

セミ達の大合唱もそろそろ終わり、季節の移ろいを感じ始めるころ。まだまだ熱いけど……そんなもの気にならないくらいに、吹き抜ける風は爽快だ。

部屋の中にこもっていることがバカバカしくなるくらい、そんな晴天の日に……

「……何が楽しくて、こんなせまっ苦しい教室で妖怪ババアにこき使われてるんだか……」

「……あんたらは本当に、年長者に対しての敬意ってもんを知らないねえ……」

敬意？ 何それ、おいしいの？

……とまあ、僕こと……吉井明久の心の声だったりする。



ここは文月学園。

テストの成績によって強さが変わる『召喚獣』を使って戦う、『試験召喚システム』というものを導入している試験校だ。

その高等部第2学年の、最下級と呼ばれる『Fクラス』に……在籍クラスでもあるこの教室の床に、僕は綿の少ない座布団を敷いて座っていた。

教室にいるのは、僕だけではない。

僕の左には、鬘のような赤髪を逆立てた、野生的な風貌の男。こいつは坂本雄二、一応このクラスの代表で、最優秀成績生徒。

さらにその向こうに、性へのおくなき探究心で学園にその名をとどろかせる、ムツツリーニこと土屋康太、そして学園にその名を知らぬものなしの稀代の美少女・木下秀吉と続く。

そして僕の右側には、ポニーテールと強気な目、そしてスレンダーな体が特徴の美少女・島田美波、そして……プロポーションに成績、そして料理の腕……どれをとっても殺人級の美少女・姫路瑞希さんが座っている。

そして最後に……僕ら全員の視線の先に……今日ここに僕らを呼び寄せた張本人であり、一応『試験召喚システムの開発者』……つてことになっている、この文月学園の学園長……藤堂カヲルの姿があった。うん、今日もキモイですね。

「待ちな、何だいその『ホントは他の誰かが作ってます』と思われそうな紹介文は」

「え、違うんですか？」

「正真正銘私が開発したシステムだよクソジャリ。ったく……こんな利発そうな雰囲気を見て、どこに疑う要素があるっていうんだい？」

「理髪？　今の会話でどこに美容院が出てくるんでしょうか？」

「字が違うんだよ、ったく……本当に話していて疲れるガキだね」

ため息混じりに言ってくる、妖怪一步手前の老婆。

まあ、その都市で痴呆にもならず、この学園の運営をこなしてる手腕は買うけれど（といっても、経営は他に任せて自分は研究ばかりやってるって話だけど）、とりあえず……

「で？ 俺達は今度は何でここに呼び出されたんだ、ババア？」

と、面倒くさそうな雄二の声。

このババア、帰ろうとしていた僕ら6人を呼びとめ、なんかやつてもらいたいことがあるとか何とかでこのクラスに居残らせているのだ。何で？

……なんか、怒られるようなことやったっけ？ 今日はいせいで、異端審問会から逃げる過程で窓ガラス数枚割ったのと……

あ、もしかして……鉄人の補習食らって腹が立ったから、どっかの部屋にかけてあった学園長の肖像画（自筆）にヒゲとちょんまげを落書きした挙句、ムツツリーニ頼んでラミネート加工してもらって男子更衣室に飾ったのがばれたとか……？ バカな、完璧に隠蔽したはずなのに……

「……なんだか、凄まじいことを誰かが考えてる気配がするんだけどねえ……まあいい、本題に入ろうか」

すると学園長は、話し始めた。

「今日はね、あんた達に召喚獣の新システムの試運転を頼みたいと思っただよ」

「「「えゝ……！？」」」

聴いた瞬間、僕ら全員の顔が引きつる。

そりゃそうだ。夏休み明け……同じように『試運転』という名目でこのババアに付き合わされた思い出は、まだ僕らの記憶に新しいのだから。

あの時は酷かった。何せ……自分の心の中の『本音』をバカ正直にしゃべっちゃうなんていうとんでもない設定の召喚獣（しかも消せない）のせいで、僕らはてんてこまいで……ううつ、思い出しただけでも、ため息が出てきそうだ。

ちなみにその後、ババア自身もきっちりしっぺ返しは食らってたりするのである（僕らの意思をそのまま反映した召喚獣の逆襲という形で）。

と、僕らのやる気名下げなムードを察したのだろうか、ババアは、「大丈夫だよジャリ共、今回ののは違うよ、ああいう設定じゃないし、そもそもしゃべらない、普通の召喚獣だからね」
「……つまりババア、前はやっぱり『しゃべる召喚獣だ』ってことを承知した上で俺達に試運転をさせてたんだな？」

「……………さて、本題に入るよ」

待てコラ、勝手に話を進めるな。

全く……大人ってどうしてこう勝手なんだろう？

まあ、そういうわけで……『試運転』と名がつく以上、僕らはそれを引き受けるつもりはない。ババアは大丈夫だと言うけれど、信用しろって方が無理だ。

そういうわけだから、今回はきっちり断ろう。こっちに何も非はないんだから、向こうも強制はできないはずだ。

「報酬は、そうだね……」

「おいババア、勝手に進めんな。悪いが俺達はこの話……」

「補習の回数を減らしてやるってのはどうだい？」

「「「やりますっ！！！！」」」

前言撤回！ 僕らの学園長は最高のババアだっ！

「そう思うなら呼称も改めなクソジャリ。まったく……まあいいや、始めるよ。その代わり……潰してやる補習の分の勉強は、きっちり自学自習でカバーするんだよ、いいね？」

「「Yes sir！！」」

とりあえず元気よく返事。うんうん、これはいい気分だね！

けど……不安もあるな……。

何せ、教育者の立場にあるババアが『補習を潰してやる』なんて言って来たんだ。……それだけ、大変な内容……ってことになるよな……一体、何させられるんだろう？

それと釣り合うだけのテスト項目があるんだろうけど……予想がつかない。

まあ、女子も一緒にいるんだし、あまり物騒なのはないと思うけど……

「それじゃ始めるよ。今回も、姫路以外の5人でやらしてもらおうからね」

と、ババア。姫路さんの召喚獣は点数が高いから、試運転には向いてないんだ。

残念そうな顔で姫路さんが一步後ずさったのを確認して、

「まあ……全員気になってるだろうから、先に今回のテスト項目を説明しとこうかね。今回の試運転は……『NPC』の戦闘動作確認さね」

「NPC? 『ノンプレイヤーキャラクター』か?」

「そうさ、試召戦争に彩りを持たせられるかと思ってね、セツトップしてみたんだ」

NPCってたしか……RPGとかに必ずある、コンピュータがオートで操作するキャラのことだよね? 敵モンスターとか、格闘ゲームの対戦相手とかの……あれを、試召戦争にも応用してみよう、と考えたのか、このババア。

なるほど……面白いかもしれない。それに、それなら……僕達に何か被害がある……ってわけでもなさそうだ。

聞けば、そのNPCを無限に発生させて、それらと僕達の召喚獣を……ちょうど、時代劇や戦隊ヒーローの殺陣みたいにして戦わせるのが今回のテスト項目らしい。その際に、学園の管理コンピュータにかかる負荷を調べるんだとか。

NPCの駆動性はかなり低くしてあって、無双じみたバトルもできるとか言うし……なんか面白そう。学園長にしては、これはいいことを思いついてくれたもんだよ。

「学園長、それは暴走してわしらに襲い掛かってくる可能性というのはいいのかの?」

「その点は特にきっちりチェックしたよ。それに、いつも通り召喚獣は物に触れない設定になってるから、そこは安心しといいいさね」

「なら安心ね、じゃ、始めましょっか」

「そうさね。じゃ、全員召喚しな」

「ん？　今回はババアもここで見てるのか？」

と、そのままパイプ椅子（鉄人が持ち込んだ）にどっこいしょと腰掛けたババアに雄二が問いかける。

たしかに、前回ババアは……システムを通してモニタリングするって、部屋を出ていったんだっけ。……まあ、クレームを避けるためかもしれないけど。

それが今回は部屋に残ってる……ってことは……

「ああ、今回のプログラミングは何も問題ないし、なるべく近くで見たいからね」

「……：前回のプログラミングに問題があるとわかっていた……と自白してくれているように聞こえるんだが？」

「さあ始めるよ、全員とっとと召喚しな！」

大人ってやっぱり汚い。

まあ、ともかく……今回は特に危険も何もなさそうなので、全員一緒に……おなじみのあのセリフを述べる。

「「『試獣召喚』ッ！！」」」

———その時、異変は起こった。

——バチバチッ、バチバチバチッ——

ん、何だコレ？

唱えたのに、なぜか召喚獣は出てこなくて……

代わりに……周囲に展開された召喚フィールドが何だかバチバチ
いって、火花なんか飛び散らせてる。……何コレ？

……こんなの始めて見るんだけど……大丈夫なの？

「心配いらないよ、召喚と同時にNPCも出てくるように設定した
んだ。これはそのせいで、サーバに負荷がかかってるだけさ」

あ、そうなんだ。ならいいか。

サーバに負荷がかかってるだけなら……ちよつとローディングが
時間かかるだけだろう。ちよつとめんどくさくはあるけど……まあ、
待ってみよう。

！
そういえば……気になったんだけど……

「ババア長、NPCって、どんなのが出てくるんですか？」

「無限バトル形式ってことは……ザコ兵士的な見た目なのか？」

と、僕と雄二の素朴な質問に、ババア長の答えは……

「ああ、それかい？ 暫定的にだけど、あんた達2人の召喚獣の姿
に、戦国時代の足軽の装備をプラスしたものにしているよ。ぴった

りだろう？」

「「オイ教育者！！」」

何だその新手のいじめみたいなのはっ！？

じゃあ何か！？ あんたはこれから、その2人（僕と雄二）を含む僕ら5人に、僕と雄二の姿をした足軽軍団を大量虐殺させる気だったのか！？ なんて陰湿な！

イメージしてみる。足軽装備の僕の召喚獣（オート操作）を、改造学ランに身を包んだ僕の召喚獣が（マニュアル操作）、木刀を一閃させて葬り去っていく光景……。

さながらそれは、僕（本物）VSドッペルゲンガー軍団……なんておぞましい。無双シーンだったのに、これでもかってくらいに爽快感とは無縁だ。

っていうか、足軽装備って……オリジナルの僕らの装備より上等じゃないか！？ 屈辱感半端じゃないぞ！

疲れた様子の僕と雄二を尻目に……なぜか美波はやる気満々で準備体操なんか始めた。……どうしてターゲットが僕だってわかった瞬間にそんなやる気出すのさ……。

それにしても……

——バチバチッ、バチバチバチッ——

………一向にバチバチが収まらないんですけど……？

さすがに、僕も、僕以外のメンバーも『おかしい』と思い始めたらしく、不穏な空気になる。

無理もない。ローディングとはいえ、長すぎだ。

バチバチ……バチバチ……

「おいババア、本当に大丈夫なんだろうな？」

「……………大丈夫だよ、静かに待ってな」

「……………不自然な間が」

バチバチバチバチバチバチ……！

「あ、あの……全然何も起こらないんですけど……いや、別のことは起こってるんですけど……」

「あ、あんまりこういうこと聞きたくないんですけど……ホントに大丈夫なんですよ、学園長先生？」

バチバチバチバチバチバチバチバチ……！

「ちょっとババア長！　いくらなんでもおかしいでしょコレ！？
さっきからバチバチしか聞こえてこないですよ！　NPCどころか
召喚獣すら出てこないし！」

「ああもううるさいねえ！！　こういうことを事前に感知するため
の試運転だろうに！」

「今ワシらがいけにえじゃと公言されたように聞こえたのじゃが！
？」

「てめえ開き直ってんじゃねえぞババア！！」

と、次の瞬間、

バツシイイイイイイイイイイイイイイイイイツ！！！！！！

「「「わあああああああああああ！！？」」「」」

ひとときわ大きい音が響いたのと同時に……教室全体に雷が落ちた
ような超ド級の衝撃が僕らを襲い……

……………直後、全てが一変した。

衝撃に耐え切れず目を瞑った僕が、再び目を開けると……

そこには……

「……………は？」

見渡す限りの……荒野が広がっていた。

……………いや、荒野って？

え、だって僕、今まで教室に……あ、そうか。コレは召喚システムの異常で召喚フィールドに映し出されてるだけの、ただのバーチャル……

……でもないみたいだ。風とか感じるし……足元の土や草の感触もある。

つまり……正真正銘の屋外、ってことか……。

……………で、でもそれだと……………

……………今のバチバチで僕、どこから知らないところにワープした、ってことになっちゃうんだけど……

バカとキセキと真・恋姫†無双……始まり始まり
(ぱちぱちぱち)

第1話 バカとワープと流れ星（後書き）

やっぱりギャグを入れるタイミングとか、内容とか……カンが戻るまでにしばらくかかりそうです。

しかも、なんか導入部分だけで終わっちゃった……次の話も、可能な限り早く投稿したいです。

あ、それと……皆様に1つ質問など。

この『真・バカ恋』、前作『バカ恋』から、だいぶ書式を変えてみました。会話文とか、なるべく間を空けるようにして、読みやすく……っていう意図なんです。前のは、ギッチギチにつまっていた印象があるので。

で、この変えた書き方なんです……かえって読みにくくなったりしませんかね？

もしそういうことがあったらご指摘ください。様子を見て、直したいと思います。

ではまあ、この辺で。和尚でした。

第2話 川と少女と運命の出会い（前書き）

第2話を更新します。

明久が会おうのは……この人。
どうぞ。

第2話 川と少女と運命の出会い

悠然と広がる、広大な大地。

ちらほらと見られる草花が、適度な彩をそえてくれている。

ふっ……人間なんて、この大自然に比べたら、本当にちっぽけな存在なんだなあ……

………なんて、現実逃避してても何も始まらないね。うん、わかった。

ったく……今度は一体何が起こったんだ……？

ババアの実験に付き合わされて、いつものごとく失敗して……気がついたらこんなよくわからない場所にいて……と。

……あらためて見直してみても、わかることが1つもないな……。

そもそもここ、どこなんだろ？ 文月学園どころか…東京都ですらない気がする。っていうか、見渡す限りここまで何も無い荒野って、現代日本にあるんだろうか？

いやそれより……僕は間違いなく『文月学園』っていう学校の……れっきとした建物の中にいたっていうのに……なんでいきなり外？

……何かの超常現象で、ワープした……？ いやいやいやいやいやいやいや、そんな、SFじゃあるまいし。

けどまあ……何か考えてた所で、状況が変わるわけでもなさそうだ……。

となると今は、良くも悪くも、このただっ広い荒野に一人ぼっち……っていうこの状況をどうにかして変化させないといけないわけだ。

あても何もないけど、とりあえず、動いてみるしかなさそうだな……歩こ。

「はぁ……」

どこにともなく歩きながら……僕は、自分が持っている装備を今一度確認した。

まず……通学カバン。帰宅するつもりで用意してたから、教科書以外は全部入ってる。

何、置き勉？ デフォでしょ。

他にもカバンの中には、携帯電話とか、まとめて買ったばかりのルーズリーフとか……ああ、この際だから文房具一気に新調したんだっけ。僕の学校生活を支えてくれた新旧文房具さん達が仲良く入ってたり。

あとは……購買部で残り物だったから安くしてもらった焼きそばパンと、お菓子と……姉さんにもらったカロリー○イト……か。

それに、音楽プレイヤーと携帯ゲーム機、その他色々。……サバイバルに役立ちそうなものは……あんまりないな。

ちなみにケータイは……圏外……か。

はぁ……まあとにかく、どこか電波が届くところまで出られれば……なんとかなるだろう。幸いバッテリーはかなりあるし、こんな状況なら……救急車読んだって許されるはずだ。

ともかく、それまでの辛抱……ん？

と、ここで僕の視界に……あるものが飛び込んできた。
それは……

「川、か……」

都会じゃ見られないような、信じられないくらい澄み渡った川だ。
……なんだか新鮮な気分になるけど……感激してる時じゃないんだよね。とりあえず……水分補給だけさせてもらおうかな。ちょうど……飲み物の類だけは持ってたし。

「……ごくっ……ふう……ま、生水は危ないって言うけど……なんとかなるよね」

姫路さんの料理に比べれば、川の水のバクテリア軍団なんてかわいいもんだ。

さて……せっかくだし、この川に沿って試してみようかな。

インダス文明しかり、メソポタミア文明しかり……水源って言うのは、人が住んだり、何かの施設を作るには欠かせないものだ。うまくすれば、集落か……水力発電所なんかが見つかるかもしれない。

……なに、もっといい例えはなかったのかって？ 知らん。

それに、川にそってあるいていけば、飲み水には困らないしね！
これでこの先何もなくても、1週間は大丈夫……と。

うーん、僕ってついてるなあ！

☆

○Side ????

何で……なんで、こんなことになっちゃうの……？

管輅ちゃんが占いで言ってた『流星に乗って天の御使いがあらわれ、この乱世を沈めるであろう』……っていう占い。私はその言葉を……1日だって忘れたことはなかった。

え？ 『沈める』じゃなくて『鎮める』？ あ、間違った。
と、ともかく……そんな時に、私は見た。

真昼の空を切り裂いて……流れ星が落ちてくるのを。
それを見て……ぴんと来た。『来た！』って！

あ、いや、いまの『来た』はそういうひらめきの『来た』じゃなくて、その……なんていうか、天の御使い様が、っていう意味で……ってそんなことはおいといて、

ともかく、今日の……お昼過ぎだったかな？ 流れ星が落ちたところ目指して、私は……愛紗ちゃん、鈴々ちゃんと一緒に走り出した。

そして、現場に行くつもりだったんだけど……

……まさか、2人とはぐれるなんて……

しかも、こんなうっそうとした森に迷い込むなんて……

しかもしかも、夜になっちゃうなんて……

しかもしかも、

「おう姉ちゃん、金目のもの置いていきな」

「へっへっへ、逆らわない方が身のためだぜえ？」

……盗賊さんにからまれちゃうなんて……

ど、どどどどどうしよう！？ 私戦えないし……だからって、
ずつと歩いてきて疲れちゃったから、逃げられるかどうか微妙だ
し……

……でも、迷ってても仕方ないよね。

第一、私……金目のものなんて持ってないもん。あるのはせいぜ
い、この剣だけ……でも、この剣だけは絶対に渡せない！ これは
……これから絶対に必要になるんだもん！
だから……ここで諦めるわけにはいかないっ！！

そう思って私は、素早く後ろを向いて全力で逃げ出し………あれ？

「おいお前、そっち川だぞ？」

ホントだ、川だ。

いつの間にか私は、川を背にして立っていたらしい。つまり……

追い詰められてたってことだ。

「ま、まさか……最初からこうするつもりで、私を川岸に追い立てたんですかっ!？」

「いや、お前最初からここにいただろ」

「……気づいてなかったのか？」

あれ、そうでしたっけ？

何でだろ、盗賊さんたちが私を見るその目に、少しだけ……残念そうな成分が混ざったような気がした。

ええと……なんか、別の意味でも逃げ出したい……。

と、とにかく……状況は依然として最悪なんだから……一刻も早く逃げなくちゃ!

べ、別に現実逃避とかじゃないんだからねっ!

とりあえず逃げよう……ってああ、後ろ川なんだった。
じゃあ右……も左も、正面も盗賊さんに囲まれてるね。

「……あれ、もしかして私、囲まれてた？」

「「「今頃!？」」」

再び盗賊さんたちの目が哀れみに光る。ええと……どうすれば……?
……?

と、ともかく逃げ出さなくちゃいけないんだから……こ、こうなったら、川に飛び込んででも……!

……なんて私が考えた、その時、

———びちゃっ

「「ん?」」

視界の隅で……何か動いたような気がした。

えっと……多分、気のせいじゃないと思う。盗賊の皆さんも、そんな感じの反応示して、全員でそっちの方見てたし。

今逃げ出せば逃げられたかもしれないけど……あいにくと私も、それが気になってあたりを見回してた。

ていうか、今の音、どこから（びちゃっ）あ、また聞こえた。

すると、また視界の隅で何か動いた。

今度は……なんか、川岸の……泥が積み重なったあたりが動いたような気が……

と、次の瞬間、

グバァッ!!

「「!?!?」」

泥の中から……何かが出てきた……って、え!?!? な、何!?!?
いきなり盛り上がった泥の塊……それを押しのけるようにして現れたのは……人!?!?

「オ、オ、オ、オ、オ……」

人！？ 人なのアレ！？ 怖っ！！

全身泥まみれで……人の言葉話してないし……しかも、所々に赤い……なんかこう、血みたいなのついてるしっ！ 怖すぎ！！

しかも、漂ってくるこのすっぱい匂いは……え！？ ふ、腐臭！？

「ヴオオオオオオオオオアアア！！！！」

「「「ひひひひひひっ！！？」」「」」」

ずざざ——っ、とまあ引いていく盗賊さん達。わかります！
だって怖いもん！！

ちょ……ど、どうしょ！？ 変な声出すし、動きぎこちないし、アレ絶対人じゃないって！！ っていうか、え！？ こ……こっち近づいてきてる！？

や、やばいよこれどう考えても！ たたたた、助けて愛紗ちゃん！
鈴々ちゃん！

「ああああああアニキ、どうしやすか！？ ば、ば、ば、化け物ですぜっ！？」

「み、見りゃわかるってんだよ！ あ、あんなもん相手にしてられるか！ その女が食われてるうちに逃げるぞ！」

えゝ！？ 何それ！？

食べられるの！？ 私食べられちゃうの！？ ちょっ……聞いてないよ！？

ああああでも化け物（仮）さんこっち来てるしっ！ 盗賊さんたち一目散に逃げてるしっ！ 信憑性7割増しだよおっ！！

「す……すまねえお嬢ちゃん、恨まねえでくれ！」

「そのー……来世は、もう少しいい頭に生まれるといいな！」

「大丈夫だ！　今より悪くなることなんてねえよ！（いい笑顔）」

「ちよっ……ちよっとお！　せめて救いようのある捨て台詞選んでくださいよお〜！」

何でだろう……今正に命の危機だっというのに、私の目には別の理由で涙がいつぱいに……ううっ、これが世の中の不条理なのかな……？

「ウウウウ……」

「ひいっ！？」

とか言ってる間に来たあっ！？

しかも川のほとりのぬかるみに足を取られてすっ転んじゃう私……ああもうついてないっ！　おしり痛いっ！

そして、目の前には……

「ヴァアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

「いやあああああああああ————っ！！！」

直後……その緊迫した状況に拍車をかけるように、空に大っきな雷が走った。

化け物（仮）さんの、泥まみれの体……大きな目……口と思しき部位……こびりついた血（多分）……何本もの角……それらを浮かび上がらせる、青白い稲光。

それらの恐ろしい光景に……私は、意識を保っていられなくなっ

不思議なもので、自分の意識がなくなっていくのが……ゆっくり、そしてはつきりと感じ取れた。そしてそれがはつきりわかるがゆえに……逆につらい。

できることなら……寝てる間に、痛みもなく、食べられたい、な……。

（ああ……ごめんね、愛紗ちゃん……鈴々ちゃん……私、ここまでみたい……）

薄れ行く意識の中、最後に私の耳に残ったのは……

「アアアアアアあああ——っ！！ 何なんだよもお——っ！！」

……化け物（仮）さん……意外と、声、かわいい……？（がくっ）

☆

○Side 明久

「アアアアアアあああ——っ！！ 何なんだよもお——っ！！」

不幸だ……。

イマジンプレイヤー
『幻想殺し』とか別に持っていないのに不幸だ……。

川を見つけてラッキー、みたいなことを言ってたのもつかの間、上流から流れてきたらしい、おいしそうな果物を取ろうと身を乗り出したら……つるつと滑って川に落ちた、なんていう大失態を犯してしまった僕。

……だって……美味しそうだったんです。

ともかく、そのままひたすら流されて（川上に向かって歩いてたのに！）、なぜか途中から流れが速くなって……気がついたら泥の中。

……思い出せないけど、流されている間に何かあったらしい。

で……泥まみれで、川岸に打ち上げられてた……ってわけだ。

……しかし、なんかホントに色々あったらしいな。

そこら中についてる泥はともかく……枝とか木片とかが何本も髪に、生け花のごとくさくつと刺さってる。頭には刺さってないからいいけど……これ、角みたいに見えるよ。

しかも、とうとうとした果実の果汁らしき赤い液体がべっとりついてる……血か、ってくらいにべっとり。っていうかこれ……ザクロの一種かな？

そんなわけで、今の僕の姿は……旗から見たら結構グロッキーな感じだろう。

……おまけに……雨まで降ってきた。

まあ、飲み水になるし、泥を洗い流せるからいいけど……それでも、全身泥まみれでびしょびしょのこの状態は……ほっと一息つけるほどいい状態じゃないな……。これ、早く洗わないと染みになるよ……。

幸い、一緒に流されてきたバックの中身は……バック自体が防水タイプだったおかげで無事だ。まあ……不幸中の幸い、かな。

と、そこまで考えて……僕はようやく、目の前に倒れている『誰か』に気づいた。

「……？ この娘……誰？」

知らない……女の子が倒れていた。

気を失ってるみたいだ。僕が近寄っても……さらに、その身にガングラン雨が降り注いでるのに……身じろぎ一つしない。

そういえば……さっ何かギャーギャー騒がしかったっけ……てっきり野生動物が自己主張してるもんだとばかり思ってたけど……何かあったのかな？

それにこの娘……

……よく見たら……すつごくかわいいし……

「うう……んっ……」

あ、なんだか濡れた体が温まってきたような……って何考えてるんだ僕！ こんな時に……ひっこめ煩惱！ ムツツリーニじゃないんだから！

ともかく……この娘、このままにはしとけないな……ちやうど向こうの方に、雨をしのげそうな岩陰がある。泥で服が汚れちゃうのは後で謝るとして、運ぼう。

☆

○Side ????

「……知らない天井だ」

実際にそうだったし……なんか、言わなきゃいけない気がした。
あ、いや、違うね。天井っていうか……岩だもん。

あれ？ たしか私、気を失って……化け物（仮）さんに食べられ
たんじゃ……？

そう思い出した私が、思わず上体を起こしたその時、

ごんっ！！

「「いだっ!？」」

何かに思いっきり頭をぶつけた。

いや、今の何!？ 体を起こした瞬間に、おでこに『ごん!』っ
て……。うう、痛い……お星様見えたよお……。

あれ？ っていうか、今声聞こえた……？ もしかして私、人に
ぶつかったの!？ 誰に!？

痛みをこらえて、また体を起こして……

ごんっ!! (2回目)

「「いだあっ!?!」」

また!?

え、ちよっ……ホントに何なの!?

そして誰!?! 私と同時に声が聞こえたから、今ぶつかったのや
っぱり人だよね!?! なんだろ、すごく気が合いそうな、仲良くな
れそうな気がするよ!?! (ダメな意味で)

その痛みも何とか乗り切って、今度はさすがに慎重に……

すると、おでこへの衝撃のかわりに、私の目に飛び込んできたの
は……知らない男の人だった。

第一印象は……

…………おでこが赤い。そして涙目。

あ、ぶつかったのこの人だ………ってそんなことはどうでもよ
くて、

あらためて第一印象は……中性的、っていうのかな? 男にも女
にも見える、かわいい系の顔。……声が低めだったから、多分男の
子だ。

服は……何だか着心地がよさそうな、見たこともない意匠の服だ。
色は、黒と紺色。

(……………この人、誰だろう……………?)

☆

○Side 明久

(……………この人、誰だろう……………?)

痛む額を押さえ、今しがた意識を取り戻した女の子の顔を見ながら……………僕は思った。

しかし、偶然(多分)とはいえ、起き上がるタイミングと覗き込むタイミングかここまで見事にかぶるとは……………おかげで目がちよつとチカチカする。うう、いたた……………

とりあえず、よかった……………怪我とかもないし……………短時間とはいえ雨の中にさらされてたわけだけど……………どこも、何ともないみたいだ。そして、目を覚ますなり騒がれる……………なんてこともなくてよかった。

そこにいたって、僕はようやく彼女をじっくりと見る事ができた。

さっき言ったとおりのかわいい顔に……………桃色の長い髪。ただ、髪色は……………姫路さんのそれよりも濃いかな。

身長は……………座ってるからわかりにくいけど、僕と同じくらい?

服は……………なんていうか、RPGのキャラとかが着てそんな感じの……………コスプレ?

そして、何より目を引くのが……………

……あきらかに姫路さんクラスか、下手すればそれ以上の、その胸……。

うわ……こんな状況で不謹慎かもだけど……すごい。

ちなみに今僕は、上着とYシャツとネクタイを干して、上半身はシャツ一枚の状態。下半身は……さすがにズボン履いてる。女の子の前だし。

と、

「えっと、その……あなたが、あの化け物さんから私を助けてくれたんですか？」

「は？ 化け物？」

え、そんなのいたの？ このへんそんなの出るの！？
いやでも、そんなのいなかったけどな……。

「で、でも……この岩場まで連れてきてくれたのは、あなた？」

「あ、うん。化け物はちょっとわかんないけど……一応、まあ」

「あ、ありがとうございます！ おかげで雨をしのげてるし、化け物さんも……」

だから何なの、その『化け物』って？

気になることではあったけど……女の子の顔がばあっと喜びに輝いてかわいさ3割増しなので、気にならなかったり。

まあともかく……お礼を言ってくれてるみたいだし、そこは素直に受け取っとうか。

あ、それより……助けたお礼、ってわけじゃないけど……ついで

だ、ここどこか教えてもらいたいな。

そう思って、彼女に聞こうとしたその時、

彼女の口から……不思議な言葉を聴いた。

「あ、ごめんなさい。私……劉備っていいます！
姓は劉、名は備、
字は玄德！ よろしくおねがいますね！」

.....

は？

第3話 異世界と天然と天の御使い（前書き）

第3話を更新します。

また何か、明久と劉備がバカやらかす予感……。

第3話 異世界と天然と天の御使い

○Side 明久

この女の子から話を聞いて、色々とわかったことがあった。
けど……わからないことが倍くらいに増えた。

いや、僕の理解力不足とかじゃないよ!? 断じて!

だってこの娘……自分のこと『劉備』だって言い出すんだよ?

劉備って言ったら……三国志のあの劉備でしょ? それをこの娘
『自分ですー』とか言ってるんだもん……何コレ?

魅力的と言っているいい、彼女のプリティフェイスに見とれそうにな
ってた僕だけ……その電波発言に、そりゃ煩惱なんか引っ込んじ
やったよ、僕は。

けど彼女は、『なんちゃって!』とか言ってくれる様子とかは全
然なくて……むしろさらにわけのわかんなくなることを説明してく
れたりする。

それによると……

・この世界は、いくつもの国々が戦いを繰り返す乱世である。
・自分は2人の仲間とともに、この世界を平和にするために立ち上
がった。

・その『2人の仲間』の名前は、『関羽』と『張飛』である。

……………何て言ったらいいの、僕？

そんなことを説明してくれた劉備ちゃんは……今、僕の隣で一緒に歩いている。

旅は道連れ世は情け……ってことで、2人でこの森を抜けるべく歩いているところ。

もう少し休んでから行かない？　って誘ったんだけど……彼女いわく、『このあたりは盗賊なんかも出るから、見つかる前に抜けたほうがいい』とのこと。

……化け物に続いて、盗賊までいるのか、このへん……。

ちなみに劉備ちゃん、歩き始める前に……『何かお礼がしたい』って言って、泥まみれになった僕の上着を洗ってくれた。

なんか、そこらへんに生えてる草をとってきたかと思うと、その草のエキスを染み出させた水で洗ってたっけ。なんでも、その草は汚れが落ちやすくなる薬草だとか。

何そのおばあちゃんの知恵袋的なのは？　とか思ってたんだけど、洗いあがったら驚くほど泥がきれいに落ちてたからびっくり。いやあ、感謝感謝。

でもまあ……感謝はいいけど、そろそろホントにここがどこなのか知りたいな……なんて思ってたその時、

「桃香さまあ———っ！」

「桃香おねーちゃん！」

……？　前方から何か来ましたが。

と、その声に反応したらしい劉備ちゃん、はっとしたように前を見て……

「あっ……よかったあ！ 愛紗ちゃんに鈴々ちゃんだあ！ おーい！！」

そう叫んで、前方から駆け寄ってくる2人のもとに走っていった。……えっと、知り合い？

目を凝らしてみた感じ……走ってきてるのは、2人の女の子みただけだ。

1人は、流れるような黒髪をサイドテールでまとめた……またとびっきりの美少女。

劉備ちゃんに負けないくらいのバストサイズに……凛としたたずまい。強気そうな目元で……なんか、またコスプレっぽい服に身を包んでいる。

もう1人は、橙色の短めの髪、ちっちゃな女の子。

こっちにむかって元気いっぱい手をぶんぶん振ってて、いかにも元気っ子って感じだとわかる。服は……デザインはだいぶ違うけど、やっぱりコスプレっぽい。

そして、彼女達のいでたちに決定的な違和感を加えている要素が1つ。

……2人とも……武装しとる。

しかも、黒髪の娘の方は、龍の飾りがついた長刀を、オレンジのちびっ子の方は……3mはあろうかという長さの槍を。

……もしかしてあの武器、三国志ゲームで見た『青竜偃月刀』と『蛇矛』じゃ……？

……ってことは、あの2人は……『関羽』と『張飛』……？

つまり、つまり……

こ、ここって……三国志の武将が女の子になってるパラレルワールド……！？

☆

「なるほど……旅の御仁、礼を言わせていただこう。我が義姉を助けていただき、かたじけない」

「なのだ」

ぺこり ×2

関羽さんと張飛ちゃん（自己紹介済み）のおじぎに、僕も一応返しておく。

いや、別に助けた……ってほどのことでもないけどね。っていうか、雨の中で一人放置しておくとか……それが雄二じゃない限り……それこそ外道ってもんだし。

「うん、ホントにありがとね、明久君」

そういつて劉備ちゃん、にっこりと100万ドルの笑顔。
なるほど、底抜けに明るく優しく、前向きな性格と見た。

いやいやこちらこそ、この世界（……っという表現で間違っ
てないだろう、悲しきかな）に来て初めて出会った人が、こんなか
わいい……もとい、こんな優しい人でよかったよ、ホント。

「そういえば……明久君って迷子なんだよね？」

「あー、うん……最も情けない言い方で言うかね」

境遇を考えると、そう呼ばれるのは納得いかないんだけどね。
全くあのババア……またとんでもないことに生徒を巻き込みや
がって……くそっ、戻ったら教育委員会で問題にして絶対更迭して
やる！

すると、

「じゃあさ……しばらく、私達と一緒にいかない？ 行くあてもな
いんでしょ？」

と、劉備ちゃん。え……いいの？

それは願ってもないや。正直、この世界のこと何にもわかんない
し……一時的にでも、案内役になってくれる人と一緒、っていうの
は心強い。

横を見てみると……関羽さんと張飛ちゃんも、反対は特にな
いみたいだ。

僕の表情から了承を読み取ったらしい劉備ちゃんは、『よかった

！』と言うように手をうつと、

「えへへ……旅は人数が多い方が楽しいし、御使い様を探すのも楽になるよね！」

……ん？

えっと……今のはどういうこと？

『ミツカイサマ』を探すって……人探しでもしてるのかな？

すると、関羽さんが僕の頭上の『？』に気づいたらしく、説明してくれた。

聞けば……何でも、今、都では……管輅とかいう占い師が予言した『流星に乗って天の御使いが現れ、乱世を鎮めるであろう』って
という言葉が広く知られてるんだとか。

……何それ？

えっと……つまりあれか？

この戦国時代を、ウ○トラマンよろしく空からやってくるスーパーヒーローが終結させて、平和な世界を築き上げるだろう……ってこと？ 何だそのうさんくさいの……

聞きようによつては、1999年の某大予言レベルのアレな話だけれど……関羽さん、超真顔である。マジっすか……。

そして劉備ちゃんたちは、その流星がこの近くに落ちたのを見て、天の御使いとやらを探しに来たらしい。

いや、そんな……流星って、あれは普通に隕石とか人工衛星とか

が大気圏で燃えてるだけで、人が乗ってくるとかありえないから……って、言ってもムダか。

もしホントに流星で来るとしたら、それこそウル○ラマンだ。

「でもお姉ちゃん、昨日流れ星が落ちてから、だいぶ時間が経っちゃったのだ」

「あう……そーだよなー……。ごめん、私のはぐれたりしたせいで……」

「そんな……桃香様がご自分を責められるようなことは……」

とか思ってる間に、3人で話進めてるし……僕、入り込む隙なし。

「んー、ともかく、一応行ってみようよ、あっちだから。もう居なくなっても、何か手がかりとかあるかもしれないし……明久君、ちよっと寄り道だけど……いいかな？」

と、聞いてくる。それはもちろん構わないけど……でも……

「いいけど……行っても誰もいないと思うよ？ その『御使い』さんも」

「えー、明久君までそういうこと言うのー？」

「いやいや、そうじゃなくて……」

だってさあ……

「僕、その『あっち』から川伝いに歩いてきたんだけど……誰とも会わなかったよ？」

「え、ホント？」

「うん。えっとね……多分、ここから10km……あ、いや、20里くらい先から」

たしか、中国の1里は500mだったはず。

「20里といえますと……ちょうど、流星が落ちたあたりですね」

「あ、そうなんだ？ でも……誰もいなかったよ？」

「お兄ちゃん、ホントに誰とも会わなかったの？」

「うん、聞いた感じ……ちょうど同じころ、同じあたりを歩いてたと思うけど……そんな人とはすれ違いもしなかったなあ……開けた場所だし、間違いないよ」

「そっか……ちようと流星が落ちたあたりから歩いてきたのに、誰もいなかったんだ……」

目に見えて落胆する劉備ちゃん。

そういうこと。残念だけど……何かの間違いみたいだね。そんな『天の御使い』なんて大げさな感じの人とは、会いもしなかったもん。

と、劉備ちゃんがため息をついて、僕がそれを申し訳なさそうに見ていた……その時、

「……………ちょっと待ってください、桃香さま」

関羽さんが……何かに気づいたように言った。どうしたの？
僕ら3人の視線を受けながら関羽さんは、

「桃香様、お気付きになりませんか？ この者……明久殿は、ちょうど向こうの……流星が落ちたあたりから歩いてきたのでしょうか？」

「え、うん。でも……誰にも会わなかったんだよね？」

「いえ、そうなのですがね……つまりですよ？ 明久殿は、ちょうど都合よくその『流星が落ちたあたり』にいたにも関わらず、誰も見なかった……のです。この意味が？」

「……………あ！」

と、劉備ちゃん……何かに気づいたように言ったかと思うと、関羽さんはうんうんと頷くような仕草をして、

「ええ、そういうことです。明久殿が、御使い様に会えるはずがありません。何せ……」

「そっか……あの流れ星は、天の御使い様とは特に何も関係ない、ただの偶然の流れ星だったんだね……」

「何でそうなるんですかっ!？」

関羽さん、なぜかシャウト。……？ 劉備ちゃん、何かへんなこと言ってた？

「いいですか!？ この明久殿は、ちょうど昨日、ちょうど流星が落下した時間、ちょうど流星が落下した地点にいて、そして他の誰をも見ていないのですよ!？」

「？ それはさっき聞いたのだ？」

「少しだけ黙っている鈴々! ……ですから! 仮に天の御使い様が降臨されていたとして……明久殿がそういった状況になる理由は1つでしょう!」

……さっきから関羽さん、何言ってるんだろう？

だからそれは、その流れ星が勘違いだった……ってだけのことでしょ？ 『天の御使い』なんて、いるわけないし。

っていうか、そんな状況があったとしたら、それってまるで……

「やだなー愛紗ちゃんったら！ 同じ時間に同じ場所にいるのに会えないなんて、それじゃまるで、明久君自身が天の御使い様……みたい……じゃ……えっ？」

ぱちくり

そこにいたって……『ようやく気づいたか』とでも言いたげな関羽さんのため息。

そして劉備ちゃんは……ぎこちない動きで僕の方を振り返ると……

「……………御使い様？」

「は？」

僕の方を指差しながら、そんなことを……って……えゝ！？

☆

「いやいやいやいやいやいや！　ちょ、何いきなり！？」
「だってー！　それしか考えられないじゃん！　明久君が『御使い様』なんでしょ！？」

いや、何言ってるんのさつきから、ホントに！

何でも……劉備ちゃん達が探してた『天の御使い』が僕だとか何とか……いや、どうしてそういう展開になってるの！？

どう考えても違うでしょ！　僕ただの高校生だよ！？

……って何度も説明したんだけど……劉備ちゃん、変なところで頑固。聞いてくれない。

「だって、明久君『ちょうど流星が落ちたあたり』から来たんでしょ？　それに、私と会うまで誰とも会ってないっていうし、おまけに『気づいたらこの世界にいた』っていうし……もう、そうとしか考えられないじゃない！」

「……そうとしか考えられない割には、随分思考が遠回りしたようでしたが」

「あ、あはは……まあ、それは置いといて、ね？」

ため息混じりに関羽さんがつつこんだセリフを流して、劉備ちゃん続ける。

「それにその服！　黒く染められてるのになんかキラキラきらめいてるし……どう見ても普通の素材じゃないし……これが噂の『天の羽衣』ってやつだよね！？」

「いや、これただの合成繊維！ 日光を反射して化学物質がテカってるだけ！」

「『こうせいせんい剛聖戦衣』、ですか……？ ううむ……雄雄しい名前ですね……」

「字違う！！」

こんな感じでさっきから平行線。うう……きりないよ……。

すると……劉備ちゃんも同じことを考えたのか……唐突に、こんなことを言い出した。

「じゃあ……試してみよう。明久君が、『天の御使い様』かどうか
「へ？ 試す？」

「どうやって試すのだ？」

「桃香さま……何か考えが？」

突然の提案に、きよんとする僕と張飛ちゃんに、思案顔になる関羽さん。

いやあの……試すって何？ 痛いのかやだよ？

「簡単だよ？ 私が今からする質問に、答えてくれればいいから」

え、そんなんでいいの？

それで何がわかるのか、いまいち見当がつかないんだけど……まあ、それで気が済むなら。どのみち、僕が『天の御使い』なわけないんだからね。やってみますか。

すると劉備ちゃん、僕の返事を待たずに、

「じゃあ第1問！ 愛紗ちゃんの武器の重さは？ 5秒以内！」

「えっ！？」

せ、制限時間あるの！？ しかも5秒！？ 短っ！

ええと……確か三国志だと、関羽の青竜偃月刀の重さは……

「20kg……じゃなかった、この時代だと……82斤！」

「第2問！ 私たち3人が乱世を戦い抜く誓いをかわした場所はどこ？」

「えっと……桃園！」

「第3問！ 鈴々ちゃんの武器『蛇矛』の名前の由来は！？」

「ええと……刃の部分が蛇みたいに蛇行してるから！」

「第4問！ 私の持つてる剣の名前は！？」

「えっと、劉備だからたしか……せ、『靖王伝家』！」

「最終問題！ 私の特技は！？」

「えっと……草鞋^{わらじ}作り！」

そして、一瞬の間をおいて、

「やっぱり明久君が天の御使い様なんだね！」

「なんでそうなるの！？」

今のタイム○ヨックで何がわかったと！？

「だって明久君、今の質問の答え、私達が明久君に説明してもいな

いことなのに、全部あてちゃったじゃん！ 千里眼を持ってるっていう天の御使い様じゃなきゃ不可能だよ！」

ああつ、しまった、そういうことか！

つまり……知りもしないはずの知識を知ってることで、『天の御使い』の証明にしようと考えたわけだ！

5秒っていう制限時間を付けたのも、焦らせて八百長回答を出させないため……くっ、劉備ちゃん……のほほんとしてるわりに、抜け目がない！

この事実……関羽さんや張飛ちゃんまで、完全に納得しちゃうてるし……悪い意味で。こ、これもう、説得無理かも……？

そして……『勝った』とでも言いたげな、どや顔の劉備ちゃん。何もしなくても十分すぎるほどに自己主張している胸を、えっへんと張って……いや違うんです、これはその……年頃の青少年としては、あの2つのふくらみに目が行くのはどうしても自然なことだと思っんです。

ともかく、その劉備ちゃんは、

「と、いうわけで……これからよろしくね、ご主人様！」

「いやだからそんな……って『ご主人様』！？」

なんか呼び方変わった！？

いや、その呼び方自体はすごく魅力的って言えばそうなんだけど……何いきなり！？

「だって、私達の指導者になってもらうんだもん、当然だよ」

「し……指導者ぁ!？」

「そゆこと! これからよろしくね、ご主人様♪」

そして……につこり。

邪気のないその顔は……『本気だよ♪』と、僕に対して残酷なま
での事実を突きつけていたり……

いや……ちよつと……

ど、どういふことコレ……いやむしろどうなるのコレ……!？

第3話 異世界と天然と天の御使い（後書き）

やはりこのおバカ2人、思考が似過ぎ……まあ、劉備のほうは抜け目が無いですが。

書きやすいようなそうでもないような……

ともかく、『天の御使い』認定されてしまった明久でした。

だいたいこんな感じのペースでの更新になると思います。

ご了承ください。

ではこの辺で。和尚でした。

第4話 賊と初陣と召喚獣（前書き）

今回はバトル……というか、何というか……
いよいよ明久が『アレ』を使います。

ではどうぞ。第4話です。

第4話 賊と初陣と召喚獣

○Side 明久

結局あの後、僕は桃香たちの誤解を解くこともできないまま、今に至る。相変わらず呼び方は『ご主人様』だし……。

あ、そうそう、呼び方といえば……さっき彼女達から『真名でいい』って言われた。

……真名って何？ ってなもんだっただけど……聞けば、『自分が認めた人だけに呼ばせる特別な名前』なんだそうだ。

さっきから呼び合ってる『桃香』『愛紗』『鈴々』ってのがこれにあたるらしく……もし無断で呼んだら、その瞬間斬られても文句言えないものなんだとか。……怖っ。

当然だけど、僕には真名も字あざなもない。

真名はもちろんだし……『字』ってたしか、座右の銘みたいな感じの別称だよな？ 某錬金術師の『鋼』とか、某海賊の『麦わら』とか。そんなの、僕にはない。

……一瞬、『観察処分者』ってワードが頭をよぎった自分が憎い。ということで、彼女達の好きなように呼んでもらうことに……した結果がこれだよ。

「もうご主人様、そんな顔しないで、もっと前向いて明るくしてようよ？」

「そうですとも。我々の主が、そんなことでどうするのです、ご主

人様？」

「お兄ちゃん、『てんのみつかい』なんでしょ？ もっと堂々とするのだ！」

「だーからそれ、誤解なんだってば……」

と、その時、

「ぞ、賊だぁあ——っ！！」

「「！！？」」

いきなりそんな声が響き渡ったかと思うと、カンカンカンカン……と鐘の音が響き、町の人たちが端からパニックになって逃げ出していく。え、何！？ 何なの！？

通行人の会話（ハイテンポ）に聞き耳立ててみると……近くに根城を構えてる盗賊の一団がいて、そいつらが攻めてきたとかなんとか聞こえてきた。マジ！？

すると……愛紗がそれに対して素早い反応を見せる。獲物を手に駆け出した。

場慣れしているのか……はたまた正義感が強いのか……いや、両方かな。

「お2人とも避難しててください！ 鈴々、行くぞ！」

「応なのだ！」

「え……ちょ、ちょっと！？」

そんな僕のセリフを聞くことなく、2人とも駆け出していった。
い、いや……何やってんの!? 行くって……と、盗賊だよ!?

逃げないと!
すると、今度は後ろから桃香が上着を引っ張ってきた。

「ちょ、桃香!？」

「大丈夫だよご主人様! 2人とも強いから、盗賊なんて目じゃないよ!」

いやそんなこと言われても!

そりゃまあ、パラレルワールドとはいえ『あの関羽』と『あの張飛』なんだし、強いんだろうとは思うけど……それでも、気にするなっつてのは無理だ。

盗賊っていうからには人数多いんだろうし、武器だって持つてるだろう。町の自警団と協力するとしても、女の子に任せていい任務じゃないと思う。

……それに……

「……………(じーっ…………)」

「……? え、えっと……ご、ご主人様? わ、私の顔に何かついてる?」

きょとんとする桃香。

……『三国志』だとそれなりに強いはずの劉備さんが、ここではこれだし……。

天然丸出しでのほほんとした雰囲気の彼女からは……覇気とか感じない。全然。

っていうかさっき自分で『私弱いから』とか言ってたし……明らかに、守られる側の存在だとわかる。

愛紗達が強いのはいいとしても、絶対誰か、この娘をそばで見てあげる存在が必要だと思うんだけど……って、あれ？　もしかしてそれ僕？　え、押し付けられた？

「と……ともかくご主人様、盗賊さんたちを追い返すのは愛紗ちゃんたちに任せて、私達は安全な場所に行こう？　もし巻き込まれたら、その方が迷惑かけちゃうよ」

「そ、そうだね……それに、町の人たち逃がさないと……先導しようか」

「うん！」

☆

慣れてる……のかな？

桃香はてきぱき動き……町の人たちを、盗賊の魔の手が及ばないであろうところまで先導していた。僕や、町の他の若い人たちと協力して。

しかし……今更だけど、ホントに異世界だなあ……。

盗賊が攻めてきて、しかも武器はピストルとかじゃない……剣とか弓矢で、それを愛紗達が迎え撃って……やれやれ、現代っ子にゃきつい……

……それに、もう一つ、きついことがある。

町のあちこちに……盗賊の攻撃で傷を負ったと思しき人や……中

には、それで死んでしまった人なんかもいたことだ。

グロテスクな映像は……試召戦争や映画のDVDとかで結構見たけど……やっぱり本物は重みが違う……正直、何度か吐きそうになった。

それをこらえてがんばっていると……町の人たちの避難がほぼ終わった。

……と、思ったら、

「え、あれ!？　ちよっ……桃香、どこ行くの!？」

全部終わって、あとは僕達が逃げるだけ……って段階になったと思ったら、なぜかいきなり桃香が、戦場になってる地区に向かって走り出そうとした。

慌てて引き止める僕。

「だ、だってその……」

「『だって』……何？」

「あ……愛紗ちゃんたちが心配で……」

いや、結局あんたも心配なんかい！　いやまあ、普通そうだけど。

や、でも、あんたがさっき『大丈夫だ』って言ってたんでしょーが！　っていうか、向こうは戦闘区域なんだから危険だよ!？　賊とかいたらどうすんの!？　ってかいるよ！

そんなところに巻き込まれたら、それこそ愛紗達に迷惑かかるんじゃない!？

「だ、大丈夫だよ！　愛紗ちゃん達なら……もう盗賊さん全部倒しちゃってるはずだよ！　だから……ね？」

「『ね?』じゃなくて! ていうか桃香言ってること滅茶苦茶でしょ!
大丈夫だと思うんなら見に行く必要ないじゃない!」

何だかんだ言って心配らしい。その気持ちはよくわかる。
わかるけど……それにしたって危険すぎる。僕らは戦えないんだ
から……ここはやっぱり、僕らは避難すべきだ。

「だってだって、愛紗ちゃん達を放っておくなんて、私の方が落ち着かないよ!」

「でももし盗賊とかに見つかって巻き込まれたらどうするの!?!
危ないでしょ!」

「大丈夫だよ、愛紗ちゃんたちがもうやっつけて……」

「それはさっき聞いた!」

「じゃ、せめて応援! 応援ならいいでしょ? ね?」

「いやなんでそんなところに思考が行くのさ! 問題ありすぎだよ色々!」

と、その時、

「「……………え!?!」」

☆

○Side 愛紗

「はあああああ————っ!?!」

「うりやりやりやりや————っ!!」

「ぎゃあああああ——っ!!」

「くそっ……こいつら強え!」

くやしそうな盗賊共の声が耳に届くと……恐れをなした盗賊たちが、一旦まとまって距離をとった。けん制の目的で……私と鈴々はそれをにらみつけ、武器を構えなおす。

ふう……もう何十人斬ったことだろうか。数えてなどいないが……もうだいぶ数を減らせたはずだ。

しかし……一向に攻撃が止む気配がない。全く……一体どれだけの人数で攻めてきたのだ? 数えていないとはいえ……鈴々と二人で100は倒したぞ?

その時、

「動くなあ!!」

「「!」?」

突如として響いた盗賊の声を聞き、戦っていた者達が動きを止める。

声のした方にめをやると……っ!!

「動くなお前ら、この女がどうなってもいいのか!」

賊の1人が……逃げ遅れたと思しき、村人の女性を後ろから羽交い絞めにし、刃を突きつけていた。っ……人質か!

「こいつの命が惜しけりゃ……金目のものと食料をありったけ用意

しろ！」

「おう、でかしたぞお前！」

「くっ……卑怯者め……！」

人質ができたことで余裕が生まれたのだろう、盗賊たちの顔に下卑た笑みが浮かぶ。

それでも、一応警戒はしているのか……不用意にこちらに近づいてくることはないが。

しかし、まずいな……人質がいては、ろくに動けん。このまま押し切れば、殲滅は無理でも、追いつくくらいならできたであろうものを……

金品と食料……十分に奥歯をかみ締める略奪行為だが……それ以上を用給しないあたり、奴らにもそれほどの余裕はないのだろう。実際に、人数もだいぶ減ったのだ。

「おら早くしろ！ この女がどうなってもいいのか！」

とはいえ、このままみすみす略奪を許すなど……

右を見てみるが……鈴々も、何も案などはないようだ。くっ、どうすれば……！？

と、その時、

カラカラカラ……

「「「?」」」

裏路地の方から……からからと音を立てて、何か盗賊たちのほうに向かっていった。それに……全員の視線が集中する。

あれは……乳母車?

そのまま転がって、盗賊の、ちょうど人質を抱えている男の下へ……ってまずい!

どこから誰が転がしてしまったのか知らんが、下手を打てばもう1人人質ができてしまう……しかもそれが無抵抗の赤子となっては……最悪だ!

「? 何だこりゃ?」

と、私達の目の前で……盗賊がしっかりと女を抱え込みながら、乳母車を覗き込んだ……その時、

ヒュン、バキィッ!!

「ぐがあっ!?!」

「「「!?!」」」

乳母車の籠の中から、突如として何かが飛び出し……男の顔面を痛打した。

その拍子に人質が開放されたかと思うと……その『何か』は人質の女性を持ち上げるように抱え……すたこらさっさとこちらに逃げ

てきた。な……何だ!?

驚きつつも、女性の保護のためにその『何か』に近寄る私達。

自らも『わけがわからない』と言いたげな女性を持ち上げている
その正体は……

……………ご主人……様……?

☆

○Side 明久

いいえ、召喚獣です。

衆人環視の中……ベビーカーから飛び出して盗賊のおっさんを昏倒させた僕の召喚獣は、きっちり人質の女性を救出することに成功。うん、ミッシェンコンプリート。

……とまあ、そんな光景を物陰に隠れて見ていた僕と桃香でした。

しかしびっくりしたなあ……まさか、この世界で『召喚獣』が使えるなんて……一体全体、何でなのかとかはさっぱりわかんないけど……

あの時実は、

『いやなんでそんなところに思考が行くのさ! 問題ありすぎだよ色

々！』

『……行くのさ！ 問題……』

『……のさ！ もんだい……』

『……さ！ もん……』

『さもん』

『サモン』

……で、『試獣^{サモン}召喚』。あらやだ偶然。

とまあ……そんな感じで、僕が『召喚獣』を呼び出すためのキーワード『試獣召喚』が発動。

どうやら『召喚』が可能だったこの世界で、僕ははからずもキーワードを口にし……こいつを呼び出してしまったわけだ。

そりゃびつくりしたけど……この状況下でこいつが使えるってわかったのはラッキーだ。何せ……やってるのは盗賊との戦闘行為なんだからね。

で……人質の場面に遭遇して、たまたま見つけたベビーカーを使って……あとは略。

そして、

「かかれえ————っ！」

後顧の憂いがなくなった所で、愛紗&鈴々、そして自警団の皆さんが総攻撃。

あーあ、人質作戦なんて死亡フラグ立てるから……盗賊さんたち、怒りで武力3割増しの愛紗達にきっちり制圧されちゃいました。

☆

……で、その後、僕と桃香も愛紗達に見つかって……当然のごとく『何やってるんですか!』って怒られた。……義姉とご主人様相手でも容赦ないのね……。

そして、一通り雷を落とすと……今度は、愛紗と鈴々の興味は、当然ながらこいつに向いた。

「すると……この『小さなご主人様』は、ご主人様が天の神通力を使って生み出した、ご主人様の分身のようなものなのですか?」

「あーまあ、だいたい捻じ曲がってるけど……詳しいこと話すとややこしくなるから……それでいいや。……ってあ痛っ、鈴々つねらないで、それ僕と感覚共有してるから」

「にゃ? あ、ごめんなのだ」

なにやら使い魔的な解釈が入っちゃったけど……まあいいか。『召喚獣』はあくまで科学とオカルトの産物なんだけど、説明すると長いし、ろくに説明できないし。

ともあれ……どうにかこの村に迫っていた危機は回避できたわけだけど……

……人命救助のためとはいえ、不用意にこんな『召喚獣』なんていうオーバーテクノロジーを見せちゃったことにより……僕はますます『天の御使い』あつかいされることになっちゃいましたとき。村の人たちまで、村の危機を救ってくれた愛紗たちと合わせて、その愛紗たちを率いているっていう（本人の僕は散々否定したんだけど）僕を、愛紗たちと合わせて『救世主』とかいってあがめ始める始末だし……。

愛紗達にいたっては……もう、仮面○イダーとかウルト○マンとかを見る5歳児の目になってるし……

こ、こんなはずじゃ……僕の逃げ道が、どんどんなくなっていく……っ!?

第4話 賊と初陣と召喚獣（後書き）

ギャグが少なめになっちゃいましたが、とりあえず初陣？終了です。

次話で第一章は終了の予定です。

ではこれで、和尚でした。

第5話 本音とブランドと桃香の思い（前書き）

今回で第一章、終了となります。

どうぞ。

第5話 本音とブランドと桃香の思い

○Side 明久

「はぁ……」

ため息しか出てこない。

誰になんと言われようとため息しか出てこない。頑として。

というかむしろ、わけもわからないうちにスーパヒーロー扱いされてるこの状況下……ため息以外の何を出せと？

「もう……そんな顔しないでよ、ご主人様！」

テーブルの向かいに座ってる桃香から、のほほんとした声がかけるけれど、何の慰めにもならない。当然ながら。

「なんていうか……エ○ア初号機のパイロットの気持ちかわかるな……」

「は？」

「あ、いや、こっちの話……」

シ○ジ君……望まずして表舞台に立たされるっていうのは、こんなにつらいんだね……。ヒーローにあこがれてる全国の子供は何もわかってないんだな、って思うよ。

……なんて心の中で思いを吐露してみたところで誰も助けてくれないから、そろそろ現実に戻ろうか。

僕は今、とある食堂の二階、その個室で……桃香、愛紗、鈴々と一緒にご飯を食べてるところだ。

町の人たちが『守ってくれたお礼です』とか言ってくれて、ここでの食事代はチャラになってる。なので……ってわけじゃないけど、僕らはお腹いっぱい、遠慮なく食べることができていた。

……食べたらず少しは気がまぎれるかな……なんて思ったんだけど、そんなことはなくて。

むしろ……食事の最中も僕に向けられる、桃香達の好奇の視線で気が滅入ってたり。

「はあ……」

「もー……ご主人様、ため息つきすぎだよ？」

「あんまりため息ばかりついてると、気が滅入っちゃうのだ」

「大丈夫大丈夫、もう既にシャレになんないあたりまで滅入ってるから」

「いえ、それは明らかに大丈夫という表現を使うべきではないと……」

励まそうとしてくれるのは嬉しい。

ただ……事態の收拾にはならないから嬉しくない。だって……さつき僕を大々的に『天の御使いです！』って祭り上げてくれやがったの、彼女達だもんね。

そんなんじゃない、って、何回も言ったのに……。

……そんな空気の中、料理の皿が一通り空になったあたりで、

「ねえ……ご主人様、そろそろ……本題に入ろうと思うんだけど……」

桃香が、そんな感じで切り出してきた。……本題？

その言葉に、愛紗と鈴々も顔がまじめなものになった……気がする。

「えっと、さ……ご主人様、さっきから見てる感じ、その……『天の御使い』様って祭り上げられるの……嫌、だったりする？」

「うん」

「あ、そこ即答なんだ……」

そりゃもう。だって全然違うもん。

ちよっと困ったような顔になった（気がする）桃香だけど、

「でもでも、ご主人様はホントに天の世界から来たんでしょ？　さつきもあんな神通力使ってたし……」

神通力で。

だから召喚獣は科学技術で……って、言ってもわかんないか。

「天っていうか……まあ、こことは違う世界から来たっていうのはあってるけど……」

「じゃあ、全然問題ないんじゃない？　ちよっと呼び方が違うだけでしょ？」

「その呼び方が一番の問題なんだってば……」

意外と頑固に食い下がってくる桃香に、またしてもため息が出た。人のよさとか、甘さとかはあるみたいだけど……だからって気が弱かったりするわけでもないのが彼女である。したたかっているか

……意外と強情？

けど……だからって僕も、ここでひくわけには行かないわけで。

「だからさ……この際『天』とかいう呼称云々についてはもう置いとくとして……僕はそんな、こう……英雄じみた感じの名前が付けられるような感じの存在じゃ、全然ないんだって。異世界人っていうのも、普通の一般人なんだよ」

それなのに、そんないかにもな感じの呼称で呼ばれても、名前負けもいいとこだ。

……っていうか……ここまで連れてきてもらって、さらに守ってもらってなんだけど……僕みたいのを祭り上げても、むしろ桃香達のほうが迷惑でしょ？

いくら異世界人とはいえ、戦えもしないし頭もよくない、ただの高校生なんだから。

そこまで言う……なぜか、桃香達がちょっと沈んだ面持ちになった。

「その……そういわれると、申し上げにくいのですが……」

おずおずと口を開く愛紗。

いや、事実なんだから普通に言ってくれていいのに……と思ってたら……愛紗の口から出てきたのは、予想とは違う回答だった。

「……実のところ……我々は、あなたが『天の御使い』であるかというところは……本当は問題ではないのです」

「え？」

？ どういうこと？

目に見えて『？』な顔になっているであろう僕に、なぜか申し訳なさそうな感じの顔のままの桃香達。

「えっとね……天の国から来たご主人様が知ってるかどうかかわかないけど……この大陸は今、すごく大変な状況にあるの」

「中央・地方を問わず、役人の間では賄賂が横行し……都市によっては、理不尽なほどの重税や兵役を民に課すところも、珍しくはありません。ほとんどの民は、その日その日を生きていくのに精一杯で……希望などとても持てない状態です」

「盗賊なんかもいっぱいいて、どこもかしこもあればーだいなのだ。さっきもほら、町が盗賊に襲われたでしょ？」

「あー……なんか、ざっと聞いただけでもすごく大変そうだね」

僕からしたら……完全に歴史もしくはファンタジー漫画の世界だ。盗賊だの重税だの、現代日本じゃ考えられないことばかり。

賄賂は……まあ、一部残ってるみたいだけど。嘆かわしいことに。

「取り締まろうにも……今の腐敗・疲弊しきった『漢王朝』に、その力はありません」

「もうこの大陸は、根底からボロボロなの……」

「うんうん」

なるほど、大変だ。

「……ここからが本題です。私たち3人が……この乱世を鎮め、太平の世を築くために立ち上がった……ということは、以前にお話ししましたね？」

「うん。それは聞いた。立派な目標だよね」

つまり……今の世の中を変えて、人々を救ってやろうと思って立ち上がった……と。

なんか言葉にすると中二病的な響きが付きまとう気がするけど……生半可な覚悟で掲げられる目標じゃない。現代っ子の僕でもわかる。

……でも、それがどうかしたの？

「いかに大望を持っていたても……われらが今持つ力は、微々たるものです」

「あー……まあ、3人だもんね」

「あ、いえ、人数もそうなのですが……我々にはこれから先、この大陸を変えるだけの力を付ける上で……決定的に欠落しているものがあるのです。おわかりですか？」

ん……何だろ？

人数やお金なんかは当然だから、ここで求められてる答えとは違うんだろうし……

となると、うーん……こういう下克上系ストーリーでは……あ、これかな？

「フラグ……とか？」

「「は？」」「」

違うか。うーん……当たらずとも遠からずだと思ったんだけど……じゃあ……うーん、他には……

「変身ベルト……異世界転生……いや、思い切って特殊能力？ 絶

対遵守な左目……ゴムゴムの実……103000冊……リリカルマジカル……あ、でもそれにはまず妖精その他との出会い（魔法少女的な意味での）が何らかの形で……」

「あー……ちょ、ちょっと待ってご主人様？ 何だかその……ご主人様に考えてもらっても永遠に出てこないような気がしてきたんだけど……」

なぜか疲れた様子の桃香が、思案中の僕を止め……ようとした所でひらめいた。

「そうか、デ○ノートだ！」

「あ、もう私言っちゃうねご主人様！ 私達にはほら、実績がないの！」

新世界の神になる！ ……ってあれ？ 僕は一体何を考えてたんだっけ？

いやそれよりも、桃香が今答え言ってたな……『実績』？

「うん、実績。ほら……私達、3人とも平民だし……名声とか、そういうの何もないの」

「そんな、どこの馬の骨ともわからない者のところに……いかに大望を掲げたとしても、人は集まりません」

あー、まあそうだよな……。

いきなり『大陸救うぞー！』とか『民を助けるぞー！』とか言った所で、最悪『戯言』で済まされるし。

「一応鈴々達、行く先々で山賊退治とかやってたけど……それでも、その近くでちょびつと評判がよくなるくらいなのだ……」

「本来ならば、そういったものは、それなりの年月をかけて積み上げていくべきものなのですが……もはや、我々にはその時間すらありません」

「……だから、私達は……」

そこまで聞いて……僕にもようやく、彼女達が言いたいことがわかった。

つまりは、彼女達は……これから1つの『勢力』をつくり、それを拡大して力を付けたい。この大陸を巻き込んだ戦いに、名乗りを上げられるくらいに。

けど……それを作るだけの名声やら何やらを、正攻法で作り上げるには……何もかも不足すぎる。身分は普通に平民だし、女の子だからなめられやすい。

おまけに……これからまもなく戦乱の世が来ることを考えると、時間もない。

そう考えた桃香達が狙ったのは……現代社会ではまず通用しない、ある裏技。

「……つまり、『天の御使い』の名前と、それについてくる名声を利用しよう、と……」

「……………うん……」

なるほど、ね……謎が解けた。

つまり彼女達がほしかったのは……『天の御使い』である（とさ
れてる）僕自身じゃなくて……僕について回るであろう、風評だっ
たわけだ。

そういう、なんかこう……神懸かった感じのありがたそうなもの
を祭り神輿にすれば……わりと信心深いこの時代の人たちの心を、
手っ取り早く集められる。

僕に求めてるのは……そのためのブランドロゴ、ってわけだ。

見ると……桃香達はそろって、気まずそうと言うか……申し訳な
さそうな顔。

無理もない……かな。正面きって、僕自身に『あなたのことを利
用させて下さい』って言ってるのと同じだったし……今の。

そしておそらく……それを説明する前に僕が承諾でもしようもの
なら、その流れで何も話さずに、僕を利用していくつもりだったん
だろう。意外としたたかだな、やっぱし。

……まあ、僕が人並みには小心者かつ、頑固で心配性だったおか
げで、そうはならなかったけど。

「都合のいい話かもしれないけど……私達には、そうするより他に、
方法がないの」

……それでも、桃香達の決意、というか主張は揺るがないらしい。
後ろめたい雰囲気が強引に吹っ切ると、桃香は僕の目を真っ正面

から見据えて、

「ご主人様の気持ちとか、尊厳とか……そういうの全部ないがしろにしちゃう頼みだっていうのはわかってるし、それをわかって頼む私達って……酷い奴だと思う。謝っても謝りきれないと思う。でも……それでも私達……今この時も苦しんでる人達を救いたい！」
「……………っ!？」

「だから……だからご主人様！　こんな身勝手に見苦しい私達に……力を貸してください！」

そう言うなり桃香は、テーブルに頭ぶつけそうな勢いで頭を垂れてくる。必死だ。

なんか、低姿勢に見えちゃうけど……桃香の言葉には、決意が満ち溢れていた。

そしてそれゆえに……説得力もあり、心を突き動かすものがあった。なんていうか、有無を言わさぬ……っというアレかな？

実を言うと、僕は……何を言われても断るつもりだった。

だってそうじゃん。天の御使いだか何だか知らないけど……学級委員長もやったことない僕に、そんな大層な役割勤まるはずないもん。メツキどころか、氣ぐるみだよ。

……それなのに、

気づいたら……僕は、こんな言葉を、彼女にかけていた。

「……知らないよ？　僕みたいなのをマスコットにして……後で、

後悔しても」

「……………え…………？」

あーあ、何言ってるんだろうね、僕。物語か何かの主人公にでもなったつもりかな？

こんなこと言って……………あとですんごく困ることになるの、バカでもわかるだろうに。

……………どうやら、僕のバカは……………そこらのバカとはレベルが違うと見た。

「僕はさ、正直……………この世界のこととか、何にもわからないよ？ 戦えもしないし……………頭も悪い。字も読めないし……………はっきり言って、足手まといになる自信、超ある」

そんな僕の演説(?)を、ぽけーっとした表情で見ている桃香達だったけど……………次第に、僕が言ってることの意味がわかってきたらしい。

徐々に、その顔に赤みがさしてきて……………

そして、僕の最後の一言を皮切りに、

「それでもいいんなら……………ま、僕みたいなただのバカでよかったら、使ってみれば？」

「……………ご主人様っ……………ありがとう!! 『ますこっ』って何なのかはわからないけど!」

天然っぽいセリフとともに、その顔が……満面の笑みに変わったのだった。

やれやれ……我ながら、何というかこう……芝居っぽいことしちゃったなあ。

しかもその上、こんな約束までして……この先どうなることやら。

……まあでも、

「これから……よろしくね、ご主人様！」

……ま、この笑顔が泣き顔に変わるよりかマシかな、なーんて主人公的なことを考えてみちゃったり。
すると、

「にゃ？　それで結局……お兄ちゃんは仲間になるのか？」

「「「……………」」」」

……あらま。

約一名理解してなかった。

これから鈴々の前で、わかりにくい感じのセリフは極力控えようかな……なんてことを考えながら……僕はひとまず、結構大きな対談が終わったことに、一息ついていた。

しかし……ははっ、とんでもないことに巻き込まれちゃったな

あ……僕。

これから……どうなるんだか。ははっ、なんか笑えてくる。

この、自然とこみ上げてくる笑いの意味を……場の空気から開放され、冷静になった僕が気づくのは……もうちょっと後の話だったりする。

いやホント……勢いって怖いよね。

第5話 本音とブランドと桃香の思い（後書き）

さて、あらためて仲間になった明久たちでした。
ちなみに、設定上『桃園の誓い』はもう桃香達で済ませちゃってる
ので、書いてません。期待してた人すいません。

これからどうなりますか……次回、新章突入です。

それと……今更出すけど、自分この間、『真・恋姫†無双 萌将伝』
買いました。

ただいまプレイ中です。面白いです。まだ序盤ですが。

ではこの辺で。和尚でした。

第6話 誤解と山賊と三羽烏（前書き）

さて、

公孫賛さんの出番を予想していた皆さん、すいません。ちょっと反れます。

今回から……ちょっと都合上、原作とは違う展開を歩んでいきます。公孫賛さん、もうちょい出番待ってね。

原作知ってる方は、タイトルで気付くでしょうが……今回登場する武將の皆さんは……あの娘とあの娘とあの娘です。では、どうぞ。

第6話 誤解と山賊と三羽鳥

○Side 明久

……いやホント、勢いって怖い。

「……はあ……」

「あー……ご主人様、疲れたの？」

「……うん……色々……」

「は？」

心が疲れてる……なんて言ったら笑われるか怒られるか……
けどまあ、ここ数日の僕の心労は尋常じゃないわけで……それに
立派に耐え切ってるだけでも褒めてほしいわけで……

……えっと、状況説明。

初陣を勝利で飾った僕ら『天の御使いの一行』は……

……いや、このユニット名やめようって言ったんだよ？ 死ぬほど
恥ずかしいから。言っただけだね？ この娘たち……変なところ
で強情だったんです。

教祖様よろしく村の人たちに祭り上げられた後、なんかお礼金と
食料までもらって……僕らは次の目的地へ向けて旅立ったのでした。

今現在……よくわかんない山道を歩いてるとこ。

「はー……」

「ご主人様、ご辛抱を。もうまもなく、次の村が見えてくるはずですよ」

（あー……いや、別に肉体的疲労で参ってるわけじゃないんだけど……）

心労ですとか、色々後悔してますとか……そういうことを言うわけにもいけないので……詳しいことは言わず、黙って歩く。

いや、でも肉体的な疲労もあるっちゃあるけどね。RPGだと、ノンストップで勇者さんは知らせて大陸横断するとかザラだけど……まさにそんな感じの僕が、今朝から移動した距離は……せいぜい10kmちょい。けっこう足、酷使してる。

おまけに、村と村の間では……寝泊り手段は野宿。

いや、野宿自体は……まあ、つらくないことはないけど……村でもらった毛布とかあるし、焚き火で暖も取れるから、どうにかなってるかな。

……それよりもその……年頃の青少年の近くに、桃香とか愛紗みたいな、煩惱をガンガン刺激してくれるナイスバディな女の子を寝かせてることに、大いに問題がある気がするといえますか……。正直、気になって……寝付くまでにすこぶる時間がかかる。

え、鈴々？ いや、彼女に関しては別に何も……なんで？

ともかく……僕は今、この先どうなっていくのかっていうことに、言いしれぬ不安を抱えているわけなのですよ……。はあ……。

何回目かもわからないため息をついていると……

「……………ん……………」

いきなり愛紗が立ち止まった。

そして、きよろきよろあたりを見回してる。 ? どうしたの？

「？ 愛紗ちゃん……………どうかした？」

「……………お気をつけください、桃香様、ご主人様。複数の視線を感じます」

「「え!？」」

「にゃ？」

緊張感をはらませた愛紗の声に、ドキッとする。いや……………無理ないよね？

「し、視線って……………まさか……………山賊とか？」

「……………どうでしょう……………それにしては、数が少ないような……………」

「敵なら、鈴々たちがぶっ飛ばしてやるのだ！」

言うが早いか、蛇矛をぶんぶん振り回す鈴々。……………まあ、頼もしいか。

が……………その視線の主とやらは……………一向に姿を見せる気配がない。

……………逆に不気味だな……………一体、何なんだ？ 山賊の罠か何かか？
だとしたら……………うかつに動くことも控えなきゃだけど……………。

ともかく、万が一に備えて……………僕も『召喚獣』を呼び出そうとしたその時、

『さ、山賊だあ——っ!! 山賊が出たあ——っ!!』

「「「え!?!」」」

なんかすつごく遠くの方から、そんな声が聞こえた。

と、次の瞬間……

ガサガサッ! ×3

「うええ!?!」

近くの茂みから、突如として3つの人影が姿を現した。な……何だいきなり!?!

びっくりしながらも、僕たちがよく見ると……3人共、同じ年くらいの女の子だった。

おそらく……さっき愛紗が言ってた『視線』の主であろう、この女の子達は……今の声によほどびっくりしたのか、茂みから飛び出るやいなや、3人で何か話している。

「うあちゃー、しもた! はずれやった!」

「あうう、本命はあっちの道だったのー!」

「山賊の一味がこの道を通りがかるという情報はガセだったか……くそっ！」

「「「……………?」」」

……僕らに見つかってるのにも気づかずに。

「なんやねんもうっ！　せっかくええ情報が手に入って、村に来る前に待ち伏せかまして、山賊連中一網打尽にしよ思っと思ったん……」

「朝から張り込んで、ようやく怪しい4人組が通りがかったと思っただのに、とんだ無駄足だったの……」

「くっ……真桜！　沙和！　とにかく今はごちゃごちゃ言ってる時じゃない！　あの4人はこの際放っておいて、早く向こうの……」

「あの……」

「「「……………ん？」」」

と、そろそろしびれ切らしたっぽい桃香が、おそろおそろ声をかけると……なんかすっかり3人の世界に入っていた彼女達が、ようやく反応した。

まず、視線を自分達に注目させている僕らを。

次に、すっかり茂みから露出しちゃってる自分達を。

その状況を見て……顔を見合わせると、

「……あー……ええっと……」

「ほな、こちらはこれで……」

「待たんか！」

何事もなくその場を去ろうとしたところを、愛紗に見事に阻止されていた。

3人中2人が『あちゃー』な顔をしているところに、ずんずんとか赦なく近づき、

「何なんだ一体貴様ら？ 影からこそそ人を見張った上、怪しいだの何だのと……」

「うっ、いや、その……それは……私たちは別に……」

最前列（僕達から見て）に立っていた、銀色の髪の娘が……愛紗のじろりと、いやむしろ『ぎろり』とした視線に若干ひるみつつ、どうにか受け答えしようとしている。

が……愛紗の彼女達に対しての認識が『不審者』に固定されているのは明らか。言葉を選んでいるのか、はたまた単に気まずいのか……しどろもどろだ。

すると、その後ろにいた、紫の髪の娘と、薄茶色の髪の娘がフォローを、

「あー、ちょ、ちょい待ちおねーさん？ あのあれ……うちらほら、別になんも怪しないで？ あんたさんらを山賊や思て影からこそこそ見張ってたりしてへんで別に？」

「そ……そうなの！ 油断してるとこに奇襲かけようとか、もうちょつと進めば事前に作つとした罠にひっかかるなーとか、武器持ってる2人は強そうだから風ちゃんにまかせちゃおうとか、そんなこと全然これっぽっちも思っていないから警戒しないでなの！」

……しようとして、盛大に自爆していた。

てか、罠仕掛けてたの！？ あぶなっ！

「「「……………」」」

「「……………」」

周囲に『（^^;）』で『？』な空気を漂わせている2人が、たつたいまやかしたドジ（しかも気づいてない）に……僕ら4人プラス、銀髪の……比較的まともそうな娘は、絶句しているよりほかになかったのは、仕方ないはず。

あー……つまり君ら、僕らを山賊か何かと勘違いして、この先の村に襲いに来る前に、ここで一網打尽にしちやおうと思ってたわけだ？　なるほど……気配を殺して（愛紗に見つかってたけど）見張ってたのはそのためか。

すると、銀髪の娘がはっと気づいたような表情になって、

「っ……それより今は向こうの救援に行かないと……真桜、沙和、行くぞ！」

「うえっ、な、風、ちょ、待……」

「ああんっ、お洋服が伸びちゃうのー！」

「え、あ、ちょ……お、お前達！？」

「旅のお方、勘違いしてしまって大変失礼しました！　急ぐので失礼しますっ！」

銀髪の娘は、しゅぼつと一礼して詫びを入れると、傍にいる2人の腕を引っつかんで……凄まじい速さで走っていった。横の2人を、半ば引きずるような形にして。

まだ何か言ってるらしいその声からドップラー効果を感じ取りつつ……僕らだけがぽーんと取り残されたのであった。

……………えっと……何コレ？

☆

○Side ???

ぐうっ……不覚だった……っ！

全く見当違いな人物を山賊だと思ってつけ回し、他の地点での襲撃を見逃してしまうとは……私としたことが……っ！

い、いや……今はそれを悔やむよりも、今起こっている事態を何とかするのが先だ！

あの方々には、一応詫びは入れておいたし……開き直りに聞こえるかも知れないが、今優先すべきはこっちだからな……一刻も早く、現場に！

林の中を、真桜と沙和を急かしながら失踪していくと……見えた、山賊の一味だ！

旅人の一団か……いや違う！ あれは村への物資を運んできた商隊か！ だとしたらなおさら奪われるわけには行かないぞ！

「へっへっへ……運がいいぜ、まさかこんなに食料をつんだ馬車が通りかかるとはな」

「ああ、金目のものもかなりあるぜ、こりやしばらくは遊んで暮らせるな」

「させるかあっ！！」

怒号とともに……私は勢いそのままに茂みから飛び出す。

驚く山賊共の視線がこちらに向くより先に……私の拳が一気に2

人まとめて殴り飛ばす。吹き飛んだ2人は……とんだ先にいた数人の仲間を巻き込んで木叩きつけられた。

「よっしゃ間に合ったあ！ それ以上好き勝手させへんで！」

「とつと尻尾巻いて帰りやがれなのー！」

私の横をすり抜けるように、真桜と沙和も駆けつける。

それぞれ獲物を手に、まだ困惑気味の山賊たちに飛びかかり……体勢を立て直す前になぎはらっていった。

無論、私も黙ってはいない。拳と蹴りを主体にした連撃で、向かってくる山賊を沈めていく。私達の村を……荒らされてたまるものか！

「お……おい、何なんだこの3人、女のくせに……強えぞ！」

「は、半分以上がもう……くそっ、こうなりゃ逃げるが勝ちだ！」

と、そんな会話が聞こえた方を見ると……列の端の方にいた山賊たちが、もてるだけの荷物をもち、荷車を引いて逃げていこうとしていた。……っ、させんっ！

私は腰を落とし、拳を構え……意識を集中させる。

すぐに……私の拳に、空気がうねるような音とともに『気』が収束し始めた。

「あかん、逃げられる！ 風、『気弾』ぶちこんだれ！」

「言われなくても……はああああっ！！」

ギユウウウウン………ドウン！！

「うぐおあっ!!」

私の拳から放たれた『気』の弾丸……その名の通りの『気弾』が炸裂し、逃げていくうちの男の1人を昏倒させた。

続けて数発放ち……合計4人ほどを沈めたが……まだ何人かが逃げ延びている。

しかも……使えるものとしては希少な『気』を使った技を目の当たりにしたせいだろう……恐ろしさを顔に表し、逃げ足を加速させていた。くっ、厄介な……!

そのせいでだいぶ距離が開いたな……この距離で当たるか……? ダメもとで私が再度、気を集中しようとしたその時、

「そこまでだ、この恥知らず共めが!」

「な、何だてめえ……っ!?!」

「……っ? なぜ、ここに……」

山賊のみならず、後ろから見ていた私までもが目を見張るその先には……

先ほど、私達3人が、山賊だと勘違いしてしまった4人のうちの1人……流の装飾があらわれた長刀を手にした、黒髪の女性がいる。

逃げようとする山賊たちの前に立ちはだかり……仁王立ちをしている。

「何だてめえ女! そどこかねえとぶっ殺すぞ!」

「下衆の言葉になど聞く耳持たんな。貴様らこそ……我が刃の餌食となりたくなければ、奪ったものをおいてここを去れ!」

「あんだとコラァ! なめてつとてめえも一緒に持って帰るぞコラ

ア！」

口々に汚い言葉を浴びせかける山賊達だが……この時、私は気弾を装填することも忘れて、その女性のたたずまいに見入っていた。……遠めに見ただけでわかる。あの人の……底知れない実力に、だ。

さきほど隠れて見ていた時から……妙に胸騒ぎのようなものはあったのだが……臨戦態勢に入ったその姿を見て、ようやく気づけた。あの人から……とてつもなく強力な威圧感を感じる。それこそ……私達以上の。

そして、その証拠とでも言うように、

「はあああああああ——っ！！」

「「うっぎゃあああああ——っ！！」」

襲い掛かってきた山賊たちを……長刀をうならせ、いとも簡単に切り伏せた。

は、速い……それでいて力強く、正確な太刀筋……。距離があるせいもあるかもしれないが……目で追うのがやっとだった。

と、今度は後ろから……

「うにゃにゃにゃにゃあ——っ！！」
「っ！？」

声に驚いて私が振り向くと……そこには、黒髪の女性と同じく……先ほどの一団にいた、橙色の髪の、我々よりも年下に見える小さな少女が……身の丈の倍ほどもあるかという長槍を振り回し、山賊たちを宙に舞わせていた。見た目に反して何という怪力……。

「うにやにやにやにやあああ——っ！ 村の人達と、襲われた隊の人達と、あとついでにお前達に間違われた鈴々達の分なのだあ——っ！！」

「な……なんだそりゃああっ！？」

「ま、前2つはともかく、最後の知らねえぞ！？」

……私怨というか、八つ当たりが少々入っている。

あー……すまん、それ、我々のせいだ。とぼちりが行ってしまったか。

「あと、お腹減ったのだあ——っ！！」

「「「知るかあああああ——っ（泣）！！」」」

……さらに脈絡がなくなった気が。

不覚にも盗賊に同情しそうになった。

真桜と沙和、そして私も……その光景にあっけにとられていたが、すぐに気を持ち直して戦いに加わる。なぜ加勢してくれているのか、いや、そもそも何者なのかもわからんが……とりあえず、これは好機だ！

「よっしゃ、沙和、風、なんかよーわからんけど、一気にやったら！」

「了解なの！」

「ああ！ 旅のお方、その……助太刀感謝します！」

「気にするな、どの道このような外道はほうってはおけん」

「困った時はお互い様なのだ！」

それから数分が経った頃には……山賊たちは全員倒され、物資も全て、無事に取り戻されていた。

☆

○Side 明久

愛紗たちと、謎の少女A、B、Cが山賊さん達をちょうど殲滅し終わったころ、

僕ら一行は、『お礼がしたい』とかいう銀髪の娘の提案で、彼女達の村まで案内されてきていた。

まあ……どの道ここ来るつもりだったんだし……いいよね。

で、どうやら彼女達が3人で借りてるらしい借家に案内された僕は、遠慮なくそこに上がらせてもらい、靴を脱いでくつろいでいた。

結構広いな。ワンルームだけど……小学校の教室くらいはありそうだ。

「さて……先ほどはありがとうございました。おかげで、村の大切な物資を守ることができました」

「せやね、ホンマおおきにな」

「ありがとうなのー」

並んで座ってそう言うってくる三人娘に、愛紗が代表して『気にしないでくれ』と返す。

……鈴々はともかく……僕と桃香は、隠れてバトル終わるの待ってたただけだったけど。

話してくる彼女たち、3人共、自己紹介は終わっている。

まず一番右の、薄めの茶色の髪を三つ編みにしたの彼女、名前は于禁。

丸メガネとそばかすが特徴で、まだ幼さの残る顔つきだ。

腰には、武器である2振りの剣。二刀流か。さっきもそれで戦ってたっけ。

そして……僕の気のせいか……ちょっと露出多いけど、どこことなくデザイナー的に服が現代っぽく見える……かも？　しゃべり方とかノリも、現代の女子高生っぽいし……。

次に真ん中の、紫色の髪の彼女。名前は李典。

何よりも先に、服がすごい。下は作業着風のズボンとベルトなのに……上は、ビキニ水着みたいの1枚だけっていうけしからん状態。しかも、愛紗クラスの巨乳だからもろに目が行……ちょっ、眼福ってレベル超えてるんだけど……どうにかならない!?

そして、古代中国なのになぜか関西弁……って、ここはつつこむべきなんだろうか？

極め付けに……武器が……ドリル!?　え、ちょ、何で!?　ここ古代中国だよね!?

さ、最後に……、短め……と思いきや長い三編みがある銀髪の娘。名前は楽進。

性格はすつごくまじめで、前の2人のストッパー兼管理役、って

感じ。

褐色の肌のあちこちに……戦いによるものなのか……すごくたくさん傷痕が見て取れる。なんか、こう……すごい。目つきも鋭いし。

武器は手甲で、どうやら徒手空拳で戦うらしいんだけど……すごいのはその技。さっき、その……僕の目が間違ってたければ……エネルギー弾出してませんでした？

なんかもう、どこからどう気にしていいやら……って感じの3人。また、妙なのと知り合ったもんだな……。

「するとあなた方は……諸国を旅して回っているのですか？」

と、楽進。

戦場ではすごく雄雄しい感じがあったけど、こうしてみると、案外普通の女の子だ。

「うん。まあ、ここ通ったのは、ほとんどたまたまですけど」

「ふーん……けどなんや、難儀やね？ 何もこんな物騒なご時勢に、旅なんてせんでもええやろに……さっき見た感じやと、関羽さんや張飛嬢ちゃんくらい強かったら、いくらでも仕官先あるんちゃうの？」

「ううん、鈴々たちは、こんなご時勢だから旅してるのだ！」

「？ 何か、目的があって旅してる、ってことなのー？」

と、メガネの奥の目をきよんとさせる于禁。他2人もそんな感じだ。

その質問を受けて……何やら桃香がにやりと笑うと、『よくぞ聞いてくれました！』っていう雰囲気になって、胸をそらして……
……ん？

何だ、何かいやな予感が……僕の頭の中でアラートが鳴ってるぞ！？

僕は頭をフル回転させて考え……桃香の口が開きかけると同時に、それに気づいた。ま、まずいっ……！

「えへへっ、よくぞ聞いてくれました！ 私達ね、何を隠そう、ここにいる天……」

「桃香ちよっとこっち来てっ……！」

「のみつか……あえええええっ！？ ちよ……ご主人様！？」

どどどどど……ばたん！

強引に桃香の腕を引っ張ると、そのまま扉から家の外に出てさらに家の裏にまで一気に連れて行く。ま……間に合ったっ……！

家の中は多分『『……？』』な雰囲気になってるだろうけど……気にしてられるか……！

「ど、どうしたのご主人様！？ い、いきなり走り出して……」

「と……桃香……た、単刀直入に言うね？ あ、あのさ……僕の『天の御使い』ってステータス、絶対他の人に言わないで！ お願い……」

「え？ 何で？」

きょんとんとして『？』な桃香。

や、そりゃそうだよな。桃香達は思いっきり、僕のそのステータ

ス利用しようとしてんだもん。名乗ってナンボだよね。

けど……ちゃんと理由が、そしていくつかある。

僕が注目されたくないのはもちろんだけど……それ以上に、真っ向からそんなうさんくさいプロフィール語って、余計に警戒されたり、否定的な目で見られるのを防ぐためだ。

だって、天の御使いだよ？ そんな、現代日本で『俺、ウルトラマンに変身できるから。マジで』っていうのとさしてかわらないよ？ そんなのバカ正直に語ってみた所で、鼻で笑われるケースの方が多いだろう。愛紗たちと最初に訪れた村なんてのは、むしろ珍しいケースだと言っている。

けどまあ……僕も『名前を貸す^{ブランド}』ことを引き受けた身だし……ごまかしごまかしはさせてもらうとしても、名乗り全面禁止とかはさすがにしないけどね。

名乗るとしたら、しかるべきタイミングを見計らって……ってこと。じゃなきゃ、効果もありがたみも十分には発揮できないからね。最初っから『ひかえおろう！』の印籠出す黄門様とかいないでしょ？

それをどうにか説明すると……どうにか桃香もわかってくれたらしかった。ふう、クリア。さて……愛紗と鈴々にも注意しとかなないと……。

そう思いつつ、僕が家の中に戻ると……

「やーごめんごめん、ちょっと桃香に急ぎの用事があったね？」
「おーお帰りあんさん。天の御使い様ってホントなん？」

ずこおっ!!

李典の口から極めてナチュラルに飛び出した言葉に、僕は顔面から床につこんだ。

ちょ、今何て言った!? 何で!? Why!?

驚いて顔を上げる僕の視界に……今のヘッドスライディングにあぜんとする楽進、于禁、李典の3人が映り、

その奥に……につこりと笑う、愛紗と鈴々。

く……口止め……ここ来る前にしとくべきだった……っ!

結局その後、どうにか僕はそれ以上の噂の拡大の阻止と、愛紗たちへの事情説明&口止めを完了させることができましたけども……はあ、村来て早々、調子狂いっぱなしだなあ……。

さ、先が、思いやられる……。

第6話 誤解と山賊と三羽烏（後書き）

と、いうわけで、出てきたのは……三羽烏こと、于禁・李典・楽進でした。

本来蜀ルートでは戦場くらいしか接点が無い彼女らですが……そんなぞんざいな扱い許しません。

さーて、どう暴れさせようかな……

ではこのへんで、和尚でした。

第7話 襲撃と名乗りとギャリック砲（前書き）

……えー……

オリジナル展開に入っただと思っただら、なんじゃこのタイトルは？
って方、

多いかと思いますが……まあ、読んでください。

ちなみに今回は戦闘パートです。……戦争って感じはほぼ皆無なんです。あいかわらずノリと勢いで突っ走っております。

第7話、どうぞ。

第7話 襲撃と名乗りとギャリック砲

○Side 明久

僕らが楽進たちの村に到着してから、数日が経った。

どこぞのモトラドに乗る旅人よろしく、村にはせいぜい3日くらいしか滞在するつもりなかったんだけど……山賊との戦いを通して、楽進や李典、于禁とも知り合えた……っていうのが、ちょっと大きかったのか……予定よりも、割と長いことこの村にいる。

旅人生活で、他人との付き合いが希薄だと……たまーにできるこういう仲って、離れたくなるものらしいな。

物資防衛のお礼ってことで、無料で提供してもらえた空き家に滞在しつつ……何でも屋よろしく仕事の手伝いなんかをしながら、僕は日々を過ごしていた。

楽進達や、ほかの村の人達ともすっかり仲良くなって……よかつたらそのままこの村に住まないか？　なんて時々誘われたりする。まあ……いい加減に出発しなきゃいけないから、断ってるけど……。

……そんな、ある日。事件は……突然に起きた。

……この前の山賊たちよりもさらに大きな、いやむしろ、この村にとってこれまでで最大規模だという盗賊の一団が……村に直接攻めてきたのである。

☆

てんやわんやの大騒ぎになっている村の中。

そんな中……場所を楽進の家（広い）に移し、僕達は即席の陣営をつくり、主要人物を集めて作戦会議みたいなものを行っていた。

ちなみに、この村の村長とか、そういうお偉方の人達は……もう何ヶ月も前に逃げたしちゃったらしい。なんて無責任な。

そういうわけで……実質今は、自治会みたいな感じでやりくりされてたらしいんだけど……その中で防衛担当である、楽進、于禁、李典の3人が、この会議の中心になる。

で、そこに……村の自警団の人と……ついでに（？）僕と愛紗と桃香と鈴々。

「偵察に出した仲間の報告だと……山賊たちの数は、数百人はくだらないらしい」

と、重々しく口を開いたのは……楽進。

その両隣、いつものほほんとしてる于禁と李典も、今回ばかりは思案顔だ。

「それに対して……われらの兵力は、せいぜいその半分がいいところ、か……」

「うー、さすがに厳しいの……」

「罨ありったけ張っても、正直厳しいで、これ……」

聞くところによると……盗賊たちの到着はおよそ1刻後とか。1刻……現実世界の単位に直すと……確か、2時間くらいだ。

どこから攻めてくるかはわかってるらしいから……それまでに設備を整えて、正面から迎え撃つらしい。小細工を弄してどうにかなる数じゃないんだとか。

……ホントに切羽詰まってるな……。

李典のトラップで少しは削れるかもしれないけど……逆に怒らせちゃったら元も子もないし……うーん、これま難しい。

すると、会議のさなか……楽進が、ふと僕らの方を見て言った。

「みつか……じゃなくて、明久殿。あなた方は、今のうちに、むらの裏にある山道から逃げてください。これ以上……巻き込むわけには行きません」

目を真っ直ぐ見て言うてくる楽進。

まあ……彼女のまじめな性格を考えれば、当然の配慮だろう。

最初の出会いが、そもそも『山賊に間違えた』ってやつだったんだっけ。

それだけでも、失礼だった、と思ってた相手に……あろうことか、山賊の撃退まで手伝ってもらった結果となったわけだから。楽進、ちよっぴり僕らに対して遠慮気味。

や、別に結果的に襲われなかったし、罠にも引つかからなかったから、別に僕らの方は全然気にしてないんだけどね……？

そんな感じで、楽進は僕達にも、今のうちに避難するように指示してきたんだけど……

……僕達のもともとの目的が目的だし、そうでなくても愛紗と鈴々、それに桃香は『そういう性格』なわけで。

「いや……楽進殿、我々もここに残って戦おう」

「……な……っ!？」

目に見えてびっくりしてる3人。

しかし……愛紗たちは、さも『当然』とでも言いたげに堂々と構えている。

ま……当然か。彼女達、こういう現実を無視できなくて立ち上がったんだもんね。

「な……何を言っているんですか!？　このままここにいたら危険です!」

「この前とは規模がちゃうねんて!　いくらなんでもあかんよ!」
「気持ち嬉しいけど、ここは避難してなの!」

口々にそう言ってきてくれるけど……そのくらいで意見を変えるほど、桃香達は単純じゃない。……御使い云々の一件で、僕はいやと言うほどそれを思い知ってる。

どうにか説き伏せようとしていた楽進たちも……最後にはしぶしぶ折れた。

結局、愛紗と鈴々は……楽進たちと強力し、自警団を率いて戦う小隊長……っていう感じのポジションに落ち着いた。

……で問題は、残る2人のポジション。
や、ぶっちゃけ、僕と桃香なんだけどね？

「ご主人様、桃香様、お2人は危険ですので、後方で下がって待っててください」

「えー!　でも、私達も何か手伝いたいよー!」

「んー……まあ、確かに怖いけど……武器運んだりとか、雑用系の仕事なら……」

最初の戦いでもそうだったけど……愛紗達が戦ってるのを知って後方で待ってるのって、落ち着かないわけで……何か仕事割り振ってくれた方が、ぶっちゃけ気が楽。

そう、桃香と僕は言い張ったんだけど……頑として許してくれない。雰囲気はもう、戦場だもん、愛紗。

「前線付近は、流れ矢が飛んでくる危険があります。お聞き分けてください」

「そうですね。我々武人なら、流れ矢程度叩き落せますが……体つきなどから判断させていただく限り、武に優れている……とは言えないご様子。ここはお下がりを」

うっ、鋭い……っていうか、矢、叩き落とせるの君達？　すごいね？

そして楽進……体見ただけでそんなことわかるんだ？　重ねてすごい。

そう説かれつつも、僕と桃香がどうにか食い下がっていると……

「た……大変だ！　予想より早く、盗賊共が襲ってきやがった！」

「「「……っ!？」」」

いきなり飛び込んできた伝令の人の口から、そんな言葉が。……ってマジ!？

「くっ……まずい、今すぐ配置につかねば！ 鈴々！」

「真桜、沙和、私達も行くぞ！」

「あ、あの……私達は……」

「ですから桃香様たちは下がっていてください！」

愛紗、一喝。もう、雰囲気は戦場ですね。

まあ、仕方ないか。迷惑かけてもあれだし……と、僕が諦めて一歩下がるけど、桃香はまだいい足りないらしく、食い下がる。

「でもでも、私、愛紗ちゃん達に任せて待ってるだけなんて……」

「っ……ですからここは……」

「我々に任せてください！」

と、痺れを切らしたらしい愛紗と楽進が、強硬手段よろしく……突き飛ばした。

……なぜか、桃香じゃなく……僕を。

「いや僕何も言っただぐごげあっ!？」

ごん!!
↑ 僕が後頭部を床（木造）に強打する音

いだあっ!？ 何で!？ 何で僕なの!？

落ちかけている意識の中で……慌てる桃香の声と、走り去っていく愛紗たちの足音。ああ、人が悶絶してるそばで、けっこう重要っぽいシーンが進行していく……。

家には……やはり落ち着かない様子の桃香と、痙攣気味にふるふると震えている僕が残されただけだ、

しばらくして……やはりというか、

「……やっぱり……落ち着いてなんて、いられない……ほっとけないよ!」

そんな声が聞こえたあとに、すたすたと去っていく足音。
多分、雑用その他の手伝いにいったんだろう。やれやれ……『ほっとけない』か……桃香らしい、優しい考えだなあ。

……けど、

「……僕の方は、ほっといていいの……桃、香……（ガクッ）」

ちよつとだけ、涙が出た。

☆

「くっ……こうまで数が多いとは……」

「ああ……いい加減、厄介だな……」

簡易的に整えた陣営で、私と関羽殿は談義を交わしていた。

大通りに作った5つの防衛線のうち、3つ目までを突破されてしまった状態。

しかも、最後の1つは、資材も時間も足らなかったがゆえに未完成のものだし……このままでは押し切られて、村の中への進行を許してしまいかねない……！

しかし、どうにかしようにも……正直、数の暴力が相手ではいかんとも……

「ほ……報告！ 4つ目の防衛線が突破されました！」

「……っ！」

「く……まずいな……！」

横にいる関羽殿も、顔をしかめる。

これで残るは、ほとんど未完成の5つめのみ……これ以上は本気でまずい！

沙和と張飛殿が前線に出ているが……さすがに兵の差がある。全て抑えきることはできず、いくつかの部隊がすり抜けたようだ。

こうなれば……真桜を呼び戻し、私と関羽殿で当たるしかないな……。

と、そう思ったその時……

「愛紗ちゃん、楽進ちゃん！」

「……っ!？」

「と、桃香様!？」

通りの向こうから……手を振って、申し訳なさそうにしつつ……走ってくる劉備殿が見えた。なっ……何でここにっ!？

ここは危険だと、（明久殿を）突き飛ばしてまでわからせたというのに……

横にいる関羽殿も、息を呑んでいた。

くっ……その優しい心根は賞賛に値するものだろうが……ここでははっきり言って邪魔だ、今度は縛ってでも安全なところに……

……その時、そのさらに背後に……信じられないものが見えた。

「なっ……!」

「と……桃香様、う……後ろっ!」

「愛紗ちゃ……え？　後ろって……えええっ!？」

驚く劉備殿の後ろから走ってくるのは……なんと、まだ防衛線で食い止めているはずの盗賊たちの一団だった。バカな、なぜ村の中につ!？

まさか……別働隊か!？　本隊をおとりに少数で内部に潜入し、内部から突き崩すための……くそっ、やられた!　こしやくなまねを……

いや、今はそれよりも、劉備殿が危ない!

劉備殿を守ろうと、関羽殿はすでに駆け出していたが……到底間に合わないだろう。距離に差がありすぎる……たどり着く前に、劉

備殿に賊の凶刃が届いてしまう。

ここは私が気弾で……しかし、この距離であたるか!?

しかし、ダメで元々……私が拳を構えようとしたその時、

「だあああらっつっつしゃあああああ————っ!!!」

ひゅるるる……ドゴォン!!!

「「!?!?」」

そんな声とともに、どこからか……特大の荷車が宙を舞って飛来し、劉備殿に迫ってきていた盗賊達に真上から直撃した。な……何だあ!?

当然、盗賊たちは荷車に押しつぶされて全滅……と、思いきや、1人運よく生き残っていた。端の方にいたために……直撃を免れたようだ。

と、そこに……

「ライダー・キック!!」

「ぶげらっ!?!」

土煙の中から飛来した吉井殿のとび蹴りが炸裂し、その賊を昏倒

させる。

ま、まさか……今の荷車は吉井殿が！？　その細腕で……どうやって！？

いやそんなことより……なぜ吉井殿までこんなところに！？
当然ながら、私のみならず……関羽殿や劉備殿も、驚いていた。

「ご、ご主人様あ！？」

「ぜー……ぜー……どうも！　意味もなく昏倒させられた挙句、愛紗たちをほっとけなくて駆け出した桃香にまでほっとかれた吉井明久、ただいま参上！」

「「「あうっ！！」」」

ぐさっ　　×3

い、今のセリフに胸が痛い……

関羽殿と劉備殿も同様の反応をみせていたが……すぐに関羽殿が立ち直り、劉備殿と吉井殿を見据えて怒鳴りつける。

「お……お2人ともなぜこのようなところに！？　危険ですから楽進たちの家にいるようにと申し上げたでしょう！？」

「あう、ごめんね愛紗ちゃん……でも……」

「何言ってるんの愛紗！？　あそこ余計危険だったでしょーが！」

「「「え？」」」

劉備殿のセリフをさえぎって発せられた吉井殿の言葉に……我ら一同、目を丸くする。

危険……だった、とは？

「だからね……」

☆

○Side 明久

はい、ここから僕の回想始まります。一同、注目！

一応、言いつけどおりに家でじっとしてた……というか、愛紗と楽進による脳震とうが思いのほか深刻で、動けなかった僕は、楽進の家で自然治癒を待っていた。

しかし……その時、どうやら本隊とは別に村に潜入していたらしい別働隊が表で暴れだしたのが聞こえてきて、やばいどうしよコレ？　とか思ってたわけ。

その後、どうにか回復した僕は……このまま家の中にも殺されるな、と思って外に出た。家の中にいたら、襲われたとき退路ないし。

でもって、召喚獣を呼び出した後……今みたいに重いもの片っ端から投げつけて、賊を一掃したのでした。幸いザコばかりだったし、まとまってたからなんとかなった。

それにその途中、資材取りに来たらしい李典たちが合流して加勢してくれたしね。

その際、李典に召喚獣見られちゃったけど……うまくはぐらかしてここまで来た。

はい、回想終わり。時間軸戻します。

「と、いうわけで、家にいる方が危険でした。以上」

「も、申し訳ありません……浅慮でした……」

「あ、いや別にそういう意味で言ってるわけじゃないんだけど……」

ため息はつきつつも、楽進や愛紗をねぎらってそう言うておく。

ちなみに、今も僕の肩にちょこんと乗っかってる僕の召喚獣に關しては……『後で説明するから勘弁して』って言っというた。

と、

「愛紗ー！ ごめん、もう防衛線無理なのだ！」

「最後の1つも突破されちゃったのー！」

「あかんわ風！ 関羽さんも！ 修繕まにあわへん！」

前線から、負傷した兵士の皆さんを引き連れて戻ってきた鈴々たち
が合流。本人達はいした怪我ないみたいだけど……

しかも……超凶報もってきた。うわ……マジっすか？ 防衛ライン
やられたって？

すると、それを裏付けるように……その後ろの方に、砂煙を上げて走ってくる盗賊の一団が見えた。しかも……数多っ！？ ちょ……
…これ本気でまずくない！？

愛紗も、楽進も、齒軋りをしてそれをにらみつけている。

自警団、あと兵力30%くらいかな……のこりは傷兵ばかりだし、
戦力としては期待できない。愛紗達が全員戦線に加わっても、正直

厳しいんだろうな……。

けど、ここで逃げたら村は壊滅。食料も金品も、何もかも奪われる。

まあ……殺されるよりかは、マシかもしれないけど……。

「あ、愛紗ちゃん……ど、どうにかならないの!? このまま負けちゃうなんて、村を守れないなんて……あんまりにも……」

「……お気持ちはわかりますが、桃香様……何もかもが圧倒的に不足しています。これ以上は、いくらなんでも……防衛しつつ、村人を逃がすしか……」

「そんな……」

泣きそうな桃香をなんとかさとしつつ、愛紗は兵達に戦闘準備をさせる。

……桃香の言うことはもっともだけど……正直、実行は無理と言わざるを得ない。

だって、盗賊たちがここまでくるまで……もう残り十数分だろう。その間に新たに防御壁や、一発逆転の攻撃手段なんか、用意できるわけ……けほっ、ないし。

やっぱりここは……けほっ。愛紗のいうとおり、逃げるしか……げほげほ!!?

……って何ださっきから? なんか、けむい………ん?

見ると……周囲に、何やら白い煙が立ち込めていた。……何だこれ? 煙幕? まさか……賊の別働隊が奇襲を?

……って、違った。

さっき僕が投げつけた荷車の積荷が、小麦粉だったみたいだ。落下の衝撃で袋が破れて……あたりに散乱してる。ごほっ……けむい。

見ると、みんなの髪とか顔とかにも小麦粉が斑点状について、ちょっと笑いそうになった……って、いかんいかん、そんな場合じゃない。

で、でも……鈴々の髪飾りにも小麦粉がついたおかげで、トラが白クマッぽくなって……って、いかんいかん、笑うな。あれはトラだ！

全くもう、こんな時に……

………まてよ？

「これだっ！！」

「「「え！？」」」

いきなり僕が大声を出したのにびっくりしたのか……愛紗たち全員が、驚いた視線をこっちに向けていた。あ、ごめん、でもいいこと思いついた！

えっと……風向き……よし、こっちが風上！でもって……街道の両側が家で囲まれてるから……

「ご……ご主人様？ 何か……思いついたの？」

「みんな！ 古くても質が悪くてもいいから、あれみたいな小麦粉

の袋ありったけ集めて！　今すぐ！」

☆

そして、数分後。

混乱しつつも……兵を動員し、小麦粉の袋は集まった。

新品のものもあるけど……去年から使わないまま、捨てることも
もったいなくてできずに古くなっちゃったというのが結構多くあ
ったので、結構な数が集まった。

よし……これだけあれば、足りるだろう。上手くいくかもしれな
い。

一応、愛紗たちは兵に指示を出し……盗賊たちの迎撃用に陣を組
んで待ち構えている。

できれば……僕の作戦が上手くいって、この陣形使わないで終わ
らせたいけど……。

でも……やってみなきゃわかんないし、保険ってことで！

「吉井殿！　前方に敵確認、後3分もしないうちにここまで来ます
！」

「っ……ご主人様、やはり後方に下がられた方が……」

「大丈夫、この作戦が失敗したらきちんと下がるから、ね？」

「は、はい……」

愛紗を納得させて……さあ、いよいよ作戦開始だ！

「試獣^{サモン}召喚……！」

ポンッ！ ↑ 僕の召喚獣登場

呪文を唱え、召喚獣を呼び出す。

その際、幾何学模様の光と、突如現れたちっちゃい僕に、風たちを含む兵達のほとんどが驚いてたけど……無視。じゃ、いくよ！

「いくよ楽進、せーの……そーれえっ！！」

「了解です、はああああっ！！」

どひゅんっ！！ ↑ 僕の召喚獣が思いっきり小麦粉の袋を
投げる

ひゅるるる…… ↑ 小麦粉の袋が盗賊の皆さんの所に飛ん
でいく

ばしゅっ！！ ↑ 楽進がその袋に当たるようにエネルギー
弾を放つ

ばふおんっ！！ ↑ 楽進のエネルギー弾が袋を直撃して爆砕

……で、当然のごとく、中身の小麦粉が周囲に飛び散ってカオスなことに。

「どわああっ！？ な、何だぁ！？」

「け、けむいっ！？ しかも前見えねーっ！？」

よし成功！

小麦粉煙幕のせいで盗賊の皆さんの速度が落ち、さらに前が見えないために、見方同士で前後衝突する音なんかも聞こえてきた。この調子っ！

「せいっ！」

「はあっ！」

「そいやっ！」

「はああっ！」

これを繰り返し、同じ要領で、ちょっとだけ着弾地点をずらしながら、楽進と僕（の召喚獣）で小麦粉煙幕を打ち込んでいく。

ほどなくして……大通り全体が真っ白な煙に覆われた。

「く、くそ……け、けむいっ……！」

「い、息が、苦し……！」

「なっ、ナメたまねしやがって……！」

そんな苦悶と怒号の声が、盗賊さん達のほうから聞こえてくる。

さて……ここまでが準備段階。

これだけだと、単に足を鈍らせて時間を稼ぎ、戦闘開始をちょっと遅くしただけだけど……残念ながら、本当の目的はまだこれからなんだなあ、これが。

今、大通りは……こちらから追い風だっということと、両側に家々が並んでもうこともあって……宙を舞う小麦粉が充満。数メートル先がやっと見えるくらい。

盗賊団の皆さんは……全体がその小麦粉濃霧の中にいる。うん、理想的な状況だ。

さて、と……仕上げだ。

僕は合図して……横にいる于禁から、赤々と燃える火がともった薪を受け取った。

そしてそれを、僕の召喚獣に持たせて、投擲の体勢をとらせる。

……さて、わかったんじゃないかな。僕が何をするつもりか……

「よっしゃあ、うなれ僕のギャリック砲!!」

せめてものの演出にと、某野菜宇宙人の王子の決めポーズをとりながら、僕の召喚獣が燃える薪を勢いよく投げつけた。低角で、なるべく遠くに。

そして、その薪の火が、小麦粉スモークの端にまで差し掛かった瞬間、

シュボツッ!!

その端から勢いよく火の手が上がり……盗賊たちのいる方に向かって、凄まじい速さで勢いを増しながら、灼熱の爆炎が突進していく。

ドゴオオオオオオオオン!!!!

「「「!!!!?」」」

町の人達も、盗賊たちも……皆が一樣に、これ以上ないくらいの驚愕を浮かべた。

僕が今起こした……『粉塵爆発』に。

はい注目。知ってるかどうか知らないけど、空气中に可燃性の粉塵が充満した状態で火を起こすと、それが次々に引火・燃焼し、大爆発を起こす……その現象を『粉塵爆発』と呼びます。

その爆発的な炎に包まれ、盗賊たちが次々に吹き飛んでいく。

結果的に……街道全体が、数秒間だけ火の海になり……そこにさしかかっていた盗賊達がほとんど全滅した。

お、思った以上に威力高いな……前に見た映画の知識が役にたった……。

こ、これで、とりあえず盗賊連中、兵力的にも精神的にも結構な打撃になったな……なんて、僕がちよっとだけ安心して、あとは愛紗達に任せて下がろうとしたその時、

……予定外のこと起きた。

……いや、起こしやがった。……愛紗が。

下がろうとする僕をなぜか引きとめ、軍の最前線に連れて行く。
わけもわからないまま連れて行かれた僕の眼前に……爆発から運
よく生き残りつつも、あまりの超常現象を目の前にして戦意喪失気
味の盗賊さん達が映った。

……そして……僕は、そこにいたって、ようやく悟った。
愛紗が……何をするつもりなのか。

失敗は……3つだ。

1つ目……こんなトリッキーな策を、愛紗達がいるそばで、かつ
衆人環視の状況下で実行してしまったこと。

2つ目……粉塵爆発は、全体が一気に爆発するのではなく……引
火した端っことから、高速で燃え広がるように、炎がほとばしって
く見た目をとっていること。

見方によっては……僕の手元から炎がほとばしったみたいに見える。
る。

そして3つ目……調子こいて、ベ○ータなポーズなんかとったこ
と。

気づいた時にはもう遅い。愛紗の演説が始まっていた。

「見たか下郎共！ わが主、吉井明久様の神通力『ぎやりつくほう』を！」

「ぐ、ぐふっ……な、何なんだ今のは……！？ お前ら、一体……！？」

盗賊の1人がそう言った所で、愛紗が僕にしかわからない程度に不適に笑う。

「ええい静まれ静まれいっ！ この『召喚獣』が目に入らぬか！」
「あ、愛紗！？ ちょっと待……」

しかし、手遅れ。

「こちらにおわすお方をどなたと心得る！？ 恐れ多くも、乱世を鎮めんがために天より舞い降りし『天の御使い』、吉井明久様にあらせられるぞ！」

言っちゃったあ————っ……！？

しかもこんな大々的に！ ちょ、どこの水戸黄門！？

おそらくとっさに思いついたんだろうけど……愛紗の演出センスが本気で憎い。

ぽかんとしている、盗賊および民衆の皆さん。やばい、この後の展開が目に見える。

で、次の瞬間、

「一同！ 御使い様の御前である……！ 図が高い、控えおろうッッ！！」

「「は、ははああ————っ！！」」

一瞬後、全員土下座。村人、盗賊問わず。
気分はどこぞの副將軍。でも全然嬉しくない。

や、やっちゃった……『粉塵爆発』なんて超常現象見せてる分、
前の村なんかよりよっぽど洒落にならない事態に……っ！！

今や僕は、摩訶不思議な神通力で、たった1人で盗賊の大量に殲滅し、残る者達の戦意を喪失させて村を救ったスーパーヒーローって位置づけになってしまった。

この先……多分、普通の生活送れない。少なくとも、この村にいる間は。

どうして……こんなことに……っ（号泣）！！

第7話 襲撃と名乗りとギャリック砲（後書き）

……さらに追い詰められる明久でした。ちゃんちゃん。
不憫な上に不幸で……なんかもう泣けてきます。

そして、なんか思った以上に『水○黄門』のセリフがマッチしたの
で、愛紗に助さん角さんを兼任して啖呵切ってもらいました。……
意外と似合ってる？

次回、三羽烏編ラスト（の予定）です。

第8話 真名と火鍋と川下り（前書き）

今回、三羽烏編ラストです。

どうぞ。

第8話 真名と火鍋と川下り

○Side 明久

あー……もう！ あれからもう！

何、言ってる意味わかんないって？ 察してくれ。

盗賊さん達を、ギャリック砲という名の粉塵爆発で滅殺した後、僕はあえなくヒーローに祭り上げられてしまいましたのでした。

当然……普通の待遇・普通の生活なんかさせてもらえるわけもなく……村で一番上等だっという宿屋にタダで泊めてもらったり、料理も色々と豪華なもの食べさせてもらったり……しかもなんか、礼金まで（ムリヤリ）受け取らされて……はあ。

その流れで、『ずっとこの村にいてください！』とか言われたりしたんだけど……さすがに無理です。

これ以上滞在するとマジでそうなりそうな気がしたので、明日出発することにした。

☆

現在、

場所……風の家。

状況……鍋パーティ。

最後の夜は皆仲良く、庶民的にわいわい騒ぎたかったので、こんな感じで風の家に集まりました。

「いやー、しかしホンマ、なんちゅーか……長いよーで短かったなあ」

と、中央に置かれている鍋から、しらたき（に似た何か）をとって食べる真桜。

その横には、豆腐が熱くてハフハフ言っている沙和と、大量の七味唐辛子を自分の取り皿に投下している凧。……辛い好きなのか？

あ、今のでわかったと思うけど……3人共、真名を許してくれました。楽進が凧、李典が真桜、于禁が沙和だっさ。

桃香達も、きっちり真名を交換して……僕だけ、なんか疎外感。仕方ないじゃん、真名とかないんだもん。

その代わり……ってわけじゃないけど、凧たちの僕に対しての呼称が変わった。

前は『吉井殿』とか『吉井はん』とか『吉井くん』だったけど、今は……

「んぐ、んぐ……なあ隊長、そのシイタケもろてええ？」

「……いいけど……その呼び方、どうにかなんない？」

「？ 何や、やっぱ嫌なん？」

いやその、嫌っていうか………はあ、ため息。

ええとですね、これはどういことなのかって………話は数日前。

というか、盗賊ぶっ飛ばした日の夜。

はい、回想入りまーす。

『御使い様！ 村人達から、受け取って欲しいと野菜や果物が届いてます！』

『ねー御使い様ー！ その服、意匠が変わってて興味あるんだけど、見せてなのー！』

『なー御使いはん、さっきのどえらい爆発の原理教えてんかー？』

『風！ 沙和！ 真桜！ だからその呼び方頼むからやめてっば！ 普通に『明久』とかでいいから！』

『しかし、村の大恩人に対して礼を失するわけには……』

『村全体で、御使い様には最大限丁寧に接するように、っていうのが暗黙の了解になってるから……いくら了承もらってても、気安く呼べないの〜』

とまあ、最低限……敬う気持ちが見られる呼称でないとダメらしい。

……話的内容的に、沙和と真桜は……敬ってるのは、呼称だけって気がするんだけど。そこまでフランクにできるなら、今更呼称ごとききにせんでもよかろうに。

と、そこで真桜が……

『あ、せやったら……こんな呼び方どやろ？ 御使いはん、戦いの後の復興とかで、天の世界の知識生かして、うちに色々指示だしてくれはったやん？』

ああ、まあ……マンガ・アニメ・ゲームの聞きかじりだけだね。

で……それが？

『そんなときウチな、まるでウチら、御使いはんの部下見たく思えてん。せやから……』

……で、僕を尻たち三人の上司に見立てて……『隊長』だそーです。安直。

まあ実際……その後も、3人して僕の補佐というか……手伝いみたいなことしてくれてたし、似たようなもんか。『御使い様』よりはいいしね。

小学生のカッコつけみたいで、なんていうか……ちゃちいけど。

「あー……明日で隊長ともお別れかぁ、なんや寂しーなー」
「それなら……もぐもぐ、真桜達も鈴々達と一緒に来ればいいのだ！」

「いや、残念だがそれは無理だ。我々3人はこの村の防衛が仕事だから……」

「だから、故郷の村を見捨ててどこかには行けないの……」

「あ、じゃあ仕方ないね」

ちよつとがっかりしつつ、山菜をほおぼる桃香。旅の仲間が増えることを期待してた見ただけど……そういう事情があるんじゃない、仕方ないよね。

「しかし、ホンマ寂しゅうなるな……！　なあ隊長、隊長って確か……桃香はん達とは別の部屋借りて泊まっとるんやろ？」
「？　そうだけど……」

せっかくタダなんだし……そんな時まで女の子と同じ部屋で……
っていうのは、さすがに色々まずいしね。主に僕の理性のリミッタ
ーとかが、色々。

それに、部屋はちょうど3人部屋だったから、桃香、愛紗、鈴々
で一部屋使って、僕は他の部屋……っていうのが、一番バランスい
いんだよ。うん。

で、それがどうかしたの？ そんなニヤニヤ笑って……

「えつとなー……隊長、今晚、このあと3人で隊長の部屋行って寝
てええ？」

「「「な!？」」」

「わーお！」

「にゃ？」

驚く桃香、愛紗、凧。若干驚き方が違う沙和（悪ノリの気配）と、
きよとんとする鈴々。

「真桜！ お、お前、何をいきなり、ご主人様に何を……」

「？ 別にいいけど？」

「「「ええっ!？」」」

何か言おうとしてた愛紗と、横であわあわ言ってた桃香が再び驚
く。あと凧も。

？ 僕の返事がそんなに意外だったんだろうか？

桃香達が慌てるような顔になってるそばで、からかうような顔の
沙和と真桜。

「あはははっ、隊長、意外と積極的なのー♪」

「にひひっ、ほな、遠慮なく行かせてもらおか。なあ、凧？」

「えええっ!？」 いや、そんな……いくらなんでもお前達、そんな

いきなり……」

「まあまあ、3人仲良く来なよ。それじゃ僕は今日は、他の部屋借りなきゃね」

「「へ?」「」」

瞬間、今までテンション高く話していた3人の目が点になる。
? どしたの?

「え? た、隊長? 他の部屋って……?」

「ウチら、泊まり行ってもええんちゃうの?」

「? うん、三人で泊まりにすれば? 僕は今日は他の部屋で寝るから」

「「何で!?!」」

いや、沙和、真桜、『何で』って……

「年頃の女の子と一緒にの部屋で寝るのはまずいでしょ? 一応僕、男だよ?」

「「「……………」」」

「?」

「……………もしかして、ご主人様……………」

「単に……………真桜たちが、『私達の泊まっている宿』に泊まってみた
いのだ、と解釈なさったようですね……………」

? 違うの?

いや、まあ……………無理ないよね? この村で最高級の宿屋だし……………

設備も充実してるところだったし。女の子なら、一度はそういうところに泊まってみたいと思うのも。

ちようど3人部屋だし……最高級3人部屋は、宿にその2つだけだったから、自然と僕は他の部屋を借りることになる……ってわけだね。

「……アカン、色々想像の斜め上行かれとる」

「完全に肩透かし食らったの……」

？ どうしてみんな、なんか疲れたような顔になってるんだろ？
風が妙にほっとしてたような表情をしてる理由と一緒に教えてほしいけど……

「と、ともかくほら……みんな、食べよ？ ね？」

なぜかごまかすように、食事を勧める桃香。……？ まあ、いいか、食べよう。

……ってあれ、もうない！？ くっ……会話にあんまり参加してこなかった鈴々か！

「あちゃー、もうないね……」

「鈴々はまだ食べたりないのだー！」

「いや、一番ぎょーさん食ったやん」

つつこみつつ、真桜は新しい鍋を用意する。……ん？

今度のは……今までつついてた鍋とは違う感じだな？ 材料とか、出汁とか……

「『火鍋』^{ほいつ} ゆーねん。ちょっと辛目の味付けやけど、美味しいで？」

「うん！ あったまるし、辛いから汗とかいっぱい出て、美容にも

いいのー!」

美容・おしゃれ命の沙和は、そう言っただけでいい。なるほどね、発汗作用か。唐辛子のカプサイシンとかかな？するとおもむろに、風が前に身を乗り出して……

「じゃあ、私が味付けを……」

「だめなの」「アカン」

「ええっ!？」

両サイドから同時に否定されて風がショックを受ける。どしたのいきなり？

「？ 風ちゃんに味付けお願いしないの？ さっきのお鍋も、出汁とかは風ちゃんにやってもらってたのに……」

と、桃香。

そう、さっきの鍋だけ……入れる食材の指定とか以外の、いろいろ細かい調理は、実は風がやってもらってた。ここ風んちだし、ホストってことで。

それがまた上手で……美味しいんだ。風って、料理上手いんだね？なら、その『火鍋』ってのも風に頼めば……

「いや、アカンねん隊長。風は確かに料理は上手いんだけど……」

「辛い料理だけは任せちゃダメなの……」

「え？ そうなの？」

「せや、風自身がえっらい辛党やさかい、風の味覚に任せて作ったらウチらが食えるもんでけへんねん」

「なっ……失礼な!」

顔を赤くして反論してくる凧の手には……赤唐辛子と、その粉末と、七味唐辛子と、一味唐辛子と、青唐辛子、それにラー油。山椒っぽい木の実も少し。

……ま、まあ、種類のには若干多い気がするけど……ブレンドで味をよくするなんて、よくあることじゃない? そんな、食べられないほどのものには……

「ちなみに隊長、凧がもつとる調味料、凧の一回分やで」

「沙和、味付けお願い」

「はいなの」

「隊長まで!?!」

があん、とショックを受ける凧の手から、沙和が赤唐辛子とラー油だけを失敬して鍋に加えていた。ごめん、凧、僕らは人間なんだ。

「うう……美味しいのに……」

「風基準やったら、木イチゴ感覚で唐辛子丸かじりしてもおかしいからアカン」

「? ……普通に美味いぞ?」

「やっとなのかい!」

常識人だと思ってた凧の味覚に戦慄しつつ、僕らは沙和の味付けで火鍋を囲む。

うん、まあ……確かに辛いけど、これはこれで癖になる美味しさだと思った。けど……後で雑炊とか作るには、向かないかな、この味付けだと。

その火鍋にも……凧は自分の分に、後から大量の香辛料を追加し

てた。いわく、『足りない』。

ちなみにその少し後、食い気が勝ったらしい鈴々が、風流味付けの火鍋スープを味見させてもらい……火を吹いた。

……恐るべし……辛党……。いや、そういうレベルでもない気がするけどね？

☆

翌日。

風たちは、村の出口付近まで、僕らを見送りに来てくれた。

うーん……名残惜しくなるから、見送りは断ろうかと思ってただけど……まあ、最後だし、会っておくにこしたことはないよね、そう考えれば。

お土産に色々もらったし。

機械いじるのが趣味だっという真桜からは、自作のカラクリ玩具オモチャをもらった。しかもいっぱい。しかも、よくできてるんだコレが。

……家においておくと、風に『ゴミだろ』と捨てられるんだとか。それなら、ってことで、僕らにくれたのだ。……スペース圧迫するのが目に見えてるなら、作らなきゃいいのに。

某仮面ラ○ダーのカンドロ○ドを思い出させるデザインだったけど、さすがに缶モードに変形はしてくれなかった。でも、面白いからいっか。

沙和からは化粧品。全員分。

でも、愛紗と鈴々がそういうのに興味なかったので、全部桃香と僕に流れた。いや、一応僕、男なんだけど……どうしろと？

で、風からは、香辛料一式。多い。

毎食使っても3ヶ月は余裕でもちそうな量だけど……風曰く『1週間分』だとか。

……彼女の味覚が割と本気で心配になった。

それと、味付けしてある燻製の川魚をいっぱい。あ、これは普通に嬉しい。味付けも、香草とか使った普通のやつだし。

まあ……ともあれ、そろそろお別れの時が近づいております。

「ふう……そろそろやね」

「これ以上は、なんかお見送りじゃなくなっちゃう気がするの」

村出て結構歩いたしね。ここまで、かな？

「なあ、桃香はん達……これからどないするん？ 平和な世の中作るゆーたら、いつまでも旅人ゆーわけにもいかへんやろ？」

「どこかに仕官されるのですか？」

と、真桜と風。

桃香が少し考えて、まだわからない、と答えた。

「仕官する先は、まあ……愛紗ちゃん達がいるから、正直困らない自身あるけど……私達は、あくまで私達のやり方を通したいからなあ……」

「せやったら……仕官やのーて、自分で勢力立ち上げるしかあらへんのちゃうの？」

「すっごーい！　もしそういうことになったら、沙和達、その陣営に入りたいのー！」

きゃいきゃいとはしゃぐ沙和……ってちよつとまった。君らこの村守るんでしょーが。

すると、その疑問に、風が説明を入れてくれた。

「あ、はい、今はそうですが……いずれは、私達も、どこかの勢力に仕官することになるかと思うんです」

「そうなのかー？　村はどうするのだ？」

「それもちゃんと考えてるのー。この村ごと傘下に入って、軍や部隊を出して守ってもらえるようにすれば、大丈夫でしょ？」

「せやから、そんなくらいの力がある勢力やったら、ウチらも仕官したる思てんねん。ウチらから、この乱世なんとかせなあかん思うしな」

そっか……風たちも、この世の中のこと考えて、自分達の将来のことを考えてるんだな……ニートやら　ひきこもりやははびこってる現実世界じゃ、考えられないくらい立派だよ、君達。

けど……そうになると、もしかしたら次に会うときは、敵同士になっちゃうかもしれない……の、かな……？

「仕官の先によつては、そうですね……」

「できれば、そないなことになってほしゅうないけどな」

「あ、でもでも……もし桃香さん達が勢力を立ち上げて、沙和達を迎えにきてくれたら、万事解決なの♪」

そりゃ大変だ、急がなきゃね、なんて雑談をかわしながら……僕は道を歩いていた。

……と、

「……？ 何やろ？ 何か忘れとるようーな気が……」

「？ 真桜、どうかしたか？」

「うーん……」

？ さつきから……ちょうど、村を出たあたりから……真桜が、ちよこちよこうんうんうなってるんだけど……どうしたんだろう？

そうこうしているうちに……

「それでは、私達はこのあたりで」

「ホントにありがとうなの！」

「達者でやりィや！」

と、真桜達の見送りを受け……僕らは、一行から離脱し、旅立った。

……真桜は、まだ何か引っかかってるようだったけど……まあ、そのうち思い出すだろう。忘れた頃に、ひょっこり、ね。

歩いていき、時折振り向くと……どんどん3人の人影が小さくなっていく。はあ……ちよつと寂しいな。

「いい人たちだったねえ……」

「ええ。願わくば……共にこの乱世、戦い抜いていきたかったです
が……」

「村のことが大事なら、仕方ないのだ」

「そういうこと。けどまあ、何ていうか……またすぐ、会えそうな気がするよ、僕は」

何でか、知らないけどね。そんな気がする。

そうだったらいいな、っていう希望も……入ってるかもしれないけど。

……………それにしても、

何だろう？ さっきから……真桜じゃないけど、僕も何か忘れてるような気が……

「……………あああっ！！ お、思い出したあっ！！」

「っっ！？ な、何だ真桜！？ 脅かすな！」

「び、びっくりしたの……真桜ちゃん、一体何？」

「あ、すまへんすまへん……ってちゃうわ！ アカン、隊長止めんと！ おーい隊長！ それ以上進んだらアカーン！！」

「？」

何だろう、真桜が何か叫びながら、こっちに走って来……

カチッ

……………ん？

なんだ、今、足元から…………嫌な感じの『カチッ』って音が……

その瞬間、

ここ数分の間…………頭の片隅ですっと気になってたことの正体がわかった。

それは、数日前…………真桜…………じゃなくて、沙和が言っていたセリフ…………

『そ…………そうなの！ 油断してるとここに奇襲かけようとか、もうちょつと進めば事前に作つといた罠にひっかかるなーとか、武器持ってる2人は強そうだから凧ちゃんにまかせちゃおうとか、そんなこと全然これっぽっちも思っていないから警戒しないでなの！』

『…………もうちょつと進めば事前に作つといた罠にひっかかるなーとか…………』

『罠に引っかか…………』

引っか…………か…………あああつ！？

そ、そういえばこの道、僕らが最初に通ってきた道と同じ道…………

直後、僕の足元から、巨大な網が現れ……えええええっ!?
な、何だあああ!?

「わああああああ!?!」

「ご、ご主人様!?!」

桃香の驚愕の声が耳に糸を引く中……次の瞬間、僕は………な
ぜか、上空高く放り投げられていた。え、ちょ、何コレ!? 何が
起こったの!?!

「しもたー、遅かったっ!」

耳に届く、真桜のそんな声。どういう意味だよ!?

「ごごご……ご主人様あああっ!? いい、いずこにいい
っ!?!」

「な、何アレ!? なんでご主人様が吹っ飛ばされちゃったのお!
?」

「にゃにゃあっ!? 大っきいパチンコみたいな罠なのだ!?!」

「ま、真桜ちゃん!? ま、まさかこの罠、あの初日の……」

「あう……あの後、片付けるの忘れとった……」

「こ、この大バカ者!! た、隊長が、隊長が飛んでいくっ!?!」

ああっ、やっぱり!

これ……最初に会った日に、真桜が僕達を山賊だと勘違いしては
つといた罠だろ!

あの後片付けもしないでそのままほっという……で、今になって
僕が引かなかったってわけかいっ!!

しかも何この罨！？ 巨大パチンコで超長距離吹っ飛ばすって…
…地味だけど怖すぎる！

っていうかコレ……落下の衝撃がハンパないことになる気が！？

「あああああああ————………」

「ま、真桜どうするんだ！？ あの高さから落ちたら……」

「隊長、死んじゃうかもしれないの！」

「あ、そのへんは大丈夫や。だって……」

次の瞬間、

どっぽおおおおん！！

………ごぼごぼ………水中！？

もしかして……川に落ちた！？

「川に落ちるように、着地地点計算しとったからな」

「そ、そうなんだ……よかった、ご主人様……」

「……せやけど………」

ざざざあああ————っ！！

「流れが速あああああ————っ！？」

「………もう二度と攻めて来れへんように、どっか遠く行っても
らお思て、このあたりで一番流れが急な川、着地地点にしとったか

らなあ……………」

「「ええええええ——っ!!?」」

そんなとんでもないセリフが聞こえましたけど!?

……って、ああっ! 木々の向こうに! 木々の向こうに愛紗たちの姿が見えた! けど、無慈悲までの流れの速さでどんどん小さくなっていく——っ!!

向こうも僕に気付いたみたいで、慌ててUターンして追ってくるけど……………もう、手遅れだった。

「「ご主人様ああ——っ!!」」

「お兄ちゃああ——ん!!」

「「隊長おお——っ!!」」

「うわああーんっ、こんなのないよ——っ!!」

せめてもの抵抗にと張り上げた声も…………ざあざあとうるさい激流の音にかき消され…………僕は、まだ見ぬどこかへ流されていった…………。

第8話 真名と火鍋と川下り（後書き）

……とまあ、こんな感じで。

例によってグダグダのまま、明久たちと三羽鳥の別れとなるのでした。ちゃんちゃん。

さて、それと同時に……自分がなぜ彼女たちをこの段階で登場させたのがお分かりいただけたと思います。

そう、ズバリ……明久を『隊長』と呼ばせるためです。

そこ、手段がムリヤリとか言わないで下さい。自分でもわかってますから。

『真』はルートによって死人が出る出ないだけでなく、呼び方まで変わっちゃいますからね。

桃香たちの『ご主人様』しかり、風たちの『隊長』しかり……

そのへん、調整したかったんです。

さて、次はどうなることやら……ってかその前に、明久がどこに流れ着くか、かな。

ではこのへんで。和尚でした。

第9話 山小屋と人魚と三人の幼女（前書き）

さて、新章突入……じゃないですけど、場面が変わりますね。
でもって、性懲りもなくまたオリジナル展開です。

今度、明久が出会うのは、果たして誰でしょう……？

第9話 山小屋と人魚と三人の幼女

○Side 三人称

ある日、ある小川

膝の下ほどの深さのその川で……2人の少女が、手づかみで魚をとっていた。

……そんな時、どこか声がボーっとした感じで、片方がもう片方に話しかける。

「……ねー、流琉……」

「? 何、季衣?」

「……あれ……何だろ?」

「? 『あれ』って何……えええええっ!?」

とった魚を籠に入れ、首を動かして『あれ』を見た少女は……そのまま絶叫した。

無理もない。なにせ、その視線の先にあったのは……

「に……人魚……!?」

想像上の生き物でしかないはずの……上半身が人間、下半身が魚、その身に神通力を宿し、その肉を食べたものは不老不死の力を得るという……かの『人魚』……

……ではなく、

「あ、ちがう、よく見たら人間だよ、流琉」

「え……？ ……あ、ほんとだ、腰から下、大っきな魚に食べられてるだけ……」

「なーんだ……」

「びっくりした……」

………

「……って安心してる場合じゃないよ、助けなきゃ季衣！」

「う、うん！ なんかもうびっくりして色々飛んでたけど、コレ結構大変だよね！」

☆

○Side 明久

「………知らない天井だ」

起き抜けにいきなり、某アニメを髣髴とさせるネタ発言をかましてしまった。

……いや、狙ったわけじゃなくてね？ 実際そうだったから……

え、何、このネタ前にもやった？ いいのいいの、そんなことは。

……って、そんなことより……ここどこ？

「……………？　どこかの、家の中……………」

どうやら……僕は、どこかの家の床に、掛け布団代わりの薄い毛布をかけられて寝かされているらしい。

それをめくって状態を起こすと……その部屋の様子がよくわかった。

なんというか……かなり質素な、山小屋か何か……って感じた。

ええと、たしか……真桜が後片付け忘れやがったトラップのせいで、ふっ飛んで、川に落ちて……って感じだったはず。

それが、建物の中……ってことは、誰かが僕を運んだことになる。一応、自分の身なりを確認して……あれ！？　上着とズボンがない！？　Yシャツも！？

も、もしかして僕を助けたのって、追いはぎ……いや、だったら親切にこんな小屋に運んだりしないだろうし……

……と、

「（がらっ）あ、気がついたんですね？」

「！」

小屋の扉が開き、中から——いや、『外から』か——女の子が入ってきた。

その手には……僕の服。あ、もしかして……乾かしてくれてたのかな？

「あー、その……おはよう」
「あ、はい……こんばんは」

いきなりズレちゃったのは無視して。
見ると……窓の外が暗い。夜じゃん。

……ともかく、

「あー、ええと……助けてくれてありがとう……でいいのかな？」
「あ、いえ、お構いなく。体……大丈夫ですか？」

僕の近くに腰を下ろしながら、少女はそう聞いてきた。

まだ、小学生か中学生くらいに見える……薄い緑色の髪のかわいい女の子だ。カチューシャみたいな感じにリボンをして髪をとめている。

服装は、かなり薄着……っていうか、布地が少ない。下の服にいたっては……スパッツ履いただけ！？ スカートとかは！？

ちよ、いくら子供とはいえ、女の子なんだし……ちよっと目に毒……

「？　どうかしましたか？」

「い、いや、何でも……」

れ、冷静にしろ明久。君はロリコンじゃない、君はロリコンじゃない。
ない。

今心の中にあるこれは、劣情とか色欲とかじゃない……かわいいものを愛でる心だ。

……誰だ、今、それでも結構ギリギリだって言ったのは。否定し

ないけど。

「あ、あのー……顔、赤いですよ？ ひょっとして、熱とかあるんじゃない……」

「い、いや、大丈夫だから！ これはその……詳しくは言えないけど、むしろ健全な……じゃなくて、健康な証と言ってもいいものだから、うん」

「？ は、はあ……」

困惑顔の幼女相手に必死で弁明する高校生の囃。さぞ見苦しかろう。

と、

「そうですねー、まあ、健全な分まだマシだともとれますがー」

うお！？ びっくりした！！

い、いきなり後ろから声が……って、もしかして……ずっと後ろに誰かいたのか！？

そういえば、上半身起こしてから、左右と天井しか見てなかったから、気づかなかった……って、それにしたって気配なさすぎだろ。誰？

振り返ると、そこには、また違った、しかし今の娘と同年くらいの女の子。

ふわりとしたロングの金髪、半開きの眠そうな目、顔は……まだ幼さが残るけど、十分に美少女とっていい。法衣みたいな、ふわりとした感じの服に身を包んでいる。

そしてなぜか……頭の上に、どっかの万博のシンボルとして建てられた塔みたいな形の人形をちょこんと乗せている。……なぜ？不思議ちゃん？

何だろうこのいでたち……仮装大賞？

「どちらかといえば、お兄さんの服の方が仮装だ、と風は断言できますがー」

「うお！？」

すんなりそんなことを言い返してくる女の子。え、心読まれた！？そ、そういやさつきも、似たような声のかけられ方したような……

「とりあえず流琉ちゃん、お兄さんが何か言いたそうにしていますので、先に服を着せて差し上げましょうー。そのかつこうでこの部屋に私達と3人だけというのは、傍から見ていて少々絵面に問題があるかとー」

「え？ ……あゝっ！？」

言われて気づく。あ、ぼ……僕シャツとパンツだけじゃん。うわ、ヤバっ！確かにこんなとこ誰かに見られたら通報ものだっ！

「こ……ここに置きますねっ！ ふ、風ちゃん、私達は出てよっ！」
「……………zzz」

寝た！？ え、このタイミングで！？ さつきまで話してたのに！？

「……………おおっ」

そして起きた。何この子!?

「ふ……風ちゃん、早くう……」

「はいはい」

と、今更ながら顔を赤くした、流琉と呼ばれていた子に引っ張られ……もう1人の、風と呼ばれていた子も退席。たぶん……真名だろうけど。

☆

外に出ると、暗かった。当たり前だけど。

見ると……焚き火を囲んで、3人の女の子が座っていた。

そのうち2人は、さっきの。……もう1人は初めて見る子だった。

桃香より明るい桃色の髪を……なんかこう、フライドチキンみたいな特徴的な形にまとめている。歳は、前の2人と同じくらいで……服装は、緑髪の子と似て露出が多い。

胡坐あぐらですわり、焚き火にかざして焼いているらしい魚の切り身（？）を、口いっぱいにはおぼっている。なんていうか、雰囲気だけど……元気で活発そうな感じ。

するとその子、僕に気づいたらしく、

「あ、人魚の兄ちゃん、起きたんだ？」
「は？」

開口一番………何？

え、人魚？ マーメイド？ 何で？ 僕の下半身は普通に足だよ？
すると、緑髪の子が苦笑いしながらこっちを見て……

「あー、えつとですね……」

かくかくしかじか。

「……僕、そんなことを助けてもらってたのか……」

聞いてびっくり。まさか溺れて気失ってる間に、魚に食われかけてたとは……マジで彼女達に感謝しなくちゃだな、これは……

川で助けてくれた上に、魚からも助けられて、家まで運んでもらって、服乾かしてもらって、そして今……彼女達お手製のスープっぽいものをご馳走してもらってます。

いやもうこれ、感謝しても仕切れないよ……。

そして、緑髪の少女……典章ちゃんは、どうやら料理が得意らしい。いやー……ありものの食材だけで簡単に作ったって言ってたけど、このご飯すごい。美味すぎ。

スープもそうだけど、この山菜のあえ物も、この焼き魚（切り身）も……

「あ、ちなみに、今兄ちゃんが食べてる焼き魚が、兄ちゃんを食べようとしてた魚だよ」

……あ、そうなんだ？

リアクションに困る事実だな……。一步間違ったら、僕がこの、いま口の中で肉汁をあふれさせてる魚の、一部として吸収されてたかも知れないとは……食物連鎖、怖っ。

「もぐもぐ……さすがは『煌魚』……風も初めて食べますが、おいしいですねー」

頭に人形を乗せた不思議っ子……程？ちゃんが、焼き魚をほおばりながら言う。

……『煌魚』？ この魚？ 聞いたことない名前だけど……珍しい食材なのかな？

「はい、というか……珍しい、なんてものじゃないですよ？ 煌魚と言えば、釣り人にとって、一生のうちに釣りあげることが夢だとされるほどの、貴重で高級な食材です！」

「そうですねー。大きさにもよりますが、立派な屋敷が一件建つほどの値段で取引される高級魚だとかー。かの始皇帝も、大好物だったと言われている魚ですよ」

「へー……そうなんだ？」

そりゃびつくり。思いもよらず豪華なもの食べちゃったよ。ちょっとだけ真桜に感謝してもいいかも。ちょっとだけね。

ていうか、お屋敷って……そんなマンガじみた食材が実在するのか。捕獲レベルどのくらいかな？

すると、幸せそうに焼き魚をほおぼる彼女……許緒ちゃんが、

「それもこれも、兄ちゃんがこいつに食べられて流れ着いてくれたおかげだよね！」

「そうですねー。お兄さんがおいしそうないエサになってくれたおかげですねー」

「はい！ 本当にありがとうございます！」

素直に喜べないんですけど。

あれか、僕が黄河あたりに飛び込むといい魚が釣れるのか。僕は釣りエサか。

「黄河に煌魚いないよ？」

「突っ込むとこ違うかい？」

せめて僕を人間認定してよ。

「ま、まあ……それはともかく、今は食べましょう？　せっかくの高級食材ですし……明久さんも、食べて休んで、体を治さないといけないでしょう？」

うう……典韋ちゃんの優しさが身にしみる……。

「お兄さんー、お気持ちはわからなくともなくもないこともなくないですが、何も泣かなくてもいいのでは？」

「？　どしたの兄ちゃん、何で泣いてるの？　どこか痛いのか？」

「……っ……いや、なんでもないよ……。大丈夫……」

いや……痛いとしたら……現代の乾いた社会ですさみきってしまった、僕の心が……

「大丈夫ですよ季衣ちゃん、『痛い』のはむしろお兄さんそのものですからー」

……程？ちゃんの言葉、いちいち胸をえぐるね。

ともかく、僕は典韋ちゃん特製のディナーを堪能しつつ、ゆっくりしたら急にあふれてきた疲れを癒すことにした。

余談だけど……許緒ちゃん、鈴々レベルの大食いだった。
よく考えたら、その『煌魚』……僕を食べるくらいのサイズのだった……ってことじゃん？ それを、僕ら4人で残さず食べきった理由がそこにあるわけだ。

☆

そんな会話の中で、僕は色々なことを教えてもらった。
いや……別に情報収集とかじゃなくて、世間話とか、身の上話の上でのレベルのことばかりなんだけどね。

まず、許緒ちゃんと典章ちゃん。

2人ともすごく純粋で、歳相応に明るく元気ないい子。

許緒ちゃんはまさに鈴々と同じ感じの、とにかく明るくて元気な子。

典章ちゃんは、明るさの中にも冷静さを併せ持っていて、話し方も敬語で丁寧だ。

そして2人とも……鈴々レベルの力持ち。さっきなんか、後で薪にする……っていう巨大な丸太、1人1本ずつ運んでたし。あれ、絶対成人男性5〜6人で運ぶ重さだよ。

この2人……同じ村の出身の親友で、とある用事でこの森に入ってたらしい。……その用事が何なのかまでは、教えてくれなかったけど。

続いて程？ちゃん。

どうやら、意外なことに……僕と同じ感じの身の上らしい。旅の途中で、連れとはぐれちゃったところを……この2人に会ったんだとか。

はぐれたのはこの近くの林道で、ここから近い村に向かえば合流できる可能性がある、っていうけど……このあたりは最近盗賊が出るようになって物騒だから、動くに動けないらしい。うわ、また物騒なとこだな。

なので、許緒ちゃん達2人の用事が住むまで待って、彼女達の帰り道のついでに護衛してもらいながら、村に向かうつもりなんだとか。……あれ？ ……ってことは、許緒ちゃんと典章ちゃん、強いのか？

ちなみに、頭頂部の人形には『宝？』ほうけいという名前があるらしい。

も1つちなみに、会話の中で僕についても聞かれたけど……上手くはぐらかして、ただの迷子です、ってことにしておいた。こんなときまで『天の御使い』の名前出して、変に祭り上げられたくはないしね。悪いけど、秘密にさせてもらおう。

その説明の際、許緒ちゃんと典章ちゃんは納得した顔してたけど……程？ちゃんのジト目の視線が、妙に気になった。いや、普段から半開きなんだけど……。

ともかくまあ、盗賊が出るってことは、非力な僕も同様に動けない、ってことだ。

だったら……許緒ちゃんたちの『用事』が住むのをここで待って、僕も一緒に村に送ってもらわないだろう。幸い、許緒ちゃん達も了承してくれてるし。

桃香達との合流どうしようかとかも……後でまとめて考えればいいか。

☆

○Side 三人称

食事の後片付けの最中……

明久と程？に隠れて、許緒と典韋は、2人でこっそりと話していた。

「ねえ季衣、どう思う？ 風ちゃんと明久さん……ホントに普通の旅人かな？」

「え？ それってつまり……2人がやつらの細作スパイか何かかもしれない、ってこと？」

「うん。だって……時期が時期だし……疑いたくもなるよ。もしかしたら……私達の動きがばれてて、送り込まれたのかも……って」「うーん、たしかに……」

典韋の言葉に、許緒はがらでもなく（失礼）、あごに手を当てて思案の構え。

しばらく考えたが……どうやら特に考え付くことがなかったらしい。気まずい沈黙なので、典韋の方からそれを破った。

「ま、まあ……それはおいおい、こっそり調べてみようか？」

「そ、そうだね……あ、でも……明久兄ちゃんは少なくとも違うんじゃない？　だってほら、流れてきた時の状況が状況だったし……」
「あー……ま、まあ……細作とはいえ、あそこまで体張る人はいない、か……」

下半身が『煌魚』の口の中に消えていた明久の衝撃的画像を脳内にフラッシュバックさせ、妙に納得した表情でうなずく2名。

「……なんにしても、これからやることを……あの2人に話すわけにはいかない……わかってる、季衣？」

「わかってるって！　今言った危険はもちろんだし……それに、もし2人ともいい人だった時に……」

「……うん。『あれ』に……巻き込むわけには……いかないし」

そして……2人とも、何か決意を固めるかのように、表情をきちっと引き締める。

……その姿はなぜか、これから戦地に赴く兵士や将を彷彿とさせたとか。

……密談に夢中になるあまり、それを木陰に隠れて聞いていたものがいたことに、気づかない2人であった。

☆

○Side 程？

『何だ何だ？　なにやらかわいいこちゃんがかわいい顔に似つかわし

くない深刻な雰囲気の話してるじゃねーか？」

「これこれ、あまり大きな声で話しては気づかれますし、邪魔になりますよ、宝？」

『それもそうだな。で、風よ、お前あの話の内容……何のことだかわかったのか？』

「……まあ、予想はつきますが……これが当たってるとなると、ちょっと色々やっかいなことになってますねー……」

第9話 山小屋と人魚と三人の少女（後書き）

……と、いうわけで、今回出会ったのは……

許緒！ 典韋！ 程？！ ……の3人でした。

（某メダル3枚のライダーのノリで）

さて、何でこの3人がこのタイミングで……ってまあ、風たちと同じ理由ですけどね。さすがにわかるか。

ともかく、出会わせたからには……彼女たちとの有意義なストーリーを書きたいと思います。

ではこのへんで。和尚でした。

第10話 料理と絆とそれぞれの思い（前書き）

さて……書き始めてもう一ヶ月の第10話。

なんか急展開（？）します。
浅いですが。

どうぞ。

第10話 料理と絆とそれぞれの思い

○Side 典韋

「ん……？」

明久さんが流れ着いた翌日。そして、風ちゃんと知り合ってから5日目。

窓から差し込む光で、私……典韋は、目が覚めた。……ん……もう朝か。

横を見ると、季衣と風ちゃんはまだ寝ていた。まあ……朝早いから、無理ないかな。

……風ちゃんはいつでも、ついでにどこでも寝るけど。

とにかく、朝ごはんの支度しないと。仕込みがあるから、早起きして始めないと間に合わないんだよね……。

ただでさえ季衣はいっぱい食べる上に、今は明久さんと風ちゃんまでいるから、多めに作っておかないと……って、あれ？

その明久さんがいないんだけど……もしかして、もう起きたのかな？

というか……外から、何かいい匂いが……？

不思議に思って、私が扉を開けてみると、

「あ……明久、さん？」

「あ、典韋ちゃん。ごめんね、起こしちゃった？」

「い、いえ……そういうわけじゃ……というか、何してるんですか

「？」

「？ 見ての通り、料理だけど……」

そこには……たき火に鍋をかけて、何かの煮込み料理のようなものを作っている明久さんがいて、

鍋の中で煮込まれている料理からは……おいしそうな、そして、私でも全く何の料理か思い当たるところのない、いい香りが漂ってきていた。

☆

○Side 明久

起きて出てくるなり、ハトが豆鉄砲食らった感じできょとんとする典章ちゃん。

あー……偶然早く起きたから、良かれと思ってみんなの朝ごはん作ってたんだけど……余計なお世話だったかな？

一応、賞味期限近そうな食材を選んだんだけど……勝手に使っちゃったわけだし。

「あ、あのー……朝ごはん、って……」

「あ、うん……ごめん、食材、勝手に使っちゃった。余計なお世話……だった？」

「い、いえ、そんなことないですけど……」

すると典章ちゃん、鍋の中を覗き込んできた。

「えっと……これ、何ていう料理なんですか？ 見たことないんで

すけど……」

「ああ、これ？ 『ポトフ』 っていうんだよ」

「……『ぼとふ』、ですか？」

ああ、そっか、知らないよね。ポトフはフランスの家庭料理だも
ん。

でも、作り方は簡単だし、材料も単純だから、ここで作れたわけ
だけど。

典章ちゃんが不思議そうな目で鍋の中を覗き込んでいると、小屋
の扉が開いて、

「ふぁ……おはよう……流琉……兄ちゃん……」

「おはようございますー……」

「あ、許緒ちゃん、程？ちゃん、おはよう」

寝ぼけ眼をこすりながら、許緒ちゃんと程？ちゃんが外に出てき
た。

それを見て、驚いたようにして典章ちゃんが、

「え、季衣！？ どうしたの！？ いつもはまだ寝てる時間なのに

……」

「あ、うん……流琉の料理のおいしそうな匂いがきて、それで
……って、あれ？ 作ってるの……流琉じゃないの？」

と、焚き火の前に立って鍋の中をかき回しているのが僕だとわか
ると、意外そうな声を上げる許緒ちゃん。

そうか、いつもは炊事は典章ちゃんの仕事なのか。早く起きてき
たのも、僕の調理音のせいじゃなく……いつもこの時間に起きるか
らだったんだ。

とか言ってる間に……お、できたな。

☆

「おいし——っ!!」

「た、確かに……おいしいです……」

「ふむふむ……そうですね、始めて味わう味付けですねー」

「ホント？　うれしいな、そう言ってもらえると」

——とまあ、僕のポトフはすこぶる好評でした。ほつ、よかったです。

満面の笑顔の許緒ちゃんに、こちらも笑顔の程？　ちゃん。驚いた表情で匙を止めてる典章ちゃん……とまあ、三者三様の反応。

僕が作ったポトフは……彼女達がとってきた山菜と、鶏肉やキノコなんかを入れて煮込んだ簡単なもの。古代中国の食材でも、十分に再現可能だったよ。

スープの味を整えるのには、風にもらった香辛料を使った。防水のバッグに入ってたから、どうにか無事だったよ。

「すごい……こんな味付けの仕方があるなんて……」

一口一口スープを飲みながら、典章ちゃんはそんな事を言ってた。いや、そんな大げさな反応されても……普通に、何種類かの香辛料をブレンドして、現代の洋食に近い味付けに仕上げただけだよ。何もすごくないって。

「そんなことはありません！　私、一応料理には自信あるんですけど

……こんな味付けがあるなんて、知らなかったし、考えもしませんでした！ 明久さん、すごいです！」

「へー……流琉にそんなこと言われるなんて、すごいね兄ちゃん」

そう言ってくれる季衣ちゃんは、早くも3杯目。いっぱい作ったから大丈夫だけど。

「流琉は料理すっごく上手なんだよ！ 村にいた頃、都の飯店から引き抜きが来たくらいなんだから！ ……断ってたけど」

「らしいですよ？ その流琉ちゃんに褒められるとは、お兄さんなかなかですねー」

「そ、そうなのかな？」

な、何か恐れ多い……

まあ、典章ちゃんの料理の腕は、昨日の晩御飯で知ってるんだけど……そこまでだったとは。

その典章ちゃんは、

「あ、あのっ、明久さん！ 差し支えなければ……あとでこの料理の作り方を教えてもらえませんか!？」

「え!?! い、いいけど……」

「本当ですか!?! ありがとうございます！」

……何かのスイッチが入ったらしい。

目をキラキラさせて、その僕の返事に喜んでいた。

……な、なんか、ここまで喜ばれると……逆に照れるな……。

すると、ふと程？ちゃんが、思いついたように言った。

「そういえばお兄さん、昨夜はどこに行っていたのですか？」

「? いや、どこにも行ってないよ?」

「しかし、風は夜中に何度か目が覚めたのですが、小屋にいませんでしたよ?」

「あれ、そうなんですか?」

と、今の会話を不思議に思ったらしい典韋ちゃん。

ああ、そういうことか。そりゃあ当たり前だろう、だって……

「いや、僕、外で寝てたから」

「「え!」?」

典韋ちゃんと許緒ちゃんの驚いた声が響く。

「そ……外って……え!? 何でわざわざ……外で寝てたんですか!」?

「いや、だって……男が女の子と一緒にの部屋で寝るのは嫌でしょ?」

3人共まだ子供だとは言え、女の子だ。

僕は別にロリコンじゃないし、やましい気持ちなんか別に……ちよつとしかないけど……それでも、道徳的に考えて、女の子と一緒にの部屋に寝るなんてのはまずい。

幸い、この世界に来てからは野宿が普通だったから、慣れてるし……ってことで、雨だけ心配して、軒下で寝かせてもらってたわけだ。

すると、

「だめだよ兄ちゃん、そんなことしたら風邪引くよ!」?

「そ、そうですよ明久さん!」

「え!?! え!?!」

いきなり2人、食って掛かってきた。ちょ……何いきなり!?

「い、いやだって……」

「氣遣ってくれるのは嬉しいですけど……それで明久さんが体を壊したりしたら、元も子もないじゃないですか!」

「そうだよ兄ちゃん、兄ちゃんが死んだらもう『ぼとふ』食べられないじゃん!」

許緒ちゃん、飛びすぎ。速攻で僕を殺さないように。

「だからせめて今日のうちに流琉にこれの作り方教えておいてよ!」
「ちょっ……季衣、なんてこと言うの!?!」

典章ちゃん、許緒ちゃんの問題発言をあわてて止めに入る。……多分、そんなつもりないんだろうけど……はは、僕死ぬの確定させちゃってるんだもんね。

すると、その2人が静かになった隙を見計らってか、

「まあ、お兄さんのその心がけは立派ですが、家主の厚意をないがしろにするのはいただけませんよ? 季衣ちゃんも流琉ちゃんも、お兄さんを心配してるんですから」

と、程?ちゃん。

いや、それは嬉しいけどさあ……あの小屋、ワンルームだし……

「それとも? お兄さんは無防備に眠りこけている風たちを前にして、その煮えたぎる煩惱のままに襲い掛かってしまうおつもりで?」
「い、いやいやいやいやいや、そんなことないって!」

「では、一つ屋根の下で風たちと寝ても、風たちは何も心配する必要はない、自分は紳士的にただひたすらぐっすり眠りますと断言できますか？」

「も……ちろんさ！」

「……不自然な間がありませんでしたか？」

「ないない！ 大丈夫、例えそんなことになっても僕は全然何も手出ししないから！」

「そうですか、では今日から普通に一緒に部屋で寝ても問題ありませんね・」

「もちろんさ！ ……って、あれ？」

いつの間にか論破されてる？

見ると、程？ちゃん、僕の方に視線を向けつつ、にこにこ。

や、やられた……どういふつもりかはわからないけど、確信犯だ……。

しかも、その様子を他の2人にもばっちり見られてしまい、声を聞かれ、言質を取られてしまったので……後戻りはできなかった。な、なんてことだ……。

ともかく、その朝はそのポトフと、近くになっていた木イチゴですませた。山奥プラス古代中国にしちゃ、上出来な朝食だと思うよ。

☆

それから、僕は数日間を、彼女たち3人と過ごした。過ごしたって言っても……自給自足の生活に必要なことをするだ

けなんだけど。

たとえば、山菜取りや魚釣り、木の実やキノコの採集。……とまあ、食糧確保だ。

僕が流琉ちゃんとキノコやら何やらをとってきた間に、季衣ちゃんは……熊とか鹿とか狩ってきてたけど。どうやら季衣ちゃん、やっぱり強いらしい。

他の仕事は……炊事・洗濯・掃除……あとは、薪割りとか、食べきれない魚や肉を、干物や燻製にして保存食にしたりとか。うーん、サバイバル。

そんな日常の中で、僕と流琉ちゃんは、相互に料理の教えっことをしてた。

流琉ちゃんは、このあたりで取れる食材を使った、簡単な家庭料理や中華料理の作り方。そして、いい味を出すコツとか色々教えてくれた。すごく博識だった。

一方僕は、この大陸にはまだない……和風・洋風の味付けのコツや、それをもとにした料理の作り方なんかをレクチャー。ここでも、風の香辛料が役に立った。

で、その実践編として……2人で一緒にご飯作ってた。

結果？ もちろん好評だったよ？

ああ、今ので気づいたと思うけど……3人とも、僕に真名を許してくれた。

季衣ちゃんいわく、『こんなおいしい料理を作れる人に、悪い人はいないよ！』だとか。

許緒ちゃんの真名が『季衣』、典韋ちゃんが『流琉』、程？ちゃんが『風』だった。

流琉ちゃんとは料理を通して、季衣ちゃんとはその料理での食事を通して、風ちゃんとは……なぜかいつの間にか、仲良くなった。

……あ、それと、一応言っておくと……言われたとおり、一緒に部屋で寝てるけど……別に何もなかったからね？ 何も手出ししてないからね？

そして、そんなある日。

僕が流れ着いてから、6日目。

事件は……唐突に起きた。

☆

朝、僕が起きると……その瞬間、違和感があった。
いや、違和感とかそういうレベルじゃないけど。

僕ら4人はこの小屋で、布団を4つ横に並べて寝てる。

毎朝、僕か流琉ちゃんのどちらか片方が一番に起きる。で、着替えた後でもう片方を起こす。最近は2人で炊事するのが日課だからだ。

この時、100%季衣ちゃんと風ちゃんは寝てるんだけど……

「……誰も、いない……？」

今朝は……僕以外、部屋に誰もいなかった。

寝過ごしたか、と思ったんだけど……違うだろう。流琉ちゃんが起こしてくれないのはおかしい。

それに、朝ごはんの時間になったら……いくらなんでも起こすはず。

というか、窓の外から太陽の高さを見てみる限り……いつも僕が起きる時間帯だ。

つまり、3人共……僕より早く起きて、小屋の外に出て何かやってる……ってことになる。……どういうことだ？

理由もなくだけど、何か不安な思いが頭をよぎる。

僕が外に出ようとすると、扉のところに……あるものを見つけた。さびた釘を画びょう代わりにして貼り付けられている、1枚の木の板だ。

見ると……何か字が書いてある。あ、伝言か何かか？

そうか、この時代……紙はまだ珍しいから高級品なんだ。メモなんかに使えるほど手に入らないから、木や竹を使う……っていうのはよく聞いた気がする。

それより、伝言の内容だ。えーと、なにに……？

……どうしよう、漢文読めない。

いや、仕方ないじゃん！　僕は日本人だから！

外国語なんて英語くらいしかやってないって！ いや、その英語すら怪しいんだけど。

ましてや国語の時間なんて、格好のお昼寝タイムじゃないか！ そんな時に、あんな漢字だけがひしめき合ってる気持ち悪いものに集中しろってそりゃ無理ってもん……

「一言で言うと、『短い間でしたが楽しかったです、お元気で』と書いてありますねー」

「またあっ!？」

背後から当然のように聞こえる声。うん、飛び上がった。
出たよこの子！ 神出鬼没！

なぜかこの時代にあるペロペロキャンデーを口にくわえて、風ちゃん登場。いや、いつからいたの!？ ていうか、いたの!？
いや、それより……今何て!？ 何、その内容は!？

「ふ……風ちゃん!？ えっと……この伝言が何だって!？」

「おやおや、では字が読めないお兄さんの代わりに呼んでさしあげましようかねー」

「いろいろと抗議したいことはあるけど……うん、ごめん、頼むよ!」

伝言の内容が気になるから、僕は風ちゃんに木の板を渡して、呼んでもらった。

「えーとですねー……『はいけい、明夕兄ちゃん』……」
「は?」

……『明夕』？　僕は『明久』だよ？

「……と、かかれたところに二重線が引いてあって訂正されていますねー。季衣ちゃんを書いたものの、まともに書けなかったので、この先は流琉ちゃんを書いたものと思われそうですー」

「あ、そう……」

いや、それはいいから、早く本文読んで！

「はいはい、わかっていますよー。ええと……」

その内容は……さっきまでのおちゃらけた雰囲気が一瞬で消し飛ぶ内容だった。

☆

風ちゃん、明久さんへ。

突然こんな手紙を残して、いなくなってしまうってごめんなさい。

でも、こうしなければ、明久さんや風ちゃんに迷惑がかかるんです。

私達の村は、最近、盗賊に襲われることが多くなり、悩まされています。

領主様は税を取るばかりで、何もしてくれません。

私や季衣、自警団の皆さんの尽力で、なんとか保っている状態です。

その私達の村に、近々、今までで一番大きな規模の盗賊団の襲撃がくるんです。

私達は村を守るため、盗賊団が村に来る前に、それを撃退することになりました。

私と季衣は、この小屋の近くにある、盗賊達の進軍の中継地の監視のために、ここ数日小屋に寝泊りしていました。戦うのに最適な場所と時期を、探るために。

私達はこれから、自警団の人たちと合流して、盗賊団と戦いに行きます。もしかしたら、私も季衣も死ぬかもしれません。でも、これ以外に村を守る方法がないんです。

場所は教えません。あなた達に来てほしくないから。残りの食料を全部持って、北西に行ってください。一番安全な道のはずです。

偶然の出会いと、短い間の生活だったけど、お2人との毎日はとても楽しかったです。

こんな形でわかれることになってしまって、ごめんなさい。許さなくていいです。

お2人が、これから幸せな人生を歩めますように。

———流琉、季衣

☆

「……………何、これ……………」

「遺書、といってもいい内容でしたね……………」

風ちゃんから木の板を受け取り、それを呆然と見つめる僕。

字はどうせ読めないけど、そういう問題じゃない。中身に問題がありすぎる。

……そう言われれば、変だよな……。

こんな山奥に、何だって彼女達みたいな小さな子供が住んでるのか……。

戦闘力（季衣Ⅱ流疏>>>熊）が規格外すぎて、あんまり気にしてる余裕なかったけど……気にするべきだったんだ。

まさか、こんな理由があったなんて……。

気構えだけを見れば、愛紗たちと同じくらい立派で、同じくらい気高くて、そして同じくらい……重い。

手紙の文面と、彼女達の屈託のない笑顔が交互にフラッシュバック。それだけでも……もう、僕みたいな凡人には……ほぼ拷問だ。急すぎて……泣くこともできない。

「何やら色々大変そうですねー。ですが、ぼーっとしていいのですか？」

「……風、ちゃん？」

放心状態だった……ことにすら気づいてなかったんだけど、

その僕に、風ちゃんがいつものほほんとした声で声をかけてきた。僕とは対照的に……取り乱した様子はなく、たたずまいから何からナチュラルそのものだ。

「察するに、あまりに突然の出来事が多すぎて、自分が今から何を言ったらいいのかすらわからない、といったところでしょーかー？」

「……よくわかるね」

自分でもわからないことを。

……でもってその上、どうしたらいいのかもわからない。

正直、どうにかしたい……っていう気持ちはある。

だってそうでしょ？ あんなに優しくて、かわいくて……褒めたらきりがなくらいのいい子たちだよ？ 煩惱は……そりゃちよつとはあるけど、それ全部抜きにしたって、脊髓反射でも彼女達を助けたいと思える。

けど、僕は……そんな、流琉ちゃんたちでも自信がなくなるような盗賊軍団と戦う手段なんて……あるはずないし……

それでも……もう、何て言ったらいいのかわかんないけど……僕は……

「お兄さん、季衣ちゃんと流琉ちゃん……助けたいですか？」
「……………え？」

……今、何て？

見ると、僕の視線の先には……先ほどと同じ笑顔で、しかし、目だけは……全く同じなのに、なぜか真剣だとわかる表情で、

僕に……真剣に、そう問いかける。

「……もしかして……」

「確かに、敵戦力は強大。大して風たちは、どう見てもひ弱そうなのが2人。普通に考えれば、勝ち目など微塵もないでしょうねー。それでもなお、というのであれば……」

おそらく……放心のために、魂の抜けたような顔になっているであらう僕に、

そしてそれでいてなお、心の中は風速数十メートル級の大嵐になっている僕に、

風ちゃんは……にっこりと笑ったまま、

「それを何とかするのが、私のような軍師の務めですからねー。それに、あの2人を助けたいのは、当然ですが風も同じ気持ちですー」

……………軍師……………？

「時間がないので簡潔にだけ聞きますがー……………」

風……………ちゃんが……………？

「風の胸のうちにある、一発逆転の大博打……打ってみる気はありますか？ お兄さん？」

にっこり。

第10話 料理と絆とそれぞれの思い（後書き）

流琉たちと明久、仲よさそうな描写で書けてたかな………心配。特に流琉とは、共通の特技があるから、そこで結び付けてみたくて。

さて……後半、なんか突然とんでもないことが明らかに。2人が隠してたのはコレだったわけですね。

そして、それに気付きつつも、確信が無かった風ちゃん。予想外に早い展開で、イベントが起こってしまった……と。

さて、次回……どうなるんでしょうか？

ではこのへんで。和尚でした。

第11話 策とリゾットと一家団らん（前書き）

第11話を更新します。

今回……話が話だからか、ギャグがすごく少ない……無念……
いや、そんなに思い話ってわけでもないんですけど……

……ともかく、どうぞ。

第11話 策とリゾットと一家団らん

○Side 流琉

「……ねえ、流琉」

「何、季衣？」

警備隊の人たちと駆け足で進軍しながら……私は、いつもと変わらない調子で、隣にいる季衣と話していた。

……不思議、だな……今から生きるか死ぬかの戦いに行くっていうのに、全然そんな感じしないんだもん。

「……兄ちゃん達、さ……今頃、何してるかな？」

「それ……6回目じゃない、聞くの」

「あはは……そっか」

……まあ、それでも……迷いとかじゃないけど、ゆらぎみたいなものは感じられるかも。

最後の最後で……明久さんと風ちゃんに出会ったから……多分そのせいだ。

いや、そのこと自体を悪いこととは思わない。けど……今から戦いに行くっていうこの状況下では、ちよつと邪魔だったかな……。心のどこかに……また一緒に遊んだり、料理したり、釣りしたいな……って気持ちが残ってしまうから……。

と、

「おい、偵察に出た奴らが帰ってきたぞ！」

「——っ！ いいよだね、流琉……」

「うん……!」

自警団の中の、偵察に行ってた人たちが帰ってきた。

……私達は、その人の最終報告を待って、盗賊たちのところに総攻撃に行く計画だから……ついに、戦いが始まる。

私達は基本、奇襲や多対一の戦い方を中心にして戦うことにしてる。まあ、私や季衣は1人で数人相手にも戦えるけど……村の人たちはそうはいかないから。

……っていうか……そもそも村の人たちが盗賊と戦うこと自体無謀だ……って言われたら、それはもう何も言えないんだけど……。でも……それ以外に、村を救う手立てが何もないんだから……仕方ない、って割り切ってる。私も、季衣も、村の皆も。

作戦……っていうか、私達の思惑はこう。

戦って勝てれば、それでよし。けど負けて全滅することになるとしても、私達は最後の1人になるまで戦うのをやめないだろう。無論、私も季衣も。

そうすれば……一応、盗賊たちに痛手は与えることができる。撃退は無理でも……一時撤退くらいはさせられるはず。そうすればその間に、村の皆が逃げられる。

事前に、『5日経っても、戦いに行った人たちが誰も帰ってこなかったら、村を捨てて逃げてください』って伝言のこしてあるから……いざというときは、その通りに。

だから……私達がここで頑張らなきゃいけないんだ! たとえ……死ぬことになったとしても!

そして私達は、その覚悟を胸に……偵察の人が口を開くのを待った。

……が、

その口から出てきたのは……予想外の言葉だった。

「そ、それが……その……」

「……？ 何か……あつたんですか？」

「……と、盗賊の連中……全員逃げ帰っちゃったらしいんだが……」

……

「「「えゝ！？」」」

そ、それ……どういふこと？

私と季衣の偵察だと、そんな気配、全然なかったっていうか……むしろ、略奪する気満々、って感じだったのに！？

でも、聞いた感じだと……嘘や冗談、ってわけでもないみたいだし……でも、何で！？

今更襲撃をやめて、しかも逃げ帰るような理由なんて、何も思い浮かばない……

そして、偵察さんが次に口を開くことには、

「変に思っ、俺達、盗賊の陣地まで近づいてみたんだが……もう全然、もぬけの空だったんだ。さっきまで酒宴か何かやってたんじやないか、って痕跡はあったんだけど……まるで、慌てて逃げ出したみたい……」

「そ、それで……そこには2人、見たことない男の子と女の子がいるだけで……」

「……………???」

と、その直後、

「どうやら間に合ったみたいですねー」

「ふー……よかった。季衣ちゃんも流琉ちゃんも、無事で」

「「!!」?」

偵察の人の後ろから……ありえない声がして、

そして……よく知った顔が、でもこの場には絶対にいないはずの人が現れた。

そ、そんな……何で……

「兄ちゃんに……風ちゃん……!」?

「何で、ここに……!」?

「何ってそりゃ……盗賊連中追っ払った帰り道だし」
「「え!?!?」」

わ、わけわかんない……どういふこと!?

けどまあ……目の前に立っているこの2人の顔から、一応本当に、盗賊たちとの戦いは回避されたみたい、っていうのは、感じ取れた。まあ、それはよかった。

でも……なんで!?

☆

○Side 明久

風ちゃんの作戦は、簡単に言えば……盗賊たちをだまくらかして、勝手に逃げてもらおうってものだった。

まあ、これだけじゃわかんないだろうから……今、目の前できょんとしてる季衣ちゃんと流琉ちゃんに説明する。

あ、ちなみにここは、もぬけの空になった盗賊の陣地。残されてる、まだ使えそうな資材やら食料やらを村の人たちが回収してるところ。

……はは、立場が逆だ。盗賊のもの奪っていっちゃってるよ、僕ら。

ともかく、説明始めようか。

- 1、適当なゴロツキ（社会に迷惑かけまくってそんな類の）を雇う。
- 2、それを偽者の『官軍の使者』に仕立て上げ、盗賊に襲わせる。
- 3、そいつに、盗賊たちが退散せざるをえない内容の手紙を持たせておけばOK。

……あ、わかんない？ わかった。丁寧の説明しよっか。

まず、僕達は森の中で、これから盗賊の襲撃に乗じておこぼれをもらおうとしている、社会にとって害悪なゴロツキさんを探した。いわゆるアレだ、火事場泥棒ってやつ。

風ちゃんいわく『いるはずですよー』ってことだったから、探してみたら……意外と早く見つかった。ちょうどおあつらえ向きに、3人組のが。

全く……いつの時代にもいるもんだ、そういう不謹慎なやつが。

次に、僕がそいつらに接触。

そしたらそいつら、『ちようどいい獲物がいたぜ』とも思ったのか、早速襲ってきたけど……僕の召喚獣でノした。3人くらい、どうってことない。

……10分ばかり風ちゃんに、声かけるの待ってもらって、心の準備してたのは内緒で。

や、だって相手仮にも武器持ってるし……それでも、鉄人1人には見劣りしたけどね。

で、そいつらの命を見逃す交換条件として、僕と風ちゃんは『お使い』を頼んだのだ。

まず、風ちゃんが事前に用意した、見た目一発上物だとわかる着物（だけど実際は安物）を着てもらう。どっから出したのか、何で持ってたのかは教えてくれなかった。

次に、風ちゃんが偽造した『ある手紙』を持たせて、これから季衣ちゃんたちが戦うであろう盗賊団の進軍ルート上で『待ち合わせ』と称して突っ立っていてもらう。

上手くやれば、待ち合わせの相手からたんまりお礼をもらえる、と言い含めて。

……待ち合わせ自体嘘っぱちだから、誰も来ないけど。

そんなところに、よさそうな身なりの人がいたら……盗賊に襲われるよね、そりゃ。

で、まあ……その人は身包みはがれるわけだけど、その際……盗賊たちは、手紙を見つけるはずだ。風ちゃんが偽造したそれを。

そして……そこには、こう書いてある。

『第3実行部隊に指令。予定通り、官軍による盗賊共の殲滅作戦を実行する。進軍経路の途中にて岩を落とす作戦を実行の後、全部隊総勢14000人で総攻撃（略）』

ま、平たく言えば、これから正規の軍隊が盗賊ぶっ殺します、って内容。

で……それと同じタイミングで、僕が近くで召喚獣を使って、崖の上から適当な大きさの岩を10個も落とせば……盗賊たちは勝手に勘違いしてくれる。

今襲った男は、正規の軍隊の連絡用員で……今読んだこの手紙は、

これから自分達盗賊を皆殺しにする作戦の確認の手紙だ……ってね……。

いいタイミングで岩が落ちてきてるし……ちよっと作戦ミスって岩を速く落としちゃった、とでも考えてくれれば上出来。

すでに軍隊が構えてて、このままだと皆殺しにされると思った盗賊たちは……もう着の身着のまま、って感じで、勘違いしたまま逃げ出した……とうわけ。

だから、今、盗賊の陣地はもぬけの空。戦いは回避。
おまけに使える物資や武器も山ほど残ってる。

……説明、終わりっ！

……そして今、僕は何をしているかというと、

「はい、お待ちどうさま！」

「おー、また奇怪な料理が運ばれてきましたねー」

「ははは……せめて珍しい料理、とか言ってよ」

「「……………」」

場所は、僕達が寝食をとにした、あの山小屋。

そこで僕は、戦うことなく帰ってきた季衣ちゃんと流琉ちゃんに、お手製の『リゾット』を振舞っている。

リゾットって言っても、この世界、この地域で手に入る食材を使った、なんちゃってリゾットだけど。

「さて、では食べましょうか、季衣ちゃん、流琉ちゃん」

「「あ、あのー……………」」

と、季衣ちゃんと流琉ちゃん、おずおずと挙手。
ま……だろうね。反応としては正常だろう。

何せ……避難してるはずだった僕と風ちゃんが、奇想天外な作戦で盗賊の軍団撃退しちゃったんだから。

……でも、それ言ったら僕らだって言いたいことがあるわけで。

「その前に流琉ちゃん、季衣ちゃん、風達に何か言うことないですかー？」

「「え？」」

「これでもすごく心配したんだよ？」

「「あ……」」

今更だけど、ようやくわかったらしい。何でさっきから……僕と風ちゃんが、笑顔のまま、無言のプレッシャーを2人に投げかけてるのか……が。

いや、そりゃ腹立つよ。僕らに黙って、あんな風に一方的に、遺書じみた手紙残していなくなっちゃうんだから。

「ごめんなさい……でも、私達……」

「デモも体験版もない！」

「へ？　たいけ……？」

「あ、今のは世迷言だから気にしないで」

「「??:?」」

きょんとんとして首をひねる2人。

うう……ちょっと厳しめなお兄さんのやり方で行こうと思ってたのに……変なところでしまらないんだから僕は……

と、そこで沈黙してしまった僕に代わり、風ちゃんが会話の手綱

を取る。

「ともかくですねー2人とも。お2人の気持ちはわからなくもありませんが、いきなり目の前からいなくなられた風たちの気持ちも察してくださいねー?」

「あう……ごめん……」

「心配したところじゃなかったんだからね?」

「はい……ごめんなさい……」

しょぼんとして謝る2人。

全くもう……そっただけ覚悟決めて、勝手にいなくなつて……こっちは、何も全く聞かされてなかったっていうのに……。いきなりすぎて逆に冷静だったけど、アレ僕パニックになつてもおかしくなかったんだからね。

僕は彼女達に助けられた側だから、本来偉そうなこと言えないけど、今回はそれ以前の問題だつていうのは、全員に共通の見解だろう。

その意味でも、今回はお兄さんとして厳しく言わせてもら……おうとして失敗したんだっけか。

……まあ、いいか。風ちゃんが代わりに言ってくれたし。

そして、

「うんうん。では、お2人ともきっちり謝っていただきました所で……」

「食べよっか、ホントに」

「えっ!? あ……お説教とかないんですか!?!」

「? 別にないよ?」

だって……許容しがたい行為だったのは確かだけど、2人にも考えや事情があったのはたしかだしね。

だから風ちゃんと話して……きっちり彼女達が謝ったら、それでチャラにしよう……って決めてたわけ。自覚さえしてくれれば、あとは勝手に反省できるだろうし。この子たちは、そのくらいできる子だ。

……それに、

「早く食べないと……季衣がほら、そろそろ限界だし……」

「え？」

僕の言葉に、流琉が季衣のほうを見ると……季衣は、もう辛抱たまらんと言った様子で、ずっと前かがみになって鍋の中を覗き込んでいた。

顔に『美味しそう』『食べたい』『待てない』と書いてある。……なんてわかりやすさだ。

それを見た流琉は、額に手を当てて、呆れながら失笑するという器用な技を見せていた。

ていうか季衣！？　ちよ、火焚いてるし、鍋まだ熱いんだから、そんなに前のめりになったら危ないって……ってああつ、よだれよだれ！　落ちる落ちる！

「に、兄ちゃん……早く食べようよ……こんな、こんなおしおき、ボク耐えられないよう……」

「？　お仕置きって？」

「その『りぞつと』を目の前にしておあずけをくらっていることか

と思われますー」

いや、まだ持ってきて1分経ってないでしょうが。

季衣は、体中の水分全部出すんじゃないかってくらいに、『どばーっ』とよだれを流していた。

一応……鍋に入らないように注意してるっばいけど……その下のたき火部分に注がれて……火が消えそうな勢いだ。……大丈夫か、色々？

とまあ、その様子を見て、

「……ふふっ、そうですね！」

流琉、笑顔でそう一言。

ほっ、よかった。季衣の食い意地が、思わぬアイスブレイカーになってくれた。流琉の緊張も、すっかりほぐれたみたいだ。

……というわけで、

「「「いただきます！」」」

実のところ、朝から何も食べてなかった僕らは……細かい話は後にする……ってことで、鍋に盛られたリゾットをよそい始めた。ちなみに、味は好評だった。ほっ。

食べながら、いろんなことを話した。

実は、風は……季衣や流琉の目的になんとかなく気がついてたってこと。

そして、それに備えて……風なりに、今回僕と一緒に実行したよ
うな、盗賊退治用のプランを考えていたらしい。

頭脳もそうだけど……見た目と性格に反して、なんて観察力だ。
さすが軍師。

ちなみに、その策を季衣や流琉に話さなかったのは……彼女達が
こんなにも早く盗賊たちへの攻撃に踏み切るとは思っていなかった
からだとか。

風に言わせると、仮に攻撃するとしても、タイミングはまだ先だ
……とのこと。その辺を見極められない流琉たちの行動を読めな
かった、と風は反省していた。

それと……さっきから僕は、彼女達のことを呼び捨てで呼ぶよう
になった。

会話の中で、風が『子ども扱いされてる気分になりますー』とい
ったためである。

いや、気分も何も、子供のように……いやまあ、頭脳が優秀な
のは認めざるを得ないけど……。

「まあ何はともあれ、またこうしてみんなでご飯を食べられてよ
かったですねー」

「そーだねー……！ これも美味しいっ！ やっぱり兄ちゃん、ご
飯作るの上手いね」

そういう季衣は、もうリラックスモードだ。追加で作った照り焼

きチキン（なんちゃって版）をほおばり、これまた満面の笑顔。

まあ、立ち直りや頭の切り替えが早い……と受け取ればそれも長所か。こっちとしても、いつまでもうじうじしてられるよりは、こっちの方が気が楽、と言えそうだし。

積もる話はまず後にして、

僕達は……またみんなこうして一緒に食事ができてることを喜び、今はただ楽しく談笑することにした。

何度も言うけど、反省なら各自でできるしね。

「兄ちゃん、おかわり！」

「風もお願いしますー」

「あ、あの、私も……」

「はいはい、今あげるよー」

……ってあれ、僕の分がなくなりそうだが、僕も食べよう。

こうして、その日の戦いの……あ、いや、別に戦ってないから、その……まあ、精神的疲労やら何やらの疲れを癒しながら、僕らはほぼ一家団らん、と言っている雰囲気の中で夜を過ごした。

難しいこととか、後始末とか……そういうのは、全部あとにまわしちゃう。

何よりも今は、この時間を楽しんでいたい。

「「「おかわり！」」」

「はいはい」

……やっぱ、みんな一緒がいいね。

第11話 策とリゾットと一家団らん（後書き）

……書いてから気付きました。

説明的な感じで書いたら、入れられるギャグが少なくなってた……！？

なんで……こんなことに……！？

ええそうです、自分の力量不足です。ひとえに。

……次回、がんばります。なるべく早く更新できるように……

ではこのへんで。和尚でした。

第12話 家族と別れと誤解の連鎖（前書き）

どうも、和尚です。

今回で、『ちびっ子編』幕引きとなります。

どうぞ。

第12話 家族と別れと誤解の連鎖

「……………何で？」

吉井明久17歳、朝起きての第一声がコレだったりする。
えっと……………なんだろう、この状況。
僕の寝ている、同じ布団の中に……

「くかー……」

「すやすや……」

「……………くうー……」

右……………季衣。僕の右腕を抱いて寝てる。
左……………流琉。同じく左腕。
上……………風。胸の上に乗っかって寝てる。僕はベッドか。

……………マジで、何!?

えっと、たしか昨日、戦い（未遂）の反省会もかねて、4人で遅くまで起きてて、

それでその後……………寝て……………そう、その時はまだこうじゃなかった。
いつも通り、きちんと4人別々の布団に入っただけなのに……………。

……………あ、ひょっとして、昨日話題で家族だの何だの話したから、
さびしくなってもぐりこんで来たとか……………なんだ、3人共やっぱり
まだ子供じゃないか。

「お兄さんが言えるセリフですかねー？」
「どわぁい!？」

また心読まれた！？　　っていかいきなり起きるな！

胸の上に寝ている姿勢の風がいきなりそんな事を言うので飛び起きる。その表紙で、左隣で僕の腕を抱いて寝ていた流琉も目が覚めた。

「こんな状況で煩惱の一つも出さずに家庭的な側面ばかりのぞかせているあたり、精神年齢が高いのか低いのかはつきりしないといいますかー……」

「え、何か言った風？」

「いえ、何もー？」

「ふぁ……あ、兄さま、おはようございます……」

「え、ああ、おはよう流琉」

まあ、風が何を言っただのかは気になるけど……とりあえず、流琉も起きたことだし、今は朝ごはんの仕度を始めないと……

……始めないと、いけないんだけど……

「くかー……」

季衣が起きない。

右腕にしがみついたまま、起きない。

言い方悪いけど正直……邪魔。だって、このままだと僕も起きれないもん。

「季衣ー、ねえ、起きてよー？」

「くかー……」

つんつん　↑　ほっぺたをつついてみる

「くかー……」

ぐにゅー……

↑

ほっぺたを引っ張ってみる

「くかー……」

ゆさゆさ

↑

体を揺さぶってみる

「くかー……」

……起きないな……。

思い切って、腕を振り切るつもりで僕が立ち上がってみると

ぶらーん……と、そのままくっついてきた。

「……コアラかよ」

「はい？ こあら……って？」

「あ、いや、こっちの話」

流琉にそういいながらも、僕は（もうこの際遠慮なしに）腕をぶんぶん振ってみるけど、しっかりとしがみついている季衣は、話してくれる気配なし。

他にも、その場で回転してみたり、ラジオ体操してみたり、昭和な仮面ライダー的なポーズをとって『変・身！』みたりしたんだけど……効果なし。

「くかー……むにゃ、お前の罪を数えろ……」

「しかもなぜそのセリフを！？」

平成だし。

すると、それを見かねてか……何やら風が、流琉の作った鹿肉の燻製を持ってきた。そしてもう片方の手には………え？ あんなものの、どうするんだろ？

風は燻製を、季衣の鼻の前に近づける。すると……

んがあっ ↑ 燻製の匂いに反応した(?) 季衣が口を開ける

がぎよっ!! ↑ 風がすばやく差し出した丸い石(握りこぶし大)に噛み付く季衣

「ほがっ!?!」

あごに伝わったであろう凄まじい感覚に、たまらず季衣は飛び起きた。

「おや、起きましたねー」

「そうだねー……って風!? 何やってんの君!?!」

なんて起こし方!? 石なんかかじらせて……季衣の歯が折れたらどうすんの!? いくらギャグだからってやっていいことと悪いことが……

……と思ったら、石の方にひびが入っていたので何もいえなくなつた。季衣、君どんな顎でどんな歯でどんな咬筋力してるの……?

「うう、いたた……おいしそうなスイカかと思ったのに……」

「いや、そこはせめてリングとか言おうよ」

君はスイカを丸かじりするのか。
……ともかく、季衣も起きてくれたことだし……朝ごはんのしたくしますか。

☆

朝食の後、

季衣は山へ芝刈りに、流琉は川へ洗濯に……じゃなくて、

季衣は山へ熊狩りに、流琉は川へ鮭の一本釣りに……ってこっちの方がすごいな。

ちなみに僕は、流琉について鮭釣りに来てます。

や、僕は細腕だから、鮭なんか吊り上げるのは無理だろうけど……そこはほら、川魚とか色々釣ればいいよ。風も、季衣についてって山菜取りだし。

まあ、サバイバル的な食料調達だけど、レジャーだと思えば楽しい。

ちなみに、なんでまだあの山小屋にいるのかっていうと……後片付けと、盗賊たちが戻ってこないかの監視のため。

「ひょっとしたら……僕をエサにしたら、またあの魚が釣れないかな？」

「煌魚ですか？ ふふっ、兄さまならできるかもしれませんね」

「ははは……素直に喜べないな……」

なんてことを話しながら、僕と流琉は釣りをしていた。

あ、ちなみに今朝からの流琉のこの『兄さま』って呼び方は、季衣のそれをなぜかマネしたくなっただんだそうだ。……なんでだろうね？

すると、ふと流琉が、

「なんだか……不思議な気分です」

「？ 何が？」

「いえ、盗賊達に村が襲われてたときは、まさかこんな風に……楽しく過ごせる時が来るなんて、思ってたからですから……」

また1匹……鮭じゃないけど、魚を釣り上げながら、流琉はそんなことを言ってくる。

まだ実感がないみたいだ。はは……まあ無理ないよね、死を覚悟した戦いがあっさり回避されただけでなく、盗賊達はるか遠くに逃げて行っちゃったんだから。

でもほら、何事も無いならそれが一番いいでしょ。

「僕は逆に、あんな事態になるなんてことの方がびっくりしたけどね。何せ、朝起きたら遺書まがいの置き手紙残して流琉たちがいないんだもん」

「あう……ごめんなさい……」

「え？ あ、いや、別に蒸し返す意味で言ったわけじゃなくて……」

もう気にしてないよ？ 全然。

こういうことは、後々まで引きずっても空気が悪くなるだけで、何でもいいから何かのきっかけにきっぱり吹っ切っちゃった方がいい、と相場は決まってるもんなんだ。

でもまあ、ただ……

「まあ……いきなり家族がいなくなっちゃうみたいで、正直焦ったのは事実か」

「……え？ 家族……ですか？」

「うん。あ、もちろんたとえ話だけどね？」

実のところ、流琉や季衣を、いつの間にか妹みたく思えてた節がある。

何ていうか……鈴々がそんな感じだったし、元々小さい子には好かれる方だった。

まあ、それは置いといて……僕自身、小さい子は嫌いじゃない。

だから季衣や流琉も（身体能力が明らかに別次元なのは置いといて）、それに風も、最初こそ色々戸惑いはしたものの……一緒に過ごして、世話して世話されて……っていううちに、何ていうか、それに近い感情が芽生えてたなあ。

だから、2人が突然いなくなったとき……言いようもなく焦ったし、さびしかった。

「いつも……流琉と一緒に料理して、季衣と一緒に薪割りとかして、風と一緒に山菜取りとかして……たったの数日だけど、それが当たり前っていうか、そんな感じに思ってたんだよね。だから……家族、かな……」

「家族………」

「うん、家族」

そう言って、ぽん、と流琉の頭に手を置く。

ちょっと驚いてたけど、特に嫌ってわけでもなさそうだった。ほつ。

……まあ、機会といえば機会だ。一応……言いたいこと、残さず言っとうか。

「流琉との料理……ホントに楽しいからさ、何ていうか……もうすでに他人って気がしないっていうか……昔からもう、こんな風に生活してたみたいで」

「あははっ、ホントに家族みたいですね、それじゃ」

「ははっ、別に……いっそそれでもいいかな、っと思うよ」

「……えっ……？」

きよとんとする流琉の顔は、少しだけ赤かった。？ 何で？

ちなみ、僕はさっきから流琉の頭に手乗せたままだけど……熱と加賀で照る風な感じはしない。どうしたのかな？

「えっと……なんて言うかこう、妹みたいだしね？ しっくりくる」

「……あ、妹……ですか……」

「？ うん、3人ともかわいいから、自慢の妹だろうな」

3人そろって呼び方からしてそんな感じだし。季衣が『兄ちゃん』、風が『お兄さん』、そして流琉が『兄さま』だもんね。

ここに鈴々の『お兄ちゃん』が加われば完璧か……いや、何に？

「わ、私はできれば、妹より、むしろ……およ……め、さ……方が……」

「？」

なんか流琉がさっきから顔赤いんだけど……どうしたんだろ？
小声で何か言ってるけど、聞こえない。まあ……独り言みたいだ

し、取り立てて気にするようなことじゃないか。

「まあ、だから……何か相談したいことがあったら、風や……頼りないけど、僕にでもしてくれていいから。間違っても、いきなりいなくなるなんてことしないでよ？　今回だって……最初から風に相談してれば、何事もなく収まったんだから」

多分あのとき僕は、世のお父さんが『実家に帰ります』という置き手紙を残して奥さんに逃げられた時の気持ちに近いものを味わったと思う。

いや、ホントにショックがハンパなかったからな……って、何か違うか。

「……はい、そうします。今度からは……遠慮なく！」

「ん、よろしい！」

さて……じゃあまた釣りに戻……ん！？

「……っと思っただけど流石、それよりまず僕を手伝って！」

「はい？　何か……あ、もしかして何か釣れたんですか？」

「そうみたいなんだけど……なんかもう、すごい手ごたえで……重い……っ！」

見ると……川の中央、ちょうど深くなってる部分……大っきな黒い影が……っていうかアレ、尋常な大きさじゃないぞ！？

間違いない、僕の身長よりはるかに大きい……何だあれ！？

「も……もしかして、また……」

「そ、そんな……川の漁師さんでも、一生に一度出会えるかどうかの希少種なのに……こんなにしょっちゅう……」

「と、ともかく釣り上げよう！」
「は、はい！」

すぐさま駆け寄ってきた流琉が、体を寄せてぐっと釣り竿をつかむ。

……ちよっただけ煩惱が出そうになったのは内緒。
いや違うんです。露出が多いせいで意識しちゃうとか、色々当たってる（小さいけど）……というかもはや密着してるとかそういうのはもう……すいません嘘つきました。

何言ってるんだろ僕、子供相手に。

と、ともかく、糸が切れないように注意しつつ引っ張って……ただ、

今度は……竿の方に限界が……まずい……このままだと折れる！

「こ、こうなったら……また僕をエサにして……」

「何言ってるんですかやめてくださいよ！？」

「じよ、冗談だよ、流琉……」

冗談で言ったのにすごい勢いで言い返された。び、びっくりした……

心配……してくれたのかな？ それは嬉しいけど……音量と剣幕が予想外だった……。

するとそれを聞いた流琉は、ほっと息をつき……その直後、僕と同じように、このままだと取り逃がすと思ったのか……なんと、彼女はどこからか自分の武器を取り出した。

見た目一発、ヨーヨーのような……というか完全に見た目がヨーヨーな、流琉の専用武器。ただし、大きさが直径数十cmあって、

重さもそれに釣り合うだけあるから……凄まじい重量級の武器である。

流琉はそれを、川の中に投げ込み……

「え—————いっ!!」

ギュルルン、バシャアッ!!

川の中の大物を直接引っ張りあげた。おお。荒技。
そして……空中を舞って川岸に飛来したそれは……

「「……熊!?!」」

なぜか……熊だった。いや……なんで!?

この世界は川で熊が釣れるのか……と納得しそうになったけど、隣で同じように流琉が驚いていたので、僕の場合は正常だと悟る。

すると……よく見たら、熊に何かがついてきてたのが見えた。
それは……

「あ、兄ちゃん、流琉も」

「……なんで？」

季衣と一緒に連れていた。流琉のヨーヨーの紐に、ぐるぐる巻きになって。

☆

「と、いうわけで、季衣ちゃんが流琉ちゃんとお兄さんに釣り上げられたわけですねー」

「……川で熊の血抜きしてたら流されちゃって、それを逃がすまいとしがみついていたらここまで来た……?」

「あはは……そうなるかな……」

「いや、季衣……なんで君はそう笑ってられるのさ……」

その後で合流した風からも事情を聞くと、そんな感じらしい。

……季衣、食い意地張りすぎ。

ともかく、今は帰宅途中の獣道。

……獣道だけど、この山の食物連鎖の頂点に（戦闘能力的な意味で）君臨してる2人がいるので、熊や野犬の襲撃とかは別に怖くないです。

というか今、季衣が仕留めた熊、実際にひきずってるし。

その道中、ご機嫌そうな季衣。

「ごきげんですねー、季衣ちゃん？」

「そりゃそーだよ、熊っておいしーんだもん！　ねえねえ兄ちゃん、料理作ってよ、今日はこの熊でさ！」

「無理だって……さすがに熊料理は作ったことないよ」

「それに季衣、熊の肉は臭みを抜いたりする下ごしらえに時間がかかるんだから、どの道今日の晩ごはんに出すのは無理」

「え……」

そんな会話を繰り返している。
うんうん……いいね、この空気。昨日までの状況が嘘みたい。や
っぱり、こういう平和で笑いあえる空気が一番だよ、人間。

と、そんな雰囲気の中で小屋に帰ると……………ん？

（え、何、この状況！？）

なんか……兵士みたいな武装した人たちが、小屋の前にたくさん
来てらっしゃるんですけど……え！？ 何事！？ 盗賊、じゃない
みたいけど……

そしてその人たちに指示を出すように……見慣れない人が、小屋
の前に立ってた。

焦げ茶色のセミショートの髪に、メガネをかけた女の子だ。ミニ
スカにノースリーブのコスプレっぽい装束で……なんていうか、知
的、っていう言葉が似合いそうな美少女。

……と、僕の後ろからその姿を確認したらしい風が、

「おー！ 稟ちゃんですかー！」

「！ 風！ ここにいたのですか！」

え？ 知り合い？

風は『稟ちゃん』と呼んだ彼女の元へ駆けていき……つとと、これ多分真名だな。

ともかく……なんか親しげに話してるから、知り合いなんだろう。そういえば……風はたしか、旅の仲間とはぐれたから、季衣たちとこの山小屋にいたんだっけ。ってことは……この娘が風の仲間か。すると……次の瞬間、

「ああっ、ご主人様あっ！」

……っ!?

すつつつごく聞き覚えのある声が聞こえてきて……いや、まさか……

まさかと思いつつも振り向くと……

ごん!! (通算三度目)

「「いだあっ!?!」」

なんか身に覚えのある痛みが額に!?!
衝撃に耐え切れずに尻餅をつきつつも、どうにか確認すると……

そこには……

「桃香!?!」

「ご、ご主人様だぁ……っ! そのおでこの感触はご主人様だぁっ!」

いや、できれば他のところで断定してほしい。

……ともかく、そう、つい先日、別れ別れになってしまった、僕
のたびの仲間……桃香だった。

そして、その向こうからは……

「あ、お兄ちゃんだ! おーい!」

「ご主人様!?! ご無事ですかーっ!」

愛紗と鈴々も来た。わー、何コレ、全員集合だー♪。

そして、僕の背後で……

「えっと……何、これ?」

「さ、さぁ……」

状況を飲み込めていない季衣と流琉が、小首をかしげていた。

☆

説明された限りだと、

あのあと……桃香達は僕を探して川を下っていったところ……近くの盗賊団を警戒していた官軍に出くわしたらしい。

……盗賊だと勘違いした鈴々が突撃しようとしたらしい……っていう余計なエピソードは置いといて（ちゃんと止めたらしいよ?）。

で、そこで客将として雇われてたのが……風の旅の仲間である、稟こと『郭嘉』さんだったらしい。風の搜索もかねて客将になったらしい。

そして、何だかそこで色々と情報の交換をしたところ……どうやらこのあたりで僕らしき人物の目撃情報があったため、同行させてもらって一緒に探してたそう。

稟達としても、強大な戦力は欲しかったところだったらしいから、ちょうどよかったんだとか。

結果的に、僕は桃香達と、稟は風と合流でき……さらに稟とは『風が言うのなら、信頼に足る人物でしょう』ということで、真名まです許してもらえた。初対面なのに、何か恐縮です。

そして……合流できたということは、それぞれの旅に戻る、というところもあり、

季衣と流琉と、ここで分かれることを意味していた。

「さびしくなるな……兄ちゃん、もう少しここにいてもいいじゃ

ん」

「うーん……でも、随分と旅程が遅れちゃってるし……残念だけど、ごめんね」

「じゃあ、仕方ないですね……」

むくれている季衣と、しゅんとなる流琉。

僕としても、もう少し一緒にいたいけど……僕らの目的を考えると、さすがにこのまま長居しとく……ってわけにもいかないしなあ……。

それに、桃香達の話だと……もうこの先のプランがあるみたいだし。

「まあまあ、きつとまたそのうち会えますよー」

「？ 風、それは一体どういう意味ですか？」

今の風のセリフの意味を図りかねてか、稟が問いかけた。あ、僕も聞きたい。

すると……風は、僕ら全員を見渡してくすつと笑い、

「この面子なら……いずれはまた、会うことになる気がするのですよ……まあ、どういう形で、とは言いませんが……」

「「「……………」」」」

なんか、よくわからない。

どうやらわずかでもわかった感じだったのは、風と同じ軍師の稟だけだった。

むう……気になるけど……風のこの目は、聞いても教えてくれない目だ。

大方……『いつかわかりますよー』とか言ってごまかされるのが落ちだ。

ま、今はこれでいいか……と、僕がムリヤリ納得し、最後の別れの言葉でも考えようかとしたその時、

「まあ、にしても……風としても、これでもうお兄さん達とお別れというのはさびしいですねー。お兄さんという名の敷き布団は、なかなか寝心地よかったのですがー……」

「あのね……」

それは君が勝手にもぐりこんできてただけでしょうが、と僕が注意しようとした……

……その時、

「ふえっ!?! ふ……ふふふ風!?! ああああああなたは何を

……
「?」

ん、何だ?

なんか……いきなり、稟が顔をボンツと赤くして狼狽し始めた。

「あ……ああああのよよ吉井殿? あ、あなたその……風と一緒に寝……?」

「？ ああ……いや、勝手に布団にもぐりこんでた、っただけだね？」

「ふ……ふと……潜っ！？ そ、それはもしかして……よ、よば……」

……？ どうしたんだ？

なんかさっきから、稟がわたわた慌てまくってるような気が……

「ふ……風と吉井殿が一緒の布団で……風が上、吉井殿が下で……うら若き男女が一緒に……当然、何も起こらないはずが……2人はそのまま……」

……と、次の瞬間

「……ぷふうっ！！（ブシャアアアアアアアア！）」

「「ええええええええええええっ！！？」」」

いきなり大量の鼻血を噴出して倒れた！？

ちょ……何、どういうこと！？ ま、まさか今の話から妄想で……っておい！？

そんな、ムツツリーニじゃあるまいし！？

「だ、大丈夫なの稟！？」

「大丈夫ですよー、このくらい慣れてますからー」

「「いつも！？」」」

あえて繰り返そう！ そんな、ムツツリーニじやあるまいし！？
っていうか、なんかもう……致死量超えてそうな勢いの噴出です
けど……

「はいはい、稟ちゃん、首の後ろとんしますよー、とんとー
ん」

当然のように民間療法でなんとかしている風がいた。

いや……そのやり方、実は間違ってるって聞いたことあるよ？

正しくは鼻を押さえて血を止めて、姿勢を……

「大丈夫ですよー？ 風も季衣ちゃんも流琉ちゃんもお兄さんと一
緒の布団で寝ましたし、それぞれ上と右と左でしたけど、何も問題
ありませんでしたからー」

「上と右と左（ダバダバダバ……）」

悪化した！？ うわあ！ 赤い水たまりが僕らの足元にまで拡大
を！？

ちよ、風、あおっちゃダメ………うおっ！？

何だ！？ 後ろから強烈な殺気が……血の匂いに誘われて熊でも
来たか！？

「……ご主人様……今の話は本当ですか？」

あ、熊の方がマシだった。

見ると……そこにはしつかり青竜偃月刀をかまえてらっしゃる愛紗さん。

いやあの……誤解ですよ？ 風が言ったのはホントだけでも、こんな子供達相手に僕は別に何も……

「ご主人様……よもや、このような幼子達の布団にもぐりこんで破廉恥な真似を……」

違う！ それ違う！ もぐりこんできたの彼女達の方！

「これは……少々お仕置きが必要ですか……？」

「いや、ちょっと待ってって！？ 愛紗が心配してるようなこと何もないからホント！ 流琉、季衣、そうだね！？」

「……本当ですか、季衣殿、流琉殿？」

証言を！ 僕をこの地獄の淵から救い出す証言を！

「うん、兄ちゃん、すっごく僕らによくしてくれたもんね！（日々の生活で）」

「はい！ 私も、兄さまには色々と教え込まれました！（料理とか）」

「あんなの、初めてだったよねー（リゾットとか洋食）」

「はい。特に……風さんとのあれは、すごかったです……（盗賊退治の戦略）」

無間地獄に叩き落す証言が大量に発せられた。
ちよっ、言い方、言い方————！！！！

「お、教え込んで……調教……!? は、初めてを奪って……（ダバダバダババ!）」

そしてあつちでは稟がさらに死にそうに!? 二次災害!!

「……ご主人様……」

「え、あの……あ、愛紗……?」

「……何か、言い残すことは……?」

「いやちよつ、ま、待って愛紗! そんな事実はなく、全面的に誤解でホントお願い助けて殺さないでぎゃあああああああ——
——っ!!」

「……何、これ?」

「さあ……」

状況が理解できていない桃香と鈴々の前で、僕は星になった。

そして、

負傷者2名の存在により……結局、僕らは治療・療養のために、もうしばらくこの山小屋に滞在することとなり……旅立ちの日程は、図らずも延びてしまいましたとき。

ま……理由が納得できないものだったけど……流琉たちが嬉しそうにしてたし、いいか。

あ、三日後、今度はきちんと旅立ったけどね？

第12話 家族と別れと誤解の連鎖（後書き）

……最後まで騒がしい感じでした……。

まあ、これこそがまあ、バカテスらしさ……でしょうかね……。笑いがあるほうが。

そして、明久が酷い目に（理不尽に）遭うほうが。

さて、次回から新章突入です。

どういう展開になるかは……次話をお楽しみにしていただければ。

ではこのへんで。和尚でした。

第13話 旧友と温度差と思わぬ再会（前書き）

第13話です。

今回、さんざん出番を先延ばしにしてきたあの方とあの方がようやく登場……

そしてさらに……あの人まで……？

ともあれ、どうぞ。

第13話 旧友と温度差と思わぬ再会

「えっと……ここで間違いないの？」

「うん！　ここが、白蓮ぱいれんちゃんのお城……のはずだよ！」

えっへん、と胸を張る桃香がその背後に背負っているのは……すぐく立派なお屋敷。

というか、城。

うん、城だ、これは。今、桃香言ってたし。

さて、あの後……名残惜しくも流琉たちや風たちと別れた僕らは、桃香の提案で、彼女の旧友が治めているという城に来了。

どうやら、まずはここにいる桃香の旧友を頼り、徐々にでも力をつけていこうか……っていう作戦のようだ。

まあ、賢いといえば賢いやり方……かな。

「でも……利用するみたいで、ちよっと白蓮ちゃんに悪いなあ……」

と、ただでさえ大きい胸を張ったばかりなのに、心持ちしゅんとしている桃香。

どうしたんだろ……なんて聞くまでもないか。その友達に対して、ちよっと申し訳なさを感じてるんだ、あれは。

でも……

「でも桃香、仕方がないよ。僕ら4人じゃ、できることは限られてる……どころの話じゃないんだからさ」

「いずれ、どうかして力を付けなければならない……というのは課題だったのです。方法として少々後ろめたいのは否めませんが……」

「まあ……仕方ないのだ。その代わり、鈴々たちでいっぱい、その『公孫賛』こうそんさん って人のお手伝いしてあげればいいのだ」

まあ……鈴々の言うとおりだ。その分の働きを向こうに対してもしてあげられれば、少しはまししてもんだろうね。言い訳だけどさ。

ちなみに、面会に際して、いくつか課題があった。

こういう場で、相手に舐められないためには……自分達はすごいんだぞー、っていうアピール要素が必要なんだけど……通常、権力のある人なら貢物とか、大勢の兵士とかでアピれるようなそれを、僕達は持っていない。

そこで、桃香達は……途中から僕も加わったけど……この数週間、各地で盗賊退治の手伝いなんかで名を上げて、さらにその噂を方々に広めさせた。『4人組の、すごい連中がいる』って、ね。

その評判と……あとは、町でちよろっと買ったお土産で、アピールのかわりにする……っていうのが、僕らのプランだ。ちょっとシヨボいけど、まあよしとしよう。

ちなみに路銀は、盗賊退治の報酬に加え、僕の持ち物のいくつか……ルーズリーフ（100枚入り）とかボールペンとか……が予想外の値段で売れたため、不自由はしていない。

や、今まで忘れてたんだけど……紙って、この時代では高級品なんだよね。ボールペンにいたっては、オーバーテクノロジーもいいところだし。

結果、愛紗いわく『向こう数ヶ月楽に暮らせる』くらいに懷が暖まった。そのおかげで、これから会う『公孫賛』って人へのお土産も奮発できたよ。

さてさて……どんな人なのかな……。

☆

古い知り合いとはいえ、他人。しかも平民。

まあ、数時間余裕で待たされるのは覚悟したんだけど……以外にもすんなり会えた。

公孫賛って人、案外フランクなのかな？

その答えが……今、僕らの目の前にいる。

「おーおー、久しぶりだな、桃香！」

「白蓮ちゃん！ 久しぶりーっ！」

姿を見るなり飛びついてスキンシップに移行する桃香。ああ、困ってる困ってる。

横にいる衛兵さん達が驚いてたけど、公孫賛さん、であろうその人は、『いいから』と手をかざしてとめていた。

ピンク色のポニーテールに、整ったきれいな顔。常備なんだろう

か、白い軽鎧を身にまとい、腰には一振りの剣をさしている。

身長とかは、桃香とさして変わらないけど……ある部分において、あまりにも発育に差があるのがありありとわかる。いや……どこことは言わないけどね。

なんていうか……聞いてた通り、人がよさそうな感じの人だ。公孫賛さん。

すると、人懐っこい猫よろしくじゃれつく桃香をどうにかどかして、公孫賛さん、こんどは僕らの方に視線を向けた。

敬意を表し、愛紗、すかさず一礼。慌てて僕と鈴々も。

「ふーん……あれが、お前の連れか？ 頼れる武将2人と、『天の御使い』とやら」

「うん！ 左から、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、そしてご主人様！」

「桃香、右からじゃなくて？」

僕、君達から見えて一番左に立ってますよ？

「あ……」

「それに桃香様、真名と呼称で紹介しては……公孫賛殿が呼べませんよ？」

「あー、うん、ごめん……えっと……」

「ははは、変わってないな、桃香」

その後、無事に自己紹介を済ませました。

その中で、公孫賛さんが

「天の御使い、ねえ……」

なんてつぶやきながら僕の方をジト目で見てたのがちょっと気に

なったんだけど……いや、仕方ないだろう。胡散臭いのは重々承知だ。

そしてそんな中、思い出したように桃香が、

「あ、そうだ白蓮ちゃん、お土産買ってきたんだ！ はい！」

と、何やら紙袋を差し出す。

お、桃香に任せておいた、例の『お土産』か。

さて、何を買ったんだろう？ けっこうな額だったみたいだけど……秘密だとかで、僕も愛紗たちも何を買ったのかは聞かされてないんだよね……。

まあ、受け取って喜ぶような品物だとは思うけど……

それを受け取った公孫賛さんが、紙袋の中から取り出したのは……

「……何だコレ、石？」

手のひら大の……石？

石英か何かかな……キラキラしてキレイだけど。

……何だろう、何か嫌な予感が……

「えっ、と……桃香、これは……？」

「ふっふっふっ……聞いて驚かないでよ、白蓮ちゃん」

何やら自信たっぷりといった雰囲気の桃香だけど、それに比例して僕らの不安度ゲージがうなぎ上りだったりします。

……まさか……

「それはね、露店で売ってた『幸運を呼ぶ石』！ それを部屋に置いてくだけで、次から次にいいことが起こるんだって！ すごいよね！」

「「「……………」」」

ああ、そういうこと、ね。

目をキラキラさせて言う桃香のその周りで、その他全員が三白眼になる。うわぁ、この温度差。

「……愛紗、今度から……買い物は桃香に任せちゃダメだね」

「ええ……こうなることは予想してしかるべきだったのかもしれないが……」

「……うっかりしてたのだ」

「ははは……桃香、お前は相変わらずだな」

「……………??？」

知らぬは当人ばかりなり、か。

思いつきり騙されてつかまされている買い物をしてなお、誇らしげにしている桃香の前に……公孫賛さんを含めた僕らは、この娘にどう言ったもんかと頭を抱えていた。

☆

それから数分後。

場所を……机と椅子のある、おそらく応接室と思われる部屋に移して。

「しかし、意外だったな……お前ほどの才能と能力がある奴なら、一国の太守にだって慣れただろうに……塾を出てから、ずっと旅して回ってたってのか？」

「あー……うん……いろいろ、そのー……見て回りたくてね……」

事の真相を知った（愛紗が容赦なくバラした）桃香は、目に見えてテンションが落ちていた。『幸せを呼ぶ石』が偽者だった、という事実。

この娘……人を疑う、ってことを知らないからなあ……。

ちなみにこの後、桃香にそれを売りつけた悪徳業者は、公孫賛さんが摘発しました。

……買った桃香も悪いように思える……けど、無視！

それはさておき、

どうやら桃香と公孫賛さんは、同じ『私塾』……現実世界という学校みたいなものらしいけど、その同期だったらしい。それで知

り合いだったのか。

こんな大きなお城持つてる人と知り合いだなんていうから……てつきり桃香って、どこかのお嬢様なのかと。仮にも『劉備』だし。

どうやら同じ『私塾』を卒業した後（桃香は凄まじく成績優秀だったらしい）、普通はそのままいい仕事につくらしいんだけど……そこを桃香は旅に出ちゃったから、出世とは無縁だったわけだ。思い切ったまねするなあ……。

まあ、立派だけどね。

そんな思い出話に花を咲かせつつ、愛紗と鈴々、それに僕が適宜口を挟んで、公孫賛さんに『本題』を切り出していた。

「なるほど、ね……つまり、お前らはこの私を、自分の道の第一歩として利用したいわけだな？」

にやりと意地悪っぽい笑みを浮かべて言う公孫賛さん。お、鋭いな……お見通しか。

一応、そこは上手く隠して話してたつもりだったんだけど……さすがは一国一城の主。そのくらいの観察眼は持ち合わせてる……ってことか。

「あう……ごめん、白蓮ちゃん……」

「はははっ、気にするな、今の時代に生きるものなら当然の考え方さ。私としてはむしろ、お前がようやくそういう野心の類を持ってくれたってことの方が嬉しいし、ほっとした」

「あ、これは愛紗ちゃんたちの案なんだけどね？」

「……あっそ」

公孫賛さん、ちょっとがっかりしたように見えたのは気のせいじ

やないと思う。

「まあ……何にせよ。気にしないでいいよ。その申し出、受けさせてもらうよ」

「ホント!？」

「本当だ。そういうわけだから……桃香に……関羽と張飛、あとその……吉井だっけ? お前達は、私の所で客将として預かることになるが……いいか?」

「もちろんです、公孫賛殿」

一同、ぺこり。

ほっ、よかった。うまくいった。

まあ、完全に見抜かれてるとか、当初の予定とは幾分異なる部分もあるけど……まあ、さして問題ないだろう。

向こうはきちんと、僕らの『実績』と『中身』を評価した上で受け入れてくれたみたいだし。

「それに……何というか……友として、お前を野放しにしておくのは気が引ける」

「?？」 ↑ 桃香

……良くも悪くも。

ま、まあ……桃香の、保護欲をそそる『実績』と『中身』は置いといて、だ。これからがんばらなくちゃね、公孫賛さんに愛想つかされないように!

すると、

「それに……私としても、有意の人材は今1人でも欲しいところなんだよ」

「? それ、どういう意味?」

何やら難しい表情になった公孫賛さん。

すると、桃香の問いに彼女が答えるより前に……別の声が割り込んだ。

「おや、公孫賛殿に用があったのですが……来客中でしたかな? これは失敬」

「「「?」」」

ガチャ、と扉が開く音がして……そっちに全員の視線が行く。

そこには……『失敬』と言いつつも部屋から出て行く様子はない、一人の女性が立っていた。

青い髪に、白い服。露出は多めで、動きやすさ重視、って感じがする。

袖の形が特徴的で……振袖みたいな形状のそれに、蝶の羽根みたいな模様が描かれている。回ったらキレイと言うか、優雅に見えるそうかも。

顔もスタイルも愛紗に負けず劣らず、って感じで……特に薄く笑ってるその顔は、妖艶……って表現が似合うかもしれない。歳は……こちらも愛紗と同じくらいかな?

客人の前だったのにほぼ遠慮0（いや、別にいいけどね？）でずかずか部屋に入ってきた彼女は、公孫賛さんの座ってる隣に立った。
……？ 公孫賛さんの部下さんかな？

同じように気になったらしい愛紗がたずねた。

「公孫賛殿、その方は？」

「ん？ ああ……こいつは私のところにいる客将で……というかおい、趙雲、お前、少しは遠慮しろ。一応、旧友との再会を喜んでいる所だぞ？」

「おや、これは失敬」

言いつつも、趙雲さんの顔に反省は見られない。……何だろう、つかみどころがなさそうな人だ。
………ん？

さてよ……『趙雲』？

その名前、どこかで聞いたような……
いや、三国志の超重要人物だってことはわかるんだけど……何か、他に……最近聞いたような……あつ、そうか！

「あ、趙雲さんって……もしかして、風と稟の仲間の！？」
「む、あの2人をご存知か？」

驚いたように僕の方を見る趙雲さん。ああ、やっぱり！
この人……風と稟が、前に一緒に旅してた、っていう……『趙雲』

さんだ！

あーあー、なるほど……風も稟も『最近わかれた』って言うから、もしかしたらどこかで会うかも……なんて思ってたんだけど、よもやここまで早く会えるとは……。

とりあえず、2人の近況を知らせておく。元とはいえ仲間だったんだし、気になるよね、多分。

「なるほど……2人は元気か。それは重畳」

うんうん、とうなずく趙雲さんだけど……その直後、一気に話を变えて、

「所で、吉井殿でしたかな？ 聞けば、あなたが最近噂の『天の御使い』である」と

「え？ あー、うん、まあ……一応、そうみたいだね」

「？ そうみたい……とは？」

「うん、『天』っていうか、そのー……まあ、こことは違う別の世界から来た、っていうのは合ってるんだけど……そんな大層なものかな、って話」

「ほう……随分と謙虚であられるような」

そう言うてにやり。

趙雲さん……何考えてるのかわかんないなあ……。いや、何度も言うけど、胡散臭いのは承知だけだね。

けど……そういう感じでもないんだよね……。まるで、その先にある何かが理由で、こういう態度をとってるみたい……そんな感じがする。

するとそのタイミングで、

「……あのさ、桃香」

公孫賛さんが口を開いた。

しかも……何やら、雰囲気が真面目だ。……何だろ？

きよとんとして見返す桃香に、公孫賛さんは呼吸を落ち着けると、

「その……だな、率直に言うんだが……この吉井なんだがな？ 何か、『天の御使い』だってことの証明になるようなものとか、あるか？」

「証明？」

疑われてるのか、と一瞬不安になった桃香だったけど、すぐに持ち直す。

こういうケースは想定内だ。そして……対応策も考えてある。

桃香のアイコンタクトを受けて、僕は……すっと席を立つ。

そして、

「それじゃ……サモン試獣召喚……！」

ポンッ！
↑ 僕の召喚獣登場

「「！」」

見慣れてる桃香達以外……公孫贇さんと趙雲さん、それにその周りの兵士の皆さんが驚いてた。
まあ……そりゃそうだよね……いきなりこんな『小っこい僕』が出るんだもん。

すると、

次の瞬間……公孫贇さんの口から、意外な言葉が出た。

「なるほどな……やっぱり『召喚獣』か……」

「「「え!?!」」」

ちょ……今の、どういうこと?

まるで、『召喚獣』を知ってるみたいに聞こえたんだけど……

いや、そんなはずないよね? だって、この世界で『召喚獣』なんて僕が使ったのそんなに回数ないし……というか、僕らの噂は一応広まりつつあるけど、そこまで性格に広がってる様子はなかったはずだし……。

どうして、その正式名称まで知ってるような発言が、公孫贇さんから……?

すると、

「あのさ……桃香、いや吉井」

「はい？」

「えっと、な……お前に、会ってもらいたいやつがいるんだ」

？

僕に……？ 何で？

それを聞こうとした次の瞬間、

「明久君っ！！」

背後から……信じられない声が聞こえた。

「……………え……………？」

それは……もとの世界とは違うこの世界では、決して聞こえるはずのない声。

けど……毎日のように耳にしていた……聞き間違えようもない声。

混乱しながら、僕が振り向くと……そこには、

見慣れた……1人の女の子が立っていた。

何でここに、とか……そういう至極当然の疑問がさっきまであったんだけど……彼女を見た瞬間に吹き飛んだ。

代わりに何か、別の気持ちが出てきたわけじゃない。ただ……何も考えられなくなったんだ。

なにせ、そこにいたのは……

そこで……涙を目にいつぱいためて、まっすぐ僕の方を見てくる、その娘は……

「ひ……姫路……さん……!?!」

「明久……くん……っ……!?!」

いつも僕のそばで笑ってくれていた……かわいくて、頭がよくて、そして料理がちょっと洒落にならない、優しい女の子、

クラスメイトの……姫路瑞希さんだったのだから。

第13話 旧友と温度差と思わぬ再会（後書き）

はい、今回……公孫賛さん&趙雲さん、
そして……バカテス側より、ついに姫路さん合流です。……長かつ
た……。

これでまた、書き分けが大変になった代わりに……話の幅が広がり
そうです。

さて、一体どういう経緯で彼女がここにいるのか……ってあたりは
次回。

ではこのへんで。和尚でした。

第14話 経緯と仮説と装甲版（前書き）

さて、

昨日の夜眠すぎで書けなかったので、昼間の更新です。

姫路さんと再会した明久。

どんな展開が待っているんでしょう……？

第14話、どうぞ。

第14話 経緯と仮説と装甲版

その後は、何も言う暇が無かった。

僕の顔を見た姫路さんが、僕の胸に飛び込んできて、

僕は彼女に会えた感激と、胸の辺りに押し付けられるその……アレの感触と煩悩の爆発に耐えるのに必死で、

で……当然のごとく、その様子に三白眼で眉間の血管をピキらせた愛紗の襲撃をかわすのにまた必死で、

……いや、せつかくの再会、もうちょつと雰囲気ださせてよ？

☆

ともかく、

「まさか、姫路さんと会えるなんて……」

「ぐすっ……よかったです……また、明久君と……会えて……っ！」

ぽろぽろと流れる涙をそのままに、姫路さんは僕の目を見てそう言ってくる。

普段なら『うわ、何この映画のラストシーンみたいなの？』ってな光景だけど……ホントにそういう雰囲気だから、違和感がないん

だよなあ……

しかし、繰り返しになるけど……驚きだ。まさか姫路さんも、この世界に来てたとは。

聞けば、どうやら僕とおなじような経緯をたどったらしい。

あの、ババアの調整ミスで起こった大閃光につつまれて、衝撃に襲われて……気がついたら、荒野。

ただし、姫路さんの場合……ついた地点のすぐ近くで、ちょうど公孫贄さんの部隊が野営張って、すぐに保護してもらえたんだとか。なるほど、それで今まで無事でいられたんだ。

そして……さっきから感じてた、公孫贄さんの妙な視線の理由もこれでわかった。

あれは……僕が天の御使いとして本物かどうか疑ってた視線じゃなかった。姫路さんを事前に保護してたがために、あまりに共通点の多い僕たちの関係性をかんぐってたんだ。

ひょっとして……姫路さんもまた、巷で噂の『天の御使い』じゃないか、って。

召喚獣も、おそらく姫路さんに見せてもらってたんだろう。

「なるほど……その姫路殿は、ご主人様と同郷、というわけですね？」

「ああ、まあ……そうだね。クラスメートだよ」

「くらすめえと、って何なのだ？」

あ、横文字か。

まあ、学問所の同級生だ、と説明しておく。

「しかし驚いたなー……『天の御使い』の噂は私も聞いてたんだが、まさか複数人数いたとは……」

公孫賛さんも不思議がってた。

桃香達も同様だけど……そんな中で、趙雲さんだけは、不思議……ってうより、面白い、って感じのノリノリ(?)な表情でこっちを見てる。あからさまにやけ顔だし。

……なんかこの方、厄介な性格持ってそうな予感……。

「まあ、ともかく……よかったな姫路、仲間に会えてさ」

「はい……っ、よかったです……明久君……っ！」

そう言って、長いすの隣に座って僕の腕に抱きついてくる姫路さん。おお……多分コレ、マイナスイオン出てるな……癒される……。……と思ったら、愛紗たちのほうからそれを打ち消して余りある怒気が飛んできたので、すぐさま現実に取り戻されてしまう。いや、違うんです。これはその……姫路さんが勝手に……僕としてはほら、やましい気持ちはちよっとしかなかったんです！

「いや、あったの？」

「というか、声出てるのだ」

「しまったああっ!？」

すると直後、横からさらに信じがたいセリフで追い討ち(?)が。

「え、えっと……ちよっとなら、いいですよ？ 明久君なら……」

えええっ!？ ちょ……姫路さん、何言ってるの!？

いや、そんな……いくら場の空気を和ませるためだからって、そんなこといったら本気にするよ普通!？ 襲われても文句言えない

って言うか、むしろもうすぐにでも襲い掛かりたくなるって言うか……もう全部かなぐり捨てて欲望に正直になりたく……

ゴゴゴゴゴゴゴ…… ↑ 愛紗

……なっただけど、命あつての物種だよねっ☆

僕としてはこのままでもいいところだけど、ほんとくと愛紗がスタンド使いになりそうなくらいの怒気を部屋に充満させてるので、手遅れになる前に姫路さんを引き離す。

……いや、残念そうな顔しないで？ 僕も残念だから。すごく。でもほら、このままだと愛紗に泣くまで殴られそうだから。

すると、

「さて……まあ、再会を喜ぶのはその辺にして……本題に入っているか？」

と、公孫賛さん。ん？ 『本題』？

「あ、そういえば……さっき白蓮ちゃん、『有意の人材は1人でも多く欲しい』って言ってたよね？ それに関係あるの？」

「ああ……まあな。順々に説明するか」

そして、説明が始まった。

☆

知ってのとおり、最近は世の中の治安がすこぶる悪い。盗賊とか、普通にいる。

まあ……それは僕らも知ってるところだ。というか、僕らはそういう連中をハントして路銀稼ぎしてたわけだし。小規模なものなら、愛紗と鈴々だけで楽勝、少し数が多くなると、町の自警団と協力したり、僕も召喚獣で援護したりして。

まあ、僕らの武勇伝はひとまず置いて、その盗賊連中の動きが……ここ最近、特に活発になってきていた。そして……あの有名な『黄巾党』が、最近発足した、というのである。

シンボルマークとして、全員が頭に黄色い布を巻いてるから『黄巾党』。安直だけど……まあ、いいか。

で……三国志でも有名な事件『黄巾の乱』……ってまあ、そいつらの一斉蜂起が起こったらしいんだけど、コレが結構な規模。

まあ……この大陸の情勢に不満を抱えてる民の数そのまんまなわけだから、当然か。

けど、放っとくわけにもいかないので、朝廷……まあ、中央のお偉方から『なんとかしろコレ』ってお触れが各地の有力者達に回ってるらしい。

その1つが、公孫賛さんのところにも来たとか。

「つまり……白蓮ちゃんも、兵を率いて黄巾党の討伐に乗り出す、ってこと？」

「ああ。まあ、幸い兵はある程度あるんだが……それを統率できる将がな……趙雲は有能だが、さすがに1人で全軍の指揮を執るのは無理がある」

「あー、それで愛紗ちゃんたちの参入を『助かった』って言ったの

か」

納得したように言う桃香。

「ああ、お前達の噂は方々から聞こえてくるからな。人々を導き、いくつもの町を救って回る英雄達……ってよ」

「にやははは……照れるのだ」

そんな噂になってたんだ……。ちょっと恥ずかしいけど、まあ、嬉しいかも。

「それに吉井、お前の噂も聞こえてきてるぞ？」

「え、僕の噂も！？」

これは予想外だ。

ああ、天の御使いなんてとんでもないプラカード掲げてるわけだから、ある程度そういう噂が立つことは覚悟してたけど……まさかこんな短期間でここまで早くとは。

「明久君、すごいですね！」

「はは、ありがとう姫路さん。ちょっと複雑だけどね」

姫路さんも褒めてくれたけど……ところで、一体どんな感じの噂になってるんだろう？

三人の美少女とともに村々を救って回る天の御使いとか……召喚獣を操って人々を救う、騎士道精神あふれる美少年とか……いやいやいや、そんなそんなそんな、はっはっは、それほどでもないですよ僕なんか。

「たしか……『己の姿に似せて召喚した外法の魔物を操る、女顔の

妖術使い』だったかな」

どこでそんな黒魔術的な解釈が入ったんですかね？

いや、魔物で。確かにちっこいし力強いし、そういう印象抱いても多少仕方ないかなとは思うけど……それにしたって……

しかも、百歩譲って魔物うんぬんはいいとしても……『女顔』て！
もうちょっと他に言い方あるでしょ！？ 結構気にしてるんだよ！？

「だ、大丈夫ですよ、明久君」

「うう……姫路さん……？」

「その……ほら、明久君はちゃんと……かわいいですから！ ね？」

いやそれがむしろ！

ま……まあ、それはもう考えないことにして、話を戻そうよ。

さて……ともあれ要するに、その『黄巾の乱』の制圧……そのうち、公孫賛さんが担当する区画の鎮圧のために、僕らも協力して欲しい、というわけだ。

まあ、元からそのつもりで着たんだし、是非もない。

そのあともうちょっと色々話して、いろんな方向から僕のガラスのハートを傷つけられながらも、皆協力して戦いましょう、って方向でまとまって、その日の会合はおわった。

「はい、明久君」

「お、ありがとう、姫路さん」

で、会議が終わって……今僕は、姫路さんと一緒に、公孫賛さんの城の一室にいる。

客間らしいんだけど、使っていないとかで、2人で話すのにはちょっといいだろう、ってんで貸してもらった。

そこで僕らは、さっきは話せなかったものの、色々となつていたことを相互に言い合う。

具体的には、

「……ってことはやっぱり、姫路さんもアレが原因だと思う？」

「はい……教室全体がすごく光って……気がついたら、何もないところになっていたんです」

そう、この世界に来るに当たつてのプロセスだ。

予想通り……姫路さんも、ババアが起こしたあの事故の影響によるものだった。召喚獣のテストに参加してた僕らの巻き添えで……多分、一緒にいただだけの姫路さんも巻き込まれたんだ。

まったく……あのババア、ホントにこれ大問題だぞ？

「うーん……でもまあ、無事でよかったよ」

「そう……ですね。公孫賛さんから聞いた感じだと、色々物騒な世の中みたいです……」

正に、ね。

姫路さんみたいなかわいい女の子が1人で無防備に立ってたら、盗賊連中の格好の標的になっちゃうだろう。そんなシチュエーション、僕でも襲うもん。

あ、嘘嘘、ごめん、だからその……白い目で見ないで？

ところで、その理屈で行くと……

「あのさ……もしかしてだけど……」

「はい……もしかしたら……」

「「他の皆も……!!」」

そう……あの時、教室にいたのは……僕と姫路さんだけじゃない。僕は当初、僕だけが何らかの事故でこの世界に着たもんだと思ってたんだけど……姫路さんがこうしてここにいる、ってことは……あの教室内で起こった事故は、周囲にいた者達にすべからく影響を及ぼした、と見るべきだ。

……つまり……

「雄二たちも……この世界に来てるかもしれない……ってことか……」

あの場に一緒にいた……雄二やムツツリーニ、秀吉や美波も、僕や姫路さんと同じように……この世界に舞い降りているかもしれない、ってことだ。

一緒にいただけの姫路さんがこうしているんだ。可能性は十分に

ある。

それがわかったのは収穫だけど……まずいな……。

タダでさえ治安が最悪なご時勢だし……どこに落ちたかにもよるけど、みんな、無事だろうな……？

くそっ……美波と秀吉……どうにかして見つけて助けないと……

「もうっ！ 明久君、冗談が酷いですよっ！」

顔を赤くした姫路さんに怒られた。ああ、ごめんごめん、冗談冗談。

さすがにシチュエーションがマジ過ぎたからなく……不謹慎だったか、こりゃ失敬。

「わかってるって姫路さん。ちゃんとムツツリーニも助けるさ」

「あの……言いなおしても坂本君の名前は出てこないんですか？」

「……あ」

いっけね、素で忘れてた。

ま、まあ……ちゃんと雄二も助ければいいか。あんまり気が進まないけど。

……何、誰かもう1人忘れてるって？ ははは、いないよそんなの。

でも……今名前を上げた面子なら……なんだかんだでどうにか生き残ってそうだけだな……皆、けっこうたくましいし。

雄二なんかは腕っ節もあるし、秀吉には『演技力』がある。ムツツリーニは隠密行動得意だし……美波は意外と（？）攻撃力も判断力もあるしなあ……。

全員に共通する不安要素と言えば……言語くらいか。この世界、漢文だし……

けどやっぱり、心配なものは心配だ。後でそのへん……公孫賛さん達にも相談しよう。

「でも……よかったです」

「？ 何が？」

すると、僕の隣で……唐突に姫路さんがそんな事を。？ 何だろう？

「……この世界に来て……明久君に会えて……」

「ああ、そんなことか」

いや、そりゃ当然だろう。こんな、わけもわからない場所で、誰も知ってる人がいない……ってそりゃ、つらいとか不安とかいうレベルじゃないもんね。

僕だって、最初のうちはすごく不安だったんだから。

……ただ、あまりに状況が目まぐるしく変わるもんだから、そこまで頭をやる余裕がなかっただけで。

いやホント、色々あった。

この世界に来てまだ1ヶ月も経たないけど……であった人の数は……特に、軍師とか武人とか、そういう特殊な種類のカテゴリの人が結構多い。

しかも、全員女の子ときたまんだ。

愛紗、鈴々、桃香に始まり……風に沙和に真桜、季衣に流琉、風

に稟……あと、ついさっきだけど、公孫賛さんに趙雲さんか。いや、ホント色々あった。

まあそんな中で、知り合いである姫路さんに会えたっていうのは、僕としても、いや僕の方こそ心強いと言うか、ほっとするとか……

……と、返したら、

「あ、いやその……そうじゃなくて……」

「え？」

「その……いや、ほっとした、っていうのは正しいんですけど……私はその、むしろ……」

そのまま、顔を赤くしたかと思うと、

「……………あ、明久君だからこそ、ほっとしたというか……」

うええええっ!？　　ちょ……何言ってるの!？

そ、そんな思わせぶりなセリフ……そんな赤い顔で……え!？
ホントに何!？

いやその……激しく誤解しちゃいそうなんですけど……いや、これはむしろ誤解じゃないのか!？　　そんな、姫路さんが僕に……そういう意味!？

姫路さんはほほを染めてうつむき、時折ちらちらと僕の方を見ては……目があうと慌てて下を向く、を繰り返す。こ、この仕草……

まさかホントに!?

だ、だとしたら、ここでおとなしくしていいのか吉井明久!
その……なんだ? こう……男として、いやむしろ漢としてやるべきことがあるんじゃないのか!?

『何言ってんだよ明久、そんな勘違いに決まってるだろ?』

うおっ!? 今の声は!

ひ……久々に出たな、僕の中の悪魔! くっ……やはりお前は、どこまでも僕の邪魔になるような考えを植えようとして……!

『いいか明久、お前はもてないんだから、そんな甲斐甲斐しい思いを抱いてくれるはずないだろうが! 社交辞令だ、社交辞令!』

うるさい悪魔! ネガティブな考えを吹き込むな!

あと社交辞令って……その……本体の僕がよく理解してない単語を、心の中の存在の分際で使うな!

『その文句は俺に言うなよ、お前の学力が原因だろうが』

あーあー聞こえない……はっ! まてよ!?

この流れは……あの天使も出てくるんじゃない……

『希望を捨てちゃいけないよ明久! 彼女は本気で言ってくれてくれる!』

おお、久々に出てきたと思ったら天使! 嬉しいことを言ってくれる!

『ああ？ 何を世迷言言ってるんだよ天使、そんなはずねえだろうが』
『わかっていないな悪魔、彼女の気持ちはまだわからないのか！』
『じゃあ何か？ お前本気で姫路が『明久でよかった』とでも思ってるっていうのかよ？ 腕っ節が強い坂本でも、同じ女子の島田でも、土屋や木下でもねえ、明久をよお！』

『当然だ！ 明久には、今挙げた者達の誰にもない長所というものがある！』

言ってやれ言ってやれ！ 天使、今こそ僕と僕の悪魔が気づかなかった、彼女の僕への思いのたけを……

『明久なら、何かあった時、何の迷いもなく盾にできるだろう!!』

………ああ、そう………

………そうだよね………言われてみれば、それが一番可能性高いよね………。

『いや………ちょ、天使………いくらなんでもそれは………』

『よかったな明久、お前は姫路に必要とされているぞ！』

『おい、あの………おい！ さすがにその………天使、それでいいのかお前は!?!』

『よっ、使い捨て装甲板！ にくいねこのこの!』

『もうやめてやれ！ 明久のライフは0だ!』

「あの……明久君？　なんかすごく落ち込んでますけど……どうかしたんですか？」

「いや、いいんだ姫路さん……今、自分のシールド機構としての役割を再認識したところだからさ……」

「えっと……また何か勘違いされているような気が……」

くそう、めげないぞっ！

僕は諦めない！　いつか……いつか使い捨て装甲板じゃなくて、再利用可能な装甲板になってやるんだい！

『『そこかよ』』

まあ、そんな感じで……ちょっとグダグダのまま、僕と姫路さんの秘密の（秘密ってわけでもないか）会合は終わった。

色々問題はあったけども……大方針は定まったわけだし、よしとしよう。

残りのFクラスメンバーの搜索と救助……っていう方針で、ね。

「……ところで明久君」

「ん、何、姫路さん？」

ふと見ると、何故か姫路さん……ジト目になってこっちを見返してくる。

……何だろ、さっきまでのベリーハッピーな空気とは違う……何か、僕の中の危機管理本能が警鐘を鳴らすかのような感覚が……？

「……さっき……関羽さん達に、『ご主人様』って呼ばれてましたよね?」

「えっ!?!」

ああっ、それか!

くっ……最近まるでなれちゃって気付かなかったけど……常識的に考えたら、自分のことを『ご主人様』なんて呼ばせてるなんて、イタイ奴以外の何者でもないじゃないか!! しかも、桃香や愛紗みたいなかわいい娘に!

おまけに、鈴々にいたっては『お兄ちゃん』だし……

ホントの兄弟じゃない『お兄ちゃん』……解釈にもよるけど、下手したら通報されるレベルだ。

やばい、姫路さんが僕を見る目に変化が……

いや、下手したら……このままお仕置き直行コースだろうか。ううっ、今、こんな状況じゃ逃げ場ないし……腕一本くらいですめばいいなあ……

そんな感じで、僕が姫路さんの次の句を待っていると……

姫路さんは、なぜかもしもじと体をくねらせながら……恥ずかしそうにして、

……予想外のセリフを口にした。

「えっと、その……私も、その……明久君のこと、『ご主人様』とか呼んだ方がいいんですか……?」

「うえええっ!？」

ちょ、何言ってるの!？

「だ、だって、確かにその……その行為自体、問題はあるかもですけど……それ以上に、その……何だか……劉備さん達、すごく明久君たちと距離が近いみたいな感じで、うらやましくて……その……」

何かぼそぼそ言ってたけど、聞き取る余裕がナッシング。ちょ、何言いつのいきなり!？

鉄拳制裁が飛んでくるならまだわかるけど（いや、『拳』はむしろ美波か）、何でよりによって姫路さんがそっちにあわせようとするの!？

いやまて、これはきつと孔明の罠だ。まだ出てきてないけど。というか出てくるんだろうか？

いやいやいや余計なことを考えるな、きつと何か裏の意図があるはずだ。そもそも姫路さんが僕をご主人様をか呼ぶなんて色々な観点から見えてありえないことであって（言ってる悲しいけど）、これはつまり別の何かを最終目的に見据えた何らかの婉曲表現で、僕には今ここでその意図を汲み取って適切な返答を迅速に返す義務がどーたらこーたら。

すると、

姫路さん……何やら意を決したような表情で、

「じゃあ、た、ためしに……え、えっと……」
「え?。」

「あ、明ひ……じゃなかった……その……ご、ご……『ご主人様』……?」

……わお。

「ごフツ」 ↑ 吐血とともに倒れる僕

「はう……や、やっぱり恥ずかしすぎます……って、あ、明久君! ? どうしたんですか! ?」

「……い、今僕は……真理を見た……」

「何言ってるんですか明久君! ? 明久君! ?」

……お仕置きされなかったのはよかったけど……下手したらそれより威力のある一撃。

ううっ……なんてパワーだろう……。いつも愛紗や桃香に言われなれてるセリフなのに……姫路さんが言うところまでクリティカルになるのか……っ! ?

長らく会ってなかったっていうこともあるだろうけど……真に恐るべきは、その『恥じらい』だろう……。

純粹に呼称として呼んでる桃香や愛紗とは違い、普段気軽に接してる相手だからこそ見られるそのもじもじした仕草で、彼女の『ご主人様』はバイキルトなみのパワーブーストを起こしている。

当然、僕はそのとてつもない破壊力に耐え切れるはずもなく……
脳内回路のオーバーヒートで意識を手放した。

「明久君!？　しっかりしてください明久君!」

「ああ……ときが見える……」

「いや何ですかそれ!？　真理の次は時って……言ってる意味わからないです!」

「長いくちばし……赤い目の淵……白い翼……川の向こう岸の花畑に……僕も、川を渡って今そっちに……」

「『時』じゃなくて『朱鷺』ですかっ!？　いや、その前にその川渡っちゃダメです!　明久君!？　明久君ーっ!？」

……今日の教訓。

姫路さん×上目遣い×恥じらい×『ご主人様』は、死ぬる。

ちなみにこの後、どうにか自力で戻ってきました。

まだ……僕は死ぬわけにはいかないっ!　秀吉と美波を助けるまでは……!

第14話 経緯と仮説と装甲版（後書き）

……お仕置きは無かったけど……再会して暴走気味の姫路さんの『ご主人様』はだいぶ効いたようで……明久君、臨死体験。

……これで、後々お仕置きパートが復活したらどうなるんでしょう……ちよつとペース配分間違ったかな……。

さて、これで、他のFクラスメンバーがいるかも……っていうフラグが立ちました。

この先どうするかな……

ではこの辺で。和尚でした。

第15話 スケベと噂とロリっ子コンビ（前書き）

えー……タイトルで誰が出てくるのか完璧にわかってしまいそうな第15話です。

それと、あとがきで連絡事項があります。
できれば読んでください。

では、どうぞ。

第15話 スケベと噂とロリっ子コンビ

僕らが公孫賛さんのところに転がり込んでから2週間弱。

現在、数日置きのペースで、盗賊退治なんかをこなしつつ暮らしてる状態です。

なんか、狙ったようなタイミングで盗賊被害とか、襲撃とか増えてさ……町を襲ってくる奴らとか撃退したり、拠点潰したりするのがほとんどだけど。

で、今僕らは……結構な規模の襲撃を蹴散らすため、公孫賛さん総指揮の元、軍隊を率いて連中をぶっ潰す戦の最中です。

当然、僕らだけ家でごろごろしてるわけにもいかないので、姫路さんと一緒に、こっちの軍の本陣に一応いるわけだけど……

やっぱり、姫路さんも少しつらそうだった。まあ……実際に目の前で人死にの戦いが繰り広げられてるんだもんね……。

それでも、芯が強い彼女は……がんばって踏みとどまっていた。僕の隣で。

「……つらくなったら、遠慮しないで言ってね？ 無理しても……何もいいことないからさ」

「あ、ありがとうございます……でも、皆さんがんばってらっしゃるのに……私だけ、甘えるわけにはいかないですから……」

まあ……『がんばってる』の意味、違うけど。

愛紗や鈴々、趙雲さんは……前線で部隊を指揮しつつ、直接暴れてもらってる。まあ、何ていうか……皆さん生き生きしてた。特に

……鈴々と趙雲さん。

片や暴れん坊、もう片方は基本的にバトル好き（比較的、だけど）、平常心で戦ってるのは……愛紗くらいか。

で、それが片付くのを……総大将の公孫賛さんに、桃香、僕や姫路さんがここで待ってるわけなんだけど……

「で……伝令っ！ 敵兵の何人かが、防衛線を突破して捨て身で本陣に向かってきますす！」

「「えええっ！？」」「」

たまに……こういう事態が起こる。

「うおおお——っ！」

「総大将の首をとっちまえば俺達の勝ちだあっ！」

「死ねえーっ！」

おおっ、もう来た！

ここは、本陣付きの近衛兵の皆さんと……僕の出番だ！

「桃香、公孫賛さん、下がってて！」

「え？ あ、お、おう……」

「ご、ご主人様……気をつけてね！」

一応剣を抜いて、戦闘態勢をとうとうとしてたお2人だけでも……正直言って戦力にならないからパス。

桃香は普通に戦闘ダメだし……公孫賛さんはそこそこ戦えるらしいけど、明らかに実践慣れしてないというか……剣持ってる手がカタカタ震え気味。なのでパス。

そして姫路さんも……同じ理由でダメ。ここは僕が出ます。

「よし……『試獸^{サモン}召喚』……!!」

「あ……明久君……」

「ああ、うん……大丈夫。姫路さんは下がってて」

僕と姫路さんが共通して使える戦闘手段……『召喚獣』は、学力テストの点数がそのままその強さとして反映される。

当然、学年最下位の僕なんかよりも、実質の学年次席の姫路さんの召喚獣の方が圧倒的に戦闘力は上だ。たぶん、ク○リンとベ○ータくらい違う。

それでも姫路さんを戦闘に参加させないのは……単純に、彼女には無理だからだ。

僕は今まで、愛紗たちの援護とかで盗賊たち相手に召喚獣で戦ってたから、ある程度慣れてるけど……公孫賛さんのところにいた姫路さんに、この世界の『戦い』……すなわち本当の殺し合いに、召喚獣で参戦するだけの度胸は、悪いけどない。

徐々に慣れていく必要があるだろう。……『慣れる』って表現も、正直微妙だけど。

「せりゃああああっ!!」

ばきばきどか!

「「ぐあああああっ!!」」

召喚獣に比べれば、動作も遅くてモーションも大きいから……対人戦は楽だ。

……鉄人みたいに規格外のスピードとパワーをもっていない限りは、

だけど。

前に一度、愛紗や鈴々と召喚獣で模擬戦してみたけど……ろくに戦えなかったからな……。技は早いわ力は強いわで、召喚獣のパワーでも対抗できなかったし。言っちゃ悪いけど、ホントに彼女達は何者なんだろうか？　むしろ人間？

よけ続けるのが精一杯だった。まあ、元からそれは得意だったんだけど。

そうこうしてる間に、

「伝令！　敵軍全面降伏！　我々の勝利です！」

「そうか、よくやった！」

「やったね、白蓮ちゃん！」

と、本陣に知らせが入った。ちょうど、僕も盗賊の皆さんを片付けたところだ。

陣の外からは、公孫賛軍の勝どきが聞こえる。めっちゃ聞こえる。

まあ……後始末は公孫賛さん達に任せて、僕らは……下がるとしますか。

役目を終えた召喚獣を消して（この世界では自分の意思で召喚解除ができるみたいだ）、僕は姫路さんのところへ向かう。一緒に下らないと。

「えっと……姫路さん？」

「あ、明久君……お疲れ様です」

「ああ、うん、別に……じゃあ、僕達も下がってようか」

「そう、ですね……」

……なんか、やっぱりというか……元氣ないなあ……。

無理もないだろう。つい最近まで、平和な日本で暮らしてた女の子が……こんな物騒な世界に来てる、つてのがそもそも無理あるんだもんな……。

けど……こればかりは、僕が何か言っただうにかなるもんでもないし……

「き……気にしないでください……その、えっと……私なら、大丈夫ですから……」

「え、ああ、うん……」

……ちよつと悔しいな。こんな時……彼女に何もしてあげられない、何も言葉をかけられない自分が、さ。

まあ……こんな状況下で、そんな人がいるかどうかとも正直わかんないし……悩んでも不毛なことなのかも知れないけどね。

とりあえず僕らは、前途多難なこれからを思い、こらえ切れなかったため息を吐き出しつつ……愛紗達と合流して公孫賛さんの城へ戻った。

……そこで……予想外の出会いが待ち受けているとも知らないで……

「は？ 客が来てる？」

城に戻った公孫賛さんの下に駆け寄ってきた番兵がもたらした報告に……公孫賛さんはそんな返事を返していた。

どうやら……僕らが戦に出てた間に（僕らほとんど何もしなかったけど）、

客……ああ、そりゃ客の1人や2人くるか。公孫賛さん、太守だもんね。

ちなみに太守っていうのは……なんかこう……その地方を治めるボスみたいな感じのアレだったはず。

おそらく、そのお客さんも公孫賛の公務関係なんだろうな……と、思ってたんだけど、

「はっ、それがその……そちらの、吉井殿と劉備殿に会いたい、と……申しております……」

「「「え！？」」」

僕と桃香に！？ え、何で！？

詳しく聞けば……どうやらこの城に『天の御使い』が滞在してるらしい、っていう噂を聞きつけて、ここまできたらしい。ああ……

そりゃ僕達あてで来るわけだ。

合計3人来てるらしいんだけど……今は、客まで待たせてあるんだとか。

「しかし……よく通したな、そこな兵士」

と、これは趙雲さん。

このセリフには理由がある。

こういう大きな城や屋敷……特に、権力者が住んでるところには、色々と陳述なんかを目的にして色々な人が訪れる。そういう人達の対処をするのも太守の役目であり……はつきり言って面倒くさい＋大変である。

が……その人達全員が面会できるわけではない。ちゃんと身元がはつきりしてて、

面会に乗じて暴行や暗殺やらかそう、っていう不屈きな連中や、単に会ってみたい、ってだけのミーハー連中もいるわけで……。

そういう疑いがかけられた人は、門前払いを食らうのだ。もしくは、面会はするけど代理人ですよ、みたいな対処をされる。

客間に通したってことは、そういう心配がないと受け取られた、ってことだけど……何か、確かな身分証明の手段か何か持ってたのかな？

愛紗も気になったようで、

「確かに……衛兵殿、よければ理由を聞かせてもらえるか？」

「はっ！ 訪問してきた3人のうち、2人は女、1人は男だったのですが……女2人の方は、『水鏡塾』の紹介状を持っておりました！」

「『『水鏡塾』!!?』」

え、何!? 何で皆さんそんな驚いてらっしゃるの?

知識不足で取り残され気味の僕と鈴々の目が点になる（姫路さんも知ってたらしい）。

すると桃香が、

「えっとご主人様、『水鏡塾』っていうのはね? この大陸でも最高峰、って呼ばれてる、すごい私塾のことなの! 卒業した人は皆、中央府で高官になれる、って言われてるくらいに!」

「へ、へえ……桃香や公孫賛さんが通ってたところよりすごいのか? なんかそこも、結構優秀な塾だ、みたいなこと言ってたけど……」
「ずっとずっと上だよ!」

ふーん……そうなんだ? 現代日本で言ったら……東大とかそのへんかな?

まあ、そんなところからの紹介状なら……それは、確かに立派な判断材料か。

それにしても、『水鏡塾』……か……
何だろうこの感じ? 今の説明以外にも、前にどこかで聞いたように……?
うな……?

まあ、それはともかく……残る1人の方は? 確か、男だったんだよね?

「はっ、それが……」

と、その時、

「「きゃあああああ————っ!!」」

「「!」?」」

城の奥から、唐突に……叫び声が響き渡った。何事!?

「な、ななな……なんだあ!」?

「こっちか! 行くぞ鈴々、趙雲殿!」

「応なのだ!」

「うむ!」

反射的に走り出す愛紗たちを、とりあえず僕らも追いかける。気になるし……。

えっと、確かこっちの方向には……あれ、客間があるぞ!? 例のお客さん達を待たせてるっていう話の……

そこから悲鳴が聞こえてくるってことは……どういうことだ!?

困惑しつつも、僕らは全速力で走って、すぐさまその部屋の前に来る。

やはり……音源はここ、『客間』だったようだ。一体、中で何が……

あたりに嫌な緊張感が漂う中、愛紗たちは僕ら非戦闘要員に『下がっててください』と合図すると、一瞬間をおいて……

ボタンッー！

突入し……

……………そして、硬直した。

え、何？ 何があったの？ 部屋の中で一体何が！？

「……………なんだ、この状況は？」

「……危険は、なさそうだが……？」

聞こえてくる、愛紗と趙雲さんのそんな会話。……ホントに何？
恐る恐る、桃香や姫路さんと一緒に、愛紗たちの間から部屋を覗
いてみると……

……………予想外にもほどがある光景が広がっていた。

「何、だと……」

そこには、なんと……

「は、はわわ……この人だが、い、いきなり……その……」
「あ、あわわ……わ、私達、何もしてないんですけど……」

小さな2人の女の子が、手を取り合って涙目でぶるぶると震えていて、

そして……その2人の視線の先で、何と……

「……………ここまで、か……………（ドクドクドクドク）」

「……………何してんの、ムツツリーニ……………？」

「つ……………土屋君っ!？」

「「「え!？」 知り合い!？」」「」」

どこか満足げな表情で床に倒れ付している、僕の悪友の姿があった。

その鼻から、既に大量の鼻血を床に噴出し、大きな水溜りを形作って……………だ。

……………いや、何で？

☆

えー……………待つこと十数分、

「……………復活」

「ほっ、よかった。いつも通りだ」

「……………いい、いつも通り、なんだ……………？」

桃香、顔引きつつてる。

まあ……何はともあれ、回復したようで何よりだ、ムッツリーニ。
……って、何でコイツここにいるんだろ？

「……………明久がここにいると聞いてきた」

「え、僕？」

「（こくっ）……………このあたりで、だんだん広まってきた。大陸に『天の御使い』が舞い降りた、っていう噂」

聞けばムッツリーニ、その噂を聞いて……もしかしたら自分と同じ境遇Ⅱクラスメート達かも知れない、と考えて、はるばるここへきたらしい。

さらに、身体的特長なんかから、いるのが僕と姫路さんだ……っていうのも、どうやらわかってたみたいだ。

で、さらに聞くと……この城に入れたのは、門番の皆さんに、僕と同じ『召喚獣』を使えるところを見せてやったためで、

その後、この部屋に通されたところ、先客の2人の女の子がいて、
……で、脊髄反射で這いつくばってそのスカートの中を覗いたら
……鼻血出しちゃった、と。

「……………まあ、そんなところ」

「いや、自爆じゃん、完全に」

同情の余地ゼロだし。

「……………名誉の負傷と言ってもらおう」

や、その……その変換は無理がある。
まあ……いいか、いつものことだし。

「え、いいの!？」

と、桃香。いいのいいの、気にしてたらキリないから。
今はまず、こうしてまた一人のクラスメートと再会できたことを
喜ぶとしよう。

……そして、だ。問題はこっちか。

「は、はわわ……」
「あ、あわわ……」

『鼻血 ↓ 昏倒 ↓ 復活』

……この一連の出来事にすっかりビビっちゃってる……この2人
の女の子。

人数と『女の子』ってとこから察するに……この2人が、さっき
門番さんが言ってた『水鏡塾の紹介状を持ってきた女の子2人』……
……ってことになるか。

……なんか、その割にはまだ随分小っちゃい子だけど……まだ小
学生か中学生くらいじゃないかな？ 2人とも。

1人は……レモン色の髪をセミショートにしている娘。平素な造
りだけど、布地が上物らしい高級そうな服に身を包み……大きな目の

帽子をかぶっている。

身長はその……僕のみぞおちくらいまでだ。小っちゃい。

震えてて、さっきからほぼ『はわわ……』しか言わないんだけど……大丈夫？

もう1人は……おそらく同じ年くらいで、淡い青色の長髪をツインテールにしている女の子。身長も同じくらいだ、小っちゃい。

服も似たような感じだけど……こっちは特徴として、さらに大きな……なんかこう、魔女とかがかぶってそうな帽子をかぶってる。あれ……三角帽っていうんだっけ？

そして……同じくパニックってるのか、『あわわ……』しか言わない。大丈夫？

この2人……一体、何者なんだろう……？

水鏡塾、ってとこの紹介状持ってきてるくらいだから、その生徒か何かなんだろうけど……幼な……あ、いや、その……若すぎない？

「えっと……それでその……君達も、僕と桃香に会いに来たんだっただけ？」

「は、はひっ！」

あ、噛んだ。

真っ赤になる女の子を『あ、かわいい』と思いつつも……まあ、まず話を聞かないとね。

まだこんなに幼な……いや、小っちゃ……いや……若いのに、随分と長い道のりを旅してきたみたいだし……ちゃんと相手してあげないとかわいそうだ。まじめに。

「……………いい（パシャパシャパシャ）」

既に煩悩に忠実になってるやつがいるけど、コイツは一旦置いてこう。

というか、どこからカメラなんか取り出したんだお前は？

フラッシュがまぶしいらしく、困惑気味の美少女2人に向き直ると、僕より先に桃香が口を開いた。

その後ろには……一歩下がって、いつでも飛び出せる位置で愛紗もついてきてる。不測の事態の可能性も考慮して……ってわけか。大げさに思えるけど。

「えっと……それで、私達に何の用？」

「は、はい……あの、えと……りゅ、劉備元徳様でしゅかつ!？」

噛み噛みだ。ちょっと落ち着こう君たち。

「あはは……まあ、そうだけど……そんなに緊張しなくていいよ。で、どうしたの」

「あわわ……その……私達、実は……」

一瞬言いよんだ後で……思い切って、といった感じで、ツイーン
テールの子が言った。

「りゅ、劉備様と、天の御使い様のもとで、この大陸を平和にするお手伝いがしたくて……来たんです……」

「「「え!？」」」

それって……士官しに来た……ってこと？

しかも、公孫賛さんじゃなく、僕と桃香のところに！？ え、僕らそんなに有名になってたの！？ いつの間に！？

「……………大陸では、もう結構な具合に『天の御使い』の噂が広まってるから、大都市の一部にまで届いていても不思議じゃないかも知れない」

と、ムツツリーニ。マジ！？

うわ……………なんか複雑な心境……………っていやいや待て待て。

隣では愛紗と桃香も、どこか嬉しそうにしてらっしゃるけども……………今はそれよりも……………この2人のことでしょうが。

聞く限り……………僕らのお手伝いがしたくて来た……………って感じだけど

……………

と、愛紗もそれに思い当たったらしく、微妙に繭をよせる。

いや、その……………気持ちは嬉しいんだけど……………正直、早すぎる気が。

主に、年齢的に。

思いつきりまだ子供だし……………常識的に考えて、そんな君達2人を僕らの目的につき合わせるのは、その……………無理があると言うか……………危険と言うか……………

……………あれ、何かこの世界で言うと言説力が希薄だ。

いや、だってほら、前例がいくつも。鈴々とか季衣とか流琉とか。

けどまあ、彼女達は純粹パワーファイターだったし……………この目の前にいる2人は、どう見てもそんな感じじゃないし……………

そもそも、さっきから……………

「お……お願いしましゅ!!」

「が……がんばりましゅ!!」

……戦場でもないのに緊張しすぎ&ビビりすぎだし……。つていうか、よく噛むな、君ら。

や、その……さすがにこれは、その……事情を聞くまでもないと言うか……ここでびしっと言っとかないと人としていろいろとアレというか……

と、とにかく、かわいそうだけど……大人の世界、つてものをわかってもらわないと。高校2年生、17歳の僕だって、こういう場に立ってるのはつらいんだし……こんなちっちゃな子をどうにかするわけにはいかない。

横を見ると、愛紗も同意見らしい。目で『どうぞ』と言ってくる。

うーん……上手く説得できるといいけど……

や、その……さすがに、小学生相手に論破されるようなことは僕でも……ない……とは言いきれないけど!

吉井明久17歳、やるだけやります!　がんばります!

……と、僕が説得のために口を開こうとしたその瞬間、

いろんなものを根本からひっくり返す、超下級の自己申告が……彼女達2人の口から飛び出した。

「あつ、ももも申し遅れました!　わ、私……その……水鏡塾からまいりました、しょ、しょ……諸葛亮孔明といいましゅ!」

「あ、あわわ……お、同じく……ほ……鳳統でし!」

.....

「「.....え!!?」」

主に、文月メンバー3人の目が、一瞬で点になった。

いや、あの、ちょ.....この子ら.....今、何言った!!??

しょ.....『諸葛亮』に、ほ.....『鳳統』!?

このロリ.....ちびっ子2人が!?

三国志のあの、劉備軍最強軍師コンビ!?

「はわわ.....」

「あわわ.....」

.....いや、もう.....驚き方わかんない。

第15話 スケベと噂とロリっ子コンビ（後書き）

ムツツリーニ、諸葛亮、鳳統参戦です。

……この登場はもはやパターンか……

まあ、無事で何よりということ……無事じゃないですけど。

さて、前書きで述べた『連絡』をここで。

まあ、前にもチラツと言ったんですが、ここで本格的に。

実は自分、週末から……大学の実習で、しばらく山奥にこもるということになっているのです……。

しかも、その場所にはパソコンが無いもので……更新が無理なんですよね……。

執筆はまあ、ケータイとかで書くなりなんなり可能なんです……それでも、ちょっと更新はしばらく止まりそうです……。

区切りがいい(?)とここまで来れたのが、せめてもの救いでしょ
うか……

中休みみたいなものが予定上いくつかあるので、もしかしたらその時にまた更新はできるかと思いますが、本格的な再開は、九月上旬になる見通しです……。

なので……しばらく更新は止まるというか、間が空きますが……気長にお待ちいただければと。

どうぞご了承くださいます。

ではこのへんで、和尚でした。

第16話 同盟と邂逅とキーワード（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。

中休みで帰ってきています和尚です。

……実習……35度の中で昼日中の作業……死ねる……。ホント、脱水症状寸前で一回ぶっ倒れそうになりましたからね……。夏ってホント怖いです。

みなさんもお気をつけ下さい。水分補給は喉が渴いてからじゃ遅いです。

さて、今回……新たな合流者が登場します……。

……最近ラッシュですね……。

それはそうと……今回出てくるのは……なんとあの人！

そしてあの人とあの人とあの人！

そしてあの人とあの人とあの人とあの人と……ってもう多過ぎるんで本編で。

では、どうぞ。

第16話 同盟と邂逅とキーワード

○Side 明久

まー、びっくりした。

ずんげーびっくりした。

いや、するなって方が無理だよな？

だって……あの諸葛亮孔明さんと鳳統さんが……まあ、女の子になってるかも、ってのはある程度考えてたけど……まさかこんな口リ……もとい、美少女……もとい、美少女だったんだから。

しかも、三顧の礼とかそんなの全然なしに仲間になったし。ていうか自分達で尋ねてきてくれたし。

ちなみに、諸葛亮ちゃんと鳳統ちゃんの真名は『朱里』と『雛里』だった。呼んでいいってさ。

姫路さん&ムツツリーニと話し合った結果、愛紗と鈴々（関羽と張飛）がこうなんだから、まあこの2人も多少なり、本来の『三国志』での役割……『軍師』としての能力はあるんじゃないか、ってことで、一応手元に置くことでまとまった。

愛紗は『まだこんな小さな子供を……』って納得せずに渋ってたけど……そこは、水鏡塾とのコネクションの存在を強調して説得。上手くいってよかった……。

……で、今、僕らはというと……新たに舞い込んだ遠征のため、軍を率いて城を出発したところだったりする。無論、皆で。

ちなみに、2人が加入してから数日経ってます。

「えっと……愛紗、これからその……」

「はい、黄巾党との……本格的な戦いになりますね」

僕の隣で馬に乗って進んでる愛紗のそんな一言。

切迫した……ってほどじゃないけど、やっぱり今までよりも大きな規模での戦いだからだろう、緊張感が辺りを包んでいる。

……戦の場ではコレがデフォルトなんだろうけど……僕はやっぱりまだ慣れないなあ……なにせ、僕らの世界じゃ、戦なんて試召戦争か、購買部の焼きそばパン争奪戦くらいのもんだっただし……

その点、この世界在住の皆は立派だ。きっちり緊張感を持って……

「（ぐ……）にゃ、お腹空いたのだ……愛紗、お弁当食べよ？」

「こんな時に情けないことを言うな！ 戦の前だぞ！」

……訂正。

この世界在住の皆、の、ほとんど、は立派だ。きっちり緊張感を

……

「（ぐ……）あう……たしかにお腹空いたね……ははは……」

……ま、まあ……桃香は非戦闘要員だし？ 仕方ないと言うか？ と、ともかくまあ……大多数のメンバーは、きちんと緊張感を……

「あー、そうだなー……腹が減ってはなんとやら、と言うし……一旦休憩して飯にするか」

「そうですね。では私も、趙子龍特製メンマ弁当の封を開けるとい
たそう。ふふふ……」

「…………おかずの用意は万全。たくさん作ってある」

「あ、じゃあ私……伝令兵さんに『全軍で休憩取ります』って伝え

てきますね？」

……それでいいのか、君達。

公孫賛さんに趙雲さん、ムッツリーニに姫路さんまで……全くもう、僕がこんなこと言うのもアレかもしれないけど……何このピクニック的なノリ？

ていうか、メンマ弁当って……好きなの、メンマ？

そしてムッツリーニ、君が作ったのか、弁当。マメだな。

まあ、姫路さんにだけは手を出させないように、僕とムッツリーニで事前に全力にて根回しをさせてもらったわけだけど……まさか自分で作ってたとは。

全くもう……まあ、お弁当タイム自体を非難するわけじゃないけど……みんなもうちょっとこう、朱里や雛里を見習ってさあ……

「は、はわわわわわ……つ、つつつつついにわわ、私達のううう初陣で……が、ががぎゃががんばらなくちゃ……」

「あ、あわわわあわわ……う、ううううう上手く指揮できるかな……お、おとおお落ちていて、れ、れりえ冷静に戦況をよく見て……」

……あー……ここまで緊張するのも違うか。

ていうか、噛みすぎでしょ。逆に狙ってやってもそこまでののはなかなかできないんじゃない？……どんだけ緊張してんの？

なんかこう……両極端な軍勢だな……個性的と言うか、扱いづらいと言うか……。

一応僕らは、食事の最中に……これからのプランを話し合っていた。

……そうでもしないと、完全にピクニックになる。

鈴々はすごくいい笑顔でがつついてるし、桃香と公孫賛さんは昔話に花咲かせてるし、ムツツリーニは家族写真よろしくカメラ持って奔走してるし、趙雲さんは……ちょ、ダメだってさすがに酒は！開けるな！ 飲むな！ 何やってんの戦の前にっ！

「心配無用だ吉井殿。私の槍は酔拳といって、飲めば飲むほど、酔えば酔うほど、そして酒とメンマが美味ければ美味しいほど強く……」
「んなわけないでしょ！ 飲みたいだけでしょ君！？ ていうかそもそも酔『拳』て、拳法違うし！ さりげにメンマとか混ぜてるし！」

くっ……特にこの人は規格外だ……まさか僕がツツコミに回るとは……。

さすがはあの超個性的幼女、風の前の仲間……ってところか。……関係あるのかわかんないけど。

……と、そんな僕らの元に、

「伝令です！ 今しがた、官軍の使者であると名乗るものが陣に着いたしました！」

「「「え？」」」

一家団欒の空気の中に……そんな報告が飛び込んできた。

え、官軍の使者って……どこから？

ちゃんとした朝廷からの特使なら、公孫賛さんの城に来るはずだし……ってことは、この近くにいる、官軍所属の別の陣営の軍隊、ってことだね。

このタイミングってことは……黄巾党とのバトルの共同戦線の申し出かな？ 似たようなこと、前にも何度かあったし。

それで……どこの誰なんだろう？

それを伝令兵さんに聞いてみると……返ってきた返事は、なんと、

「はっ！ その使者に聞いたところ、どうやら……曹猛徳殿の使者だとのことですよ！」

……

「「「えっ！？」」「」」

そ、曹猛徳って……そ、曹操！？

え、ちょ……あの超有名キャラ！？ あの、レ○ドクリフのラスボス！？ マジで！？

☆

○Side ???

同時刻

曹操軍・陣営

さて……そろそろ、高孫贊とかいう奴の軍勢のところに、我らの軍の使者がついたところだろうか。

「『公』孫贊だ、姉者」

「？ 何か違ったか？」

妹……秋蘭から何やら指摘が飛んできたが……まあいい、大したことではあるまい。

何かあったら、その都度我が剣で真っ二つにしていけばいいだけの話だ。うむ、単純明快。

「まったく……コレだからうちの獣將軍は……ホント嫌になるわね」

まずこいつから真っ二つにするか。

私の横でため息をついてそんなことをほざく猫耳軍師。まったく……いつものことながら、何なんだその奇怪な頭巾は？ 猫にでもなりたいのか？

「猫じゃないわ、私は華琳様の犬だもの」

「何おうっ！？ 私だって華琳様の忠実な犬だという自覚くらいあるぞ！」

「あなたは獵犬の類でしょ？ 私は愛玩犬だもの、品位が違うのよ品位が」

「だまれこの役立たずが！」

「なんですってこの駄犬！」

こいつ……武はからっきしのくせに、口先だけは斬れるやつだ！
あ、私今上手いこと言ったな。

と、私が自分の秀逸な文才に少しだけ酔いしれていたその時、

「落ち着きなさい春蘭、剣を振るうべきは今ではないわ、余計な体力を使わないの」

「えっ！？ あ、か、華琳様！？」

「い、いつのまにいらっしゃっていたのですか！？」

と、唐突に背後から、愛らしい……じゃなくて、愛すべき……でもなくて。いや、そうだけでも。

……敬愛すべき主の声が響き、私と桂花の意識の9割9分が持っていた。ああ、今日も美しい！

「はあ……破顔してくれるのは嬉しいけど、戦場では慎みなさいね。あなた達は私のものであると同時に、部下。この曹猛徳の軍勢の、大將軍と筆頭軍師なのだから」

「無理で……がんばります！」

「無理で……善処いたします！」

「……聞かなかったことにしてあげるから、精進なさい」

おお、心が広い！ さすがは我が主だ！

いや、私としては別にその、あそこで怒っていただいてお仕置きでもなんでもしていただいても、それはそれでよかったのだが……
いやいや、自重自重。

あ、そういえば、

「ところで華琳様」

「何かしら、今夜の閨の相手は桂花に決めてるからダメよ？」

「いやそこを何とか私に……いや、違いました、そうではありませ
ん」

「あら、そうなの？」

「……その話はまた後で」

聞き逃せん。というか諦め切れん。

「いえその……これから、件の公孫賛軍との会談に赴かれるとのこ
となのですが……その会談、『あの男』も連れて行くのですか？」

「……ええ、連れて行くわ。向こうの反応の確認と、牽制にもなる
かも知れないしね」

むう……あんな男がいなくとも、私1人で華琳様の剣にでも盾に
でも頭脳にでもなってみせるものを……

「頭脳は無理よ、猪」

「貴様……」

くっ……耐えろ夏侯惇、今、華琳様に自重しろと言われたばかり
ではないか。

『春蘭は大人なのだから、桂花のようなお子ちゃまのいうことに
いちいち腹を立てていてはだめよ、うふっ♪』と言われたばかりで
はないか！ そうだ、耐えろ春蘭！ 曹操軍のお姉さん役！

「……なんだか、あの単細胞の脳内で著しい真実の婉曲がなされて
いる気がします、華琳様」

「奇遇ね桂花、私もよ」

？ どういう意味だ？

「まあ……姉者のコレはいつものことです、華琳様」

と、秋蘭。なんだ、いつものことなのか、なら問題あるまい。

「あんたが言う？」

「ほじくり返すな桂花、話がややこしくなる。して華琳様、例の情報ですが」

桂花の戯言は聞き流すとして、

今秋蘭が言っていたのは、たしか……そうだ、ここ最近……公孫賛の領地の中で特に話題になっているという……あの噂のことか。

「ああ、あれか。なんでも……『天の御使い』が現れた、とかいう……」

「その噂よ。そしてその『御使い』が、最近売り出し中の……劉備、とかいう奴に肩入れしている……という噂も、ここ最近流れてきているわね」

「ほお……聞かん名だな」

気にはなるが……まあ、気にしても仕方あるまい。

いざというときは……うん、私が斬る。文句あるか。

そんな私の決意を知ってか知らずか、華琳様はにっこりと妖艶な意味を浮かべ、

「ふふっ……楽しみね……。その『天の御使い』とやら……私達の

陣営の、同じ『天の御使い』と顔を合わせたら、どういうことになるのかしら……？」

そう言って……天幕に戻っていった。

……後を追おうとしたら、秋蘭にとめられた。

「姉者はこれから出陣の準備だろうが」

「うう……秋蘭のいぢわる……」

「ふっ、いいざまね猪。華琳様のお相手は、私が代わりに立派に務めて……」

「お前も準備だ、桂花」

「あう……」

同じく引きずられていく桂花。やーいやーい、ざまーみろー♪

「いくつよ、あんた」

「全く……喧嘩するのは別に構わんが、やることはきっちりやってくれ2人とも。あとで華琳様のみならず、他の者も困ることになる」

呆れ顔の秋蘭に引きずられ……私と桂花は前線の兵達の元へ向かった。

☆

○Side 明久

（劉備軍（公孫賛軍）・陣営）

「何て書いてあるの、桃香？」

「んーっとね……まあ簡単に言っちゃうと、これから相手にする黄巾党の人達、数がすごく多いから、協力して戦わないか、っていうお誘いかな？」

「おお、そりゃありがたいな！」

公孫賛さんが嬉しそうに言う。

当然だろう。何せ共闘を申し出てくれたのは……天下に名高いあの曹操だ。

まだ向こうも始動直後の宮仕えらしく、勢力としてはまだそうは大きくないんだとか。いずれは……三国にその名を轟かせるすごい人になる……っていうのを、僕らは知ってるんだけど。まあ……僕らの歴史で、ね。

とはいえ、そんな人が力を貸してくれると言うのであれば……それはまあ、嬉しいことこの上ない。公孫賛さんの喜びも当然だろう。

「なら、早いとこ進んだ方がよさそうじゃない？　せっかく言ってきてくれてるんだし……待たせたら失礼でしょ？」

「そうですね。それに……事前に挨拶とかもしなきゃだめじゃないでしょうか？」

「……………勢力としては、こっちの方が格下。礼儀は通すべき」

と、文月メンバーの総意。桃香達や公孫賛さん達も、それに賛成してくれた。

そういうわけで……僕らは一路、曹操さんの待ってる陣営のところまで行くことになった。挨拶と……詳細な打ち合わせのために。しかも手紙には……曹操さんが今どこにいるか……ってことを伝

える地図とかも一緒に付属されていた。……なるほど、僕らが誘いに応じること前提……か。

……ちよつと達観した感じの見方をされてるようだけど……まあいいか。元から僕ら、応じる……というか、ご厚意に甘えるつもりだったんだ、気にしても仕方ない。

☆

……で、僕らがその地図に従ってその場所に行つて、曹操さんに会いたいから……つてその旨を向こうの陣営の人に伝えようとする……ここでもすごいことが。

……なんと、ついた瞬間に、向こうの方からこっちの陣に挨拶が来たのだ。

誰がつて？ 曹操さんが。

……なんと、こっちが面会の申し込みをすることまで予想済みだったらしい。……なんと……どこまで自信満々なんだ。応じなかったら無駄足なのに、何も迷いない感じ。

そして、せっかくいらっしまった方を待たせるわけにもいかないので……僕らもさっさと支度をして、会合の場に顔を出す。

で、一応場を整えて……待ち構える形で向こうが来るのを待っている、

「申し上げます！ 曹操軍総大将・曹猛徳殿、ご到着なさいました」

お、いきなりきたか……ホントに早い。

「ああ、わかった。通してくれ。失礼のないようにな」
「はっ！」

公孫賛さんの言葉に、びしっと敬礼して去っていく伝令さん。
ちなみに……あの、おまわりさんなんかがよくする『敬礼』は、
僕がノリで教えた。なんか……それっぽくなりそうだったから。
おかげで、一応上官と賓客として軍に認識されている僕らは、兵
隊の皆さんに出会うたびに『敬礼（びしっ！）』されるので、ちょ
っとした警視総監気分を味わっている。

そんな事を考えていると、
ざっ、と兵士達の人垣が割れて……その向こうから、3人の人影
が現れた。

自然、緊張感が僕らを包む。アウェーである以上、向こうにもそ
ういうのはるはずなわけだけど……そんな事を気にもかけず、って
感じで……その3人はこっちに堂々と歩いてくる。広場の真ん中を
突っ切って。

先頭にいるのは……明るい金髪に、ロールがかったツインテール
の髪が特徴の……小さな、ハンパない美少女。身長で言ったら……
僕の胸に頭がとどくくらいだ。

……が、それはあくまで『身長が』小さいのであって……それ以
外がハンパない。

現代日本の平和な社会で育った僕にさえ、この子が放ってる凄ま
じい『威圧感』と呼べるものの存在がわかる。殺気……じゃない
な、コレは多分、『覇気』だ。

そのせいだろうか、その子が身にまとってる、ドクロをあしらっ
たデザインの鎧が……小さな女の子にはまず似合わないはずのその
鎧が、何の違和感もない。

……この子が曹操そうそう、ってことか……。

……やっぱり女だったか。

いやまあ、別にいいけどね？ そんなこと全然気にならないくらいのインパクトだし。

で、その曹操ちゃんに一步下がる形で、両サイドを固めてついてきてる……護衛らしき女性が2人。

1人は黒い長髪で、凛々しい顔に……赤いチャイナ風の装束を着ている。右肩にドクロデザインの鎧をつけ、背中に……おそらく剣と思われる武器を背負ってる。

この人も、威圧感すごいな……というかこの人は、威圧感とか警戒心を隠そうとしてもしてない感じた。……愛紗と似たような雰囲気、かもしれない。

よく言えば、雄雄しくて剛健、悪く言えば……単に怖い。

もう1人は……さっきのとはうってかわって(?)、落ち着いて物静かな雰囲気、とでもいうのだろうか。水色の、短めの髪で……右目が隠れてる。……見えるのかな？

赤い方の人のと同じようなデザインの服と鎧だけど……こちらは服は青色、ドクロの鎧は左肩についてる。鎧も……左右逆のデザインだ。武器は……弓か。

2人とも、武官だろう。雰囲気からただけだけど……多分、相当強い。

突如現れた美少女×3。それに……おそらく反射的にカメラを構えてしまったのであろうムツツリー二を、それとなく制する。……

いくらなんでも空気を読め。

全くもう……いきなり写真なんかとって、気分を害されたら困るじゃないか。いいかいムツリーニ、もっとそのあたり、常識を考えて……

(こういうときは隠しカメラとか使うべきでしょ?)

(……………了解した)

そう、それでいい。

「あの……いいんですか?」

いいんです、姫路さん。あんなかわいい子のコスプレ写真、写真に収めて焼き増しして手元に残さないことの方が失礼ってもんです。あ、この世界じゃ別に、普通の装束なのか……まあ、どうでもいいけど。僕らから見たら立派にコスプレなわけだし。

「……? そこ、一体何を話してるの?」

「「「いえ、何でも」」」

おっとっと、曹操ちゃんに注意された。失敗失敗。

「……? まあいいわ。始めまして……になるわね、公孫賛・劉備
連合軍」

あら、連合軍ですって。

なんか僕ら、随分と有名になってると言うか……いつのまにか、対等の関係みたいな感じに受け取られてる? いや、僕らまだ客将なのに。

……まあいいか、悪い気はしないし。

見ると、桃香と公孫賛さんも……強調しても別にアレだし、って
感じの顔で、何も言わずに彼女達の話聞いていた。

「私の名は曹操、字は猛徳。この先の区画の太守を任されている者
よ、よろしくね?」

おお、太守だって、すごい。

堂々とした態度に、相変わらずの威圧感……なるほど、正にその
器、って感じがする。

そして、それに続き……護衛らしき2人も続く。まずは赤い方が、

「夏侯惇だ!」
かこうどん

……

……

……え?

あの……終わり?

赤い方の方……夏侯惇さん? 名前だけ言って……後はまた堂々
とその場に立っているのみ。いやあの……ホントに、今の一言で自
己紹介終わりですか?

僕らが唾然としている中、呆れ顔(?)の曹操ちゃんと青い方。

「……春蘭、もう少し何か言うことは?」

「はい? ええと……もう少し言うこと、ですか?」

「……全くもう……秋蘭、先に自己紹介して」

「はっ」

すると、今度は青い方が、

「……失礼した。私は夏侯淵^{かこうえん}、字は妙才。こちらにいらっしゃる、曹猛徳様に使える将であり、此度は護衛を勤めている。以後、見知り置きを」

おお、まともだ。

冷静な口調で淡々と述べる夏侯淵さん。そして、隣にいる夏侯惇さんに目配せ。

あ、なるほど……今のお手本にしてやってみろ、って言ってるんだ。なる。

夏侯惇さんもそれを悟ったらしく……おお、といった感じの顔になり、僕らに向き直る。

そして、若干大仰に『おっほん!』と咳払いをすると、

「えーと、だな……『私は夏侯淵、字は妙才。こちらにいらっしゃる、曹猛徳様に使える将であり、此度は護衛を勤めている。以後、見知り置きを』」

……見事に全部同じに繰り返した。

「「「……………」」」

啞然としている僕らの視線の先では、『やりとげた!』とでも言いたそうなどや顔の夏侯惇さん。
いや……あんだ、マジですか？

「……………春蘭」

「はっ、何ででしょうか華琳様!」

返事はムダに元気な夏侯惇さんに、ため息混じりに曹操ちゃんは、

「……知らなかったのだけれど……あなた、いつから名前が秋蘭と同じになったのかしら？」

「はい？ ははは……何を言っているのですか華琳様？ 私は夏侯惇、字は元嬢、秋蘭は夏侯淵で妙才ではないですか。いくら双子の姉と妹とはいえ、名前まで同じはずがないでしょう？」

今のセリフの方が見事に自己紹介になっとなる。なんか複雑。
で……まだ意味がわかってないらしい夏侯惇さんだけ……

「……まあ、そういうことだ。その……色々とすまん、了承してくれ」

「？ どうした、なぜ謝っている、秋蘭？ 名乗りに何か失敗でもしたのか？」

あんただよ、原因。

ともかく……どうやら自身の口からまともな自己紹介をさせることを諦めたらしい夏侯淵さんがそうしめくくった。ははは……手のかかる妹を持つと大変ですね。

「ちなみに、私が妹、こっちが姉だ」

「「何いっ！！？」」

「おい！？ なぜお前らそんなに驚く！？」

いやそりゃ驚くわ！ 何でお姉さんの方がそんなこう……残念な感じなのっ！？

「……今のは春蘭が悪いわ」

「な、なぜですか華琳様!？」

ダメだこの人、素でわかってない。

……夏侯惇さんのキャラが、全員の心の中で『バカキャラ』に固定されてしまった瞬間だった。ははは……ご愁傷様。

「……………お前が言うか」

「? ムツツリーニ何か言った?」

「……………いや、何も」

…………… まあいいけど。

ともかく……いきなり何か疲れた感じだけど……とりあえず、向こうの自己紹介に答えて、僕らも自己紹介をした。

すると、最後に僕と姫路さん、ムツツリーニの自己紹介が済んだ所で、

「……! そう……あなた達が、ね……」

そんなことを曹操ちゃんがつぶやいた。 ? どういうこと?
すると曹操ちゃん、僕ら3人(文月メンバー)を見渡して、

「さて……協議の前に確認しておきたいのだけど……あなた達3人が『天の御使い』で……あっているかしら?」

「え? あ……はい」

あらら……なんか、予想以上に有名になっちゃってるみたい……?
まあ、その方向性で今まで戦ってきた、っていうのはそうだけど
……なんか複雑。

すると、

「……あなた達に、ひとつ尋ねてみたいことがあるのだけど？」

「「「？」」」

次の瞬間、曹操ちゃんの口から……予想外にもほどがある一言が発せられた。

「『文月学園』『Fクラス』『召喚獣』……これらのキーワードに心当たりは？」

「「「えゝ！！？」」」

ちょ……今なんて！？

「……聞き覚えがあるみたいね、これらの単語に」

「いや、あるも何も……全部僕らの世界の単語なんだけど……なんで知ってるの！？」

「「「えええっ！？」」」

後ろから桃香達が驚く声が聞こえてきた。けど……多分、僕ら3人が一番驚いてる。

いや、だって……3つとも文月学園の固有名詞だし、僕らの『正体』にかかわるワードだし……しかも、『キーワード』って！英語じゃん！横文字じゃん！

この世界じゃまず聞くはずない単語なのに……なんで知ってるんだ！？

「ふふっ、それはね……………」

すると、曹操ちゃんの答えは……

「……私達の陣営にいる『天の御使い』から聞いたのよ」

「「「えええええっ!!?」」」

今度は、僕ら全員の驚きの声。

曹操ちゃんのことにも、『天の御使い』……っていうか、現実世界の人間が!?

っていうか、それって誰……と、僕が聞こうとしたその時、

「ああ、あと……吉井明久？」

「はい？」

名指し!?! 何!?!?

「あなたに関して……その人物から、他にも情報を聞いているのだけれど」

「え?」

「たしか……『メイドのアキちゃん』『全てを知らない男』『見た

目は高校生、中身は小学生』『奇跡の偏差値一桁』……とかだったかしら」

……それが一体誰だか聞こうと思ったけど、やめた。聞くまでもない。

……んなことを吹き込みやがるのは……僕の知る限り1人だ。

と、その時、

「あー、悪い、遅くなった！」

そんな声が陣営の入り口のところから聞こえた。

それに反応し、僕らがそっちを見ると……

「全く……遅いわよ、もう少し礼節というものを考えなさい！」

そんな曹操ちゃんのセリフをBGMに、

………1人の男が僕らのところに走ってくるのが見えた。

たてがみのようにツンツンした赤い髪。

背の高い、がっしりと筋肉のついた体つき、

存在感のある、野太い声、

そして……忘れるはずもない、あのブサイクな顔。

姫路さんとムツツリーニが驚いている中……僕は、はあ、とため

息をついていた。

.....あア、

「やっぱりお前か、雄二」

のんきに走ってくる悪友……坂本雄二を前に、僕は、そんなセリフをつぶやいた。

第16話 同盟と邂逅とキーワード（後書き）

曹操・夏侯惇・夏侯淵のボス級3人が登場です。相変わらずすごい方々……

……そしてついに、ついにあの男……『神童』坂本雄二、合流です。

……まあとりあえず、この先、色々とあることでしょうね……

ええ、そりゃあ……すぐにでも……

しかし、立ちほだかる『実習』の壁……この休み終わったらまた地獄だもんなあ……

……生きて帰れたらまた更新します。待っていただければ。

ではこれで。和尚でした。

第17話 ケンカと再会と首脳会談（前書き）

な、なんとか、中休み中に……もう1話……仕上げました……

どうぞ。

第17話 ケンカと再会と首脳会談

そいつを見つけたまま……僕は一步も動けずにいた。

視線の先にいるのは……野生的な風貌が印象的な、僕の戦友。

間に曹操たちを挟んで……僕は、現実世界で苦楽を共にした悪友と向かい合っている。

もう……二度と会えないんじゃないか、なんて覚悟すらした……あいつと。

どうやら向こうも僕を見つけたようで……そのままの姿勢でただ立っていた。

「雄二……………」

「明久……………」

そして、

ダッ！！

×2

どちらからともなく……互いに走り出す。互いに……向かって。互いの足が動き、広場を突っ切っていく。一步一步、距離は縮まっていく。

「……よかったね、ご主人様……」

「……ふふっ、嬉しそうじゃない、坂本雄二……」

その様子を、桃香達も、曹操たちも……何も言わずに見ていた。
傍から見れば……長らく離れ離れだった親友の再会に見えるのだ
ろう。いきなり走り出した僕達を……止めようともせず、ただそ
の顛末を見守っている。

そして、そんな視線の中……僕らは互いに駆け寄り……

「雄二いいい——っ!!」

「明久ああ——っ!!」

そして……

「くたばれええええっ!!!!」

バキィイツ!!! ズシャアアアアッ!!!

×2

……思いっきり、互いの顔に渾身のストレートパンチを叩き込み
……そして、互いにふっ飛んだ。

「「ええええええええ——っ!!!?!」」

てっきりそのまま抱き合うなり手を取り合うなりするだろうと思
っていた三国志ガールズは……その、常識的に考えてあまりに予想

外すぎる展開に……驚きの声を上げた。

動揺してないのは……姫路さんとムツツリーニくらいだ。

姫路さんは乾いた笑いを浮かべ、ムツツリーニは『やっぱり』って感じの呆れ顔。

まあ……当然か。久しぶりの再会に……クロスパンチだもんね。少しばかり一般常識とはかけ離れてる僕達のコミュニケーション（肉体言語）は、ちよつと刺激が強すぎたかもしれない。

……が、だからって僕らにここで終わる道理はないわけで。

「雄二キサマ！ 何曹操にあることないこと吹き込んでくれてるんだよコラ！！ おかげで大恥かいちゃったじゃないかつ！！」

「うるせえ明久！ 恥なんざ向こうで散々かいてんだからそんなにかいとけバカ！！」

すぐさま起き上がって……取っ組み合いのケンカに発展する僕らのコミュニケーション。

「大体なんでお前の方からも殴りかかって来るんだよ！？ ここは明らかにけなされた側の僕がお前をフルボッコにするパターンだろ！！」

「黙れ明久、理由は二つある！ 1つは……あのエロ本だ！！」

エロ本？ それって一体……ああ、あれか。

そう、あれは確か、僕がこの世界に飛ばされた日の朝だ。

あ、ここから回想。

☆

その日の朝、鉄人が抜き打ちの持ち物検査を始めたんだけど……僕はその日、ある1冊のエロほ……もとい、保健体育の参考書を、運悪く持ってきてしまっていた。

そこで、鉄人の気が他の生徒に向いた一瞬の隙を見計らい、既に検査が終わった雄二にその本をパスし……隠し持っていてもらったのだ。

そのおかげで、あの聖典は見つからず、没収を免れたわけ。うーん、僕って天才。

……ああ、そういえば、アレ雄二に預けっぱなしで返してもらってないまま、この世界に飛んできちゃったっけな……。

☆

はい、回想終わり。

ちなみに、今の間に……割り込んできた愛紗と夏侯惇によって僕らのケンカは止められ、僕と雄二は話し合いの場に引きずり出されました。

「……で、その本がどうして僕を恨む理由になるのさ？」

「……俺はこの世界に飛んできた時、盗賊討伐でこの世界に来てた華琳たちに拾われたんだがな？」

「で？」

「その時に、その本が華琳達に見つかって大恥かいた」

うわぁ……ご愁傷様。

まあ……文字（日本語）が読めなくても、写真とか絵とかでどう
いう本なのかはわかるもんね……

……ってアレ？ その本、その後どうなったの？

「切り刻まれた挙句燃やされた」

「雄二貴様ぁ！ 僕の大事な聖典を！！」

守れよ！ あれネットで探してようやく見つけた極上品なものにっ
！！

「そしてもう1つ」

ん？ もう1つ？

ああ……殴る理由は2つあるって言ってたっけな、あれか。

すると……雄二はとたんにまじめな顔になった。

……コイツがこの顔をするときは、本当に心の底からの本音を言
うときだ。

もしかして……僕は気づかないうちに、何か重要なミスをしてし
まっていたんだろうか？ だとしたら、場合によっては僕の方から
謝るってのも選択肢に入れないと……

「俺は単にお前の幸せがムカつくんだよ」

「やはり貴様は僕の敵か雄二！！」

ああ、雄二の本音ってこれなんだ。

「何だお前、上手いこと関羽だの劉備だのって主人公格キャラと遭遇して、姫路たちとも上手いこと合流して、しかもご主人様とか呼ばれてるだ！？」
「どこのギャルゲだこら！！俺が華琳の所でただけ苦労してたと思ってやがる！？」

「んなこと知るか！！そっちこそ普通に保護してもらって守ってもらってここまで来て……って普通に得じゃないか！僕なんか空飛んだり川に流されたり人魚になったりギャリック砲撃ったりでマジで大変だったんだぞ！！」

「何だその状況！？この世界サイ○人でもいんのか！？」

「いるわけないだろそんなの！？バカじゃないの！？」

「バカが人をバカ呼ばわりすんじゃねえバカ！！」

「何だとコラ！やんのか雄二！」

「あんだとコラ！そっちこそやんのか明久！」

「上等だ！表出る！！」

「もうここ表だぞ！！」

「「いい加減にしなさいっ！！！」」

と、曹操と愛紗の怒号が響き……僕らのケンカは再び中断となった。

くっ……命拾いしたな、雄二。

僕と雄二が納まったのを確認すると、呆れた様子で……今まで傍観していた曹操が口を開いた。

ああ、ちなみに『ちゃん』付けはしないことにした。聞いた感じだと、どうやら僕らと歳そんなに変わんないらしいし。

「さて、話が中断したわね……ともかく、会えて嬉しいわよ、劉備」

「あ、こ、こちらこそ……会えて嬉しいです、曹操さん！」

堂々とした風格の曹操に……対照的、と言ってもいいくらいに緊張してる桃香。うわぁ……セリフ、噛まないといいけど……。

まあ……そのへんは、愛紗とか朱里とかが何とかフォローするだろう。愛紗は普通に堂々としてられるし、朱里も……緊張すると桃香よりヒドいけど、一旦おちつけければ、さすがは諸葛孔明、って感じの冴えと落ち着きを見せてくれるから。

話の内容としては、予想通り……共闘の申し出だった。
要約すると……こんな感じ。

- ・黄巾党も数が増えてきて、しかも組織立って動くようになってきたから、僕らも曹操たちも、普通に戦っても苦戦する。
- ・だったら手を組んで、兵数も行動力も上げた上で戦えばいいんじゃない？
- ・そういうわけだし、一緒にやろうよ？
- ・手柄とかそういうのも、平等に入ってくるし

……うん、わかるよ？ 著しく緊張感に欠けるよね？
でも……僕的にはこれが一番というか……精一杯というか……

「つたく、いつまで経ってもお前は成長しねえな、頭が」

「あははー、そうだね、雄二のセコくてウザくてずるがしこい頭に比べたら、僕の頭脳はまだ未熟かもねー」

……

「「やんのかコラあああ——っ！！？」」

「「だからもうやめなさいっ！！」」

その後、ケンカの再発が著しいので、僕と雄二は縄で縛り上げられて天幕の柱にくくりつけられ、さらに召喚獣によるケンカも防止するため、召喚獣を召喚した姫路さんの監視下……という状態で会議が進みました。うう、何でこんな扱い……

「自業自得ですご主人様。まったく……このような重要な会談の場で……」

「そうだぞ坂本。やるなら終わってからやれ」

「いや、それもどうかと思うのだが……」

「？　そうか？　ぶつかり合うこと自体は別に問題なからう？」

このあたり、愛紗と夏侯惇さんの考え方の違いが出てる気がする。夏侯惇さん、直情的というか……戦闘民族？

「まあ、ケンカは放っておいて……詳細な作戦を話し合いたいわね……。劉備、そちらの将はそこにいる者達で全員かしら？」

「え？　あ、はい……まあ」

「そう……じゃあ、これから作戦を共にするわけだし、主要戦力全員が顔を合わせていたほうがいいわ。これから来る私達のところの將軍達と……顔合わせをしてくれる？」

「あ、はい、もちろんです！　じゃあ、伝令を出して呼んで……」

「ああ、大丈夫よ、もう呼んであるから」

「ああ……そ、そうですか……」

まさかの対応に、桃香も啞然。

うん、わかる。やるのが早い……ってレベルじゃないもんね……。

この子、何もかもお見通しだ。自分の考えたとおりに相手が動くことを前提にして行動してる。『いいよね？ 答えは聞いてない！』ってやつだろうか？

……まあ、ともかく……それで全部上手くいってるんだからすごいよね……。

と、僕がそんなことを考えた……次の瞬間。

「「あ————っ！！！」」

そんな声が……陣営の入り口付近から聞こえた。

あ、このタイミングで来るってことは……曹操が今言ってた、顔合わせに呼んだ、曹操軍の主要メンバーかな？

それにしても、今の声……どこかで聞いたような……って、あれ！？

「兄ちゃん！！」

「兄さま！！」

「え！？ 季衣！？ 流琉！？」

小っちゃな体に……特徴的な髪型と髪色。甲高く、かわいらしい声。

誤解を招きそうな表現だけど……そこその期間を一つ屋根の下で寝泊りしてた2人を、今更見間違うはずもない。季衣と……流琉だ。

何でここに……って聞く前に、2人とも笑顔で走って突っ込んできて僕の胸に飛び込んできてげふうっ!!

ずどどっ!!
↑
流琉と季衣のタックルが僕のみぞおちに
クリーンヒット

「兄ちゃんだ! ホントに兄ちゃんだあっ!」

「こんな所でまた会えるなんて……嬉しいですっ、兄さま!」

僕に抱きつき、奇跡の再会をすごく嬉しそうにしながら、2人は僕のみぞおちに頭を食い込ませる。ぐりぐりと、ねじりこむように。僕はというと、天幕の柱に縛り付けられているため、動けません。手も出せません。

「き……季衣、流琉……う、嬉しいのはわかったから、ちょっとまって……」

こうやって、甘えてきてくれるのは……純粹に嬉しいと思える。僕自身、子供は嫌いじゃないし……流琉も季衣も、純粹で、素直で、かわいいし。

……嬉しい、けどその……い、息が……肺が圧迫されて、息がで
きない……

「「「ああああ————っ！！！！」」」

え、今度は何……ってうそおっ！！？

「「「隊長おお————っ！！！！！」」」

季衣＆流琉に続いて、今度は……

「凧！？ 沙和！？ 真桜！？」

あの山間の村で出会った……3人娘だった。

え、ちよっ……何なの！？ この再会ラッシュ！？ 何、どうしてこんなことになってんの！？ 季衣も流琉も凧も沙和も真桜も、自分達の村を守ってたんじゃ……！！？

っていうか三人娘！ 走ってくるな！ そのままそのペースで走ってきたら季衣と流琉の二の舞になるぐふおおっ！！？

ずどどっ！！ ↑ 沙和・真桜が何の遠慮もなく僕に突っ込んできた音

ちなみに、あの中で一番の常識人である風は、直前で思いとどまって急ブレーキかけてくれたんだけど……はつきり言って残り2人だけで致命的なダメージだったので、助かった、とはいえない状況だ。

そして……深刻なダメージを受けたのは、何も僕だけではなかったりする。

みしみしみし……

「「「え?」」」

どこかから聞こえてくる、何というかこう……壊滅的な音。

その音源は……僕を縛り付けてる、天幕の柱だったりするわけで

……

まあ当然だろう。立て続けに4人分の女の子のタックル（しかも一人ひとりが強い）を食らって……急ごしらえの天幕が耐え切れるか、と問われれば……

……NO、と答えるしかないわけで。
当然………

みしみしみしみし……

「あ、アカン！ 倒れる！」

「なっ……何がですか!？」

「柱や! うわちゃー、耐え切れへんかったっばいわー……まー、
うちら5人分の体当たり食ろてんやから、無理ないわな」

「ちよつと待て! 私ほちゃんと止まったぞ!? 突っ込んでいっ
たのはお前達だろうが!」

「「連帯責任や(なの)」」

「何だそれは!? ムチャクチャを言うな!」

「ちよつ……風ちゃんたち、言ってる場合じゃないって! このま
まだと兄ちゃんが倒れちゃうよ!」

「違うよ季衣! 兄さまじゃなくて柱が倒れるの!」

「え!?! だって兄ちゃんが傾いてるし……」

「兄さま『も』傾いてるの! 兄さま縛られてるんだから……って、
あれ? そういえば兄さま、どうして縛られてるんですか?」

「いや気にしてる場合!?! このままだと普通にどっちも倒れるか
ら! ていうか助けて! ホントに! 下敷きに、生き埋めになる
!!!」

「お、おい、こっちも助けろ! 縄解け!」

あたふたしてる彼女達に向かって、僕も雄二も必死に叫ぶ。
が、時間とは残酷なもので……待ってはくれない。
そんな感じでパニックってるうちに……

みしみしみしみし……ずずうん……

「「ぎゃあああああああ——っ!?!?」」

「「「あああああああ——っ!?! しまったああ——
——っ!?!」」」

「……………何なの？」

ぽつり、と、

曹操がそのカオスな光景を見てつぶやいた言葉を耳に残し……僕と雄二は一蓮托生、天幕の大きな布と木材の柱の下敷きになった。

まあ……その後すぐに季衣たちが助けてくれたから、大事無かったけど。

☆

その後、

あらためて全員で自己紹介を済ませた上で……その場にいた人たちは、曹操軍の主要メンバーのほとんどが僕の関係者、というこの事態を驚いていた。

いや、一番驚いたの、僕だけだね？

聞けば、季衣も流疏も、凧も沙和も真桜も、規模の大きい官軍にどうにか村を守ってもらえることになって……その恩返し、みたいな形で。曹操のところに士官したんだとか。

なるほど……よかったね、村を守れるようになって、しかも就職先まで見つかった。

そのあと、縛り付けるものがなくなったので、僕も雄二も会議に

普通に復帰し、

しかし季衣たちが空気を和ませてくれた……というかケンカとか気にならなくぐらいのカオスな空気に上書きしてくれたおかげで、ケンカの再発などといった事態は起こらず、スムーズに会議を終えることができた。

そして、大まかな作戦と方針まで決めた所で……

「ふふっ……この戦い、実りあるものになるといいわね、劉備」

「はい！ お互い……がんばりましょう、曹操さん！」

がしっ、と、

両方の陣営の代表がしっかりと手を取り合った所で……第一回、劉備・曹操陣営の首脳会談兼軍議は……終わった。

無限の可能性を……その先に残して。

果たして……この邂逅が、この先、両陣営を……

果てはこの大陸を、という方向に導いていくのか……

それは……髪のみぞ知る。

「字違います、隊長」

……うん、ごめん。

☆

余談だが、

「……………あのさあ、趙雲……………」

「何ですか、公孫賛殿？」

「……………一応、こっちの陣営の代表者って……………私だよな？ 桃香達だって、立場的には私の客将なわけだし……………」

「ああ、まあ……………そこは、その場の流れというか……………宿命というか……………ですか」

「……………宿命、なのか……………」

存在と役割を完全に忘れられていた哀れな誰かが、人知れず涙をこらえていたとか、そうでないとか。

第17話 ケンカと再会と首脳会談（後書き）

……いつも通りとしか言いようがない二人でした……

そして、まさかまさかのあの子たちが合流……

凧、沙和、真桜、流琉、季衣……とまあ、今までフラグ立ててきた皆さん、一気に登場（一部除く）。い、いきなり大所帯に……

……早すぎ、とかいうのは無しで。

そして、始まりますのは……いよいよというか、『黄巾の乱』で……その先、さらに何が待っているかというのは……まあ、今後。

実習の合間をぬって書いていたもう1話、ここで投稿しました……ということ、また、間が開くことになりましたが……お待ちください。

ではこれで。和尚でした。

第18話 軍師と遊軍とコンビ争奪戦(前書き)

えー、大変長らくお待たせいたしました。

先日帰ってきて、ようやく片づけが終わったので……更新したいと思います。

……でも、ペースが元に戻るにはまだちょっとかかるかと……。どうぞご容赦のほどを。

ともあれ、第18話です。

クオリティが落ちてないか自分でも心配なんです……どうぞ。

第18話 軍師と遊軍とコンビ争奪戦

えー、まずは結果だけ。

というか、ここまでのあらすじ的な？ 何かを。

再会した雄二との、全く心温まらないふれあいと、さらに再会した流琉たちとの心温まるけど肉体的に非常に厳しいふれあいの後、僕らと曹操軍の連合軍は、共同作業で黄巾の連中を片っ端から駆逐していきました。

「敵前線崩壊！ 指揮系統ももはや機能していないと思われます！」

「再編成の兆しは？」

「ありません！ 撤退する模様です！」

「ふっ、かかったわね……劉備軍に横撃実行の伝令を！ 衝撃で敵の足が止まったところを、劉備軍との連携で包囲する！ 息の根を止めなさい！」

「承知しました！ 者共、かかれえええ——っ！——っ！——っ！」

「「「オオオオオオオオオオオオ————ッ！——ッ！——ッ！」」」

えっと……こんな感じ。

主に曹操が指揮で、それにしたがって僕ら劉備軍が動いて、敵を蹴散らしていく……って感じのスタイルが確立してる。

使われてるみたいない感じがしないこともないけど……2つの理由で気にならない。

1つ、実際に曹操の方が、地位やら軍の規模やらが上であること。

そしてもう1つは……

「逃がすな！ 弱きを虐げ、己が欲望にその刃を染める悪しき者共を逃してはならん！ われらがその身に背負い、その剣に掲げるはこの大陸の明日と心得よ！ 民の明日のため、そして己が信じる正義のため、剣を振るい、雄雄しく戦うのだ！！」

このセリフからもなんとなく感じ取れる……曹操のリーダーシップ。

なんかこう……安心して任せられるっていうか、現時点では……完全に負けてるなあ、っていうのが実感できちゃうから、なんというか……

へこへこ仕えたいわけじゃないけど……信頼はできる、かな。

現に、共同戦線張るようになってから、相互に被害が凄まじく減ってるしね。仮に僕らが、この連合軍と同じだけの兵力を持っていたとしても、こんなに鮮やかな戦運びを見せるのは無理だろうな……。

なるほど、雄二が信頼してその身を寄せてるだけのことはあるみたいだ。

並みの、そうじゃなくても頭の悪い愚か者に拾われてたら……アイツのことだ、姦計めぐらして、地盤ごと乗っ取っててもおかしくない。

けどまあ、僕達だったただ従ってるわけじゃなく、独自のやり方で戦果を上げている。

そこで役立ってくれたのが……趙雲さんと、新たに加入した朱里と雛里だ。

趙雲さんは武術でも愛紗と並ぶ腕前……というだけでなく、とっさの冷静な判断が下せる切れ者でもあった。

そのおかげで、少し独断行動が目立つところもあるんだけど……戦場では八面六臂の大活躍。状況を読んで、やれ西へ、やれ東へと目まぐるしく動いて、戦場を駆け抜ける。

朱里と雛里は、やはりというか……軍師としての優秀さがハンパじゃなかった。

逐一状況を把握して、戦場において臨機応変かつ適切な判断を下し、どんなピンチも逆にチャンスに変えてくれるというすんばらしい働き。

おまけに、戦の前の戦略会議だけでなく、戦後処理や政治的問題なんかも一手に引き受けて解決してくれるときたまんだ。優秀すぎ。ホント助かります。

もちろん、戦の策略を考える上でも、彼女達は重要。

曹操軍にもいるらしい……『荀?』って言ったかな、会ったことないけど……もう1人の軍師との協力で、最高の策を考えて僕らを助けてくれてるのだ。

ともかくまあ、そんな感じで……僕らは連戦連勝、着実にこの『黄巾の乱』を収束に向かわせていっているのです。説明終わり。

……そんな、ある日のこと。

「ご主人様、こちらが先の戦における、収支報告のまとめになります」

「お目通しをお願いします」

ぺこりと一礼しつつ、僕に書面を渡してくれる朱里&雛里。うん、かわいい。

この2人と姫路さんの笑顔を見ると、今日も一日がんばろう、って気持ちになれるよ。

……って言ったら

「あわわ……そ、そんな……もったいないでしゅ……」

言ったそばから顔を赤くするとことかも特にGOOD。

うーん……このままお持ち帰りしたい衝動に駆られるけど、そんなことをしたら僕がこの世からお持ち帰りされそうになるので、頼りない理性を総動員して防ぐ。

そして、恭しい動作で僕に渡されたその書見を……

「はい、公孫賛さん」

「ん、ああ」

そのまま公孫賛さんにスループス。

なぜって、字、読めないもん。まだ。僕も姫路さんもムツツリー二も、この世界の文字は勉強中です。

漢文形式だから、姫路さんはほとんど読めるようになったっぽいけど。

そういうわけで、こういう書類は公孫賛さんに丸パスして、見て

もらうわけ。

……っていうか、どっちみち公孫賛さんは僕らの『雇い主』扱いなんだから、どのみち彼女には回すんだけどね。遅かれ早かれ。

で、僕らは後から……朱里と雛里に直接説明してもらう。文句あるか。

ちなみに今、愛紗、鈴々、趙雲さんは戦後処理で前線にいたので、陣には不在です。

「……あのさ、吉井……」

「？ 何、公孫賛さん？」

「あの……どっち道渡すんだしさ、最初から諸葛亮たちが私にくれればいいんじゃない？」

ああ、それはもったもんだけど……朱里&雛里いわく、

「で、でもその……一応私達は『ご主人様に』仕えてる身ですので……」

「こ、こういうのは、ええと、形式というか……雰囲気というか、を大切にしたいというか……」

「……と、いうわけらしいです」

「あ、そう……ははは、なんか私、形無しだな……」

ちょっとだけしゅんとしつつも、崩れ落ちることなく踏みとどまり、書類に目を通す公孫賛さん。……健気だ。

その……まあ、悪いけど……立ち直りは自力でやってもらうとして……

………ん？

「あれ、誰だろ？」

「「「え？」」」

ふと目がいった陣営入り口の方から……誰かが入ってくるのが見えた。

人数は3人……って、ああ、曹操からの使いか何かみたいだな。
何でわかるのかって？ 雄二と流琉が一緒にいるもん。

けど……3人組の、残りの1人……知らない顔だな……？

セミロングの茶髪に、かわいらしいけど、どこか冷めた感じの表情の顔。

猫耳っぽい形のフードのついた、ゆったりめの服を着てる。身長は……低め、歳は……僕より少し年下、ってとこかな。

その彼女は、特に礼も、にこりともせず……どこかよそよそしい態度のまま、早足で僕の方に近づいてくると、

ぽいつ、ぱさつ、すたすたすた

何かの書類と思しきものをこちらにぽいと投げてよこして、僕の足元に着弾したのと同時にすたこら立ち去つ……ってちょっと待つんだ。

「え？ や、ちょ、えっと……その君？」

「……………（すたすたすた）」

え、シカト!？

いや、この距離だし、明らかに聞こえてたと思うんだけど……その横にいる流琉が気まずそうにしてて、何か話しかけてるし。

見る限り、流琉はちょっとあわてて、僕とその娘を交互に見ながら、どうにか僕の方に向かせようとしてくれてるみたいなんだけど……効果なし。
すると、

「あ、あああああの……ま、待ってくだしい、荀？しゃん！」

と、朱里がかみながら言って……ん、荀？？

あの子が……つまり、曹操軍の軍師？

するとその『荀？』ちゃん、ぴたりと止まって、

「……………はぁ……………何よ？」

あからさまに嫌そうな顔で振り向いた。うわぁ、超ジト目。

いや、その……あの、僕ら何かした？ 嫌がられるようなこととか……

「け、桂花さん、兄さまが困ってますから、そんな、あんまり邪険な態度は……」

「いいのよ流琉、男なんてみんなケダモノなんだから」

……あ、そういう考え方の人なんですか？

どうやらこの荀？ちゃん（桂花、って多分真名だ）、いわゆる『男嫌い』ってやつらしい。

女性には普通に接するけど、男性を露骨に嫌ってて、近づくのも話すのも嫌っていう……純粹培養の女子高のお嬢様みたいな感じの生体だ。

それでいて、この娘の場合……性格もきつそうだな。今の口調か

らして。

「いい流琉、この際だから教えておくわ。男なんてみんなふしだらなケダモノなのよ！ 半径3歩以内に近づいたら妊娠させられちゃうんだからね！」

「いや、その……それはさすがに……」

何ちゅう暴論だそれ。

流琉の目を真正面から見て、『雷様におへソ云々』レベルの迷信（とも最早言えない気がする）を説く荀？ちゃんの目は、どこまでも真剣だった。……こりゃ筋金入りだ。

「そ、それに私は、兄さまになら別に……」

流琉が何か言ってたみたいだけど、小声で聞こえなかった。荀？ちゃんも、聞いてなかったみたいだ。

すると、

「おい、その軍師、荀？……つつったか？」

「？ 何かしら？」

と、今まで空気だった………もとい、何も発言のなかった公孫賛さんが、ここに来て久しぶりに口を開いて存在をアピールした。

「……何か今、ものすごく失礼な説明の類が入ったような気配がしたんだが……」

「ははは、気のせいですよ」

「……まあいいや」

そして、公孫贇さん、再び荀？ちゃんに視線を戻し、

「荀？さんよ、あんたの趣味思考は知ったこっちじゃないが……一応ここにいる明久は、私と同じようにこの同盟軍の代表格だぞ？ 仮にもそれを相手に、何の説明もなく、書類ほっぽってはいサヨナラたあ、ちつとばかりし礼節に欠けるんじゃないか？」

とのこと。ああ……そういわれてみればそうかも。

確かに……いくら客将とはいえ、同盟相手……っていうのは、一応それなりに敬意をもって接するべき対象だ。

そのへんは、曹操もそうしていた。偉そうな口ぶりだったけど……それを背景に僕らを見下してくるような言語表現は一切使っていなかったのだ。

やれやれ、バカにされたり邪険な態度とられるのなんで、向こうの世界じゃ日常茶飯事だったから、思わず気にするのわすれちゃったよ、ははは。

「悲しくなるからやめてくれ吉井……ともかく、どうなんだ、荀？さん？」

すると荀？ちゃん、

「こいつが言ったのよ、『明久にはこれでいい』って」

と、雄二を指さしながらつつけんどんに言い放つ。……って、お前かよ犯人。

雄二だって、荀？ちゃんからすれば『男Ⅱケダモノ』の理論の対称なんだろうけど……その男のいうことでも、自分に都合がいいこ

とであれば聞き入れるらしい。

……もつとも、きっちり半径3歩以上の距離はとってるけど。
いや、まあ……別にいいんだけどね？

「け、桂花さん……す、すいません兄さま、桂花さんもその……悪
気があってこんなこと言ってるわけじゃなくてですね……その、何
というか……」

「流琉、男に気を使う必要なんかないって言ってるでしょ？　とい
うか、隙を見せちゃダメ、絡めとられて手箒めにされるわよ！」

「け、桂花さんっ！　あ、あの……兄さま、その……」

「ああ、いいよ流琉、気にしてないから」

気にしてないし……懸命にフォローに回ってる流琉が健気だ。

それにどっちかっていうと……苟？ちゃんの中の『男』ってもん
がどういう存在なのかの方が気になる。人間にカテゴライズされて
るんだろうか？　絡めとられるって、何に？

「ふんっ！　男なんかが生意気にも、華琳様の配下である流琉の真
名を呼ぶなんて………一生呼べなくしてやろうかしら……？」

「……………（うるうる）」

あーもう、フォローに回ってる流琉のほう泣きそうになってる。
同席してる者として、この論争（というか、一方的な悪口）の責
任を感じちゃってるんだろうか？　責任感強くて健気な子だからな
あ……。

大丈夫大丈夫、僕怒ってないから、泣かなくていいから。ね？

……というか、僕はむしろ、もう1人……隣にいて、しかも苟？
ちゃんにあらぬことを吹き込んだ張本人で、その癖に何のフォロー
もしようもしないコイツに対して、少々腹が立つというか……

にらみつけると、『何だ文句あるか』って感じのにやけ顔を返してくる雄二。

……別にこのくらいいつものことだから流してもいいんだし、雄二も『このくらいでいちいちコイツは怒らんだろ』と思ってるんだろう。

まあ、実際そうだけど……似たような体験、現実世界でもあるし。が、

僕のかわいい妹分である流琉が泣きそうになってる点だけはちょっと看過できない。……軽く粛清しとくか。

「はあ……雄二、あんまり調子に乗ってると……」

「あ、何だ？」

「……姫路さん特製ゴマ団子を名指しで差し入れするよ？」

シュバツ、ずざざざざっ！！ ↑ スライディング土下座

Orz≡

「すまん俺が悪かった許してくれ」

わかればよろしい。

「でもあれだ、僕じゃなく流琉に謝っというてね、気苦労かけてるよ？」

「あ、そうだったのか？ あー……すまなかった流琉、関節の一つくらいなら差し出すから殺さないでくれ」

「えー！？ こ、殺っ……あ、いやその、私は別に……」

謝られたら謝られたで慌ててる流琉。忙しい子だ。

……まあ、涙目でなくなったからよしとしよう。彼女には笑顔とエプロンが似合う。

……それはそうと、

「雄二、本当の用件は何？」

「んあ、気づいてたのか？」

土下座から起き上がりながら、意外そうに雄二が聞き返してくる。当たり前だ。たかが書類届けるごときに、曹操軍の重鎮3人も差し向けるか。僕だってそのくらいはわかる。本当の用件は他にあるはずだ。

……そうになると、荀？ちゃんはその用件を雄二と流琉に丸投げするつもりだった……って仮説が立っちゃうのが困りものだけど。

そして雄二によると、今回の訪問は、荀？ちゃんの顔見せと、もう1つ……

「華琳から伝言でな……統率する将をこっちから派遣するから、劉備軍を分割して遊軍を作ってくれとさ」

「「「え？」」」」

と、僕のみならず……朱里や雛里、公孫賛さん……

……そして、たった今帰ってきた愛紗たちの声も混ざっての聞き返し。

……どうということ？

つまりアレだ。

戦も佳境に入ってきたから……戦略のバリエーションを増やしたいと。

それで、今現在は1つにまとまって動いてる僕ら劉備軍を分割して、遊軍を作って戦って欲しい……と、そういうわけか。

「『劉備軍』？ 『公孫賛軍』じゃねーのか？」

「ん、ああ……そういえばそうだったような……まあ、どっちでもいいでしょ？」

「確かにな」

双方納得につき今の会話は流します。

隅の方でさめざめと泣いてる公孫賛さんがちらっと目に入ったけど、フォローは部下の人達にまかせて僕らはこっちの会議に集中。

確かにまあ、この先は戦いも厳しくなるだろうし……軍の分隊の数は多い方がいい。

それに、分隊の1つや2つを作れるくらいの数なら……公孫賛さんの兵力はある。

それを僕らがしないのは……それを率いるまとめ役……『将』がないからだ。

兵士達の『隊』は、強さと経験、そしてカリスマを持ってるリーダーによって統率されるわけだけど……僕らの軍は、少々それが不足気味なのだ。

率いるリーダーになれそうなのは……現時点で、愛紗、趙雲さん、あと……たった今隅っこから無事帰還した公孫賛さんの3人くらい。

鈴々は、その……判断局面で『突撃』以外の選択肢がないので、ちよつと……。

無理すれば分隊を作れないこともないけど、義勇兵を多分に含み、複数のまとめ役による確実な統率が必要となる僕らの軍でそれは……正直厳しい。

それを見越して、曹操たちは僕らに将を貸してくれる、というのだ。

……で、誰が来るかというと……。

「い、いやその……ここは能力配分的に考えて、私がだな……!」

「夙ちゃんずるいの! 隊長のところには沙和が行きたいの!」

「ウチかて同じや! 隊長と一緒に戦える機会……簡単には譲らへんで!」

……今、決めてます。

夏侯惇、夏侯淵姉妹は……曹操の直属かつ、軍の中核だからだめ。同じ理由で、荀?ちゃんもアウト。

季衣と流疏は……なんと、曹操の親衛隊長なんだって! すごいね、大出世だよ!

「さすが季衣と流疏だね、びっくりしたよ、すごいじゃない!」

「そ、そんな……あ、ありがとうございます……兄さま……」

「えへへ……すごいでしょ、兄ちゃん♪」

ちよつと恥ずかしそうに、顔を赤らめて言う流疏と、自慢気かつ

得意そうに胸（推定A）を張る季衣。うんうん、相変わらずかわいいよ、2人とも。

……その向こうで、曹操が僕と季衣&流琉を、交互に何やら見たような気がしたんだけど……何だったんだろう？

……まあいいか、何も言われなかったし。

……とりあえず、そういうわけで……残りの武将クラスである、凧、沙和、真桜の中から1人選ぶことになったんだけど……決まらないんだコレが。

遊軍、っていう新鮮さを求めてなのか、はたまた久しぶりに会う僕と話でもしたいのか……そこんこはよくわかんないけど、その座を取り合って3人共譲らない。

結果、もう話し合って決めてよ、ってことで、今放置中。

「わ、私が隊長と行くっ！ 譲らんぞ！」

「沙和が行くのー！」

「ウ・チ・や！」

「はあ……あなた、季衣と流琉といい、彼女たちといい……私の軍の子達に随分と人気があるのね？」

と、唐突に曹操が僕に話しかけてきた。

「え？ ああ、まあ……みたいだね。一応、前に会ってるから」

「ただ会ったくらいじゃああはならないと思うけれど……。少し困ってたところなのよ？ どうも凧たち、雄二のことを『隊長』と呼ぶうとしないから……」

「え？ 雄二が隊長って……？」

「ん、言ってなかったか明久？ 俺、一応華琳から、城下町の警備

隊長任されてんだよ。それで、あいつらが部下、って立ち居地」

そうだったのか、なるほど。

あ、そうなるよ……そういうことか。

凧達は、僕に対しての愛称が『隊長』だから……ホントの上司である雄二を『隊長』と呼べない、と。それが曹操、気になってたわけだ。

ちなみにその関係で、雄二は凧たちから『坂本はん』とか『雄さん』とか呼ばれてるらしい。凧だけはなるべく『隊長』を付けて呼ぶように努力してるらしいけど……それでもやはり『坂本隊長』のような、他人行儀の呼称になるんだそうだ。

いやまあ、呼び方まで僕がどうこう言えることじゃないけどね……。

そうこうしているうちに、

「やった——っ！　たいちよー、今回は沙和と一緒になのー！」

お、決まったみたいだ。

僕と一緒に動くのは……沙和か。

「うう……こ、こんなことが……」

「あゝあゝ……ウチのグーが、グーがあ……負けるなんてえ……」

グーで負けたりらしい凧と真桜が、暗い闇を背負ってうなだれていた。露骨だ。

しかもジャンケンかよ、決め方。いや、いいけどさ。

「じゃあ隊長！　これから『黄巾の乱』の決着まで、沙和が隊長の護衛で片腕なの！　ふつつかものだけどよろしくなの！」

「ちょ、待てい！　それはアカンやろ！　一戦終わったら交代や交代！」

「そうだ沙和！　わ、私達だってその……隊長と……あの……」

微妙な言い回しで軽く挨拶する沙和に、聞き捨てならない、といった雰囲気の間＆真桜が抗議する。

が……そこに一石を投じたのは……予想外の人物だったりした。

「ダメよ真桜、風。我慢しなさい」

「「ええっ!？」」

止めたのは、なんと曹操その人でした。あれ、何で？

「はあ……あのね、戦いが一回終わるたびに指揮官が変わったりなんかしたら、兵士達が混乱するでしょう？　今回の戦は、終わるまで吉井明久と沙和にコンビを組ませます、それが一番効率的だからいいわね？」

「は、はい……」

「うう……殺生やわ、大将お……ちゅーか、『こんび』て何……?」

と、しぶしぶ納得する風と、嘆く真桜。

ていうか『大将』て……何ちゅー呼び方しとるんだ君は。

そして僕も気になる。『コンビ』ってそんな横文字、何で曹操が使ってるんだ？　っていうか、そういえばこの前も、『キーワード』

とか使ってたし……

すると横から雄二が、

「ああ……あいつ学習能力ハンパなくてな？ 日常生活で俺が思わず使っちゃった横文字とか、ちっと意味教えただけで普通に使えるようになるんだよ」

「へー……」

順応早いっていうか、なんていうか……まあ、いいけどね。

ちなみに、沙和だけじゃなく趙雲さんも僕と一緒に行動するから、厳密にはコンビ、ってわけでもないんだけど。

ともかくそういうわけで、次回から戦いでは、沙和が僕の片腕として活躍してくれることになっ……

「お、お待ちくださいご主人様！」

……ったと思ったら、もう1人納得させなきゃならない人がいた。

「ご、ご主人様！ 片腕でしたら私がやりますから、そんな、沙和殿となど……」

「いや、愛紗は自分の部隊の指揮があるでしょーが」

愛紗が僕の部隊の床に来て、沙和に関羽隊に任せるとか言わないでよ？ それこそ指揮系統が混乱しちゃうって。

「で、でしたらその、ご主人様がこちらにいらっしゃれば……」

「桃香と公孫賛がもういるでしょ。っていうか、せっかく桃香と僕とで分業してんだから、そっち行っちゃったら沙和が来た意味なくな

るじゃない」

「うう……」

そういうこと。遊軍として劉備軍を二つに分けるにあたり、僕と桃香は一応軍の看板であるということで、二手に分かれての配置となった。

だから、その2つにバランスよく戦力を分散させるってことで……分担としては、桃香の部隊に愛紗と 鈴々、僕の部隊に趙雲さんと、曹操軍から派遣される1人……すなわち沙和、っていうことになってる。愛紗たちは僕よりも桃香との付き合いが長いから、その方が円滑に進むだろうと思ってね。

「まあまあ、愛紗さん。隊長は沙和と趙雲さんがしっかり守るから、安心してなの！」

「そういうことだ。お主は自分の役目に集中してくれ」

「が……がんばろうね、愛紗ちゃん！」

「うう……あいわかった、ご両人、ご主人様を頼む……」

まだ何か言いたそうだったけど……ひとまず納得してくれたらしい愛紗にほっとしたところで、今日の会議は終了。

次からは、曹操軍の本隊、夏侯惇隊、夏侯淵隊、楽進隊、李典隊、そして僕らの吉井隊、劉備隊……という、合計7部隊の競演となるわけだ。こりゃ派手なことになるな……。

さてさて、この先どうなるやら。

第18話 軍師と遊軍とコンビ争奪戦（後書き）

いろんな思惑が入り混じった様子が……いや、ギャグ要素も多目ですけどね。

ともかく、今後どういった展開に転んでいくのか……細かいところ考えるのが大変です。

特に、三羽鳥のはしゃぎっぷりとか……桂花の男嫌いな感じとか……

次回の更新は……まだ忙しいので、少し空くかもです。

無論、時間ができて早く書けたらすぐにでも更新しますが。

ではこのへんで。和尚でした。

第19話 カラシと手紙とハイキック（前書き）

第19話を更新します。

どうぞ。

第19話 カラシと手紙とハイキック

○Side ???

大陸某所・黄巾党本拠地
中心部……総大将天幕

「……まずい、かしらね……そろそろ……」

天幕で、兵士が持ってきてくれた書類に目を通しながら……私はため息をついていた。

弱ったわね……こんな大事になるなんて、思ってたのに……まさかこんな、漢王朝や諸侯まで巻き込んだ大事に……。

「どーしたのよ人和^{れんぼう}? 眉間にしわなんか寄せちゃって（もぐもぐ）」

「地和^{ちーほう}ちゃんの言うとおりだよ人和ちゃん、かわいい顔が台無しだよー?（もぐもぐ）」

「……はあ、よくそんなにのん気でいられるわね……」

と、横から聞こえてくる気の抜けた声に、私は再度のため息をついた。

ちらりと目をやると……そこには、美味しそうにシューマイをほおぼる我が2人の姉。

全くもう……そののん気さと楽天さがうらやましいわね……今の状況わかってるのかしら? ……や、多分わかってないわね……。

「あ、もしかして人和ちゃん、カラシないとシューマイ食べられない派? ごめーん、今もらってくるね!」

「いや、天和姉さん、別に私そんなシューマイにこだわりもってないけど……って、もういないし」

「もー……さっきから何だか知らないけど、やめてよ人和ー。こっちまで気が滅入っちゃうじゃない！ そんなにお腹減ってるんならさっさと食べる食べる！」

「空腹で機嫌が悪いわけじゃないわよ……っていか何でさっきから食事に関する話題しか出てこないの？」

そんなに食事に集中したいのかしら、この人達は……

まあ……姉さん達が興味あることなんて、歌とオシャレと食事くらいだから、当然かしらね……こんな乱世、っていうのもあるかもだけど。

やれやれ……仕方ない、食べながら話そうかな。この大陸で……そして、私達の周りで、一体何が起きているのか……。

「人和ちゃん！ カラシもってきたよー！」

……だから違うって……っていうか、ムダに仕事早い……。

天幕の入り口で、ねりカラシの入っているらしい小瓶を手に、満面の笑顔を浮かべている……私たち三姉妹の長女……張角こと、天和姉さん。

呆れ気味の視線を送りつつ（呆れたいのは私だっというのに……）、マイペースに食卓でシューマイに舌鼓を打ってる、三姉妹の次女……張宝こと、地和姉さん。

そして……三姉妹の三女であり、会計とか事務とかを一手に引き受けてる……今日もため息が止まらない、三女……張梁こと、人和。

それが私。

……つくづく信じられないわね……この3人が、この『黄巾の乱』の原因である、『黄巾党』の頂点に立ってる3人だなんて……。

……なんで、こんなことになってるんだろう、ほんとに……はあ……。

「あーもうまたため息っ！ いい加減にしなさい人和！ ちい怒るよ！」

「ほらほら、カラシもちゃんと持ってきたから……あぁっ、これわさびだぁ！ ごめんね人和ちゃん、今代えてくるね！」

「いや、別にいいから……って、またいないし……」

……ホント……どこで間違っ、こんなことになっちゃったのかしら……？

☆

○Side 明久

曹操・劉備連合軍、陣地

……の周辺の草むら

「……隊長、何してるのー？」

「しーっ……静かにしたまえ沙和くん、奴に気づかれてしまうではないか」

「なんか色々変だけど……まあいいの。それで隊長、何でそんなところそ歩いてるの？」

それはね、あのブサイクの顔に一発ドギツイのをお見舞いしてやるためだよ？

えー、状況がわからない、という方……ご安心を、説明します。

例の『遊軍作戦』を実行に移した僕らは、やはり、というべきなのか……今までよりもさらに速いスピードで黄巾党の連中を蹴散らしています。

さすが、朱里・雛里・荀？ちゃんの3軍師の合同立案……すさまじい効果だ。

無論、僕と沙和、それに趙雲さんで編成された遊撃部隊も大活躍……ってまあ、逃亡兵とか、列からあぶれてる連中を叩くだけなんだけどね。

まあそれでも、機動力が上がるっていうのはもう申し分ない成果だし。

それに、沙和も……本人曰く『隊長と一緒にいつもより力が出てがんばれるのー！』……だそうだ。

……よくわかんないけど、まあ言われて悪い気はしない、かな。

ちなみにそのことを雄二に話したら、

「はあ、お前はまた……いや、なんでもない。ああ、その話姫路にはしない方がいいぞ？」

だそうです。……？　ますますわかんないんだけど……？

ともあれまあ、そんな感じで……僕らの戦いの日々はすこぶる順調です。

……戦いを順調、なんて言うのもおかしい気がするけどね。

しかし、そんな中でも……僕と雄二の戦いは終わらない。

この前も雄二が、風たち三羽鳥に、僕の恥ずかしい話を、しかもあることないこと吹き込んで……おかげでそのあと、沙和と真桜にからかわれて大変だったんだから！

……何を言われたかって？ 僕がバカだとか、スケベだとか、成績が悪いとか、学問に不真面目だとか……全く、言いがかりもいいところだよ。

……反論は受け付けませんよ、念のため。

ともかくそんなだから雄二の奴、その翌日に僕から風達に、霧島さんの存在や雄二と霧島さんの関係、運命の出会いから今に至るまでのエピソードを事細かに配布プリントつきで説明される羽目になるんだ。

別の日には、雄二は僕のラーメンに大量の砂糖を混入させて、コーラかよコレはってくらいに甘いスープのラーメン食べさせやがったし、

また別の日には、僕が雄二の使う顔吹き用タオルにたっぷり粉唐辛子を振りかけておいて、朝から雄二の絶叫が陣営に響き渡ったりしたし、

そのまた別の日には、雄二が僕の天幕に、早朝4時に大量のニワトリを放してたたき起こしやがったし……っていうかそのためだけに早起したのかアイツは。

さらに別の日には、天幕じゃなくて安っぽい宿に宿まった時だけど、僕が雄二の部屋のあらゆる扉と窓のたてつけ最悪にして開かなくしてやったし。

……まあ、そのたびに僕も雄二も、愛紗と曹操にお説教食らってたんだけどね。

しかし、そんなことでくじける僕らではないのでした！ フハハ、参ったか！

「とまあそういうわけで、僕は今、今朝雄二から受けた仕打ちの仕返しに、『曲がり角で出会いがしらのハイキック作戦』を食らわせてやるべく待ち伏せしてるわけだよ」

「ふーん……よくわかんないけど……まあ、隊長が全然懲りてない、ってことはわかったから、よしとしよーかな」

あつそ。一言多いよ？

まあ別にいいけどね、邪魔さえしないでくれれば。というわけで沙和、静かにしててね。

「ちなみに隊長、仕打ちって何されたの？」

「あのバカに椅子に細工されて、座った瞬間椅子が壊れて腰打った」「うわ、地味に痛い……」

そうそう、アレ地味に痛いんだよ。しかも笑われるし。

だから僕は、地味に痛いイタズラのお返しを、普通に痛いハイキックでしてやろうというナイスなアイデアの元、準備運動をしながらここで待っているのです。

「陰湿なあいであ、の間違いだと思うの……」

「何か言った沙和？」

「ううん、何でも」

陰湿だなんて失礼な、直接的で男らしい報復、といってもらおう。

「いや、報復って時点で既にもう色々……」

沙和うるさい。

ちなみに沙和、僕と行動を共にするようになってから、曹操ほどじゃないけど横文字を学びとり始めてます。今の『アイデア』なんかもいい例かな。

さーて………ん？

「……着たな……あ、間違った、来たな……」

「え？ ホント？」

ああ、ホント。曲がり角の向こうから……何やら気配がする。

しかもあれは……こっちに誰かが潜んでいることを警戒している気配だ。ふふふ……さすがは我が戦友、警戒を怠らず、か……。敵ながら天晴れだ。

だが、こちらにも気配を殺している……ふふっ、何も起こらないことに油断して警戒を解いたその時が……貴様の最後だっ！

「た、隊長がムダに気合入ってるの……仕事じゃこんな顔絶対見せないのに……」

沙和うるさい。

そのまま、1分弱が経過し、そして……

「……っかしいな……誰かいた気がしたんだが……気のせいかな」

そんなつぶやきとともに、こちらに向かって無防備にも歩いてくる足音が聞こえた。

よし……殺^とった！

「うなれ僕の黄金の右足っ!!」

曲がり角の向こうから、その顔が見えた瞬間に僕は動く。

振り上げた僕の足は美しい円弧を描き、吸い込まれるように雄二の顔面に……

ばきいっ!!

「ぐぼはああっ!!」

「……………あれ？」

「あれ？ 雄二さんじゃ、ない、の……？」

……と、思ったら、雄二じゃない、全然知らないおっさんの顔面を变形させた。

……ああ、人違いでしたか。

どさっ、と音を立てて倒れこむ、謎のおじさんA。や、やばっ、

全然関係ない人に渾身のハイキックがクリーンヒットしちゃった…。

と、とっさに助け起こそうとその人のそばに近寄ったその時……あることに気づき、助け起こそうとした僕の手が……ぴたっとまとった。

「「!？」」

止まらざるを……えなかった。僕も、沙和も。

いや、だってこの人……頭に……

「黄色い布巻いてる……ってことは……」

「黄巾党の人……なの？」

みたい……だね。

顔を僅かに陥没させてノックダウンしている、推定30代後半のおっさんは、黄色い頭布に黄色い鎧と、いかにもな感じの『黄巾党』の人だった。

あー……ならいいか、謝らなくても。

さて……そうなれば話は変わってくる。黄巾党を捕まえたんだから、連行しないと。

……その前に、

「さて、お財布はどこかなー、っと……」

「あ、隊長さりげなくお財布盗る気なの。いけないんだー！」
「4割でどう？」

「あははは♪ 沙和は何も見えないの♪」

買収完了。

うん、僕は話のわかるいい仲間を持った。真面目な風や愛紗じゃこうはいかないからなあ……って………ん？

と、おっさんの懐をまさぐっていると……僕の手が、妙なものを探り当てた。財布じゃないな、これは……手紙？

「えっと……あ、ダメだ、読めない。沙和、読んでくんない？」

「はいはい。えっとね、これには………あ、あれ？ え、こ、これってもしかして……」

「……？」

黄巾兵が持っていた手紙に目を通した瞬間、沙和が焦りだす。

？ どうしたのかな……何か重要な情報でも書いてあったんだろうか？

「重要も何も、隊長、これ……」

☆

○Side 雄二

少し後、曹操軍陣地

「『太平要術の書』……？」

「そう……私が探している書物の名前よ。噂では……黄巾党の頭目
が、それを持っているとか……」

天幕の中で、優雅に茶を飲みながらそう話す華琳。そしてこの俺・
坂本雄二はその眼前で、遠慮なく胡坐あぐらをかいて茶菓子あぐらをばくつきな

がら、その話に耳を傾けていた。

天幕の中には、俺の他にも……この軍の主要メンバーがずらりとそろっている。

ただし、沙和だけはいない。あいつは明久のところにいるはずだ。

そんな会話の中で『そろそろ話してもいいかもね』という切り出しで、俺達が華琳に聞かされたのが……今の話だ。

三国志にも出てた気がするんだが……聞けば、その『太平要術の書』とやら、平たく言えば……人身掌握の方法が記されている書物らしい。その中には、いかにして集団の頂点に立ち、それをまとめ、その力を最大限に引き出すか……という方法が、さらにはそれに役立つ『妖術』なんかも色々と記されてんだとか。

妖術はさすがに胡散臭いが……そりゃおつかねえ代物だな。

「ああ……華琳様、それは私も聞いたことがございます。なんでも、そのなんとかという書物、どこぞの仙人がどこかのだれかに、これであれをどうこうしろ、といったもたらしたものだそうですね？」

「提示情報が皆無に等しいんだが」

「う、うるさい！ 間違っではないはずだ！」

いや、だから間違ってるも何も、その中身がねーんだっつもの。

まあ……いい、こいつは放つところ。

「まあ、春蘭のこれは今に始まったことじゃないから、置いておきましょう」

「さすが華琳様！ この夏侯惇、身に余る光栄です！」

いや、今1ミリも褒められてねーんだが？

ったくこのバカは、昼間っから疲れる……明久がもう1人いるみ

てーな感覚だ。

季衣（同類）以外の全員がため息をついているこの状況下で、話は続けられる。

「ともかく、そういうわけだから……それらしい書物があつたら、のこらず確保しておいてちょうだい。私の覇道に……この大陸に覇を唱えるために、必要よ」

「「御意っ！」」

「あいよー、ま、見つけたら、な」

「何だ坂本、返事に気合がこもっていないぞ！」

「いや、俺は前線に出ねーんだから、そういうの見つける確率低い
だろ。その分お前ががんばれ、期待してるぞ、よっ、曹操軍最強、
華琳の右腕」

「お……おおう、わかっているではないか、ははは……」

「「「……………」」」

……はあ、相変わらず、単純さと扱いやすさは明久以上だな……。

さしずめ華琳の狙いは、そいつを使って自分の勢力を拡大させる
……ってところだろう。

こいつは今でこそ、漢王朝の配下としての位に甘んじちゃいるが
……そこでいつまでも収まってるようなやつじゃねえ。今言ってた
通り、いつか……自分の国『魏』を立ち上げて、天下に名乗りを上
げるであろう器だ……。

それだけの力も、そして誇り高さも、こいつは持ってる。……ま
あ、当然っちゃ当然か、あの曹操なんだし……。

……そこで、今まで何度も頭をよぎった疑問点が再び浮上する。

さて……劉備やら関羽が、しかも女でいた床から見ても、どうや

らこの世界、やっぱりパラレルワールドの三国志世界で間違いなさそうだが……

……となると、だ。

本来の『三国志』のストーリー通り……こいつは呉と蜀を相手取って、ラスボス的な立ち位置につくことになるのか……？

そしてその場合……俺は明久たちと『敵』として戦うことになるのか……？

いや、それは後で考えよう……今はともかく、その『太平要術の書』についてだ。

はたして、目の前にいるこの少女の手に、そんなんでもねえモンを渡らせちまってもいいもんかどうか……。

こいつの人脈や手腕、そしてカリスマ性は、今でさえ異常だ。今のまま覇道を歩んだとしても、十分に天下に通用するだけの力を手に入れられるはず。

そこにそんな、史実的にお墨付きのバイブルが渡っちまったら……こいつ、強くなりすぎるんじゃないかねーか？

某ハリウッド映画で見たような悪役になるとは思えねーが……勢力的に手の付けられない強さになることは確かだろうな……。ないと思うが、そこで道を踏み外されたりなんかしたらかなわねーし……どうしたもんか……。

理想的なのは、状況を見つつ、必要ならそれを参考に……願わくば、大陸全体でそのノウハウを共有……っていうのがいいんだろう。力の集中は争いの元だ。

が、勝つためには時として非情になるべき、っていうのをわかってる華琳のことだ、そういう手段はとっちゃくれねー。

となると……どうにかこいつに気づかれないようにそれを確保して、どこかに隠しておく……最悪、焼き捨ててでも処分する、ってのが理想的だが……

華琳のところに置いてもらってる身の俺が、そんなこと、できるのか……？

と、その時、

「申し上げます皆様！ 劉備軍、吉井明久様、ならびに当軍派遣・于禁様より、緊急の伝令であります！ 至急お目通りを願いたいとのこと！」

「「「！？」」「」」

と、天幕の入り口に現れた伝令兵が……そんなことを口にした。……なんだと？ 明久と沙和から伝令？ しかも……緊急？ 救援要請とか、賊の襲来とかじゃねーみてーだが……何かあったのか？

☆

○Side 明久

十数分後、

曹操・劉備連合軍、会談の席

今、曹操や雄二、他、この陣営の主要メンバーの皆さんが、僕と沙和が持ち帰った『手紙』に目を通して……露骨に驚いてる。うん

うん、いい光景だ。

まあ、無理もないかな……何せ、その手紙……。

「これって……黄巾党の作戦指令書？」

「つーことは、明久が仕留めたその兵士は……伝令だったのか！」

そういうこと。沙和と僕が見つけたその手紙には……僕らみたいなものにとっては井戸から手が出るほど欲しいであろう……数々の情報的事細かに記されていたのである。

「『喉から』、な。井戸じゃなくて」

「……………それだと、軽くホラー」

「こ、怖い格言になっちゃいますね……」

「……………」

総出で突っ込んでくれる文月メンバー。

……まあ、今は流して。

兵士の規模や、武器・糧食の在庫状況、食料の運搬ルートに、次に行う襲撃作戦の時期と場所、官軍に対しての対処指令……

そして……張角・張宝・張梁がいるであろう……本拠地の場所なんかも。

事の次第（財布を抜き取ったことを除く）を詳しく報告したところ、僕らへの評価は当然……

「これは……吉井明久、沙和、とてつもない大手柄ね」

「ご主人様、すごーい！！」

「「イエーイ!!」」

ばしいん!!

↑

僕と沙和、ハイタッチ

あ、ちよつと手首痛い。さすが沙和、武将。けど、ここは男の意地で我慢だ。

向こう側で、凧と真桜が『いいなあ……』って感じの視線をぶつけてきた。へへーん、いいだろ、大手柄だぞ!

「いや、『いいなあ……』の意味が違うんですが……」

「へ、凧何か言った?」

「い、いえその、何でも………沙和だけ、隊長とあんな、仲よさそうに……(ぼそっ)」

? まあ、いいか。

あと、姫路さんと愛紗とかも……似た感じの視線。

しかも、姫路さんの視線に、微妙に怖い成分が……なんで!?

さて、そうなる……だ

「よし……桂花!」

「はっ、ここに!」

「うむ、これから緊急の軍議よ。吉井明久と沙和が持ち帰った、この手紙から読み取れる情報を考慮のうえ、この戦いを終わらせるためのプラン……もとい、戦略を組み立てるわ。最早この『黄巾の乱』……我々は勝ったも同然よ!」

「御意!」

そういうこと……この情報が手に入ったことは、向こうへの連絡を潰したことも含めて、絶対的なアドバンテージだ。これでこの戦

い……すさまじく有利になった。

あとは……戦術と戦略で、敵を倒すのみ！ よおし……いけるぞ！

……その前に、

「はい沙和、取り分」

「わーい♪」

天幕の裏で、こっそり利益譲渡（4割）。約束は守らなくちゃね。
さて……何かしらの指令があるまで、僕は休んでますか。

☆

○Side 人和

その数日後、

黄巾党本陣・総大将天幕

天幕の中では……私の姉の、呆れなくなるようなあたふた声が響いていた。

「ちょ……ちよっとお！？ どういうことなの！？ か、官軍が攻めてきてるって！？」

「どうもこうも、言葉通りの意味よ。官軍の人達が、私達を討ち取るために」

「えええ！？ 何で何でえ！？ 私達何も悪いことしてないじゃない！ ！ ！ ただ3人で楽しく歌ってただけでしょ！？」

「あのね……」

今の会話からもわかるように……姉さん達は知らない、というか……理解していない。

私達3姉妹が、この『黄巾党』という組織の頭目として認識され……そして、朝廷から討伐命令が下っていることを。

すなわち……つかまれば命はないほどの重罪人だ、ということ。

……ちなみに姉さん達は、黄巾党を私達の『後援会』だと勘違いしていたりする。……こんな物騒な後援会、あるはずないでしょうが……

ともかく、どこから情報が漏れたのかわからないけど、官軍は私達の本陣……つまりここ……の場所を正確につかんでいて、戦力を結集させて攻めてきている。報告された進軍速度から考えると……おそろくけど、もう2刻もしないうちに、私達の軍の戦前とぶつかると思う。

……変なの。『私達の軍』だなんて……そんなもの、作った覚えもないのにね。

ただ楽しく歌を歌っていて……求心のために、ちよつとだけ工夫をして……そしたら、いつの間にかこんなことになっていた。……どこで間違っちゃったのかな……？

……考えてても、仕方ないか……このままここにいても、できることはない……

……だったら……

「……姉さんたち、落ち着いて聞いて欲しいの」

「ふえ？　どうしたの、人和ちゃん？」

「……このままここにいても、正直できることはないわ。どのみち、そろそろ潮時かな、と思ってたところだし……」

「……どういう……こと……?」

不安そうに見返してくる姉2人に……私は、きっぱりと告げた。

ちよつと残酷なようだけど……ここで決断しないと、私達に明日はないから……。

「隙を見て、逃げよう」

第19話 カラシと手紙とハイキック（後書き）

……なんか、すっごい大手柄の中に、すっごい俗物的な何かが見え隠れ……

そして、今回は沙和のターンでした。おおはしゃぎというか、憧れの隊長と一緒に楽しそうにしているとところが書いてたらいいな、思ってる所存です。

そして……ついに、黄巾党の3人娘……あの3人が登場しました。

……登場して早々に、追い詰められてますけど……。

さて、次回もなるべく早く更新したいです。

ではこれで。和尚でした。

第20話 本と説教とボケ合戦（前書き）

第20話です。

今回もバカ全回。そして3姉妹のターン！？

どうぞ。

第20話 本と説教とボケ合戦

劉備・曹操連合軍VS黄巾党 戦場

「敵前線崩壊！ 防衛線突破しました！」

「よしっ！ 皆の者、最後の一押しだ！ この大陸の和を乱した『黄巾の乱』、今こそ終焉の時！ 我らの手でこの騒乱に終止符を打つのだ！ 夏侯惇隊、突撃——っ！！」

「「「おおお——っ！！」」」

「夏侯惇隊に遅れをとるな！ 関羽隊もたたみかけろお——っ！！」

「「「おおお——っ！！」」」

前線にいるってのに、春蘭と関羽の声がここまで聞こえてきた。……どんな大声だ。

今の状況からもわかる通り、俺達は今……明久と沙和がゲットした手紙の情報を頼りに発見した黄巾党の本陣に、総攻撃をかけてる。実質の最終決戦だな。

それも、思いのほか相手方の混乱が大きかったらしく、抵抗らしい傾向もなく、全部撥ね退け、蹴散らせてる。ほぼワンサイドゲームだ。……まあ、戦を『ゲーム』なんて呼称するのは若干不謹慎な気がしないでもないが……

それより……この戦の本質、そこじゃねーんだよね……

華琳の望みは2つだ。

1つは、天下にその名を轟かせるための圧倒的な勝利。俺ら強いんだぞー、すごいんだぞー、ってな感じで。これは、もう達成され

たも同然だ。明久たちの手紙の情報を元に、桂花やら諸葛亮やら鳳統やらが、いくつも良策を考えてくれたからな。

……で、もう1つ……こっちがめんどくせえ。

「華琳様、第一陣、敵本陣に突入を開始しました」

「ご苦労様、秋蘭。して……例の本は？」

「は……今のところ、見つかっていない模様です」

「そう……引き続き、平行して搜索を続けて頂戴」

「御意のままに」

……と、華琳と秋蘭の会話。……まだ見つかってねーらしいな、
『太平要術の書』。

一番いいのは、燃えちまったとかで、誰の手にもわたらねーこと
なんだろうな。一市民が手にしただけでこんだけの騒乱を引き起
す書物なんざ……百害あって一利無しだ。

手にしたのが華琳だとしても……いい結果は招かねえだろう。

しかし、ほんとに燃やされでもしてねー限り……望み薄だな……。
陣営に残ってれば、華琳が見つけちゃうだろうし……無闇やたらと
人の手に渡るってのも……好ましくねえ。ったく、どうしたもんか
……。

たとえば、誰かが偶然拾って、そしてそれを誰にも気づかれるこ
となく……できればその本の正体にすら気づくことなく、隠すか処
分するか……ってのが理想的なルートではあるが……そんなこと、
起こるわけねーしな……。

同時刻、戦場から遠く離れた、ある森林地帯

「はぁ……はぁ……ここまでくれば……」

「だ、大丈夫……よね……」

「……だと、いいけどね……」

……どうにか、逃げ切ったみたい……。

私達3人とも、近くに会った木にもたれかかる。……無理もないわよね……むしろ、私たちみたいな華奢な女の子が、これだけの距離を駆け足でよく走ってこれた、って感心してもいいくらいかも……。

官軍の一斉攻撃を受けた黄巾軍は、もうもたない。私達は……ほとんど着の身着のまま、逃げ出した。持ってきたものといえば、少しの食料とお金、そして……

「あれ、地和ちゃん、それ持ってきたんだ？」

「え、ああ、まあ……この本には、色々とお世話になったし」

「……その本のおかげで、色々とおかしくなっちゃったんだけどね」

そんな複雑な思いとともに、私はため息をつき、ちい姉さんの手にある本を見つめた。

それは、私達3人の運命を、よくも悪くも変えた……禁断の書物……

『男の心をつかめ！ 色物衣装大全集！』

……いやいやいやいや、違う。コレじゃない。

まあ、確かに舞台衣装とかでお世話になったけども、そこまでじや……っていうか、ちい姉さんがお世話になったと思ってる書物ってコレなの？

と、思ったら……私が考えてたその本は、天和姉さんが持ってた。

「ああ、そういえば……この本にもけっこうお世話になってたっけ」「そうそう！ 何でかわかんないけど、この本拾ってから急に人気が出るようになったのよねー……」

いや、けっこうどころじゃないから。今まで色々あったの、全部そのせいだから。

「「ええっ!？」」

驚かないでよそこで……

まあ、確かにコレを読んで実行してたのは、ほとんど私だけ……

……この『太平要術の書』を……ね。

☆

きっかけは、本当に偶然だった。

歌が好きで、それを聞いてもらって、喜んでくれるのが嬉しい……それだけの、ただのしがない旅芸人だった私達。まあ、別にそれでもよかったんだけど。楽しかったし。

だけど……あの本を拾ってから、全てが変わった。

その中には、私達が思いもしなかった、人身掌握の方法が事細かに記されていて……しかも、輪をかけて恐ろしかったのは……私達にも実行可能な方法であったこと。

試してみたい……そんな風に思い、本に書かれていることを、1つ1つ試していったからというものの……私達の生活は一変した。

「そうそう！ あれから毎日おいしいシューマイ食べれるようになったんだよね！」

「オシャレな服も買い放題だったしね！」

いや、そうじゃなくて……ていうか、姉さん達、人の回想に平然と入ってこないで。

……とにかく、その本を手にしてから、色々と変わった。

私達の歌は、各地で膨大な数の信者を集め……私達を神格視して崇めたてまつるような団体までできた。瞬く間に勢力を伸ばし、大陸全体に広まった。

……言わずもがな、今の『黄巾党』。

慕ってくれるのは嬉しかったし、労働力にもなるから、悪いと思いつつ利用させてもらってたけど……まさか……ここまでになるなんて思ってたかった。

気づけば、暴徒化した彼らは、大陸全土にその名を轟かせる賊集団……そして、便乗して盗賊行為を働く者まで出てくる始末……。

そして、そこにちい姉さんの『天下取るぞー！』という発言が、トドメをさした。

「いや、あ、あれはその……『歌で天下一になる!』って意味で……」

「思いつきり曲解されてたねえ……『天下人になる!』って意味に……」

「まあ、あんな殺気立ってる集団にそんなこと言えば……ね……」

その結果が、今のコレ。ふう……笑えないわね……。

天下を揺るがす『黄巾の乱』が起こって……私達はその首謀者として、お尋ね者扱い……捕まれば、朝廷からの命令で死刑だし……はあ……。

「でもさ、こうして生き残れたんだし……また、3人で1からやり直せばいいよ!」

と、そんな時でも、天和姉さんは笑顔で、前向き、か……。ある意味うらやましい。

……けどまあ、そうかもね……。

いいかもしれない。こんな本に頼ったばかりに、好奇心で功を急いだばかりにこんなことになったんだから……また、1から出直してみても。

もともと旅芸人の私達だもん。元に戻っただけ、って考えればいいわけだし。

横を見れば……ちい姉さんも、そう思って納得してるみたい。

……いいかな、もう一回、がんばってみるのも、さ。

「じゃ、また3人でがんばろ!」

「そうそう! ちい達3人が力を合わせれば、できないことなんてないんだってば! また楽しい生活に戻るわよ!」

「……お金、ないけどね」

「「あ」」

あ、しまった、出鼻くじいちゃったみたい。でも、ホントのことだし……。

見ると、目に見えてしょぼくれている姉2人。……さっきの決意どこいったの？

「あうう……毎日のシューマイが……」

「オシヤレが……飾り物が……」

しかも理由が俗物。

まあ、仕方ないでしょ。旅芸人なんて、もともとそんなもの。昔の私達だって、旅のさなかには質素節約してたんだし、ね。

すると、しぶしぶ納得しつつも、どうにも何か抑えきれないものがあるらしいちい姉さんが……唐突に天和姉さんの手から、『本』を奪いとった。

そして、

「ううう……！ 服が……おしやれが……こんな、こんな本のせいで——っ！！」

ぶん！ びゅおん！！

「「あ」」

涙目のまま、木々の向こうに……思いつきり投げた。

全くもう……気持ちにはわからないでもないけど、物に当たっても不毛……

ぐすっ

「痛ああっ!？」

「「…………え?」」

林の向こうから、人の声が…………え?　もしかして…………誰かに当たっちゃった!？」

「た、大変!　謝りに行かなくちゃ!」
「え!?!　ちょ、て、天和姉さん!？」

と、慌てて木立の向こうに駆け出す天和姉さん…………ってちょっと待って!

いや、道徳的には正しい行いだけど…………うかつに出て行かないで!　私達お尋ね者なんだから!　顔が割れてるかどうかはわかんないけど、捕まったら殺されるから!

と、どうしようもなく天然名姉さんを、ちい姉さんと止めようとした…………その時、

がささっ!!　↑　茂みの向こうから兵士がいっぱい出てきた

じゃきん!!　↑　全員で槍を構える。標的は私達。

「「動くなっ!!」」
「「…………え?」」

……で、今、僕の目の前で土下座させてる状況。

あ、ちなみに、させたのは沙和です。僕じゃないです。

「「「ごめんなさいっ!!」」」

「ごめんで済んだら死刑執行人はいらないの!! もうっ、その残念な頭で何考えてるの!? 隊長に本投げてぶつけるなんて! しかも角の部分っ!」

「い、いや、その……ひ、人がいるとは思わなくて……」

「そ、それに、角がぶつかったのは偶然で、私達のせいじゃ……」

「何か言った!?!」

「「ひいいっ!?!」」

「言い訳する暇があったら人間に生まれてきたことを後悔しやがれなの——!!」

沙和、容赦なし。というか、こんな性格だったの?

雄二から聞いた話だと……沙和は新兵訓練で新兵になめられないため、ということとでこういう『鬼軍曹』的な一面を使うようになったとか。

……いや、何それ。普通に怖い。

うーん……さすがに怒りすぎ(というかいじめすぎ)じゃなからうか。

僕のことを大切に思ってくれてるから、ってのは嬉しいけど……さすがに……。3人共、かわいい女の子だし……

1人は、ピンク色の長い髪に、大きなバスト、かわいらしい顔に……どこか保護欲をそそる雰囲気をした女の娘。なんていうか、どこことなく……姫路さんや桃香に近い。や、髪色とかスタイルとかもそうだけど、雰囲気的にね?

2人目は、ロールのかかった水色の髪をサイドテールにまとめた子。ただし、髪はそんなに長くはなく、肩まで程度。小柄で華奢、活発な雰囲気がある。……言っちゃ悪いけど、バストは……控えめかな？

そして3人目は……薄い藤色のセミショートの髪に、メガネをかけている女の子。落ち着いたような雰囲気で……3人のうちで一番冷静と言うか、知的かも。沙和のお説教（おいう名の罵倒）にも結構平然と耐えてるし。……意外と、スタイルは出るところ出てる。

そして何より印象的なのは……その3人の服装だ。露出度が高くて、なんていうか……舞台衣装みたいなのを着てるところだ。もしかして、旅芸人か何かかな？

まあともかく、いつまでも土下座させてるのも気分が悪いので、僕は沙和をなだめてから、彼女達に楽にしてくれるように言った。

「えっと、聞いた話だと……君達は、イライラして本を投げたら、僕に当たったと？」

「はい……わざとじゃないんです……」

しゅんとしてる、実行犯らしい水色の髪の娘。うん、ちゃんと反省はしてくれてると見た。それなら……いいかな。

「うん、じゃあお咎めなし。帰っていいよ？」

「「「え！？」」」

3人が3人共びっくりしたような表情になる中、僕の隣に立っている沙和は、

「えー！？　たいちょー、この娘達許しちゃうのー？」

「ん？　ああ……だってさあ、別段、怪我とか僕してないし……反省もしてくれてるみたいだから。今僕ら忙しいし、そんなに気にかけるなくてもいいんじゃない？」

「あう……まあ、隊長がそう言うなら、沙和はそれでいいの」

「そっか、ありがとう。じゃあ、沙和は先に行って。僕はこの片片付けてから行くよ」

「はいなの！」

と、どうにか納得してくれた沙和が天幕から出て行くと、入れ代わりで、

「あ、雄二さん、土屋さん、お疲れなの！」

「ん？　ああ、沙和、お疲れさん」

「……………お疲れ」

雄二とムツツリーニが入ってきた。

☆

えっと、こ、これはもしかして……私達、助かりそう……？

ちい姉さんが投げた本が、偶然とはいえ官軍の人に当たった時は、もうダメかと思ったけど……どうやら、当たった人が結構いい人だったみたい。

優しそうだし……しかも、正体、ばれてないみたいだし……。

ひょっとしたら、始末書とか書けば、このまま逃がしてもらえる

かも……なんて思ってたなら、新しく男の人が2人入ってきた。

……なんていうか、少し怖そうな人と、暗そうな人……かも……？

ちなみに青い髪の方の人は、私達を見た瞬間、鼻の頭が赤くなつたような気がしたんだけど……気のせい？

「……………明久、この3人は？」

「ああ、この娘達は、かくかくしかじかで……」

「ああ、そういうことか。そりゃGJ、表彰モンだな」

「どういう意味だコラ」

「しかし、災難だったな？ 見たところ旅芸人か何かみてーだが……」

「……………こんな戦場に迷い込むなんて、運が悪い」

「は、はぁ……どうもです……」

「無視！？ ねえ無視!？」

その戦場から逃げてきたんです、とは言えないので、適当に相槌。無視されてる茶髪の人（『隊長』さん？）には悪いけど、私達も無視で。

「まあ、反省もしてくれてるみたいだし、お咎めなしで釈放かな、と」

「そうか、まあ、妥当かもな。正直、俺らも忙しいし」

「……………かわいいし」

「やだなあ、何言ってるんだいムツツリーニ、それじゃまるで僕が彼女達がかわいい女の子だからという理由でお咎めなしにしようとしてるみたいじゃないか」

「ちなみにお前、むさ苦しい野郎が犯人だったらどうしてたんだ？」

「ジャーマンスープレックス」

「思いつきじゃねーかよ」

……よくわからないけど、九死に一生を得たような？

と、その時……赤い髪の人目が、ふと……『本』に行った。

「……！？ ……明久……その本は？」

「ああ、これがぶつかってきたんだよ」

そう言っ、て、明久、と呼ばれたその人は、ぱらぱらと本をめくる。

「何書いてあるのかさっぱりわかんないけどね、達筆すぎ」

「明久、逆だ。上下逆」

「え、あ、ホント！？ うわ、どうりで読めないはずだよ……」

「……逆にしたら、読める？」

「無理」

何、今のやり取り。

……が、赤い髪の方は……その本の表紙を凝視して……っ！？
もしかして……

「ところで明久、こいつらの名前は？ 聞いた方がいいんじゃないかねーか？」

「ああ、そういえばそうだね。ねえ君たち、一応、名前聞いてもいい？」

と、茶髪の『明久』さんが……って、コレ真名かも、呼ばないほうがいいわね。

あー……さすがに本名はまずい。何せお尋ね者だし……即興になるけど、偽名を……

と、思ったら、

「あ、はい、私、張角っています」

我らが長女がとんでもないことを言っただけだ。

（姉さあああ——ん!!?）

ちよっ……何バカ正直に本名言っちゃってるのよ!? 状況立場

罪状相手何もかも忘れちゃったのこの人は!?

驚愕と絶望の入り混じった視線を送るも、天和姉さん、気づかず殴りたい。

お、終わったわ……これではれないわけがない、完全に気づかれ……

「へー、張角ちゃんというんだ? いい名前だね」

……てない?

え? これだけそのまんま言ったのに?

「あれ、でもその名前どこかで聞いたような……あ! 黄巾の頭目……」

……っ! や、やっぱり……こ、今度こそばれた……! もう、ダメ……

「……と同姓同名なんだね、うわあ、すごい偶然」

（まだ気づかない!!?）

逆にびっくりした。ちょ……人ってこんなにも鈍感になれるものなの！？

すると、天和姉さんがきょとした顔で……って、余計なこと言わないでよ！？

「？　どうかしたんですか？」

「え、ああ……君達の名前が、このあたりに逃げてるらしい悪い人と一緒だったもんだから、ちょっとびっくりしてさ」

ごめんなさい、本人です。あなたの目の前でポケットとしてるその人が張角です。

はぁ……でも、これは不幸中の幸いかも……天和姉さんも、上手くとぼけてくれてるみたいだし、このまま……

「え、そうなんですかぁ！？　うわぁ、びっくり、怖ぁい……」

……あれ？　この声の調子は、もしかして……

ちょ、姉さんも気づいてない！？　素で！？　話題の人、自分とは別人だと思ってる！？

ああ、そういえば姉さん、自分達の立場（大組織の頭目）、未だに理解してなかったっけなあ……なんて、今更思い出したり。

……それにしたって、

「あ、それと、この2人は私の妹で……張宝ちゃんと張梁ちゃんっていいです」

「ちよっ！？　姉さん……それは……」

「え！？　そうなんだ！？　連れ2人の名前まで同じなんだね！？　すごい偶然！」

（（この人バカ！！？））

「え、そうなんですか！？　うわ、不思議ー、すごい偶然！」

（（こっちもバカ！！？））

「でもホントに偶然だよね」

「そうだねー、なんかちょっと親近感あるなあ、会ってみたいかも」
♪

（（本人！　本人！））

「そういう慣習のある地域で生まれたのかな？　君達も、そいつらも」

「どうかなー……私達の生まれ故郷に、そんな風習なかったけど……」

「まあ、案外あるのかもよ？　『いちひめにたろう一姫二太郎』とか『いちふじにたかさん一富士二鷹三茄子』とか言うくらいだしさ」

（（使い方違う！））

「へー、そうなんだー？　意味わかんないけど」

「そっかー、あはははは、僕もわかんないけど」

「「あはははは♪」」

な、何、このポケ合戦……！？　聞いてる方が疲れる……。この

人、一体何……！？

ていうか、天和姉さん、いつの間にかタメ口……相手、官軍の人なのに。

その後しばらくポケ合戦が続き……結局、私達の正体は（信じられないことに）全くばれることがなかった。しかも、私達は釈放どころか、『戦いに巻き込まれた旅人』として保護され、衣食住まで保障され、近くの安全な村まで送ってもらえることになった。

……これ、奇跡……？　人生、何が起こるかかわからないわね……。

まあ、一応は安心できる……と思う。

……ただ、

隣にいた、赤い髪の男の人が……すごく鋭くて、何もかもお見通し、とでも言いたそうな視線を向けてきてたのが……ちよつと気になって、怖かったけど……。

もしかして……気づかれてたり……しないわよね……？

☆

気づかねーわけねーだろ、あれで。普通は。

明久から『コレもらっていいか？』『いいよ？』という簡潔な会話で譲り受けた、明久の後頭部を直撃したというこの『本』を見ながら、俺はため息をついた。

やれやれ、明久のバカは……またんでもねえことしてくれたな。まあ、いつものバカっぷりや、あのピンク髪の娘のバカっぷりは、この際置いといて……

まさか、マジで華琳に気づかれずに手に入るとは……『太平要術の書』。

んでもって、あの3人が……張角、張宝、張梁、か……。

まあ、あの様子だと、再起なんかは考えてねえみてーだから、放ついても害はなさそうだし……もとの旅芸人にでも戻って、それなりに楽しい暮らしをしてもらえばいいだろう。明久の奴にも、後でそれとなく打診しとくか。

華琳の奴には隠しとこう……『利用する』なんて言い出したら面倒だ。

こっそり自陣に持ち帰り……一応、本を全ページ、ムツツリーニから借りたデジカメで画像データに残し、SDカードにそれを保存する。内容の保管はこれで十分だ。これで……俺達『現代人』にしか、しかもムツツリーニの許可なしでは、閲覧は不可能。

これなら……必要に応じて、民政への応用目的のみ知識を生かせる。武人だの軍師だののよくわからん考えに流用されるような、面倒なこともない。

そして……俺は『本』を、焚き火の中に投げ込んだ。

証拠隠滅には、火は便利だ。紙製品の、それも相当に古いその本は……たちまち燃えて、その姿を灰に変えていく。さらに火箸でぐしゃぐしゃにして……よし、処分完了。

原型をとどめず『本』が燃え尽きたのを見届けた後、俺は天幕に戻った。

第20話 本と説教とボケ合戦（後書き）

さて……今回、張三姉妹の出番が……多かったけど、しばらくお別れと言う結果に……

すいません、またなるべく早く再登場させたいです。

そして、この物語では……曹操に捕まらないのでした。

果たして今後、どこへ行くのか……よく考えて物語を組み立てたいと思います。

次回、『黄巾の乱』編、最終回となります。

ではこのへんで。和尚でした。

第21話 バカと宴としばしの別れ（前書き）

今回で『黄巾の乱』編は終幕となります。

第21話、どうぞ。

第21話 バカと宴としばしの別れ

「ねえご主人様、最近私、出番少くない？」

「え？ いきなり何言い出すの、桃香？」

「んー……なんか言わなきゃいけない気がして」

何だそれ？

さて、ともかく……黄巾の乱は、僕ら曹操・劉備連合軍の大勝利で幕を閉じたわけです。

その後、戦利品として色々と物資をかつぱったり、戦後処理をしたりで数日が過ぎて……そんなある日のこと。

僕らは、曹操達が主催してくれた戦勝祝いの宴にやってきた。

戦後処理も大体ひと段落ついたから、ってことで、区切りの意味でお祝いやるらしい。しかも曹操のおごりだ、こりゃありがたい。僕らも二つ返事で参加をOKした。

そこで、星が浴びるほど酒を飲んだり（しかも全然酔わない）、白蓮が『目立てなかった……』とかってさめざめと泣いてたり、色々あったけど……割愛。

あ、ちなみに今の『星』と『白蓮』っていうの、趙雲と公孫賛の真名。呼んでいいって言われた。なんか、心を許してくれたようで、嬉しいな。

まあ、それよりも……宴の席で、曹操によって告げられた重大発表の方が、僕は、いや多分全員がびっくりしたんだけど……

それは、宴もたけなわ……ってほどじゃないけど、ギリギリ全員が酔わずに正気を保ってたあたりの時の出来事。

「わ……私が……県令!？」

「そう。先日来た朝廷からの使者にね、伝えてくれるように言われたのよ。劉備、今回の戦でのあなた達の功績をたたえて、よかったら新しい県令にならないか、ってね」

曹操の話聞いた桃香は、口をパクパクさせていたが、すぐに

「や、やります! やらせてくだしゃい!」

朱里でもないのに「ヒドいでしゅ!？」カミカミで返事をしていた。何ていうか、興奮してて……すごく嬉しそうに見えるんだけど……?

ていうか、それ以前に……

「ねえ朱里、雛里、『県令』って何？」

「あ、ええとですね……地方ごとにいくつかある『県』を統治する役職で……平たく言えば、比較的大きな町や村の長、とでも言うべき存在でしょうか」

「住民の指示を受け、なおかつ朝廷の認可のもとに任命される役職ですね」

と、朱里&雛里。へー……なんかすごそうだね。

それが、曹操が言う『朝廷』から、桃香に直々にお誘いが来たってことは……

「そうですね、桃香様の、そしてご主人様の働きが、ようやくもって正當に評価された……と見ていいでしょう」

と、後ろから、満足げな愛紗の声。その目は、嬉々として曹操から話を聞いている桃香に向けられている。……嬉しいんだろうな、今までの頑張りが認められたんだから。

ちなみに鈴々は、まだ食べてるらしい。……まあ、そつとしとくか。

愛紗や鈴々を含め、桃香達の目的は……この戦乱の世を終わらせ、平和な世界を作ること。そのためには、当然色々な『力』が必要になる。今までの戦いは……人々を助ける目的以外にも、その力を得るためのものもあったわけだし。

財力、兵力はもちろん……名声や評判、そして、今回みたい……手柄を立てることで得られる、ちよつと聞こえは悪いけど『権力』。力を強めて、いろんなものを思い通りにするためには……必要だ。

そして、今日が……その第一歩になったわけだ。

正真正銘、朝廷からの許可をもらって、桃香が『偉い人』の位置につく。『県令』っての、朱里の話だと……白蓮よりはまだ下の地位らしいんだけど、そんなことはいいだろう。これから何とでもなる。

うんうん、これでこの先、色々だいぶやりやすくなるだろう。

すると、話が終わったらしい桃香がとてとと駆けきて、

「ご主人様あー！ 愛紗ちゃん、朱里ちゃん、雛里ちゃん！ 聞いた聞いた？ 私県令だってー！ やったやったー！」

……要人、っていう雰囲気欠片もない喜び方を披露してくれた。あー……まあ……親近感あっていいんじゃないかな、こういう県令様も。

それに、これは桃香の元々のスタンスだし……いいよね。僕らも、桃香のこういう、飾らないところが好きで集まってるんだし……

「鈴々ちゃん！ 聞いた聞いたー？ 私今度から県令さんでーす！」

「にゃ？ 『けんれー』って？ おいしーのかー？」

「白蓮ちゃん、星ちゃん……ってあれ、いないや」

でもそろそろテンション元に戻そうか？

後ろの方で曹操がさりげなく呆れてるから。

っていうか桃香、放つといたら踊り出しそうだ。今にも。

とまあ、桃香を落ち着けつつ（10分くらいかかった）、新しく運ばれてきた料理を口に運ぶ。こんな上質のカロリー、そうそう取れるもんじゃない。食べられる時に思いっきり食べとかないと！

「栄養素で食事を判断すんな。悲しい奴だな」

「……………もとの世界から変わってない」

「あ、明久君、お食事ならいっぱいありますから……」

うるさいな、どうせ僕の気持ちは君達にはわからないよ。

ゲームという名の人生の必需品を手に入れるために削られていく食費を嘆き、塩と砂糖と水で月末を耐えしのいでいた僕の気持ちなんか……

「100%自業自得だろうが」

「……………むしろ見上げた根性（？）」

うるさい。

まあ最近、姉さんがいる影響で、比較的まともな食事を食べて

るけど……。

そんな僕の隣で、雄二は雑談しながら、鈴々よりは少なくとも、結構な量の食事を胃袋におさめていく。毎回思うんだけど、こいつの胃はどうなってるんだろ？

と、その時……

「もぐもぐ……あれ？ これって……」

「どうかしましたか、明久君？」

「ああ、えっと……曹操さん？ これってもしかして……流琉が作ったんじゃない？」

「！ あら……よくわかったわね、あなた」

あ、やっぱりか。

どういうことか、と視線が集まるけど……そのまんまの意味だ。

僕は以前、流琉や季衣、あと、ここにはいないけど風と一緒に、同じ小屋で暮らしてた時期がある。その時、僕と流琉が協力してご飯作ったり、僕が流琉に洋風料理の味付けなんかを教えてたりした。そして、今僕が食べた料理は……その味付けだ。そりゃわかるよ。だって、僕が流琉に教えた味で……この時代にはないはずのものだもん。

そのことを話すと、曹操達はびっくりしてたけど。

「そう……まさか、あなたが流琉に料理を指南していたなんてね……」

「いやいや、そんなたいそうなもんじゃなくて。流琉はもともとすごく料理上手かったし、そこにちよつと変わった視点からの知識を教えてあげただけだよ」

だから、その応用でここまでいい味を出しているのは、紛れもなく流琉の腕だ。

「謙遜はいいわよ。私も気になっていたの、流琉のあの、一部の料理に見られる、独創的な味付けの方法にはね……。まさかあなたがもたらした、天の国の調理法だったなんて思わなかったけど。おかげで美味しい料理が食べられるんだもの、礼を言うわ」

なんか感謝されちゃったよ。流琉、曹操のところでも料理作ってるんだ。

まあ、流琉は基本、料理するの好きだし、大人数相手の調理もできてたしね。ある意味、適材適所……ってやつなのかな？

というか、ここで流琉の料理が出てきてるってことは……

「曹操さん、今、流琉は厨房に？」

「ええ、うちの季衣と雄二、春蘭、それに、あなたのところのおちびちゃんがよく食べるものだから、料理が足りなくなる前に……つて、行ってくれたのよ。邪魔しなければ、のぞいてきてもいいけれど？」

「邪魔っていうか……手伝おうかな、せっかくだし」

僕もう結構食べたし……向こうでも、まかないとかあるかもだし。

「あれ、ご主人様が料理するの？ やったやったー！」

「ん？ 桃香、吉井って料理できるのか？」

「うん！ すっごく美味しいんだよ、ご主人様の料理！」

「ほう……それは興味深い、ぜひとも酒の肴も作っていただきたいものだな……」

と、何か桃香と白蓮と星のいるほうからプレッシャー。うーん……そんなに期待してもらってもなあ……僕にできる範囲の料理しか作れないし……。

「そのでできる範囲を期待してもらえてんだからいいだろ。さっさといってこい。そして俺に何か洋食なり和食なり食わせろ（がつがつ）」

「えー、雄二も手伝ってよー。できればムツツリーニも」
「……………今忙しい」

ほほう、杏仁豆腐を食べるのが忙しいとぬかすか貴様。
というか雄二、両手に肉まん持って何だその態度。命令するな。

「ふあんへもいひはらふるあらはあくふふつへおい！」
「『何でもいいから作るなら速く作って来い』と、言っている」

夏侯惇の異世界言語を夏侯淵が翻訳してくれた。よくわかったな。
てか夏侯惇、ほおばりすぎ。ほったの膨れ具合がマンガみたい
になってる。

そしてその横で『姉者はかわいいなあ……』となぜか酔っている
夏侯淵。……そういう人なのかな？

っていうか、雄二もムツツリーニも、ホント手伝ってよ。季衣と
鈴々、それに夏侯惇がいるから、消費スピードが結構なもんだし……
……それに洋食の下ごしらえは現代人組しかできないんだから。僕1
人じゃ大変だって。

しかし、依然として雄二もムツツリーニも、面倒くさがって動い
てくれる気配はなく……

「あの、明久くん、なら、よかったら私が手伝いま……」

「行くぞ雄二ッ！！ ムツツリーニッ！！」

「Yes sir！！」

バリバリの気合ではきはきと動いてくれた。うん、それでいい、それが正しい。

でなければ……この楽しい宴が阿鼻叫喚の地獄絵図に変わる。ダメだそんなこと！ 必殺料理人の姫路さんだけは動かしてはならない！！

それを知っているからこそその雄二たちの一瞬の変わり身。現金だとは思いうけれど、攻める気は毛頭ない。だってそれが正しいから！！

「え……？ で、でも、皆さん料理を食べるのに忙しいみたいです、私が……」

「いいや姫路さん、ここは任せてもらおう！」

「そうだ姫路！ 女性陣はここで友好を深めながら楽しみに待っていてくれ！」

「……………ここからは男の料理……………！」

「は、はぁ……………」

姫路さんが小さくでも頷いたことを確認した後、僕と雄二、そしてムツツリーニは、一迅の風となって宴会場を後にした。急げ急げ！ 姫路さんに……彼女に台所に立ち入らせる隙を作るな！

「「うおおおおお———っ！！」」

「……………何だったの、今のは……………？」

「はあ……何やら、戦場にでも行くかのような勢いで飛び出してきましたが……まあ、行き先は厨房のようですし、やることは料理で間違いないのではないかと」

「しかし秋蘭……今の気迫は単なる料理に向けられるものか？」

「……やっぱり男などというものはわけがわからないし、野蠻ですね、華琳様」

この後、鬼気迫る勢いで厨房に乱入した僕達は、そこで酢豚を作っていた流琉を盛大にビビらせつつも、それぞれの職務を全うし、みんなの胃袋を空腹と劇物から守りきったのでした。

が、がんばったぞ……僕ら……。

ちなみに、その段階で流琉にも色々手伝わってもらったのと、そのついでに色々教えたので、流琉の調理師スキルがまた上がりました。また今度会う時には、流琉の応用メニュー……洋風中華を食べられるかもしれない。今から楽しみだ。

そして、まだ飲み足りない連中を残して宴会がお開きになった後、僕ら厨房組も、料理の残りに一手間加えて作ったまかないを食べ、

さらにその残りは保存食用に加工して4人（流琉含む）で分配した後、解散した。

☆

そして翌日、

「それじゃあ劉備、ここでお別れね」

「はい、曹操さんもお元気で」

黄巾党の討伐、という役目を終えた『劉備・曹操連合軍』は、必然的に解散の時を向かえた。劉備軍と曹操軍にその名を戻し、各自の帰るべき場所へ……桃香の場合は、新たに拝領された『自分の』領地へともどることになる。

ちなみに、最後まで『公孫賛』の公の字もその名前に入れられることはなかった。……一応僕ら、白蓮の客将だったんだけど……完全に影薄れてたな……。

そして、自分達の領地をもらった僕らは……必然的に、白蓮のところから独立することになった。

これからは、僕らは自分達の城で、自分達の領地で、その民を守って暮らしていく……っていう感じになるからなあ。今までお世話になりました、とでも言うべきか。

そして、

雄二だけど……残念ながら、曹操のところに残るらしい。

こっちに合流してくれると思ってたんだけど、うーん……雄二も、この乱世で助けてもらった恩はある、ってことか……身をおくのは、まだそのつもりらしい。

僕がそのことについて聞いて、雄二が『離れない』、って言った時……曹操と夏侯惇は『当然』とでも言いたげな顔で……逆に、荀？ちゃんは露骨に『ちっ！』って顔してたけど。

……まあでも、こいつなら……何だかんだで上手くやっていくだ

ろう。

できれば、またなるべく早いうちに和えたらいいな。

すると、別れの挨拶も済んだかと思ったその時、

「……時に劉備、あなたがこの乱世に目指すものは……人々が話し合いで物事を解決できる、易しい世界だったわね？」

「え？ あ、はい！ それが私達の目標なんです！」

「そう……」

すると、曹操はうつすらと笑って……

「……私はね、違うの。この天下を、己が力を持って統一し、全てを統べる者となる……それが、私の掲げる覇道よ」

「えっ……？」

「あなたの掲げるそれとは……相容れないものに聞こえるかもしれないわね」

……えっ、と……？ 何コレ？

なんか、やんわりとだけど……もしかして……ケンカ売ってる？ 真っ向から、『あんたの目指すものは私とは違う』&『私が天下とるから』ってなこと言ってるし……。

見ると、姫路さんも、愛紗たちも困惑してる。

ちよっと対応に困るので、雄二にアイコンタクト。おい雄二ー？ おたくの大将さん何言ってるのー？

（ああ、まあ……華琳の決意表明みたいなもんだ、気にすんな）

（ええー……なんか、聞き捨てならないことばっか言われてるんですけど……）

（今気にしても仕方ねえ、ってことだ）

「同じように天下を目指すなら……いつか、あなたとは戦うことになるかもしれないわね……その時は……」

「は、はい！ その時はよろしくその……お手柔らかに！」

いうこと間違ってるよ、桃香。

まあ……こんな場面での応対、桃香は慣れてないんだから、無理ないか。無難な返答だっただけいいでしょう。

ここで愛紗が出てきたら、100%ケンカ腰になるからなあ……。

（はあ……なんか、この先面倒なことになりそうだな……）

（ま、なるようになるだろ……それより明久、お前の方こそ……注意しとけよ？）

（は？）

と、アイコンタクトで語りかけてくる雄二。……？ どういうこと？

注意って……曹操がいつか攻めてくるかも知れないから？

（それもまあ、ないとは言えねーが……それよりも、劉備の今後だ。劉備の掲げる、平和だの話し合いだのっていう『夢』……危ういぞ、結構）

（？ 危うい……って、何？）

（すぐにわかる。まあ……俺も曹操軍で、面倒なことにならねーように色々がんばってみっから……また会うことがあったら、よろしく頼むわ）

（ん……よくわかんないけど、了解。僕も、最善を尽くしてみるよ）

どうやら雄二は、『三国志』的に見たこの世界の今後を懸念して

いるらしい。

すなわち……近い将来、桃香と曹操が、それに他の権力者達が戦ったりする……っていう未来の展開が心配、ってことか……それは確かに。

それに備えて、僕ら『現代組』はできる限りのことをやろう……
ってわけだ。うんうん、なるほど。

……あるのかな、そんなこと？

それに、雄二が言ってた、『桃香の『夢』は危ういものだ』って、
一体……？

「あう……もう隊長とお別れなの……短い間だったの……」

「沙和はまだええやろ、行軍中ずっと一緒やったんやから。ウチらなんて最後の戦後処理と宴会だけやで」

「そ、そうだっ！ む、むしろ沙和は恵まれて……その……」

ああ、今はそれより……一応、曹操陣営の知り合いたちに別れを
告げようかな。

まあ、またいつか会えると思うし、そんな深刻になることもない
よね。

すると真桜が、

「なー隊長ー、この際やからうちの大將のところに来えへん？ う
ちらから口利いたってもええで？」

「沙和もそうして欲しいの！ それならみんな一緒なの！ もちろん
桃香様とかも一緒に！」

「あー……気持ちにはありがたいけど……」

一応僕、桃香と一緒にいく、って決めてるからさ。

そう説得したら、しぶしぶながら納得してくれた。……まあ、本気で僕のことと思ってくれてるってのはわかるから……嬉しいかな。

さて、三羽鳥は挨拶済んだとして……次は季衣と流琉……ん？

「あれ、流琉、季衣は？」

「あ、実は、その……」

「……？」

「………寝坊で……」

またかい。あの子は仕官しても寝坊癖は変わってないのか。それに昨日は、けっこう遅くまで騒いでたし、星に酒とか（ムリヤリ）飲まされたりしてたからなあ……。

ちなみに流琉の話だと、出発時刻までに目覚めない場合、荷物と一緒に馬の背にくくりつけられていくんだとか。あわれ。

「ま……まあ……よろしく言っというて」

「は、はい……あ、兄さま！ 今度会ったら、その……私が考えた、おいしいお料理ご馳走しますね！ その時は、また新しい料理も教えてほしいです！」

「ははは、そうだね、楽しみに待ってるよ」

無邪気に嬉しそうにする流琉の頭をなでると、照れくさそうに笑って、ちよつとだけ気持ちよさそうにする。うん、かわいいなあ。いい妹分をもったよ、僕は。

そして、

「それじゃあ、お元気で！」

「ええ、縁があったらまた会いましょうね」

そんな挨拶を交わしたのを最後に、両軍はわかれ……それぞれの帰るべき場所へ向けて歩みを進めていく。世の中の情勢を見れば、歴史どおりに考えれば、これからさらに激しくなるであろう、戦乱の世に備えるために……

こうして……僕らの『黄巾の乱』は終わりを告げた。

さーて……これからまた忙しくなるな……がんばらなきゃ。

「じゃあ皆！ 桃香も晴れて『偉い人』の仲間入りしたことだし……これからも力を合わせて、はりきって行こーっ！っ！」
「「「おおーっ！っ！」」」

……行く先々、これからいろんな困難が待ち構えてるんだろうけど……

ま、何とかなるでしょ。

第21話 バカと宴としばしの別れ（後書き）

というわけで、桃香昇格。

んでもって、雄二はそのまま曹操軍に残留……という結果に相成りました。

この後どう転んでいくのやら……がんばって考えます。

しかし、前作に比べて展開遅いなあ……。

さて、次回から日常編かもです。多分。

まだあの実習のまとめ作業やら何やらが尾を引いて、更新ペースが安定しないんですが……なるべく早く元に戻したいなあ、とは思ってます。

ではこのへんで。和尚でした。

第22話 勉強とラーメンと政治の重み（前書き）

な、難産でした……日常変がこんなに難しいなんて……。

やっぱりブランクはごまかせませんね……すぐく間開いてしまっ
てごめんなさい。

では、どうぞ。今日の主役はこの人。

第22話 勉強とラーメンと政治の重み

雄二たち、曹操軍とわかれてから……数週間が経った。

今現在、僕ら『劉備軍』は、以前までの流浪の旅人的な感じがほとんど感じられないくらいのものになっている。あらゆる意味で、前までとは違う。

まず、拠点ができた。朝廷から、なんとかっていう役職に任命されたおかげで、その役職で使う用のお屋敷を丸々1つもらったのだ。気前いいなあ。

そしてちなみに、僕と沙和は……例の『連絡員』を逮捕して黄巾党壊滅に大きく貢献した褒美として、領地とかとは別に色々褒美をもらったりした。曹操からも、朝廷からも。

おかげで、結構懐が潤ってる状態です。沙和もそのはずだ……服や化粧品にすぐ消えそうだけど。

次に、兵力とか文官とか、その辺の規模もすごく大きくなった。今の時点で……全部で2万人くらいいるかも。最初4人だけだったのが、今じゃ立派に権力者の仲間入り。すごいねホント。

まあ、そのせいで……今では、桃香も愛紗も、そして僕や姫路さん、ムッツリーニも……役人としての仕事を手伝う羽目になっちゃって、忙しいんだけど……。

しかも、僕とムッツリーニは漢文がろくに読めないから、足引っ張ってばっか。現在、朱里や雛里、姫路さんに教えてもらいつつ、やってる状態です。

うう……学校で古文ちゃんと勉強しとけばよかった……。

そしてそんな中でもきっちり運営ができてるのは……ひとえに朱里と雛里のおかげだろう。あの小ささで、仕事能力は桃香の倍以上ってんだから、すごすぎだよね……。

そして、それにもなって、僕らは公孫賛さんのところから独立。短い間だったけど、お世話になりました……と、丁寧に挨拶を済ませて、

ついでに志願者つのもって兵士ちよろまかして引っ張ってきて、ついでについでに町でも募集かけていい人材引っ張って行って、僕らは公孫賛さんの下を後にした。

……何、所々せこい部分が混じってるって？ 世の中ってね、常に戦争なんだよ。

とまあ、そんな感じで……僕らが『自分の領地』になった町で暮らし始めてしばらくした、ある日のこと。

☆

時刻は、12時をちょっと回ったくらいの時間帯。

「はあ……疲れた疲れた……ったく、仕事多いよなー、どう考えても……」

そんなセリフをつぶやきながら、僕は庭を歩いていた。

今現在、自分に割り当てられた分の政務のうち、午前にノルマが

ある分を終わらせて、今は昼休みの休憩時間。

……でも、特にやることも無いので、屋敷の中を散策してるところだ。

この、朝廷から拝領された『県令』の屋敷……やっぱり広い。気を抜くと、今でも迷いそうだもん。総面積にして、元の世界の文月学園くらい広いんだもん……。

こりゃ慣れるまでは、地図の携帯は必須だな……。

と、そんなだっ広い庭の一角に、見覚えのある後姿を見つけた。あれは……

「はにゃ……こんなわかんないよお……」

とまあ、我らが県令様でした。

おー、だらけてるだらけてる。

庭先に設けられている茶席（屋根付き）に座って、しかし、何してるんだろ、あれ……？

手元に何か、本みたいなのを広げて……筆を持って何か書いてるから、仕事かな？ でもそれなら、政務室でやるだろうし……

……ちょっと気になったのと、ちょうどいい暇つぶしの気配がしたので、僕は声を駆けてみることにした。

すると、ちょうど桃香の真後ろに來た所で……太陽との位置関係で、桃香がのぞき込んでいる本の上に、僕の影が差した。

必然、桃香はそれに、誰かが後ろから近づいてきたことに気付き……

「え？ 誰、って……あ、ご主人さ……まゝっ!？」

「あがあっ!？」

ごっんっ!!

……振り向き、勢いよく立ち上がった結果として、僕と桃香の額がぶつかった。

何度か聞いたことのある鈍い音を立てて、桃香は机に、僕はそのまま地面に倒れこむ。しかも僕は、その際に後頭部を地面に打ちつけるおまけ付き。

うう……前後から頭が痛い……。っていうか、またこうなった……。。

「い、痛たた……び、びっくりさせないでよ、ご主人様……」

「ご、ごめん……けど、何もいきなり立ち上がることはないでしょ……?？」

これで通産4回目。なんかもう、僕と桃香の恒例行事みたくなってるし……。

なんてことを考えてる僕の目の前で、桃香は散らかった机の上を整理。

桃香は随分と派手に机に突っ込んでたけど、そのせいで墨がこぼれたりしなかったとは、不幸中の幸いと言えるだろう。

それにしても、これ、何してたんだろ？

「ああ、これ？ 勉強してたの」

「勉強？」

「うん！ 『君主たるもの、学は必要です』 って愛紗ちゃんが言ってたし……実際、私も一応は統治者なんだから、相応の学力は身につけたいの。いつまでも、朱里ちゃんと雛里ちゃんに頼ってばかりじゃだめだし」

と、桃香。なるほど、それは言ってる。

実際、今のこの屋敷で、政務を担当してるのは……主に、朱里と雛里。お手伝いレベルで、桃香と愛紗、姫路さん。おまけで僕とムツリーニ、ってとこだ。

朱里と雛里は、有名な塾に通っていただけあって、そういう仕事の処理能力が別次元だった。なんかもう、年齢とかそういうの考えると、情けなくなるくらいに。

当然ながら、僕ら『色々足りない組』の分の負担が、彼女達に多少なりいっちゃってるわけで……はあ、心苦しい。

それを考えると、桃香の言い分はもつともだろう。僕でも、どうかして朱里達に頼りっぱなし名現状は何とかしたいと思える。だからこそ、文句言いつつも、漢字の勉強は続けてるわけだ。

すると、桃香は何かに気づいたように、

「あ、そうだご主人様。ご主人様って……勉強できる？ 教えてくれない？」

「えっえっ！！？」

「うえ!?! な、何そんなに驚いてるのっ!?!」

吉井明久17歳、生まれて初めて『勉強できる?』なんて期待こめて言われた! 今までは無条件で『バカ』の烙印押されてたのに! 未曾有の事態に、反応が変になってしまったらしい僕を、桃香はびっくりして見返してきていた。うう……ありがとう桃香……僕、生まれて初めて学業面で誰かに頼られた……

……けど、残念ながら返事は、

「…………ごめん、あんまりできない」

「あ、そうなんだ……」

……純粋な桃香に、嘘はつけない。うん。

期待してくれたのは泣くほど嬉しいけど、僕、学年最低成績だし……国政だの何だのなんて、そんな別次元の分野に関する知識、無いよ……

「弱ったなあ……私、ほかに始動頼める人、いないのに……」

「朱里と雛里に頼めば?」

あの2人なら……まあ、ちょっと悪い気がするけど、スケジュールの合間縫っておしえてくれそうだけど。それも丁寧に。

「……実はこの参考書、朱里ちゃんと雛里ちゃんにもらったやつで……『これがあれば、桃香様お1人で自習なさる分にも事足りると思います!』……って言われて……」

「……あ、そうなんだ……」

……忙しい自分達が桃香に教えられない分の穴埋めとして、彼女

達が直々に用意した参考書だったらしい。結果的に『できませんした』じゃ、かつこ悪すぎるか……。

そうになると、2人に聞くわけにはいかないよね……

でも、桃香って確か、それなりに有名な塾に行ってて、そしてけっこう優秀な成績だったんだよね？ 白蓮もそう言ってたし。

そんな桃香に、しかも政治なんていう専門分野で教えられる人なんて、そうそういないんじゃない……

「あ、大丈夫だよ！ 今勉強してるの、もともと塾で習ったのに、全然勉強してなくて忘れちゃった部分の復習だから！」

別の意味で大丈夫じゃない事実が判明。 いや、そうだったの？

何か今ので、桃香の『勤勉さ尊敬ゲージ』がガクツと落ちた気が……ていうかむしろ、その勉強が必然性を帯びて見える。

でもまあ、だからって僕に教えられるような内容じゃないだろうし……

「えーっと……ラーメンの材料は……」

それ政治！？ ねえそれ政治！？ 家庭科じゃない！？

何だろう、この時代の勉強とかそういうものって、僕らの世界とは概念からことなるのか！？ 桃香って塾で何勉強してたの（本来の意味で）！？

……

「んーと、ラーメンが……小麦？ 畑！？ うええ、でも、ラーメン屋さんがお客さんと……お客さんで？ え！？ でも、ラーメン屋さんの……」

「あ、あのさ桃香……それ、何を勉強してるの？」

と、恐る恐る聞きつつ、桃香の手元の本を覗き込むと……ん？
『経済』？

……あ、もしかして今の話って……

「えっとね……『しじょーけーざい』とかなんとか。よくわかんないけど……」

『しじょーけーざい』……『市場経済』……ああ、なるほど。
ってことは今は……その勉強の過程で、例としてラーメンが出てきただけか！　なんだ、びっくりした……

「あ、そっか！　ラーメンって小麦粉とメンマからできてるんだ！」

いや、君何を納得できたの今？

すると桃香、また思い出したように僕の方を見て、

「あ、ねえそういうことだからご主人様、ご主人様がわかる範囲でいいから……勉強見てくれない？　ほかに頼める人いないんだよね……」

「あー……まあ、それでいいなら……でも、自信ないよ？」

「やった！　ありがとうございますご主人様！」

ひまわりみたいな笑顔で、無邪気に喜ぶ桃香。……なんか、コレ見ていると、色々どうでもよくなるなあ……。

まあ、桃香も一生懸命なんだ、僕もがんばってみよう。経済とかでも、一般教養が入ってくるようなところなら……僕でも教えられるかもだし。

「じゃあ、はい、ご主人様！　ここ座って！」

と、少し横にずれて、同じ椅子に座るよう僕に促す桃香。いや……それちよつと無理あるって。

大きな目とはいえ、椅子は1つ、しかも一人用なわけで……そんなところに一緒に座ったら、その……色々当たるし。

「えー、いいじゃん。私気にしないよ？」

「いや、でもさあ……」

主に僕の理性とか、そういう面で心配です。

「むー……でも、横側とか向かい側からじゃ、本も読みにくいでしょう？　一緒に読むんだから、同じ側から……」

「あ、それは大丈夫。もともと読めないから」

「……あ、そう……」

ちよつとリアクションに困る桃香。言語能力出されたら何も言えないよね。

でもまあ、その流れで、誘うのも諦めてくれたからよしとしよう。若干残念そうにしてるけど……それは君のためでもあるんだよ、桃香。

それに残念なのはむしろ僕の方で、我欲に溺れなかった僕の強靱な精神力ををむしろ褒めてほしい……げふんげふん。

ま、とりあえず……始めようか。

「そうだね！　じゃあまず手始めに……ラーメンってどうやって作るの？」

「政治経済の勉強でしょ？」

「とりあえず、前途多難なようだ。」

☆

と、思ったんだけど……

実際に始めてみると、脱線さえしなければ、勉強の中身はまともだった。

消費者・生産者の関係とか、利潤の仕組みとか、そういったものだったからだ。勉強は勉強でも、こういう日常生活と結びついてる分野なら、そこそこ僕もわかる。

その調子で、ちょっと応用した内容なんかも学習していった。

しかし、これ……教えるだけじゃなく、一緒に勉強すると、僕のためになるなあ。これは思わぬ収穫だったかもしれない。

「あ、そっか。だから、利益が出るように値段を設定するんだね！」
「そうそう。仕入れのときと同じ値段じゃ、かえって損だからね。その儲けの中から、役所に収める税金とか、自分の生活費も出さなきゃいけないわけだから」

結構当たり前のことだけど……これも立派な学問、ってわけか。うんうん、桃香もスムーズに理解できてるみたいでよかった。

しかし……こうして誰かに物を教えるなんて経験、本気で初めてだな……。しかも僕、今あの三国志で有名な劉備さんに、政治経済のなんたるかを教えちゃってるよ……。

17年生きてきて色々あったけど、これって貴重どころじゃない経験だなあ……

すると、ふと桃香が、

「……なんか、こうして勉強してみるとさ……私たち、すごいことしてるなあ、って思えてきたよ……」

「？ 何、いきなり」

「だってさ、この内容って、この町でも起こってることでしょ？ 私……一応、そのの頂点に立ってるわけで……そう考えると、私、すごく大きなものを抱えてるんだな、って」

あー、確かにそうかも。

桃香は『県令』。この都市のボス。今勉強したような経済やらなにやらの流れを、一手にまとめ上げる立場にあるんだもんなあ……。

……今実際にやってるのは主に朱里&雛里だけど、ってのは言いっこなし。

でも確かに、僕らはとっても大きなものを背負ってるんだ、っていうのはわかる。

「……こんなに大きなもの……私、引っ張っていきけるかな……」

「……あー……そりゃ不安になるよね」

なんか桃香、経済の勉強から、予想外に大きな物事に気づいて惚けてる。いやあ……これは当然だろうな。むしろ、把握した以上、そう思わないほうがおかしい。

けど、

「大丈夫だよ。愛紗や鈴々……朱里や雛里もいるもん」

「にゃはは……まあ、ちょっと頼りっぱなし、って感じもするけどね……」

「ま、たしかに頼りっぱなしだけどね……今は」

「『今は』？」

「そ。これから成長していけばいいじゃない、ってこと」

そんな偉そうなこと言えた身分じゃ……ないけどね。

でも実際……そういう風に考えることなんじゃないかな。

桃香が、今日の勉強を通して気づいた……自分が背負っているものの重さや、大きさ。それらは、桃香1人や僕1人じゃあ、絶対にどうにかできたりしないものだろう。

でも……そのために、朱里とか雛里、愛紗や鈴々……っていう風な、仲間がいるんだと思うし。

今はほとんど依存してる感じだけど……それをばねに、一生懸命がんばって……これから先、肩を並べて活躍できるようになれば、それでいいんじゃないかな？

「そうだね……。それまでは頼りっぱなし、か……ちょっと恥ずかしいかな」

「そんなこと言っちゃダメだよ、桃香。朱里たちも、桃香にそんなこと思っほしくて、手伝ってくれてるわけじゃないんだからさ」

朱里たちは朱里たちで、自分の意思で、僕らに味方してくれてるんだ。そのために、一生懸命政務・軍務を片付けて、さらに僕らの

バックアップをしてってくれる。

きつとこの世界をよくしてくれるから……って、僕らに期待して。僕らができる限り不自由なく、前に進めるように……って。

「だから、僕らが朱里達に恩返ししたいんなら……いちいち立ち止まって弱音こぼすより、前向かなきゃ。ま……全く悩むな、なんてこといえないけど……あんまりうじうじしてたって、それこそ、全力で応援してくれてる朱里たちに申し訳ないでしょ」

「そっか……そうだね。私達は、前を向かなきゃね」

「そういうこと。で、もしその途中で、朱里たちが困ってたりしたら……」

「今度は私達が助けて、支えてあげるんでしょう？ 私達がしてもらったように……朱里ちゃんたちが、前に進めるように」

「ん、そゆこと」

桃香、満面の笑顔。うん、迷いが無くなったみたいでよし。

だから……それまでに、僕らも成長しなきゃね。朱里たちを支えられるように。

しかし……僕も今、なんだか随分と、似合わないこと言ったなあ……。まあ、こんな大変な世の中で、皆に助けられながら生きてきたら、こういう見方もできるようになるんだろうか。

今まで、無条件に安全な社会で生きてきただけに、そういうありがたさは人一倍わかったからなあ……。愛紗や鈴々に、何度助けられたか。

そして……桃香にも、ね。

すると、

「ふふっ……それなら、もうご主人様は、始めの一步を踏み出しちゃったね？ 先こされちゃった、悔しいなあ」

「へ？」

と桃香。どうということ？ 僕が『始めの一步』って……何が？

「だって今、ご主人様は……私を支えてくれたもん。迷ってる私を支えて……前に進ませてくれた、でしょ？」

「あ……」

そういうことか。だから、『先越された』って……

いや、もう僕既に桃香に何回も助けられてる……って、言おうと思っただけ、やめた。

今、桃香、迷いを吹っ切った、すごくすがすがしい顔してるし。……余計なこと言って、また迷わせるのは……ちょっとアレだ。まあ、僕からお礼をいうのは……また今度の機会にしよう。

「ありがとうございます、ご主人様。私を……私達を支えてくれて。そして……これからもよろしくね！」

「ん！」

と、ちようどそんなあたりで……きりよく、僕のケータイのアラームがなった。

あ、コレがなかったって事は……そろそろ昼休み終了だ。早く戻らないと、愛紗に怒られるな。

「そっかー……じゃあご主人様、また一緒にお勉強しようね！」

「そうだね。あ、でも……次からは姫路さんとかも呼ぼうかな」

「え？ 何で？」

「いや、だって……僕じゃ、教えられることには限界があるし……それに、僕だって勉強しなきゃいけない身だもん」

姫路さんなら、頭いいし、漢文も読めるし……それに、教え方も丁寧でわかりやすい。僕も桃香も、効率よく学べるはずだ。

すると、桃香はちよつと迷った風だったけど……

「うん、じゃあ……また今度ね！」

「そうだね、じゃ！」

勉強をやりきった後の、すがすがしい笑顔で見送ってくれる桃香の視線を受けながら、僕は政務室で待っている仕事のところへ、あんまり乗り気じゃないながらも向かうことにした。

やれやれ……桃香にあんだけ偉そうに言ったんだ……僕だって、ちよつとはやる気出さないと、示しつかないよね。

……その時、後ろの方で……

「……もう、私はご主人様と『2人で』がんばりたかったのに……」

何か、桃香がつぶやいたらしいのが聞こえてきたんだけど……よく聞こえなかった。

ま、いいか。独り言みたいだし……僕には関係ないでしょ。

……多分ね。

「……………いつか、私も……ご主人様の隣で、ご主人様を支えてみせるんだからね。そして、その時は……………きゃっ♪」

第23話 義姉妹と出会いと裏話（前書き）

第23話を更新します。

時間かかったわりに、出来は……うーん……
やっぱ日常編って考えるの難しいです。

ではどうぞ。

今日の主役は……誰？

第23話 義姉妹と出会いと裏話

○Side 明久

「派手に行くぜえっ！」

「いえ、行かなくていいです」

「……ですよねー……」

すいません、一部テンションが乱れました。

いや、多分作者が、某海賊戦隊大好きなのが原因かと。
映画面白かったです。

さて、あらためて……これはどういう状況かというと、
今日は僕は警邏当番。護衛に愛紗と、数人の兵士を従えて、さら
におまけ(?)で姫路さんも一緒に、町に繰り出そうとしてるとこ
ろだ。

もつとも……僕や姫路さんの目的は、どっちかっていうと、まだ
慣れないこの町を見て回ることなんだけどね。

じゃ、まあ……前置きはこのへんにして、行こうか。

☆

町は……まあ、特筆するところも無く、平和です。
当然かな、だって……治安面は愛紗達が、政治面は朱里たちがが

んばってくれてるもん。以前の状態が決してよくはなかった町だから……改善するよね、そりゃ。

けど、それ以上に驚いたのは……町を歩いてると、

「おおっ、天の御使い様！」

「御使い様だー！」

「ありがたや……ありがたや……」

なんか僕、崇拝されてる？ 特に3番目、大仏様が僕は？
とまあ、こんな感じの反応が返ってくるころだった。

最近、町に出るようになってわかってきたんだけど……どうやら、町の人たちにとっての僕の立ち位置は、劉備軍において、桃香と対を成す指導者。

そして、同じく『天の御使い』の姫路さんとムツツリーニは、その側近……っていう位置づけらしい。……随分都合がいい位置に収まったもんだな。

っていうか、僕、劉備と同格なの！？ 三国志の主人公格と！？
すごすぎない！？

それはそうと……その『天の御使い』っていう呼称、どうにかしたいな……。近いうちに、新しくユニット名でも考えようか……。あ、でも雄二に黙って、ってことになるけど、いいのかな……？

まあともかく、そんな感じで……別段何も滞りなく、警邏は進みました。

「それにしても……最初に来てから、まだ2週間くらいなのに……結構町が活気付いてきたように思いますね……」

「? そうかな?」

と、ふいに姫路さんがつぶやいたセリフに反応。……僕にはわかんないけど……。

まあ、最初来た時は確かに、この町、全然活気無いなあ……とか思った。街路が整備されてないのは仕方ないとしても、店とか少ないし……

すると、横から愛紗が補足(?)を入れてくれた。

「簡単な話です。この城に桃香様が来て、さらに我々が万全の警備体制を敷いていることで、盗賊が寄り付きにくくなっているのですよ」

「ああ、それはまあ……そうかもね」

何せ僕ら、盗賊ハンターみたいなことやってたし。そりゃ怖がって来れないよね。

「安全であるということは、それだけで魅力的な土地に見え、人を呼び寄せます。そうなれば住人は活気付き、農業・商業が芽吹き、行商人も集まり、町は豊かになります」

「そうすれば、さらに町が活気付いて、魅力的に見える……上手い具合に連鎖状にかみ合ってるんですね」

「そういうことです。それに……姫路殿が発案してくださった、天の国の警備体制も……功を奏しています」

と、愛紗。

今言っていた『天の国の警備体制』っていうのは……まあ、警察

機構とか、そういうののそれを参考にしたものだ。

町を区画ごとに区分して、交番みたいなのを設けたりとか……見回りのルートに工夫をしたりとか。それに、もう少し人員が充実してきたら、24時間体勢みたいなのも、実験的にやってみるとか言っていた。

僕らの世界じゃ当たり前のことだけど……この時代にしてみれば、革新的なやり方だろう。町の人たちが珍しかったり、期待の目で見えるのも……無理はない。

そして、愛紗や朱里が色々上手くやってその期待に応えてるから、僕らに対しての満足感もうなぎのぼり……ってわけだ。

志願兵も続々集まってきてる……って、朱里が言ってたし。

「けどさ、それにしたって……そのために動いてくれたのは愛紗や鈴々だもん」

「そうですね、私達なんか非力で……感謝しても感謝しきれないです」

まあ、そんなところが……僕と姫路さんの本音である。

実際、戦場で勇猛果敢に戦う、関羽將軍や超飛將軍の噂を聞いて、それにあこがれて志願してきた、って人だって……多いわけだし。

……ちなみに、ムツツリーニいわく……単にかわいくてお近づきになりたい、っていう邪な理由で入隊してきた奴もいたらしいけど……そういう人物は全員調査済み、リストアップ済みであるらしい。……後日、ちょっとした肅清が行われるとかそうでないとか……

何、止めないのかって？ 冗談言うなィ、それ僕も参加すんのに。

それに、愛紗の耳に入る前に処理できるんだから、むしろ都合はいいはず。堅物と言ってもいい愛紗がそんな不謹慎な噂聞きつけたら、死人が出かねない。

と、その愛紗は……何をおっしゃいます、と、僕と姫路さんのセリフに返してきた。

「ご主人様も桃香さまも、それに姫路殿も……いつもながらご謙遜が過ぎます。皆様、私や鈴々などにはない、立派なものを持っています」

「でも、守られて助けられてばかりだし……頭もよくないよ、僕？」

「それでも、あなた方にはあなた方にしかできないことがあるのですよ。そもそも、戦場での働きは我々武人の領分、ご主人様が気にするべきところではありません」

一片の揺らぎもなく、そう言ってくれる愛紗の目は……澄んでいた。本気でそう思ってくれているみたいだ。

嬉しいっちゃ嬉しいんだけど……うーん……それでも、僕、まだ罪悪感というか……無力感というかさ……

けどまあ、愛紗の言うことも正しいわけだし……その辺の心構えは、おいおい築いていけばいいのかな。

すると愛紗、まだ僕が迷ってるらしいな、ってことを感じ取ったのか……ふと、こんな話をしてくれた。

「私も……かつて、ご主人様と同じようなことを考えていた時期がありました」

「え？　どゆこと？」

「戦場で戦える力を持つてこそ、この大陸で覇業を成しえる……という考えです」

なんか、若かった頃のやんちゃ振りをしのぶお父さんみたいな雰囲気、少し恥ずかしげに言う愛紗。

……んー……僕らは、あくまで、皆に世話になりっぱなしだつてところの無力感を嘆いてるものであって、そういうのとはちよつと違う気がするんだけど……ま、いいか。

でも、それがどうしたのかな……と、思っていると、愛紗は続きを話してくれた。

「かつて私は、鈴々と共に……諸国を旅して回っていました。その途中、山賊などの出没を聞きつけると、2人で殴りこみ……壊滅させて、狙われていた村を助けたりなどと」

「へー、その頃から立派だったんですね、愛紗さん」

感心する姫路さん。いや全く。

生粋の武人というか、狭義あふれるというか……頭が下がるよ。

と、そこでなぜか……愛紗は、少し自嘲するように笑い、

「ええ、自分でもそう思っていました……ですが、ある時……その私達の考えを根本から覆す出会いがあったのです」

「……それって、もしかして……」

「………ええ、桃香様との出会いです」

☆

○Side 三人称

同時刻……城。

そこでは、ムツツリーニこと土屋康太と、小さくても將軍の一角である張飛こと鈴々が、軍関係の情報や方針などについての重要な会話を……

「そういうの鈴々わかんないから全部康太お兄ちゃんにおまかせなのだ！」

「……………まあ、いいけど」

……………できていなかった。

そして、鈴々が空腹を訴えたため……………そのまま城の食堂に行くと、たまたまそこにいた星も巻き込んで、そこから鈴々の昔話にシフト。

鈴々への報告を最後に仕事が終わる、やることも特になく、暇だったこともあり……………ムツツリーニと星はこっちはサボりだがその話に付き合うことにした。

彼女ら『桃園の3姉妹』の過去は興味をそそるものでもある、ということで。

内容としてはまあ、今現在明久達が城下で愛紗から聞いているのと同じ内容だと考えればいい……

……………はずだったのだが、

「んーとねー……鈴々と愛紗が桃香お姉ちゃんに出会ったのは……」

☆

○Side 明久

愛紗いわく、

その日……愛紗と鈴々は、いつも通り(?)、山賊退治をしたらしい。

人数も少なかったから、2人で楽々討伐できて、お釣りが来るくらいだったんだとか。

で、いつも通り、村人の人達からは感謝感激雨あられ。ひたすら褒められ、お礼を言われる。

当時は、それが半ば当たり前みたいに思っていた、と、愛紗は恥ずかしそうに言っていた。

そんな中、少し遅れて進み出た1人の少女。

その少女の口からも、てっきり感謝の言葉が出てくるもんだと思ってた愛紗と鈴々。

しかし、次の瞬間聞こえたのは……予想外の言葉だったという。

『その力があれば、あなた達はもっと多くの人を笑顔にできると思っています!』

そう、言ってきたのは……言わずもがな、今の義姉……桃香だったのだという。

どういう意味か、と、きょんととして聞き返した愛紗と鈴々は、そこで桃香に……彼女自身の、この大陸の行く末を案じているという考えを聞かされて、感銘を受けたらしい。

愛紗の目は、持論を説く桃香に釘づけになったという。

自分達は、こんな山賊退治ごときの達成感で満足しているというのに、この人はなんと大きな視野で物事を見ているのだろう……と。

そして思ったという。この人についていきたいと。

そうすれば……今まで見られなかったものを見られる、もっと多くの人を救う道を見つけられるのではないか……と考えて。

☆

鈴々は、愛紗と同じように、その時——桃香と出会った時——の話を話そうとしていたのであるが……。

なぜか、と言うべきか……少々、その内容がずれていたりする。

いや、内容的には違わないのだが……色々と『詳し』かったり、脱線していたりするのである。

ということかという……

○Side 星

ふむふむ……桃香様と愛紗達の過去話か……思いがけず面白いものが、鈴々の口から聞けそうだ。

鈴々いわく、

その日……愛紗と鈴々は、いつも通り（？）、山賊退治をしたらしい。

人数も少なかったから、2人で楽に討伐できて、釣りが来るくらいだったとのこと。

で、いつも通り、村人の人達からは感謝感激雨あられ。ひたすら褒められ、お礼を言われる。そして 鈴々、好意に甘えて、ラーメン食べ放題の権利をもらう。

当時は、それが半ば当たり前みたいに思っていた、と、鈴々は別に恥ずかしくもなさそうに言っていた。

そのような中、少し遅れて進み出た1人の少女。

ちなみに鈴々は、今正にラーメンを食べに行こうとしてた所で、呼び止められて邪魔されてちよつとご機嫌斜めだったらしい。

わかる、わかるぞ鈴々。私も酒とメンマのお預けを食らえば不機嫌にもなる。

その少女の口からも、てっきり感謝の言葉が出てくるものと思ってた愛紗と鈴々。

しかし、次の瞬間聞こえたのは……予想外の言葉だったという。

『そそ、その力があれば、あなた達はもっと多くの人を笑顔にできると思いましゅ！』

そう、朱里ばりに噛みながら言ってきたのは……言わずもがな、今の義姉……桃香様だったのだという。

「……………噛んでたの？」

「噛んでたのだ、緊張して」

「ほう、まあ、桃香様なら……ふふっ、想像できてしまうな」

どういう意味か、と、きょとんとして聞き返した愛紗と鈴々は、そこで桃香に……彼女自身の、この大陸の行く末を案じているという考えを聞かされて、感銘を受けたらしい。

その間、鈴々の目は、持論を説く桃香……の胸に釘づけになったという。

自分は、まだこんなまな板程度の平たい胸だというのに、この人も愛紗も、なんと大きな胸を持っているのだろう……と。

そして思ったという。この人についていきたいと。

そうすれば、自分の胸もう少し大きくなるのではないか……普段何を食べていれば大きくなるのかわかるのではないか……と考える。

☆

○Side 明久

「そして私と鈴々は、悟りました……このお方こそ、我々がついていくべき人物だ、と。世の中を見渡す目を持ち、優しい心と深い懷をお持ちであるこの方こそが、この乱世を沈めるべきお人だ……と」

「そっか……それでその後、義姉妹になったの？」
「はい。姉として……これほど誇らしい方は、天下に2人とおりません。この不とに全てを捧げよう、この人のために刃を振るおう……そう、決めた日でした」

☆

○Side 星

「そこまではよかったんだけど、ちょっとその後に色々大変だったのだ」

「……………大変？」

「うん、愛紗が桃香お姉ちゃんの考え方に感激しすぎちゃって、話聞いている後半で号泣したり、『師匠と呼ばせてください！』とか言い出したり」

「おや、それはまた意外な。あの愛紗がなあ……ふふっ」

「髪型同じにしてみたり……あとは、桃香お姉ちゃんのその頃の服がちよっと粗末だったから、自分の予備のをあげて……で、それを着てもらえて嬉しいのと、同じ服を着ていられて嬉しいって言ったり……」

「……………意外」

「同じ空気を吸えて、同じ大地に立って、同じ時を生きていることが嬉しい、とか言い出したときは、さすがに鈴々もちよっと引いたのだ……」

「ふむ……若干危ないところまで暴走していたのだな」

「……………何かの信者みたい」

ふむ……愛紗、お前の知られたくない……お前がこの当時の話を

するとしたらまず間違いなく省略するであろう事実が次々流出しているぞ。

主達の言葉を借りれば……『黒歴史』とやらか？ ふふっ、まあ、私はいいい酒の肴ができて文句はないがな。

☆

○Side 明久

「……何か今、酷く不穏な話がどこかで繰り広げられている予感が……」

「？ どしたの愛紗？」

「い、いえ、何でも……では、続きを」

おほん、と、愛紗は咳払いをしてから、当時のことを思い出して続ける。

「その後、私達と桃香様は、さっそく諸国行脚の旅路に出かけました。見聞を広め、世を知り、これからの道筋を見極めるために……」

「有限実行なんだ、すごいね」

「思い立ったが吉日、っていうやつですか？」

「然り。桃香様は、ああ見えて……という失礼ではあるが、いざと言うときの決断力はあるお方ですからね。山賊退治などと言う過去の栄光にすぎることなく、すぐさま私達とともに、礼も受け取ることなく、簡単な挨拶を済ませて村を出て、次の村へ……」

☆

○Side 星

「……行こうと思ったんだけど、桃香お姉ちゃんと鈴々のお腹がな
ったから、出発は明日にして村に泊まってから旅に出ることにした
のだ」

「おやおや、それは難儀な。しかしまあ、よかったのか？」

「うん！ 英雄だ、ってみんな歓迎してくれたし、山賊退治のお礼
……って、宿も食堂も無料にしてもらえたし！」

「……………お礼はちゃっかりもらってたと」

☆

○Side 明久

「それから我々は……自分で言うのもなんですが、八面六臂の大活
躍、とでも申しましょうか。民に仇なす山賊・盗賊を出会う端から
狩って進み……我ら3人、劉備・関羽・張飛とその名を聞けば、そ
の名を知らぬものなどないほどに」

「そのころから、3人共立派だったんですね」

☆

○Side 星

「うーんとね……戦ってはいただけど……愛紗と鈴々は有名になったけど、桃香おねえちゃんの名前だけ、有名になるのにちょっと時間かかったのだ……」

「戦っていないがゆえ……ですかね？」

「そう、かもなのだ……鈴々が守るから、別にそんなのいいんだけど……。」

「まあ、武人でもないのに戦場での働きを、というのもおかしいですからな」

「酷い時は……桃香おねえちゃんが、愛紗と鈴々の召し使いだと思われたこともあったのだ」

「………なんでまた？」

「だって桃香おねえちゃん、暇になると草鞋とか籠わらじとか編んでるし……お掃除とか洗濯とかも自分から進んでやるし……しかも、鈴々達や、村の困ってる人達の方まで」

「………庶民的だけど」

☆

○Side 明久

「まあ、噂の広がりとは……もともと、私が1人で、そして鈴々と2人で旅をしていたころの『黒髪の山賊狩り』という噂が先行していたこともあり、広まるのは割かし早かったですね」

「へー……愛紗って昔から有名だったんだね」

「あ、それ……白蓮さんの所で私も聞いたことがあります！ 少し前に、たなびく美しい黒髪をなびかせた絶世の美女が、長刀を手に山賊達に正義の鉄槌を下している……って」

「おはずかしい……ですが、正にその通りですね」

☆

○Side 星

「ちなみにその『黒髪 mountain 山賊狩り』だってわかって……愛紗、ちよこちよこがっかりされてたのだ」

「なんで？」

「質問を何個かして……で、愛紗がその『山賊狩り』だってわかると、まあ……怖がりもするんだけど……」

「………だけど？」

「思ったほど美人じゃないな、とか言って」

「おや、それは世の中も手厳しい」

「………十分美人だと思うけど」

☆

○Side 明久

「……やはり、どこかでなにかしら不名誉な話を……？」

「？ どしたの愛紗、さっきから？」

「………いえ……」

何でだろう、さっきから愛紗がちよくちよく挙動不審だ。

まるで、ここじゃないどこかで自分の恥ずかしい話を暴露されて

ることを悟ってるみたいな落ち着きのなさ……ってやけに具体的な例え言っというてなんだけど、そんなことあるわけないよね。

ともかく、その後しばらく……僕と姫路さんは、愛紗から、彼女達の昔の話を聞きながら警邏を回っていた。

基本的なところは変わってないみたいだったけど……僕らの知らない彼女達の姿を垣間見れた感じで、楽しかったと言えば楽しかった。

桃香はその頃から優しくて、おっとりしてて、でもいつも真剣で。

愛紗はその頃から生粋の武人で、強くて。

鈴々もその頃からやんちゃで、にぎやかで、勉強嫌いだったんだな、って。

……でも、それでも……それを聞いて一番最初に頭に浮かぶというか……いや、むしろ、考えるまでもなく明白で、それでいて喜ばしいことは……

……3人とも、その頃からお互いを信頼してて、すごく仲がいいんだな……ってことに、つきるんだろうな。

☆

○Side 星

まあ、それはそれでほえましいですかハイそうですね、と置いて、

「それで鈴々よ、似たようなその面白い話はあといかほどある？」

「にゃ？ まだまだいっぱいあるよ、聞きたい？」

「もちろん、このような極上のつまみ、そうそうありませんからな。そこな女官、酒を持って来てくれ」

「……………昼間から、他人の陰口を肴に酒盛り？」

「それも一興と言うものだろう。土屋殿はどうする？ 遠慮しておくか？」

「……………愚問を」

にやり、と笑う土屋殿の手には、天の世界から持ち込まれたという機械の数々が、しゅばつ、と一瞬で出現した。

たしか…………『れこーだー』とかいう名前だったか。

「ふむ…………と、いうことだ、鈴々、話の続きを詳しく頼む」

「……………できれば、愛紗だったら割愛しそうなところとか、特に詳しく」

「にゃ？ いいけど……………何で？」

「何、仕える主や仲間のことは、なるたけ詳しく知っておきたい、ということさ」

「それならいいよ！ えっとね…………」

「……………お主も悪よのう」

「いえいえ、天の御使い様ほどでは」

「「ふっふっふ…………」」

☆

○Side 桃香

えっ、と……

何だろう、この状況……？

警邏から戻ってきたご主人様と瑞希ちゃんと愛紗ちゃんからは……
……なんかその、ほほえましいものを見るような目で、ちよっと嬉し
そうに見られて……

反対に、食堂から戻ってきたところらしい、星ちゃんと鈴々ちや
んと康太さんからは……なんというかこう、生ぬるい感じの視線が
送られてきてます。

。愛紗ちゃん達のは……例えるなら、『頑張ってるね、応援してるよ』

星ちゃん達のは……例えるなら、『頑張ってるね、応援してるよ
(笑)』。

……って感じ。

………何で？

第23話 義姉妹と出会いと裏話（後書き）

さて、次回、

日常編なんですが……ちょっと、わき道にそれたいと思います。
どのような展開になるかは……次回。

なるべく早く更新したいです。

ではこのへんで。和尚でした。

第24話 遭難と襲撃と褐色の美少女（前書き）

今回、あの子が登場します。

第24話、どうぞ。

第24話 遭難と襲撃と褐色の美少女

○Side 明久

……まずい。

いや、これは本当にまずい。

え、何がまずいかって？

……迷った。しかも……山の中で。

僕の目の前には……うっそうと茂った森。木々が太陽光をさえぎり、薄暗い。

こんな森林、現代なら、地方の山奥にでもいかないとなかなか無いと思う。

「……これは、本気でやばいかも……」

どういう経緯でこうなったのかっていうと……僕は今日、領地の南の端っこのあたりの村まで、愛紗たちと軍を率いて遠征に来ていたのだ。調査して……もし見過ごせないようなら、そのまま壊滅させる算段で。

で、調査の結果……看過できない規模だったので、全軍でドカーンと一撃。

幸い、その場の戦いは何事も無く完全勝利したんだけど……その後が問題だった。

最後の悪あがきで突撃してきた敵の一団の攻撃を横っ腹に食らって……混乱したところでなんやかんやあって、

……はぐれた。

……はあ、なんて間抜けな展開……いや、洒落になってないけどね。

何がまずいかって言うと……具体的に2点。

1つは……単に帰り道がわからないこと。

まあでもこれは、何とかなるレベルだろう。愛紗達を探してくれてるかもしれないし……歩いてれば、少し開けた場所に出るかもしれない。食料も……まあ、木の実とかならありそうだ。

ホントに怖いのは、もう1つの方……盗賊の残党と出くわして襲われること……だ。

本陣から見てた感じだと、相当散り散りになってたし……生き残りもそんなにいない風だったから……部隊規模の連中がいるとは考えづらいけど……合流して集団になったようなのに出くわしたらまずい。

そういう不安があるから、大声で愛紗たちを呼ぶ、っていう手段が取れないんだ。

幸い、腰につてある竹製のポーチバック（のようなもの）の中に、保存の利く食料がいくらかと、いざというときの武器……刃物が入ってる。あと、身分証明になるものも。

これらを上手く使えば、大抵の局面は何とかなるはずだ。

何より僕には『召喚獣』がある。こいつがいれば、そうだな……
4、5人程度なら……最悪、どうにかなる。逃げながらだから、少し大変かもだけど。

まあ……凶器を持った盗賊と言えど、狂気をたぎらせたFFF団の連中に比べれば、その……なぜか見劣りして感じるから不思議だ。

ちなみに、腰のポーチバックは桃香のお手製。……こんなの作れるなんて、相変わらずホントに器用だな……。この前も、僕たちに草履作ってくれたし。

素直に感心するんだけど……やっぱり何か君主的なイメージと違っていく気がする。仮にも領主様の特技が、草履作りだの竹箆作りだのって……。

……と、その時、

「きゃあああああ————っ!!」

……お約束？

暗い森、もうすぐ夜、女の子の悲鳴。

……これってその……助けに行かなきゃダメかな？

☆

○Side ????

私としたことが……柄にも無く、甲高い悲鳴をあげてしまった。
……そんなことしたって、情況が好転するわけでもないのに……。
むしろ……後ろから追いかけてくるやつらを、刺激してしまうだけ。

くっ……何で、こんなことに……!?

「……はあ……はあ……はあ……っ!!」

私は今、息を切らしながら……足場の悪い森の中を走っている。
後ろは振り向かない。振り向けばわずかだけど……足が遅くなる。
そうすれば、奴らにつかまってしまいう危険がある。
捕まったりなんかしたら、何をされるか……

派遣されている先の豪族——袁家の遠縁らしい——の護衛の
任務を受けて、部隊を率いて彼らの遠征に同行したはいいけど……

その豪族の、穴だらけな警備体制のせいで……たかが盗賊に奇襲
をかけられた程度で、本陣が大混乱になってしまった。

おまけに、混乱の中で、私は本隊とはぐれて……森の中に迷い込
んでしまった。

護衛も……最初は何人かいたけど、襲ってくる盗賊たちの兵から
私を守ってとどまり、減っていった……ついには、私1人に。

その状況下で……とうとう、盗賊の残党に見つかって、追い回さ
れている。

戦おうにも、私の手元には剣一本……私自身、お世辞にも強いと
はいえない腕だ。

それに対して、賊の数は10人以上。全員が武器を持っている……
…屈強な男達。

こんなことで……姉さまやお母様に申し訳ないわ……。2人なら、
この程度、笑って乗り越えられただろうに……

……いや、襲撃されて笑ってる、っていうのもちよつとどうかと
思うけど、あの2人、こういう場面で笑う以外の行動選択が思い浮
かばないのよね……。

実際、2人とも嬉々として全員斬り捨てるでしょうし……

そうこうしている間に……だんだんと、私の体力も底をついてき
た。

くっ……今のままの調子で、あとどのくらい走れるか……と、そ
の直後、

茂みを突っ切った所で……幸か不幸か、私はいきなり開けた場所
に出て……

そして……そこに……

「……………えっと、どちらさま？」

そこに……1人の男がいた。

☆

○Side 明久

行こうかどうか迷ってたら、向こうから来たよ。

しかも、なんかこう……盗賊っぽい方々、大勢引き連れて。

僕の目の前にいる少女は……走っていたのか……、肩で息をしている。

「はぁ……はぁ……はぁ……お、お前こそ……何者だ!？」

あ、なんかしかも警戒されちゃってる……まあ、無理もないけど。

女の子の容姿は、やや薄めの桃色の長髪に、褐色の肌……気の強そうな顔で……背丈や歳は、僕とそんなに変わらないように思える。顔は……うん、汗とか浮かんでるけど……すごくかわいい部類に入る女の子だ。

……それらを差し置いて目を引くのが……あんだそこまでしますか、って具合の露出度を見せる、その少女の服。お腹のところとか……肩口とか……いや、開きすぎでしょ!？」

しかも、ボンキュッボンの出るとこ出てしまるとこしまった、理想的な体型と言いますか……その、理性を抑えるのが大変と言いますか……っていうか、それ普段着!？」

何だろう、そのカッコじゃ、盗賊に追っかけられても仕方ない気がするんだけど……。

「しっ……質問に答えろ! お前は誰だ!？ 盗賊の仲間か!？」

「え!？ い、いやいやいや! 違いますって!」

煩惱と格闘しつつ、状況把握に集中していると、焦りを隠せない様子の彼女が聞いてくる。ああ、やっぱりこれ、後ろから来た人達

盗賊なんだ。で、追われてるんだ。

すると、どうやら盗賊の皆さん、僕を見つけたらしく、

「おい、どうしますアニキ、何か増えましたぜ？」

「あ？ 知るかよ、獲物が増えただけ得じゃねえか」

あ、ロックオンされた。なんてとばっちり。

すると、その美少女ははっとして振り向く。その眼前には、追いついてきた盗賊たちがわらわらと……って多っ！ 何人いるのこれ！？

やばい……これは、召喚獣……いや、『白金の腕輪』使っても……ちよっと裁ききれそうに無い数だ……

「くっ……追いつかれたか……！」

「えっと、あの……」

「何だ！？」

ちよ、君まで威嚇しないで！ 怖い！ 僕怪しい者じゃないから！

ていうか……何だろう、この娘から感じる……この……威圧感？
みたいなのは？

……もしかしてこの娘、ただの女の子じゃない……のかな……？

いや、今はともかくそれより……

「あ、あの……こういう場合、僕はどうすれば……」

「知らん！ 自分のことくらい自分で考えろ！」

いや、この状況思いつき僕『巻き込まれた側』なんですけど。

「くっ……しかし、どうすれば……このままでは2人とも殺されるぞ……!」

「あ、既に僕も頭数に入れられてるんですね」

勝手に一蓮托生……っていうか、戦力にカウントされたらしい。

あー、まあ……敵として認識はされてないみたいだから、いいかな。

……と、それよりも今は……

「ふう……やれやれ……」

ため息をつきつつ……一歩前が出る。

その様子を見て、女の子と、盗賊さん達が目を見張った。

「お、おい、お前……何のつもりだ!？」

「いや、何って……いくらなんでもこの状況、女の子見捨てて逃げるわけにも、女の子に戦わせるわけにもいかないし……」

「なっ……!？」

目を見開いて驚く美少女。……? 僕何かへんなこと言ったかな?

「はぁ!? そのガキ、お前1人で俺達とやりあうつもりかよ?」
「なめてんのかコラ?」

あっはっは……そんな余裕ないですって。

けどまあ……どうにかしないと、っていうのは事実だな……5、

6人くらいなら、『白金の腕輪』も使えば何とかなるかもだけど、この数は……

それに、この娘……一応武器は持ってるみたいだけど……立ち姿からして、武将とか、そういう感じじゃないし……戦って強いわけじゃなさそうだ。

すると、一拍遅れて……

「お……お前っ、バカにしているのか！？ 私の代わりに戦うだと！？」

「え？ いや、それは……」

や、『代わりに』とは一度も言ってないんだけど……まあ、実質そうだけど。

でもまあ、女の子に戦わせるわけにも行かないしさあ……最悪、援護とかはしてもらいかもだけど……

「ば、バカにするな！ 何者かは知らないが、一般人に庇われるほど、私は弱くない！」

ん？ ……今の言い方……やっぱり君『一般人』じゃないの？
でも、じゃあ……強いのか？

「うっ……っ、強いかどうかと聞かれれば、その……」

「……そうは言えない、と？」

「ち、違っ……こ、こう見えても私は、『江東の虎』と……」

おおっ！？ ……なんか、こう……すごい感じの呼び名！ 実はすごい人！？

「……呼ばれていた……母上の娘で……」

だめじゃん！

引っ張っという何！？ そんなお約束な見栄の張り方はっ！？

何でこの場面で『うちのお母さんすごいんだぞ！』ってなノリで家族自慢するの！？

「で、でもその、私は私で、『江東の麒麟児』と呼ばれて……」

「……おおっ！？」

「………呼ばれている姉上の妹で……」

やっぱだめじゃん！

何さつきから！？ いや、別にそんな必死になって自己主張してくれなくても……

「そ、そんな私でも、『江東の聖剣』と呼ばれ……」

「母？ 姉？」

今度は誰だろう？

「………呼ばれたいなあ、と………思っている」

ついにはただの願望になってしまった。

……どうすんの、この状況？ ていうか、どうしろっての？

夢だけは大きなこのお嬢さん（胸も大きいけど）、もう半泣き。完全に自爆なのに。

「………おい、そろそろいいか？」

と、結構本気で忘れかけていた盗賊さん達から一言。

ていうか、今の漫才の間、律儀に待っててくれたんだろうか。意外といい人？

「どうすんだよ？ 抵抗して殺されるのか？ それともおとなしく身包み脱いでその女置いていくか？」

「いや……できればどっちも遠慮したいなあ、なんて……」

とはいったものの……どうしよう……！ そうだ！

僕はとっさに、腰のポーチ（桃香手作り）に手を伸ばす。この中には……護身用の小刀が入ってる！ これなら、相手も少しはひるむか！？

無理でも……やれることは全部やっておきたい。最悪、戦いになっても……襲って区他連中を迎撃しつつ、召喚獣で数を減らす、っていう戦法がとれるはずだ。

「っ！ 何か武器持ってたのか！？」

「落ち着けチビ！ 何を持ってた所で、この人数に勝てるはずがねえ！」

まあ、確かに、焼け石に水かもだけど……何もないよりはましだっ！

武器にもよるけど……FFF団との逃走劇で鍛えられた僕のスペックなら、この場を逆転することだって不可能じゃなくもなくもなかないといいな（願望）！

盗賊たちと女の子の視線が集まる中、僕は覚悟を決めて……ポーチの中から素早く爪切りを出して構え……

「……って爪切りで戦えるはずないじゃないかああっ!!」
「「「……………」」」

Oh、なんか既視感。^{デジャヴ}

がっくりと崩れ落ちる僕に向けられる視線の数々。……やばい、逃げたい。

盗賊とか、命の危機とか、そういう理由じゃなくて、この場から単にいたくなりたい。

「くっ……で、でも、何もないよりはましなはず……」

「いや、無い方がましだと思うのだが……」

「あなたはそんなこと言っちゃだめな側ですっ!」

「はいっ!?!」

ほぼやけっぱち状態の僕のシャウトにびっくりする女の子。

まあ、頼りない武器(?) だったのは認めるけど……夢を武器に戦おうとする君にだけは言われたくないから。

「……最近はこの辺、頭がちよっと残念な奴が多いのか……?」

? 今の、盗賊さんのセリフ……どういうことだろ。

僕はそれに入っていない、って自己暗示をかけつつ聞いてみると、

「アニキ、『この辺に多い』ってどういう意味ですかい?」

「ん? ああ……この前、盗賊仲間に聞いたんだけどよ……何でも少し前に、だいぶ残念な感じの頭の女に出くわしたらしい」

「へー、そうなんすか?」

「ああ。桃色の長髪に、胸が大きくて、色白の、ぼけーとした感じのやつだったらいいんだが……思わず同情したくなるほどだったそうだ」

……その特徴、どっかで聞いたような……？

というか、限りなくそんな感じのが身近に1人いるんだけど……まさかね。

ちなみに僕の隣では、謎の女の子Aが『……色白……ほっ、違う……』と安心してた。ああ……そういやこの娘も、桃色の髪に巨乳だな。肌は褐色だけど。

と、ともかくその……この状況どうにかして……

……と、その時、

「あいや、待たれいっ!!」

「「「!!」?」」」

突然、どこからとも無くそんな声が響き渡り……僕らの動きが止まった。

……っていうか……あれ? 今の声……どっかで聞いたことある声のような……

と、次の瞬間、

ひゅおっ、しゅたっ!!

「うわっ!？」

「なっ……!？」

「「何だあっ!？」」

いきなり、頭上から何か、白い『誰か』（もしくは『何か』）が、僕と女の子と、盗賊さん達の間には颯爽と飛び降りてきた。び、びっくりした……

その『誰か』は……すらりとした体型に、青色の髪を持ち、その手には赤い槍を持っていて……って、

「せ……星!」

「ご無事でしたか、主」

そう……こういうノリが一番似合うであろう、我が軍の將軍・星だった。

そっか……僕のこと探して回って、見つけてくれたんだ! しかもなんていいタイミング! この状況……もしかしくても助かったかも!

「な、何だ、こいつは……!？」 お、お前! 何者だ!？」

あ……つとと、無理ないけど……びっくりしてるよ、この娘。

「あ、大丈夫。この人、僕らの味方だから」

「え？ そ……そうなのか？」

「う、うん」

ちらりと視線を向けると、星はふう、とため息をついて、

「ご心配なさいますな、主。先ほどから見えておりましたゆえ、状況は把握しております。すぐに片付けましょう」

「『主』……？ おいお前達、それは一体どういう意味だ！？ 主従の関係なのか！？」

「あー、ごめん、ちょっとその……詳しいこと後で話すから、今は黙ってて！」

謎の女の子A、軽くパニック。けどごめん、今は事態の収束を優先させてください。

……って……ん？

星、今『さっきから見てた』って言った？

ねえちょっと、それもしかして、かっこよく出るタイミングうかがってて今まで出てこなかったとか……いや、まさかそんなはずないよね？

「何だア女！ 俺達と戦ろうってのか！？」

「ふん、威勢だけはいいようだが……戦いになればいいかな？ かかってくるがいい、生まれてこの方恋人もいなさそうな盗賊共め」

「なっ、何いっつー！！」

「何で知ってんだ！？」

別に必要無さそうな漫才を交えつつ、さらに僕のことは無視しつつ、星と盗賊たちとの戦いが始まった

ばきばきどか!!

「「ぎゃあああああ————っ!!?」」

そして終わった。

まあ、当然か……たかが盗賊が、星に勝てるはずないし。

「つ……強い……。い、一体何者なのだ……?」

隣の女の子がそんなことをつぶやくのを耳にしながら、僕はため息をついた。

……すごく疲れたけど、まあ、危機を脱したのは確かみたいだから、よしとしようかな……。

第24話 遭難と襲撃と褐色の美少女（後書き）

と、いうわけで新キャラ登場！　なんですけれども……

……描き終わってから気付いた。

……名前、出せてねえ……

ま、まあ……次回、ということで。

第25話 孫家と火傷と暗殺者（前書き）

さて、やっと名前出せます。

そして、さらにキヤラ追加です。
どうぞ。

第25話 孫家と火傷と暗殺者

盗賊の皆さんを（星が）一掃してから数分、

とりあえず安全を確保した僕と星、それに……まだ名前を聞いていない、褐色の肌の女の子（迷子風）。

まずは暖を取ろうということで、たき火を起こして……さらに、星が分けてくれた食料（総量の5割がメンマ）を使って、僕が簡単な料理を作った。

「ほお……やはり主、料理も一級品のようすな。ありものを使っただ急ごしらえで、これほどとは……」

「た、確かに……美味だ……」

「ははは、普通だよ」

2人とも褒めてくれた。いやあ、それほどでもないって。

「ところで……先ほどから気になっていたのだが、お主、何者だ？」

と、星は、おそろおそろ……といった感じで、でもさっきよりは警戒心も薄めて、僕特性の料理に口をつける、褐色肌の彼女に尋ねる。

そうそう、いろいろ会ったから今まで流してたけど、名前も聞いてないんだっけ。

その彼女も、名乗って思いなかったことに気付いたのか、『あつ』と声を上げた。

「そ、そうか……自己紹介がまだだったな……失礼した」

この娘、かしこまると、なんかこう……堅苦しい口調になるっばいな……。

こういう状況から立ち直ることに慣れているのか（なんで？）、びしっと姿勢を正し、

「名乗るのが遅れてすまない。私は孫権^{そんけん}、先ほどは……助けていただいて感謝する」

と、普通にして聞いていた僕は……彼女のその自己紹介に度肝を抜かれた。

ちよっ……え！？ 孫権！？ 孫権って……あの『呉』の王の！？

三国志には詳しくない僕だけど……映画とかでもそれなりに聞くくらいに有名な名前だから、すぐ思い出せた。ぼ、僕もしかして……すごい人に会っちゃったんじゃない？！？

すると、星も同じように……ではないけど、驚いたようにして、

「？ その名前……よもや江東の『孫家』の？」

「星、知ってるの？」

「ええ、有名ですからな。かつて初代当主・孫堅殿の名の下、江東に名をはせた名家……強大な武家の一族ですよ」

へえ、そうなんだ。

でも『国』じゃなく『家』ってことは……今は時間軸上、まだ『呉』ができる前段階なのかな？

「でも、そんなところのお姫様が……なんでこんなところに？」

すると、僕が『お姫様』と言ったあたりで……孫権さんの表情が曇った気がした。

……あれ？　もしかして……地雷踏んだ？

「……どれも、昔の話だ。母上の代のな……。今は、当主である姉様ともども……袁家につかえる客将の身だ」

「今の当主と言うと……孫策殿か？」

「ああ。今は……建業にいる」

そして孫権さんは、ちよつとだけ沈んだ声で、話してくれた。

孫権さんの実家である『孫家』は、江東で名をはせた一大武装勢力だったこと。

けど……彼女のお母さん、『孫堅』さんがなくなって以来、色々あって……今は、『袁家』っていう他の名家の客将の地位に落ち着いてる……ってこと。

現在の当主は、孫策さんって……孫権さんのお姉さん。2人は離れ離れになってくらしている……ってこと。

そして、彼女は……とある用事で出かけていたところを盗賊の襲撃にあい、仲間とはぐれてさまよっていたところを、僕らに出会った……ということまで。

「先ほどは本当に助かった。重ねて例を言わせてくれ」

そう言って孫権さん、ペコリ。うん、やっぱり礼儀正しい人だ。

「……と、いうことは……孫権さんも、僕と似たような状況なのか」
「？　どういうことだ？」

かくかくしかじか

と、説明すると……何か気になることでもあったのか、孫権さんが考え込んでる。

「……私も……先ほどから気になっていたのだが」

「？ 何か？」

「吉井……といったな。吉井殿は、一体何者なのだ？ 今の話を聞く限り、かなりの地位のようだし……趙雲殿のように、比類なき武を有する者を従えるなど……」

「ああ、孫権殿はやはりご存じないのだな。ここにいる我が主は……」

と、星が説明しようとしたその瞬間、

バチイン！！

「うわっ、熱っ！？」

「きゃっ！？」

「！ 主！？」

たき火にくべた薪の中に、質の悪いものが混じっていたのか……はぜて、火の粉が僕の顔に降りかかった。うわ、熱っ！？

すぐさま星がかけよってきて、見てくれる。いや、そこまで大したこと無いと思うけど。

「……ああ、この程度ならば大丈夫でしょう。つばでも付けておけば治ります」

「そっか、よかった。ありがとう」

「うむ。では失礼して……」

って、おい!?

なぜか星が、舌を出して僕の頬に顔を近づけて……!?!? ちよっ
……何すんの!?!?

「? ですから、つばでも付けておけば治ると思ひまして……」
「君のわざわざつけんでいいわ!」

なんちゅうことをナチュラルにしようとしてるんだこの人はっ!?!?
あ、危なかった……今だけは迷子で助かったかもしれない。愛紗
や姫路さんに見られてたら、どうなってたか……。

「ふむ……それは残念。では、この近くに小川があったはずですよ
で……水でも汲んできましょう」

「ん、ああ……なら、お願いしようかな。タオル濡らせば、冷やせ
るし」

「うむ、承知」

そう言って、星は駆け足で去っていった。

うーん……やっぱ扱いにくいところあるけど、頼りにはなるなあ
……

☆

○Side ????

「……好機、だな……」

「はい……」

どうやら何か用でもあるのか、先ほどまで2人のそばにいた、槍使いらしき武人は……その場から離れていった。……見回りにでも行くのだろうか。

……何にせよ、今が最大の好機だ。今、たき火の周りにいるのは……我が主と、正体不明の男1人……素性はわからんが、気にすることでもない。蓮華様の救出が急務だ。

盗賊たちとの混戦以来、行方がわからなかった蓮華様。この山にいる可能性が高い、というのは亞莎から聞いていたゆえ、私達二人で探しに入り……ようやく見つけられた。

ただし、お1人ではなく……謎の男と女と一緒にいたが。

どういう経緯でこうなったのかは不明だが、今はそれよりも……

何せ、ここはよその領地……不可抗力の蓮華様はともかく、我ら2人は見つければ厄介なことになるのは必至……見つからんうちに帰らねば。

と、

「……！」

「し、思春様！ あの男、刃物を……」

私の隣で、同じように身を潜めて様子を伺っているもう1人の少女……明命の言葉通り、蓮華様の隣の男が、刃物を抜いていた。

何のつもりかはわからんが……しかたない！

「……明命、あの男を。私は蓮華様を助ける」
「はい！」

……すまん、名も知らぬ少年よ……。

☆

○Side 明久

「な、何だいきなり!? 刃物を抜いて！」

「え? あ、ごめん……刃を鏡の代わりにして、火傷の具合見ようかなと……」

「そ、そうか……全く、驚かすな」

あ、驚かせちゃったみたいだ。失敬失敬。

まあ、暗い夜、隣に座ってる男がいきなり刃物抜いたら、そりゃびっくりするか……。

露骨にびっくりしてる（っていうか剣抜きかけてるし）孫権さんに心の中でわびつつ、僕は刃の部分に顔を映し、火傷の具合を確かめようとして……

……そして、絶句した。

火傷が酷かったからではなく……

鏡にした刀身にうつって……僕の真後ろの木の枝の上で、今にも僕に襲い掛かろうとしている……『誰か』が見えたからだ。

しかもなんか、抜き身の刃物持ってるっぽい……え！？　ちょ、何っっ！？

「うおわあああああっ！？」
「……っ！？（気付かれた！？）」

反射的に横に跳んだ次の瞬間、その影が跳躍してきて……その刃が、さっきまで僕のくびが会ったところをなぐ。

あ、あつぶなああああ——っ！！？　あと0.1秒よけるの遅かったら僕、首と胴体がさよならして死んでたかも！？

慌てて体勢を立て直しつつ、僕は、僕が今までいた所に着地する……暗殺者か何かと思しき影を見据えた。

孫権さんと同じような褐色の肌に、小柄な体躯。鈴々と変わらないくらいだ。

特徴的なのは、その手に持ってる、日本刀みたいな長い刀と……膝下まで届きそうな長い黒髪。一瞬マントかと思ったほどに長くて……つややか。ア○エンス。

そんなルックスの美少女暗殺者は、幼さの残るかわいい顔をおどろきにゆがめていた。『気配は完全に消してたはずなのに！？』と

か思ってるんだろうか？

「……っ！？ 気配は、完全に消してたはずなのに……かわされた
！？」

……答え合わせ、どうも。

すると……向かって左、あぜんとしている孫権さんの口から、

「……っ！？ み、明命^{みんめい}！？ あなた、何でこんなところに……と
いうか、何を！？」

「え、知り合い！？」

孫権さんの！？ ちょ、どういうこと……

ちりーん……

と、何か鈴のような音が聞こえた次の瞬間……

僕の左側の茂みから、凄まじい速さで何かが飛び出してきた……
僕に向けて、きらめく何か——おそらくは刃物——を振りかぶ
る。え、第2陣！？

そのあまりの素早さに、よけよう、と思うよりも先に……僕は思
ってしまった。

あ、死んだ………

「させるかあああああ——っ！！！」

ガギイン！！

と、またもや凄まじい速さで……僕と暗殺者（2号）との間に誰かが割り込んできて……暗殺者（2号）の刃を防ぎ弾き飛ばす。

……あれ、っていうか、今の声は……

「愛紗！？」

「ご主人様、ご無事でしたか！」

黒髪サイドテールをゆらし、相棒の青竜偃月刀を構えて僕を守ってくれている……頼もしい仲間の姿だった。

しかも、

「ご主人様あーっ！ 大丈夫ー！？」

「お兄ちゃん、助けに来たのだーっ！」

「主！ ご無事ですか！」

「桃香！ 鈴々！ 星も！」

いきなり集まってきた！？ すごっ！

そして、全員（桃香除く）で僕の前に立ち、暗殺者（両方）をけん制。あれよあれよという間に、防御陣形が完成。すごい……まるでどこかで見てたかのようなタイミングだ！

それを悔しそうににらむ、暗殺者2号。

こちらも褐色の肌で……紫色の短い髪に、すごく鋭い目。なんか、異様に丈の短い、赤色のチャイナ服みたいなのを着てて……手には、曲刀。背丈は……僕と同じくらい

服の丈が短すぎて、隠せてないっていうか……下からパンツが丸見えなんだけど……そんな眼福にいちいち氣を向けられないくらい、僕の心はパニックなう。

っていうかこの人、まとってる空氣が普通に鋭すぎて怖い。

すると、奇襲攻撃が失敗した暗殺者の2人は……

……なぜか、孫権さんの両隣に飛び退り、まるで孫権さんを守るような構えを取った。

……え、何で!?

あれじゃまるで、2人が孫権さんの仲間みたいな……っていうか、さっき孫権さん、そんな感じを匂わせること言ってたっけ……。本氣で何者!?

「蓮華様、ご無事ですか!?!」

「し、思春ししゅんまで……一体コレは……」

「おい、そこな賊」

と、會話をさえぎって星が言う。氣のせいか……声に苛立ちが混じっていた。

「孫権殿とどういつながりかは知らんが……我が主にいきなり斬りかかるとはどういう了見だ？ 聞かせてもらおうか」

「逃げて、今頃朱里たちが部隊を展開してこちら一帯を囲んじゃってるから無理なのだ！」

「そんなっ!？」

「く……っ!？」

鈴々のセリフと、思いがけない状況にショックを受けた様子の、暗殺者1号2号。

いや、僕も驚いてるけど。いつのまにこんな準備したんだか……

ああ、さては……星、水汲みに行った途中で、愛紗達に会って……そしたら、さっき僕が上げた悲鳴が聞こえて、ってとこかな。部隊展開は、朱里の判断だろう。

いやはや、ホントに頼れる仲間がいるよ僕は……

すると、暗殺者（2号）、落ち着きを取り戻し、孫権さんに話しかける。

「……蓮華様!こうなれば、私と明命で道を開きますゆえ、蓮華様はなんとか……」

と、

「思春、明命、剣を引きなさい」

「「「!?!」」」

今まであたふたしてた様子の孫権さんが……ふいに落ち着きを取り戻した様子で、意やむしろ威厳すら漂わせるような声で、一言。
その言葉に……そしてその雰囲気に、2人のみならず僕らも驚く。
え、何、本気モード？

あわてて暗殺者その1、明命って呼ばれてた方が話しかけるけど……

「れ、蓮華様！ 諦めちゃダメです！ 私達が……」

「そうではない!!」

「「……っ!!?!」」

お、孫権さん、女の子口調から、王様っぽいものの口調に。

「そこにいる彼は、盗賊から私を助けてくれ、さらに食べ物まで分けてくれた恩人だ。事情を入らなかつたとはいえ、恩人に手を出すことは許さん。上意である、剣を引け」

「し、しかし……」

「何度も言わせるな！ このような誇り無きまねをして……孫家の名を折る気か!?!」

「「……っ!!」」

うおお……孫権さん、一喝。

これが彼女の……後の呉の王の本気かってほどのド迫力に、そこにいる全員があっけに取られ、

どうやら家来か何からしい2人は……

「し……っ……」

「失礼……いたしました……」

言うと同時にひざまずいて、それぞれ剣を鞘に収める。おお、お見事……。

えっと……とりあえず、事態沈静？

それにしても……この状況、ホントに一体……？

「と、とりあえず……お話、聞こうか？　ね、ご主人様？」

そんな桃香のセリフによって、この場は（たぶん）収束した。

第25話 孫家と火傷と暗殺者（後書き）

一気に色黒キャラが3人になりました……書いてて楽しかったですけど。

それでも、原作にない展開って、考えるの大変ですね……。

その分楽しいですけど、更新が遅いのがネックですね……精進したいです。

さて、この後どうなるのやら……

あ、それと連絡が一つ。

感想のほうでもちろつと書いたんですが、前話のタイトルなんです……まちがえました。

何をかっという、仮題として考えてたやつをそのまま乗せちゃったんです。

なので、別に『再会』とかなかったのにタイトルに入っていました。すいません。

今はもう直しておきましたけども。

今後このようなことがないようにしたいです。

ではこれで。和尚でした。

第26話 飯と共闘と孫呉の未来（前書き）

毎度毎度遅くなって……とりあえず第26話更新です。

孫権編、完結。で、あの子も出ます。

どうぞ。

第26話 飯と共闘と孫呉の未来

○Side 明久

えー、暗殺未遂騒ぎがあったから、しばらく。

投降（？）した孫権さん達は、とりあえず僕らの軍の陣地に連行して、来てもらうことになった。

それと同時に、僕の迷子問題も解決。ほっ。

連行するなんて大げさだ、と言いたいところなんだけど……今回は実際僕が殺されなかったわけなので、残念ながら酌量の余地はちよつとないかな……。

普段は大人しめな桃香まで、僕が襲われた、って聞いたときは怒ってたし。

それで、今しがた陣に帰った僕らは、留守番してた朱里、雛里、姫路さん、ムツツリーニの4人と合流した後、孫権さん達への取調べを開始……

……しようと思ったんだけど、孫権さん達3人の露出度がヤバイ服装を見たムツツリーニが鼻血の海に沈んで、一時陣の中がパニックに陥ったため、中断。

数分後、天に召されたムツツリーニを全員で見送ってから再開となった。

「明久君、土屋君を勝手に死なせちゃダメです！」

「あ、うん、ごめん。冗談冗談」

訂正、一応ムツリーニは生きてます。

鼻血はどう見ても致死量だったけど、出血多量くらいで奴は死なない。

……と思う。

まあ、話を戻そう。

ともかくまあ、今、僕らはようやく再開した軍議の場で……孫権さん達の話を聞いているところだ。

さっきも言ったとおり、ムツリーニを除く劉備軍メンバー全員がそろってる。

その中心に、皆に囲まれる形で……孫権さんと、その家来の2人……周泰ちゃんと甘寧さんがいる形になる。

ちなみに、髪の毛の長い、忍者みたいな格好の方が周泰ちゃん、目が鋭くて、紫色の髪の方が、甘寧さんらしい。

その3人から……しゃべってるのは主に周泰ちゃんと孫権さんだったけど……身の上と事情を聞いたあたりで、桃香がまず口を開いた。

「つまり……軍が盗賊の襲撃を受けた拍子に、孫権さんがはぐれちゃって……」

「その後、僕に出くわして……」

「で、孫権さんを探して来た、甘寧さん&周泰ちゃんが……明久君と一緒にいるところを見つけて……ってことですね？」

「ああ、そうだな……それで間違っていない」

僕、姫路さんも加わった質問を、孫権さんが肯定で返す。

ちなみに、孫権さんの真摯な態度と、2人の忠誠心を信じる意味で、特に拘束とかはしてない。……武器は預かってるけど。

しかし、話聞いた限りだと……ほとんど不可抗力って感じもするんだけど……と、思ってたなら、鈴々が憤慨したように、

「でも、それなら何でお兄ちゃんを殺そうとしたのだ!? 鈴々は見てたぞー!」

あ、そうだ、それがあつたつけ。
すると、慌てたように首を振りながら、今度は周泰ちゃんが、

「い、いえ、それはその……ご、誤解ですっ! ちゃんと峰打ちで、気絶だけしていただこうと思って……」

「だとしても、あんな物騒なやり方でやることはなかったんじゃない?」

「事情を話して、普通に引き取ってつれて帰る、っていうんじゃないじゃダメだったんですか?」

と、桃香&姫路さんの当然の疑問。もちろん、僕もそう思う。
すると、それに答えたのは……孫家サイドではなく、朱里だった。

「おそらく……領土の問題があつたから、だと思います」
「へ? どういうこと?」

「ご主人様、ここは、桃香様の治める領土です。流民や旅の商人ならともかく、孫権さんのような要人や、甘寧さん達のような位の高い武官の場合、国境を越えるには、桃香様に事前に断りを入れなければなりません」

「でも、お三方は今回、その正規の手続きを踏むことなく、無断でこの領地に侵入したことになりますから……問題行動です。最悪の

場合、外交問題になりかねません……」

雛里も加わって説明してくれた。おお、よくわかった。
なるほど……そういうことか。現代で言うところの、不法入国だな。

「でも朱里、雛里、いくらなんでも仕方ないんじゃない？ 孫権さん、敵から逃げるのに必死だったわけだし……周泰ちゃん達も、孫権さん守ろうと必死だっただろうし……」

「はわわっ、で、でもこういう外交の問題は、その……こういう乱世では、慎重に取り扱うべき問題で……その……」

「あわわ……か、仮に孫権さんのそれを認めるとしても、武官のお2人は確信犯ですから、ちよつと弁明の余地が、その……」

うーん……いつもながら、政治って難しいな……。すると、今度は愛紗が、

「何よりも今回、この武官の2人は……ご主人様に対して刃を抜いています。先に述べた理由と違って……それは到底許されることはありません」

「しかも主は、この領地においては……県令である桃香様と双壁をなす存在。知らなかった、で済まされる話でもないですな。大問題でしょう」

「や、やっぱり、その……このままお咎めなし、というわけにはいかないかもです……」

そして星、雛里、ダメ押し。

雛里は言いづらいのか、どんどん声が小さくなっていった。
ま、かわいいけど。

しかしまあ、なるほどね……気絶させてこっそり連れ帰ろうとした理由は……主君を案じたがための行為だった、ってことか。……やられる方はたまったもんじゃないけど。

見ると、凶星と見える。甘寧さんはポーカーフェイスだけど、周泰ちゃんは……任務失敗と、そのせいでよっぽど大きな問題を作ってしまったことに責任を感じて、なんかもうすごくいたたまれない雰囲気をかもし出してる。

……自分の主の身を案じて、やむを得ず、っていう理由なのはわかったけど……結果として、見過ごせない問題が浮上しちゃったなあ……どうしよ、これ？

と、その時、

「申し上げます！ 伝令より、連絡事項が！」

「え？ 何？」

おお、ちょっとびっくりした。

突然、伝令係の兵の人が入ってきて、そんな一言。しかも、急いでるっぽい？

何だろう、物見とか、斥候とかの関係は、ムツツリーニの管轄のはずなのに……って、ああ……今ダウンしてるんだっけ。

そして、その兵士さんの報告はというと……

「はっ！ ここより南西の平原において、盗賊の一団を発見！ ただ……どうやら、向こうの領地のそれらしき軍と交戦中のようにです！」

「……っ!？」

その報告に……今まで務めて冷静に振舞っていた孫権さんの顔が、ぎよつとしたものになった。

しかも、周泰ちゃんに……甘寧さんまで（微妙にだけど）驚いた。え、どしたの？

「れ、蓮華様！ い、今の報告、もしかして……」

「う、うむ……ま、まさか……!」

……？ なんかただならぬ雰囲気……

すると……孫権さん、なぜか血相を変え、僕と桃香に向き直った。
え、何？

「吉井！ 劉備！ 頼む、一時的にいい、私達を解放してくれ！」

「え!？」

「なっ……何を言い出すのだ！ 藪から棒に!」

驚きつつも憤慨した様子で愛紗が返す。

けど孫権さん、びびってひっこむどころかさらに勢いを加速させて、

「無理は承知で頼む！ 今の報告にあった軍勢……向こうの領地に残してきた我らの軍かもしれんのだ!」

「え!？」

そうなの？ そりゃ大変だな………って……ん？ ちよつと待てよ？

確か、その軍の総大将が孫権さんで……その軍を引っ張る主要な

武官が、甘寧さんと周泰ちゃんだったんだよね……？

でも、3人共ここにいるわけで……

……それってつまり……

「ちよっ……その軍、指揮系統が誰もいない状態で戦ってるってこと!？」

「「えええっ!!?」「」」

んなムチャクチャな! 戦略も指示も無い状態で戦えるはず無いじゃない!

周泰ちゃんの話だと、何人か信頼できる人を見繕って、自分達がない間の軍の管理を任せてきた、って話だったけど……あくまでそれは、何も起こらない、ただそこに駐留してる状態に限っての話。戦闘の指揮系統として機能するかっていうと……NOらしい。

すなわち、いくら訓練されてるとはいえ……そんなブレーンを失った状態で、しかも自軍より数が多い盗賊連中の襲撃にさらされてる……って、勝てるわけ無いじゃない!

どうすんの!? このままだと孫権さんの軍勢、全滅しちゃうよ!?

それを全員が悟った陣の中に、緊張感が走る。

ある者は慌て、ある者は冷や汗を流すその状況下で……どうやら同じことを考えたらしい僕と桃香が、すばやくアイコンタクトをかわす。

雄二なんかとやれるような密度の濃いものはできないけど……考えてることが同じだから十分だった。

「頼む！ 私達の軍をここで失うわけにはいかない、帰還を許可してくれ！」

「都合のいいことを言うな！ 自業自得の状況を理由に、罪を帳消しにできるとでも思うのか！ 貴様ら、自分達が一体何をしたと思っ……」

「何ッ！？ 貴様、蓮華様に何を無礼な……」

「何だと、貴様らこそ、ご主人様に対しての数々の……」

「お……おおお落ち着いてくだしゃい愛紗さん！ 言い争ってる場合じゃないでしゅ！」

「し、ししし思春様も！ 今はその、それよりも重要な……」

主のことゆえに怒りを隠そうともしない愛紗と甘寧さん、大慌てで2人とをめる朱里と周泰ちゃん。

すると、これ以上愛紗に言っても平行線だと思ったのか……孫権さんは向きを変え、僕と桃香に直接交渉しようとして……

「罪を帳消しにしてくれとは言わん、後で責任は取る！ 頼む、私程度の頭ならいくらでも下げよう、一時的にでいい……私達、を………??」

いつの間にか僕達2人が忽然といなくなっていたので、ぴたっと動きを止めてしまった……みたいに聞こえた。

「……あれ？ 明久君たち……どこに？」

「主なら、今さっき桃香様とともに、どこかへ駆けて行ったぞ？ 何やら心を通わせたように、うなずきあって」

「あ……あわわ………ま、まさか……」

で、次の瞬間、

「愛紗ー！ 出陣用意するように通達出てきたよー！」

「物見さんも出してもらったし、地図ももらってきたからいつでも出発できるよ、愛紗ちゃん！」

「「は！？」」」

そんなことを言いながら僕と桃香が駆け足で戻ってきたので、だろう。星を覗く全員がパニックフェイスで出迎えてくれた。

……何驚いてるんだろう……って、聞くまでも無いか。

「ちよっ……ご、ご主人様！？ 桃香様！？ 出陣って……もしや、

この者達の言うことを信用して、聞き届けるおつもりですか！？」

「うん」

「何の迷いもなく即答しないでください！」

「……………うん」

「迷った上で肯定すればいいというものではありません！ というか意味ないでしょ！」

「どちらかと言えば、この問答の方が意味の無いものに聞こえるのだが……？」

言うな、星。大当たりだから。

「だって、このままだと孫権さんの軍勢、全滅しちゃうんでしょ？ すっごく強くて主思いのいい人たちらしいのに……だったら助けなきゃだよ、愛紗ちゃん！」

「と、桃香様、それは……ですが、今はご主人様襲撃の一件についての話がまだ……」

「そんなこと後でいくらでも話せるから！ さっさと助けに行こう

！　ね！」

「なっ……『そんなこと』ってご主人様、これは極めて重大な、外交上の問題でもあるんですよ！？　それをきちんと理解していないんですか！？」

「僕が理解していないってことを理解していないの、愛紗は！？」

「あ、す、すいません………ん？　私は今なぜ謝ったのだ……？」

さて、何かよくわからんやり取りのうちに、なぜか愛紗が考え込む姿勢に入ってくれたので、

今のうちに……と。

「鈴々、隊をまとめて戦闘準備して。星も……頼める？」

「ふむ、主の命とあらば是非もありませぬ」

「よしっし、思いつき暴れるのだ！　今度こそ逃がさないぞー！」

「朱里ちゃん、雛里ちゃん、作戦考えてもらえるかな？」

「は、はあ……でも……その……」

「……朱里ちゃん、これもう、何言っても止まらないんじゃないかな……？」

「ははは……そうだね……御意です、ご主人様、桃香様」

「ちよっ……ご主人様！　何を勝手に……」

ちっ、愛紗め、もう復活したか。

「あ、それと孫権さん、周泰ちゃん、甘寧さん、これ、さっき没収してた武器です」

「え？　あ、ど、どうも……」

「だから桃香様もそんな勝手に……っというか武器まで！」

「じゃ、桃香、号令出してくるね……あれ、カンペどこだっけな……」

「ご主人さま！ ですから……ていうかカンペって何ですか！？」

「愛紗、もう諦めろ、ああなったら主達は止まらん」

「星！ 何をわかったような口を……いや、実際そうだが……」

「ほらほら、黒いお姉ちゃんたちも急いで準備するのだ！ 敵は待つてくれないぞー！」

「く、黒いお姉ちゃん、って……まあ、気にしている時でもないか……思春、明命！」

「「はっ！」」

「あ、でも、ご主人しゃま！ その領地に入るには、孫権さんの許可が……「構わん！」……出たので行けます、ご主人様」

ナイスタイミング、孫権さん。

よし、それじゃ、約一名のぞき全員の心が一つになった所で、

「よし、それじゃ皆、盗賊退治もかねて、はりきって孫権さんの軍を助けようっ！！」

「「「応——っ！！」」」

「はあ……もう勝手にしてください」

お、愛紗、諦めた。一件落着。

じゃ……行きますか。

☆

で、勝った。

何、略し過ぎだって？　しかたないじゃん、特筆すべきことが無いんだもん。

僕らが軍をまとめて、朱里と雛里の作戦で……背後から敵に突っ込んで……その隙に、孫権さん達が軍に合流。挟み撃ちにしてフルボッコ。

結果的に、盗賊軍団は壊滅。大勝利。おわり。

あ、それと……強いて挙げれば、孫権さんの軍の被害が思ったより少なかった。

どうも、指揮系統（仮）のメンバーの中に……武官にも関わらず、かなり優秀な部類に入る頭脳を持っていた人がいたらしく……その人の指揮のおかげで、どうにか戦線を維持できていたそうだ。よかったね。

ってなわけで、今現在、周泰ちゃんと甘寧さん、そして孫権さんが、自軍の後処理と整理を終えたということで、僕らの陣に来ている。

なんでも……お礼を言いたいんだそうだ。

「例を言おう、劉備、吉井明久……ここで帰れなければ……私は、大切な孫呉の軍を失っていたかもしれない。本当に……助かった」「いえいえ、困った時はお互い様、全然気にしないでいいですよ」「それに、僕らも……孫権さんの領地に入ることを許してくれたおかげで、私達も迷惑な盗賊さん達を一網打尽にできたからさ、お互い様ってやつでしょ」

「ふっ……どこまでも、甘いと言うか、優しいというか……」

ははは、言われなれてます。

というか、僕らが拘束してたせいで軍が全滅しちゃった、なんてことになったら……その方が後味悪いし。だから、気にすること無いのに。

「そうはいかない。何せ……一方的にわれらに非がある状況に、目をつぶってもらったのだからな。約束どおり……私達は再び、とらわれの身と……」

「あ、そのことなんだけどね？ 孫権さん達、このまま帰ってもらっていいよ？」

「は！？」

律儀に約束を守ろうとしていた孫権さん、びっくり。いや、無理ないか。

けど、これ実は……事前に話し合ってたんだよね。この戦いが終わったら、孫権さん達どうしようか、って。

不法入国に、僕への暴行……それらは、確かに決して見過ごせない。外交上、重大な問題行為だ。

……って、朱里が言ってた。

けど……そこを何らかの形で処罰しようとする……後々いろいろ面倒なことになるかもしれない。

なんでも……未だ『孫家』っていうのは、客将の立場であれど健在で……1つの勢力として確立してるらしいし。そんなところのお嬢様をどうにかして、にらまれたくない。

それよりだったら、『貸し一つ』ってことで帰ってもらった方が、

恩も売れるし、こちらの大徳も示せる……っていうのが、朱里のプランだそうだ。

……というか、不可抗力でこうなったのに処罰とか……なんかやだ。

「それが本音でしょう、ご主人様、桃香様」

「うん」

「うわ、即答なのだ」

ぶっちゃけ、襲われたことに関しても……まあ、殺すつもりは無かったらしいしね。

それに、FFF団の連中のおかげで、襲われたり追っかけられたり、っていうのには、悲しきかな慣れてるから。

そのこと言うと、愛紗たちが何ともいえないような表情になるから……言わないけど。

それでも十分、孫権さん達は啞然とした表情になって……と、その時、

「あ、あの……」

「「!?!?」」

陣の入り口の方から聞こえてきた声。

その声に、全員が振り向いて、声のした方を確認する。

が……その中で、とりわけ……敏感というか、過剰に反応したの

が……

「……………っ！！？」

「えっ！？ い、今の声……………！？」

僕と姫路さん。

……………っていうか、今の声は……………まさかっ！？

あわてて、その声の主が見えるところまで……………猛ダッシュで2人とも移動すると、

「ひゃあっ！？ な、何ですかっ！？」

「……………あ……………」

……………そこにいたのは、知らない女の子。……………なんだ、人違いか……………。猛スピードで出てきた僕ら2人に、びっくりしてると見える。ごめんごめん。

その……………なんていうか、知り合いに声が似てたもんで……………思わず……………

残念なことに……………『彼女』じゃなかったみたいだ。

その、間違いでビビらせちゃった女の子はというと、

ちょっと目つきが悪いけど……………かわいい顔で、茶髪をお団子にして頭の後ろでまとめている。

チャイナ風の、そしてやはり露出が大きい服に身を包み……………なんかこう、キョンシーとかかが被ってそうな帽子と、右目の片眼鏡モノクルが特徴的だ。

そんでなぜか……………袖が異常に長い。足元まで届きそう。……………何か入れてんの？

僕的には、その袖の分の布を服にやると、露出度が丁度よくなると思うんですけど。

「……………それも個性」

「あ、ムツツリーニ、起きたんだ」

我が軍の隠密隊長、ようやく復活。

ちらっと孫権さん達のほうに視線を向けて、また鼻血出しそうになっただけど…………虚仮の一念で耐えて見せている。おお、男だ。

…………とと、それより…………この子、誰だろ？

すると、そこに入ってきたのは…………孫権さんの解説。

「ああ、紹介しよう。この者は呂蒙。先ほと言った…………我々の不在の間に、軍に指示を出してくれていた者だ」

おお、その子が例の。

すると、その娘…………呂蒙ちゃん、一步前に出て、

「ど…………どうも、その…………りよ、りよりよりよ、りよもっ呂蒙だと思えますっ！」

「思っでどうする」

「あうっ！」

自己紹介に失敗した呂蒙ちゃんは、甘寧さんの辛辣なセリフに涙目になっていた。

ま、まあ、その…………落ち着いて、ね？

「は、はい…………せ、姓は呂、名は蒙、字は子明です！ よ、よろしくお願いしますっ！」

うん、よくできました。

僕らの方も、各自自己紹介を済ませて……それから、孫権さんたちはそのままお返ししますんで、ってことを、呂蒙ちゃんに説明した。

すると、あからさまに呂蒙ちゃん、ホッとした顔。

なんでも……このまま孫権さん達が拘束される、って事になった場合……呂蒙ちゃんが代表として軍を率いて帰還するってことになってたんだとか。

とんでもないプレッシャーから開放されてだろう、すごくホッとしてる。

「まあそういうわけだから……孫権さん、気をつけて帰ってね、ってことでいいよね？」

「し、しかし……」

「答えは聞いてない！」

「は？」

元ネタがわからなければただのトチ狂ったセリフなんだけど、その場のノリなので問題なし。

すると……まだ何か言いたそうな孫権さんだったけど……どうやら折れてくれたらしい。

やれやれ、とため息をつく。ふっと……口元を緩めて。

「ならば……素直に厚意に甘えさせてもらおうとするか。礼を言う、吉井」

「いやいや、なんでもありませんって、孫権さん。桃香の言葉を借り

れば、『困った時はお互い様』ですから」

「……蓮華^{れんふあ}、だ」

「え？」

ふっと……会話の中で、孫権さんがそんな事を言った。
ん？ え、今のって、もしかして……真名じゃ？

「礼にもならんが……お前には預けてもいいだろう。私の真名だ、これからはそう呼んでくれ」

「えっ！？ い……いいの！？」

「構わんさ、大きな借りもできたことだしな」

そう言って、にっこり。

その笑顔は……すごくかわいい、素直な……女の子としての笑顔だった。ちょ……やば、かわいすぎる！ 写メ撮りたい！

……と思ったら、後ろでムツツリーニがさっきからデジカメで撮りまくってた（フラッシュなしで）ので、安心。後で売ってもらおう。

すると、それに続く形で、

「あ、蓮華様がお認めになった方にでしたら、私も……明命^{みんめい}とお呼びください！」

「わ、わわわ、私も、その……亞莎^{あーしえ}と、どうか！」

立て続けに、周泰ちゃんと呂蒙ちゃん……もとい、明命ちゃんと
亞莎ちゃんも真名を預けてくれた。おお、嬉しい。
で、残りの……

「……………ししもん思春、
だ」

……随分ためましたね？

まあ……結果的には許してくれたから、嬉しいけど。

こうして、孫家のメンバーの皆さん（一部だろうけど）に真名を
預けられ、お返しにこちらも預けて……その会合はこれまでとなっ
た。

……こういう時、僕も姫路さんもムツツリーニも、真名が無い身
としては肩身が狭い。預けられるばかりの一方的で……はあ。

その後、『この礼はいつか必ずする』と言い残して……孫権さん
達とは国境で別れた。これからどちらも、帰って……忙しい後処理
が待っている。

蓮華たちは、今回の一連の事件の報告。僕らは、盗賊討伐の後処
理。

やれやれ……また忙しくなる。仲良く慣れたとはいえ……今後、
当分は合えることも無さそうだ。

ま……元気にやっててくれれば、それでいいけどね。

こうして、色々と予想外の事態が起こりすぎた今回の遠征は……
他国との強力（？）なパイプラインができた、というおまけつきで
終結した。

うんうん、めでたしめでたし。

☆

○Side 蓮華

拠点に帰る、行軍の途中のこと。

隣を馬で走る思春が、私に問いかけてきた。

「蓮華様、よろしかったのですか？ あのような者に、真名など預けて……」

「構わないわよ、思春。悪い奴ではなさそうだったし……大きな恩を作ってしまったもの。このくらい、礼節として然るべきだわ」

「はぁ……」

まだ不安げだけど……まあ、その必要も無いでしょう。

劉備に、明久……だったかしら。あの2人、底なしのお人よしのようだけど……短い間一緒にいただけだけど、あの2人には私は、とても好意的な印象を持てた。

それに……あれほど見事な武将や軍師が集まっているんだもの。

……義勇軍とは思えないわね。あれも……2人の人徳のなせるわざ、なのかしら。打算的だけど……仲良くなっていて、あとあと後悔はしなさそうなのよね。

……できれば、次に会った時は……孫呉復興の道を、ともに歩んでもらいたいものだけど……欲張りすぎかしら。

でも、不思議なことに……また、一緒に戦えそうな気がする。彼らとは……。

ふふっ、お姉さまみたいなことを……私も孫家の娘、
かしら。ということ

第26話 仮と共闘と孫呉の未来（後書き）

新キャラ・呂蒙登場。

そして全員と真名を交換して……とりあえず終了。

……声優ネタとか色々入れてすいません。

次回からまた日常……の予定ですが……ネタが毎度難産で困ってます。

がんばらなきゃ……まだ書きたいことはあるのに……。

ではこのへんで。和尚でした。

第27話 勉強と軍師と一意専心（前書き）

今回はちびっこ2人のターン？

第27話 勉強と軍師と一意専心

○Side 明久

場所が変われば気分も変わる。

人間の感情や気分なんてのは、状況をちょっとばかしいじくってやるだけですぐに変えられる、そしてやる気になって、効率が上がる……そういう謳い文句。

普段はやる気にならない漢文の勉強だって、ほーら、こうして小鳥のさえずる庭先に場所を移してみるだけで、楽しいホームワークタイムに早がわり……

「したらどんなによかったか……」

「？ えっと……気分、変わりませんか、明久君？」

姫路さん、あんた聖人君子か。

……いやあ……僕は場所が変わったくらいじゃ、相変わらずこの呪いの1つ2つくらいならかけられそうな異世界言語の集合体を好きになることなんぞできません。

まあ、なんとなく察しついたと思うけど……今、姫路さんと一緒にお勉強中。

普通ならすごく嬉しいシチュエーションだ。何時間だってぶっ続けでやろうって気になるし……テスト前の一時期は、実際にそんな感じでハイペースの猛勉強を乗り切った。

……なのに僕のミス（内容は聞くな）で結果を出せなかったのは痛恨の極みだけ。

しかしそれでも……それが何日間、何週間と続くと……さすがに姫路さん印の癒し効果も薄れてくるわけで……
申し訳ないけど……やる気でないなあ……。

「あー……なんで言葉が通じるのに、文字は漢文なんだよ……」
「あ、あはは……まあ、仕方ないですよ、中国ですし……それに、中国特有の感じが見られない分、楽じゃないですか？」
「そうだけど……」

まあ……確かにあんな、日本の漢字と似てるけど、よく見ると違う……っていう紛らわしい連中にまで登場された日にゃ、そりや今度こそお手上げだ。

日本語の漢文もわからないんだから、苦しさは変わらないけど。

っていうか……ホント何なんだろう？　口から出てくるのは日本語、文字は漢文って……バランスおかしくない？　読むときと書く時の言語が違うんだもん。

「まあ、考えても仕方ないですよ……実際にそうなんですし、どうにもならない以上……私達がこの世界に馴染んでいかないと」
「それはわかってるんだけどさあ……」

紙は貴重だから木とか竹に書くのとか、間違えても消しゴム使えない（っていうか無い）っていうのは別に我慢できるけど……メインの筆記用具が『毛筆』ってのが地味にっらいんだよね……あれって書くの疲れるし。

なんかムダに、小学校の頃の書き初め思い出しちゃったよ……全

然嬉しくなかったけど。

ちなみに僕の記憶だと、『一日一善』^{いちにちいぜん}って書いた姫路さんは金賞もらってた一方……僕の書いた『一火弾乱』^{いっかだんらん}なる作品を見た先生が胃薬を飲んでた気がする。

評価も、他の人が『よくできました』『がんばりましょう』だったのに対して、僕のは『先生は君の味方ですよ』だったし……

というか当時の僕、何でそんな漢字知ってたんだろう？

なので、得意でもなく、いい思い出もないこの毛筆ってやつは、好きになれないんだよあ……。

なっても勉強はどうせ嫌いだけどね。

「ねえ姫路さん……こんなの勉強するより、常に通訳係でも何でもそばに用意してもらったほうが効率的じゃないかな？ 一応、そのくらいのことはできるでしょ？」

あんまり自慢とかしたくもないけど……僕、一応桃香と対等の位置づけだから、それなりには偉いんだし。

「もう……だめですよ明久君、前にも言ったじゃないですか。確かに可能ですけど……読み書きもまともにできないんじゃない、為政者として頼りないです」

「あの、ごめん姫路さん、『いせいしゃ』って何……？」

「もう……だめですよ明久君、前にも言ったじゃないですか。確かに可能ですけど……読み書きもまともにできないんじゃない、この町のリーダーとして頼りないです」

言い直してくれたのは嬉しいけど、コピペばりにそのまんまな言

い回しという姫路さんの気遣いが逆に心をえぐる。

……姫路さん、僕を気遣ってくれたのは素直にありがとう。でもそれなら普通に教えてくれた方が嬉しかった。

「まあ……平たい話がメンツってことか。やれやれ……なまじ偉くなっちゃうと逆に大変だなあ……」

「そうですね。でも明久君、だからこそ責任重大ですよ、がんばりましょう！」

「はは……そうだね。……あ、そうだ、今日の晩御飯メンチカツにしよう」

「……あの……もしかして『メンツ』から連想しませんでした？」

正解。安直でごめんね。

けどこの前、代用の材料見繕って上手く作れたんだよね。

「ま、まあ、いいですけどね……」

するとその時、

気まずそうな乾いた笑いを浮かべる姫路さんの……その向こうに、

「あれ、朱里に雛里？」

「え？ ……はわっ、ごごごごご、ご主人さま！」

「えー！ あ、あわわ……ど、どうも……」

あ、失敗失敗、驚かせちゃったっばいな。

渡り廊下を歩いていた朱里と雛里は、僕の声に気付き……その姿を視認して盛大にビビると、そろってぺこりと一礼。

仕事途中でたまたま通りがかったみたいだ。

「今日も2人ともがんばってるね、お疲れ様」

「本当……朱里ちゃんも雛里ちゃんも、毎日毎日すごい量の政務をこなしてますもんね。すごいです」

「そ、そんな……もったいないお言葉です……」

「そうです、その……私達なんか、まだまだで……」

あくまでも謙虚な軍師コンビ。うんうん。いつもながらかわいい。……けど、謙虚にしすぎというか……朱里達の仕事量でまだまだなんて言ったら、僕なんかミジンコ以下だよ。

現に今、僕と姫路さんがやってる勉強用問題集の倍くらいの量の書簡抱えてるし……内容の難易度にもよるけど、アレは僕の半日分だな、大体。

すると、2人が、僕らが広げてる勉強セットに目がいった。

「あ、ご主人様……この世界のこのお勉強ですか？」

「うん。まだまだわかんないこと多すぎて、さっぱりだからね……」

「これは……初心者用の文字の教本ですね」

雛里、正解。

この前警邏に行ったとき、愛紗が見繕ってくれたやつだ。『この世界の文字の勉強には最適かと』って。

……これでも、正直難しいんだけどね……ははは、情けない。

「しょうがないですよ……ご主人様は、全く違う概念の文字があるところからいらっしやったんですから」

まあ、それはそうなんだけど……姫路さんは普通に使えてるしなあ……。

漢文とほとんど同じだから、書く方はともかく、読む方に関しては、姫路さんは最初からほぼできてた。

学習能力高いから、愛紗とか桃香とかから書く方も習って、ぐんぐん上達して……今じゃ、この世界の一般市民ばかりには読み書きできるようになってるんだよ、この人。

何と言うか。つくづく僕なんかとはレベルが違うよなあ……世の中不平等だよ。

「ま、まあ、人それぞれですから……ね？　ご主人様も、これからがんばれば、絶対上達しますよ！」

「そ、そうでしゅ！　私達も、お手伝いしますから……ね？」

「ははは……ありがとうございます……」

励まそうとしてくれる朱里&雛里。

純粹に嬉しいんだけど……この励ましてくれてる分野が『勉強』で、しかも僕より年下の女の子2人に励まされてる……って時点で、高校2年生である僕のいろんな部分がきしんできてます。

……はは、もう開き直っちゃおっかな……どうせ僕、小学5年生に論破されるような男だし……

「ね、ねえ雛里ちゃん……なんか、ご主人様の背後に暗い影が見えるんだけど……」

「う、うん朱里ちゃん……私達、何かしたかな……？」

「ほ、ほら明久君！　2人とも心配してますよっ！」

「ああ……ごめん姫路さん、こんな僕で」

「……あえて詳しくは聞かないでおきますね……」

姫路さん、最近僕の取り扱いが少しずつ上手になってきた……よ

うに見えて、実際結構心に来る言葉をチョイスしてくるよね。さっきのコピペといい。

すると、朱里&雛里……これ以上空気を悪くしない&僕の気を逸らすためか、話を逸らす作戦に出て……

「そ、それでご主人様？ 今日ほどのくらいお勉強なさってたんですか？」

「ん？ ああ、その……はずかしながら、まだこのページ……一枚だけでさ……」

「あ、そうなんですか」

「まだ始めてすぐだったんですね」

「いや、朝からやってるけど」

「「……………」」

……そして失敗。

フリーズ&無言のまま、『え、マジこの人？』とでも言いたそうな軍師コンビの目が痛い。

……もう、引きこもっちゃおっかな……

「はわわっ！？ ご、ごごごご主人様の纏う影が暗さ5割増しに！？」

「あわわ……しゅ、朱里ちゃん……私達、何か変なこと言ったかな？」

いや、むしろ何も言ってくれないからこうなってるんです……。

「……姫路さん」

「な、何ですか明久君！？」

「……空って、何で青いんだろうね」

「あ、明久君、戻ってきてください！？」　ちよ……現実逃避しても現実は何も変わりませんよっ！？」

うん、そうだよね……わかってる。僕がバカだと言う現実……

でも……それでも僕は、この現実から目を逸らす！！

「ご、ご主人様お気を確かに！」

「そうでしゅ！　わ、私達もお手伝いしましゅから！」

あわてて言ってきたくれる2人。うう……なんか、小さい子がこうして心配してくれるのって、無条件で癒される……マイナスイオンなんか目じゃないな。

……たとえば、彼女達がそもそもこの陰鬱な気分の原因だとしても、気にならない……といいね。

すると、朱里の頭上に豆電球が。

「そ、そうですご主人様！　これから、私達と一緒に政務しませんか？」

「え、政務？」

「はい！　えっと……ご主人様、たしか……書く方はともかく、読む方はある程度できるんですよ？　だったら、どんな形でも、より多く文字に触れることで……とにかくこの世界の文字や文章になれるところからはじめてはいかがでしょうか？」

「あ、それいいかもね、朱里ちゃん。同時にお仕事も片付けちゃえるし、私達が監督すれば、政務とお勉強、両方の不備も指摘できるね」

おお……なるほど、そういう手もあるのか……

まあ、確かに……子供がこういう、文字や文章を覚えるのって、『生活の中で使ってるうちにいつの間にか覚えてる』っていう感じだし……とにかく触れる機会を増やす、っていうのは、自然かつ有効な勉強方かもしれない。

……まあ、その間中ずっと、あの黒ミミズ乱舞を見ることになるわけだから、それ自体ちよつと陰鬱ではあるけど……ええい、この際だ！

「じゃあ、そうしようかな……よろしく頼むね、2人とも」
「「はい！」」

名誉挽回、とばかりに意気込む2人。

午後からまた事後とがある姫路さんと別れて、僕は2人の執務室に向かった。

うんうん、これなら……新鮮味もあって、有意義な勉強タイムを過ごせそうだ。

☆

……そう思ってた時期が、僕にもありました。

いや、最初のうちは、たしかに……政務しながら、しっかり文字の勉強にもなるようにアドバイスはさんでくれてたんだけどね、2

人とも。

けどまあ、扱ってるのが政務の書類だ……ってのがまずかった。

簡単な事柄を扱ってる書簡がなくなっちゃって……ちょっと難しい内容の奴に手を出し始めたとたんに……

「……うーん……雛里ちゃん、ここどう思う？」

「そうだね……多分、ここがこうなってる影響じゃないかな？」

……2人とも、お仕事モード。

僕の勉強…仕事Ⅱ2…8くらいになっちゃってるんだよね……。

いや、まあ、そもそもコレ、もともと『政務のついでに勉強しよう』っていう感じで計画されたわけだから、そんな文句があるわけでもないんだけど……

……でも、でもさ、

「……ふう、こっちの人口がこれだから……こんな感じかな？ 朱里？」

「はい、失礼します……はい、この読み方・書き方であってますよ……あれ？」

「え？ どこかまずかった？」

「あ、いえ、そうでなくて……ねえ雛里ちゃん、ここ……」

「……あ、ホントだ……そもその数値が不自然だね、調べてみようか」

「あ、お仕事ね……」

……とか、

「この訳は……『今年は川の水がいつもよりも多い』か！ 雛里、見てくれる？」

「はい、それで正解……あ、水が多いつてことは、朱里ちゃん」

「うん、そうだね……雨の量や頻度を考えると……作物への影響が少し心配かな……」

「うん……あ、この書簡が参考になるかも……」

「……がんばってね」

……とか、

「ここは……こうだな！ 去年より減ってるんだ！」

「はい、正解ですね。それより雛里ちゃん、この分どう埋めればいいのかな？」

「うん、けど、去年より減ってるってことは……やっぱり何かどこかで……」

「……………」

……とか、

「ええと……この報告書は……『平和になって、民達がある程度自

分で動ける余裕が出てきた』って内容だ!」

「そうですね。そんなことより朱里ちゃん、これ、ちょっと気になるよね……」

「うん……平和なのはいいことだけど、帰属意識が希薄になるかもね……ちよっと対応を考えないと……」

「……………」

……いや、まあ……わかってるよ?

2人とも、純粹に仕事に集中してるからだ、つてのも……ね? うん。

けどさ……『それより』とか『そんなことより』とか言われると、その……露骨に僕がアウトオブ眼中だなく……つて自覚させられるというか、なんというか……

いやまあ、一生懸命働いてくれてるわけだし、こっちがついでに付き合ってもらってるわけだから、何も文句言う気はないけど……

……けどね、

「ねえ、朱里、次……僕どれやればいいのかな?」

「あ、はい。じゃあこの書簡を……」

「あ、うん、訳して……」

「いえ、その書簡と一緒に一箇所にもまとめておいてもらえますか?」

……教材の指示じゃなくて雑用の指示出されるとなると、ちよつと涙が……

完全に仕事モードの朱里&雛里。最早、僕の勉強という付随任務は頭から完全に抜け落ちている様子。

「というか、僕が君達の主だって忘れてません？」

「というか、僕、目に入ってる？」

「……………僕、どうすればいいんだろう。」

☆

○Side 星

「失礼する…………ん、2人ともいたのか」

「あ、星さん」

「ん……………終わったね……………！」

私が朱里と雛里の執務室に入ると、どうやら仕事を終えたところらしい2人が、達成感を全身からにじませて伸びをしていた。

ふむ……………仕事がちょうど終わったところらしい。

が…………

……………少し、気になることが…………

「ふう……………星さん、どうかしたんですか？」

「仕事なら、今全部終わりましたけど……………星さんにお渡しするものは特に……………」

「ああ、そうではなくてな。この間の警邏の報告書がまとまったので、持ってきたのだ」

「あ、そうだったんですか」

懐に入れていた報告書を、朱里に渡す。

素早く目を通し……朱里は、うん、とうなずく。あいかわらず、読むのも理解するのも早いな……。

「コレで問題ないと思います。星さん、お疲れ様でした!」

「私達もちょうど仕事が終わったところなので……星さんもお暇なら、お茶でもいかがですか?」

「うむ……それはいいのだが……」

「? どうかしたんですか?」

いや、どうかしたも何も……

「……私自身、状況がよくわからんのだが……」

「はあ……」

「何でしょう……?」

「……部屋の隅の……あそこで、膝を抱えて無限の闇を身にまとっている主は……一体全体どうしたのだ?」

……

「「あああああああ——っ!——!」」

思い出した！　とでも言いたげな2人が、あわてて走りよるも…
…主、反応せず。

……気のせいか、目から光が消えている気が……？

「ご、ごごごごご主人しゃまっ!?　あ、あの、私達っ！」

「え、えええとその……せ、政務に夢中に、そのっ！」

「……いいんだよ、朱里、雛里……わかってるから……」

「「え……？」」

「……あそこの書簡をまとめればいいんだよね……」

「「も、申し訳ありませんでした〜!!」」

……よくわからんが……主、どうやら色々な種類の疲労が蓄積して、少々心がアレな感じになっているようだな……。

……まあ、大丈夫だろう。しばらくすれば元に戻るはずだ。

白蓮殿もよくあんな感じになっていた（理由はわからん）が、なんとか立ち直っていたしな。

その後しばらく……何だか面白いので、反応の薄い主に、頭を下げまくって詫びまくる軍師2人の様子を、茶を飲みながら私は見物していた。

……しかし、本当に何があったのだから……

第27話 勉強と軍師と一意専心（後書き）

……なんか、すっごいぞんざいな感じの話になっちゃった気が……
（汗）。

ともかく、軍師コンビ相手でも、なぜか不幸な明久でした。

……哀れな……。

そして日常ってやっぱネタあるようですね……。

ではこのへんで。和尚でした。

第28話 俺と華琳と明久の価値（前書き）

すいません、学校行事が以上に急がしかったので、予想以上に空きました。

今回は……番外編、ってわけじゃないですけど……魏と雄二のお話です。

あんまりキャラは多くは出てきませんが……。

第28話 俺と華琳と明久の価値

○Side 雄二

「……とまあ、ここをこういじくって……あとはこんな感じのプランだな」

「なるほど……実用的ね。さすがだわ、雄二」
「お褒めに預かり、どーも」

玉座に座って偉そうにしてる——いや、まあ、実際偉いんだがな——身長150cm強くらいの金髪ロール髪のちびっ子。こいつがかの『曹猛徳』だったのは……今でも、正直違和感ある。

「……今、何か失礼なことを考えなかった？」

「気のせいだから気にするな」

「嘘おっしやい！ どうせ華琳様に対して醜い劣情でも抱いていたんでしよう！ きーっ、やっぱり男なんて汚らしい生き物です、華琳様！」

「少し落ち着きなさい、桂花」

「……でもって、こっちのネコミミ（頭巾だけどな）軍師は……まあ、いつもどおりだ。」

華琳命のこいつは、ことあるごとに俺に突っかかってきてまあ……うっとおしいっちゃあそうなんだが……正直慣れた。

「なに見てんのよケダモノ！ ま、まさか華琳様に続いて私まで脳内で……」

脳内で何だ、脳内で。

「違うから安心しろ、百合女」

「何よその百合って」

「知らんでいい。それより……華琳、俺もう帰っていいよな？」

「そうね、報告書は受け取ったし……いいわよ、ご苦労様」

と、いうわけだ。

今の俺の立場は……町の警備隊長。

天の御使い……ってのは正直こそばゆい呼ばれ方で好きじゃねーんだが……まあ、現代人としての立場から色々と言進言したのが買われたらしい。

あとはまあ、最初は文字もろくに読めない状態だったところから、日常生活に問題ないレベルまでのし上がったことかな。

華琳に、『天の御使い』として拾われたのが……数ヶ月前。

あの時俺は……ババアのみようちきりんな実験でこんなところに飛ばされて、しかもいきなり変な奴ら——どう見ても盗賊——に襲われて……腹が立ってた。

——気がついたら、顔の面積が2倍くらいになったそいつらが倒れて……何だその目は？ 正当防衛だ正当防衛。

で、その後……なんか、軍隊っぽい……というか、軍隊そのものな感じのを率いてきた華琳———当時はまだ『曹操』って呼んでた

っけな——に会った。

まず、俺が今しがたストレス発さ……もとい、正義感と義侠心に基づいて鉄拳制裁を下したそいつらは、どうやら手配中の盗賊だったらしく、褒められた。

んでその次、俺の話から華琳は、俺が『天の御使い』だとか何とか気付いて……

いや、まあ、異世界人だってのは間違っていないんだけどな……なんかこう、言いすぎじゃねーか……ってのは、正直思った。俺、ただの高校生だぞ。

……その後、何だかんだで華琳についていくことになったんだっけな。

略しすぎだとは思うが、まあ……察してくれ。

強いて言うならアレだ、華琳に探りを入れられたり、春蘭に怒鳴られたり、華琳にネームバリュー目的で勧誘されたり、春蘭に斬りかかれたり、秋蘭に謝られたり、春蘭に斬りかかれたり、春蘭に斬りかかれたり、だ。

……あの時から、俺の中で春蘭に対して『あ、こいつ色々要注意だな』っていうラベルがべしん、と貼られたのは間違いあるまい。うん。

実際それは間違っていないくて……何かと突っかかってくるんだ、あいつは。

……まあそれでも、態度がざつくばらんで話しやすい分は、こっちのネコミミ軍師よりはマシだが。

こっちは更に重症だ。簡単に言えば、アレだ。清水だ。現実世界の。

いわゆる「百合」。男大嫌い、華琳命。『華琳様の犬』を自称するコイツに対して、華琳がする全てのことが褒美であると言って差し支えない。

徹底したその男嫌い振りは、周りの補佐官から何から全員女で固め、他の男の半径3メートル以内には絶対に近づきたがらないほどだ。

職業柄、俺ともよく接触……もとい、エンカウントするんだが会ったび罵倒が飛んできて面倒だ。

……もう慣れたが。

まあ、そんなことはともかく……仕事が終わったんだからさっさと帰ろうか、と、俺が玉座の間を出ようとする、と、

「ああ、そうだ雄二、ちょっと聞きたいのだけど……今、あなたの部下達の様子はどうか？」

「？ 風たちなら、まあ……特に問題ないと思うぞ？ 真面目（？）に仕事もやってるからな」

「……ちよつと違和感があったけど……まあ、それならいいわ」

すまん、ちよつと嘘ついた。

俺の部下……小隊長を務める3人娘、『楽進』『于禁』『李典』。それぞれ、風、沙和、真桜。

……遺憾ながら、真面目なのは約一名。あとの二人は……昼間からサボって茶飲んだり、カラクリいじったり。

……そこに残る1人が怒鳴り込んできて、肅清がてら気弾が飛んでくるのはわかってんだから、真面目にやるときゃいいのにな……いつの時代も、どこの世界も、要領悪い奴ってのはいるもんだ。

ま、何だかんだで上手くやれてはいるし、上司の俺からは特に何も言うことはないが。

あいつらはあいつらで、仲良く上手くやれてるしな。

☆

「いや、そんなこと言わんといて！ ちょっとは干渉してや雄二はん！」

「いきなり何叫んでるの真桜ちゃん！？」

「え？ いや、何や叫ばなあかん気がして……」

「それより今はこの状況！ お願い、ちょ、凧ちゃん！ 話聞いてー！」

「ちゃうねん！ これはちゃうねん！ その……ちよ……と休憩がてら茶あしとただけやねん！ サボりちゃうねん！」

「そそそそそうなの！ だから凧ちゃん！ その、気がいっぱい溜まってる右手を下ろして……」

「せや凧！ てゆーか、今やられたら給料前借してまで買ったこの『カラクリ夏侯惇』が巻き込ま……」

「問答無用！ お前達……怠業するなと何度言ったらあああああ
——っ！！」

どかーん

「んぎゃああああ——っ！ う、ウチの……ウチのカラクリ夏侯惇將軍が——！！」

「やーん！ 買ったばっかのお洋服なのに——っ！！」

「うるさい、自業自得だ！ 全く……せっかく仕官できたと言うのにこの体たらく！ 隊長に申し訳ないと思わんのか！」

「どっちの隊長に？」

「明ひs……どっちにもだバカ者！」

どどかーん

「んきゃああああっ！？ い、今のは照れ隠し、っていうか八つ当たりなのー！」

「ああああー！ 夏侯惇將軍が、夏侯惇將軍が、ネジの一本まで粉々にー！」

「うるさい！」

「「鬼——！！！」」

☆

……どこかで部下達の断末魔が聞こえた気がしたが、きっと気のせいなので気にしない。文句あるか。

「所で雄二、いきなり話が変わるのだけど……吉井明久、ってどんな男かしら？」

「ホントにいきなりだな」

というか、何で明久の話になる？

「……前から、気になってたのよ。同郷のあなただけでなく……風たちや、季衣や流琉まで、あの男について楽しそうに語るものだから」

「あー、前に知り合ったみたいなきじだったな」

「……そういうレベルかしらね、あれは？」

？
どういうこった？

「……まあ、割かしドライな雄二はいいとしても……あの5人……特に、今の時点では流琉あたりが特に……」

「……？ 華琳、何か気になることもあるのか？」

「まあ、ね……というか、気になることしかないわね」

……ああ、明久がうちの武将連中と親しい、ってことか。

季衣たちは『兄ちゃん』『兄さま』、凧達は『隊長』だしな……いや、あいつらの隊長は厳密には俺なんだが。

そういや、仲がいい以上に……特に流琉なんかは……明久のことが話題に上がったり、その話をしたりする時になったりすると……少しだが、顔が赤くなる時がある。

……いや、まさかな……いくらなんでも。

や、確かにもとの世界でアイツに対して『そういう感情』を抱く奴はそこそこ多かったが（性別問わず）……いや、まさか異世界でまで。

というか、流琉まだ子供だぞ？ ちびっ子……葉月の前例があるとはいえ……。

すると、華琳……何やら神妙な顔で考え込んでいる。

「……ねえ、雄二？」

「ん？ 何だ？」

「……あの男……吉井明久が、この先……この陣営に来ることはあると思う？」

「さあ、知らん」

「少しは考えなさいよ」

んなこといわれたって知らんもんは知らん。第一、そのことなら、前に散々考えたし、話し合っただろが。

あいつはあいつで、『劉備』っていう……三国志の主人公クラス
のキャラクターと一緒にいるんだし……しかも、『ご主人様』とか
なんとか呼ばれてやがった。

まあ、あいつ単体で抜けるならまだしも……の状況下から引き抜
かれてくる可能性は低いし……そもそも、劉備が勢力を立ち上げつ
つある状況だ。劉備軍ごと取り込む、つてのも、ちっとばかり無理
がある話だろ。

……順当に行けば……あいつも、いやあいつらも、そこその勢
力の筆頭格になる面子だったし。

「……できれば、いずれとりこみたいわね……」

「まあ……そうは思えるよな」

関羽も張飛も、武人としては一流、とっていい腕だったし……
あ、下手したら趙雲もあの後加わってんじゃねーかな。

戦力で言えば、こっちの春蘭たちレベルだし。覇道を目指すこい
つとしては、ぜひとも欲しい人材だろう。

……そこも……俺が何とかすべき点ではある、か……

すると、

「……いえ、そうではないわ。まあ、彼女達もほしいけれど……私

が今、一番ほしい……というか、興味があるのは、あの男……吉井明久よ」

「は？」

きよとん、と、俺。

ぎよっ!!? と、桂花。

おーおー、この世の終わりみてーな顔してやがる。

「か、かかか華琳様!? な、何を!? こ、これ以上男を陣営に迎えるなど……ほ、ほほほ本気であらせられますすかっ!？」

「落ちて桂桂、パニクリ過ぎだ」

「うるさいわね坂本! アンタに聞いてないわよ!」

ま、無理ないが。こいつ、男はゴキブリと同等ぐらいにしか見てねーし。

にしても以外だな、まさか華琳が明久……男に興味を示すとは。

……まあ、女みてーな顔してるってのは事実ではあるが……

「……何だか激しく誤解されてるようだから先に言うけど……私があの男に興味を持ったのは、風たちのことがあるからよ?」

「は？」

「へ？」

聞き返す俺と桂花に対し、華琳は玉座に座りなおすと、

「これは、劉備たちとの共同戦線を通して感じたことなのだけれど……5人共、あの吉井という男の隣にいた間……それ以前、それ以後よりも確実に士気が上がっていたように見受けられたわ……見逃

せない事実よ」

「ああ、まあ、そういや……嬉しそうにしてたわな」

そこに続けて華琳いわく、

季衣は、いつもと変わらない様子だったが……結構懐いてて、兄ちゃん兄ちゃん、って積極的に擦り寄っていった節がある。料理作ったときなんかは特に。

真桜も……まあ、基本あいつは気さくだが……それでも、他の陣営の奴に対して、徹頭徹尾あそこまで遠慮なく、ってのはなかなかない。というか、初めてだろう。

凧も、あいつのことを意識して……普段にも増してやる気出して、戦果を上げてた。それが手伝って、あいつが率いる部隊全体の士気も上がった気すらする。

コンビ組ませた沙和はそれ以上だ。他の軍のことだから、いつもと比べての士気云々はわからんが……凧に負けなくらいの気合で任務に望んでる様子だったな。

中でも最たるものは流琉だろう。自分の士気も部隊の指揮も上がって、果ては……コレも華琳いわくだが、明久がいる間は、料理まで気合入って上手くなってたらしい。

……それ全部ホントなら……そりゃまあ、大したもんだが……

「……私以外の者に、しかも他の陣営の者によって、あそこまでテンションに如実に差が出るとはね……」

「おいおい、そんなに気になるのか？」

「当然よ。将の士気というのは、部隊全体の士気や、ひいては戦果に直接関わってくる……。春蘭が私を守る時ほどではないにせよ、それほどに彼女達の違いは大きかったわ……。いつもあの士気であるかないかでは、戦ごとの損害も戦果も、数百単位で違うわ」

「マジか」

「マジよ」

……まあ、華琳様命モードの春蘭と比べるのは色々と……。生物学的見地で違う気もするが……。

「……………そうね、華琳様のおっしゃることは正しいわ。けど……」

と、こっちは桂花。奥歯にものが挟まったような言い方の理由は、おそらく……

「……………で、ですがその、華琳様……いくら士気に関わるとはいえ、男などに目を付けるのはいかなものかと……。士気の上げようなら他にもありますし……。男なら、『天の御使い』の名という意味にしても、こいつが既にいますし……」

「ふふっ……あら桂花……あなたは、これ以上男がこの陣営に増えるのに反対？」

「は、はい……。正直なところをいわせていただければ……。その……」
「ふふっ、そう……。それなら、仕方ないわね……」

そう、いかにも納得したかのように言う華琳。桂花の顔に、ぱあっと光が差す。

……が、

俺にはわかる……。あの笑みは、そう……。あいつお得意の……

「そこまで言われると……なおさらあの男が欲しくなるわね……。決めたわ雄二、桂花、いずれ我が曹操軍は、吉井明久を引き抜いてこの陣営に加えます」

やっぱり、ドSの笑みだったか。

桂花、天国から地獄。スローモーションでゆっくりと崩れ落ちる。

……華琳に苛められるのはすきでも、こういうジャンルはふむ、やりすぎと見える。

いや、『やられすぎ』と言うべきか。

sonでもって、その様子を見て華琳がどんどん機嫌よくなってもんだからタチが悪い。

「ど、どどどとかお考え直しを華琳様!! コイツや、他の男の文官達だけでもこの陣の空気汚染が始まっているというのに、この上更に男を迎え入れられたら……」

「あらあら……そんなことを言われたらますますあの男を迎えたくなくなってしまふじゃない。そうね桂花……それなら、仮に吉井明久を迎え入れた場合、あなたの補佐でもさせようかしら」

「ひいっ!?!」

「それか、寝泊りさせる部屋をあなたの隣にするとか」

「ひいっ!?!」

「ふふふ……そうね、後は……」

「お、おとお許しを華琳様あ!! そんなことをしたら、私はあつという間に孕まされて死んでしまいますうううっ!?!」

半泣きで懇願する桂花。……その涙と泣き顔が華琳のドSエンジ

ンの加速装置だとなぜ気付かない。

まあ……いつもはアイツにとってもいい感じで働くものなわけだから、意識としてはアレなのかもわからんが。

「さ、ささささ坂本雄二！ あんたからも何か言いなさいよ！」

「は？ 何で俺が？」

「あんたアイツ——吉井明久の知り合い……ってか学友なんですよ！？ こう……アイツの悪いところか欠点とか……とにかく何か、華琳様に言うべきこと！」

俺にまで助けを求めるとは……桂花、本気で必死だ。是が非でもアイツを呼びたくないらしい。

さて、どうしたもんかね……アイツ……明久がこの陣営に、か。考えにくい……そうだな……。

「ん……まあ、別に俺も反対、ってわけじゃねえんだが……」

「な、何でよ！？ あんたアイツのこと嫌いなんでしょ！？ いつもバカバカ言ってるじゃない！」

「いやまあ……アレはその、なんだ……悪口ってより……あいつを『バカ』と呼称するのは、人間を『ヒト』と呼び変えるぐらいに自然なことであってだな……」

「それもつと酷いんじゃない！？ ホントに学友だったの！？」

「それに、あいつにはアイツでいいところもあるしな」

「例えば！？」

「いてもいなくてもあらゆる意味で戦力的に変わらんから、いなくなっても困らん」

「それ居られる方が迷惑ってことじゃないのよ！？」

ヒートアップする俺らの漫才（桂花、おそらく自覚なし）を、楽しそうに見つめていた華琳。腹筋が震えてるから、笑いをこらえて

るのがわかる。

すると、それがブレイクする前に口を挟んで、

「ふふっ……まあいいわ。聞く限りでは、まあ……あの男自身にさほど魅力的な部分は中々無さそうだけど……それを差し引いても、風達の士気向上は捨てがたいわね……。桂花、雄二、ひとまず話はここまでよ、下がちなさい」

「か、華琳様……あの……あの男に関して……？」

「無論、いずれ手に入れる方向で行くわ。あいつだけでなく……劉備軍の人材丸ごと、ね」

「か、華琳様あ……」

この世の終わりのような顔をして膝をつく桂花を、ドSスマイルで満足げに見下ろすと、颯爽と玉座の間を後に。

後に残された桂花は……まあ、俺が話しかけても逆ギレされるだけなので、放置。俺にできることはない。自分で立ち直ってもらう他は。

……しかし、

明久をこの陣にねえ……

まあ、そうなりや確かに、あいつらの士気は上がるだろうが……そう簡単に行くとも思えねーがな……あいつ、変なところで悪運強いし……。

……それに、俺としては……あいつのはあのまま別の陣にいてもraithたいしな……

さてねえ……これからのことも踏まえて、どうしたもんか……
とりあえず、今の俺の立場を利用して……少しでも先を見据えて
できることを考える、ってのが……現時点での最善策か。ったく……

第28話 俺と華琳と明久の価値（後書き）

あー……ギャグ入れづらかったな……

説明する部分が多くて……精進したいです。

ではこの辺で。和尚でした。

第29話 桃香と子供と熱闘缶蹴り（前書き）

今回はちょっと息拔きのな感じです。

第29話 桃香と子供と熱鬧缶蹴り

○Side 明久

さて、

今日も今日とて、僕は市場の見回りです。

……ってまあ、そんな大層なもんじゃなくて、ただ単に非番でやることないだけなんだけど。

しかし、普段あんだだけ政務に忙殺されてるってのに、いざ暇になるとそれはそれで……時間をもてあます。

まあ、無理もないか……この世界、ゲーセンも何もないし……持つてきたものの中には、携帯ゲーム機や音楽プレーヤーがあつたけど……あ、そういえば、それについて説明するの忘れてた。

この世界に来てから……なぜか、僕が持つてる電子機器……携帯電話や音楽プレーヤー、携帯ゲーム機といったそれらの物の……バッテリーが一向に減らないのだ。

携帯電話は通話機能が無理なので、ゲームとかメモ機能とかを主に使って……ゲーム機やプレーヤーも、仕事終わりとかにお世話になってたんだけど……未だにバッテリー残量が満タン。……何でだろ？ まあ……助かるけど。

しかし、いつまでも同じゲームソフトや楽曲で飽きないかっていうと、それはNOなわけで。最近、贅沢にもその『飽きた』って理由で、それらのお世話になる機会が減ってたりするんだよね。

そんなわけで、せっかくのまとまった休み……部屋の中でゲーム

してすごす、っていうのも何かもったいない気がしたので、外に出ただけど……

「ひにゃーん！　ちょ、ちょっとみんな待ってえーっ！」

……ん？

今、我が軍のほんわか総大将の情けない声がしたような気が……？
声のした方へ走って行ってみると……そこには、

「あ、桃香」

「え？　あ、ご主人様あ！」

20人近い子供達に囲まれている桃香がいた。……ああ、またか。

桃香は、あのやわらかい物腰と底抜けの優しさゆえに……領民、特に子供達に人気が高い。何ていうか……安心できる雰囲気みたいながあるんだろう。

そのせいで、町に出て、子供達に見つかると……あっという間に囲まれてしまう。

「劉備さまー！」

「遊んでー！」

「ちょ、ちょっとみんな、押さないで……」

……子供達にもみくちゃにされる、この町で一番偉い人の図。……しかしながら、全く何の違和感も無いところがすごい。

こうしてみると、普通にみんなのお姉さん役だよなあ……庶民的。

「ええ……それが、桃香様のいいところですから」

「あれ、愛紗も一緒だったの？」

「当たり前です。桃香様は県令……護衛は絶対に必要ですから」

ああ、そりゃそうだ。

ついつい忘れがちになるんだけど……桃香はこの『県』で一番偉い人。そんな要人が外出するんだから……まあ、護衛の1人や2人、必要だよな。

特に桃香は……なんていうか、こう、色々抜けてるから……詳しくは言わないけど。

そこ、言わなくてもわかるとか言うな。本人はがんばってるんだから。

「それにご主人様、あなたですよ」

「え？ 何が？」

「『何が』ではありません！ 全く……非番とはいえ、お出かけになるのであれば、我々に一言声をおかけください。そうすれば、護衛の10人や20人……」

桁がおかしい気がする。

いや、何それ、近代国家の要人のSPじゃないんだから……ていうか、仮にそうでもそんな数つかないでしょ？ 動きづらいつて。

「……？ 『えすぴー』というのが何かは知りませんが……断じて大げさではありません。ご主人様は、桃香様を含めた我々全員を導いてくださるお方なのですから」

いや、その設定が既に大げさなんだっての。

ていうか、最初に……協力するって決めたときに言ったでしょ？

『僕は別に何も特別なところなんかない、ただ異世界から来ただけの学生だ』って。

「ええ、お聞きしました。おっしゃってましたね……『今はまだ1人の学徒に過ぎないが、いつの日か天下に名をはせるにふさわしい人物になれるよう精進する』……と」

驚いた。過去の僕の発言が美談10割増しで脳内保完されてる。愛紗の脳内にセットされてるフィルターは相当な高性能とみていいだろう。下手な発言はできないぞこれは……！

「ひくくくん、愛紗ちゃん、ご主人様あゝ、無視しないでえ……」

……つとと、そんなことを愛紗と話してるうちに……わ、また増えてる。子供。

しかし……ホントに桃香、人気あるなあ……もみくちゃだ。

「もお、押さないで……やっ!？　ちょ、誰かいまお尻さわったでしょお!？　も……ご主人さまあ、助けて〜!」

……やれやれ、大人数でもみくちゃにされて……さすがにっちもさっちもいかないらしいな。

しょうがない……助けてあげますかね。

「……と言いつつ、桃香様の背後から近寄っていくのはなぜですか？」

ジト目の愛紗の鋭いツツコミが入る。……ちっ。

「もおゝ……もしかしてご主人様もお尻触るつもりだったんじゃないでしょーね〜？」

「はっはっは、何言ってるのさ桃香、そんなつもりちょっとしかないよ」

「「あつたの（ですか）！？」」

お、ハモった。さすが義姉妹。

「ごっ……ご主人様、い、いくらなんでも、は、破廉恥な……」

「そうだよご主人様！……まだ明るいんだから……」

「いや、そういう問題では……だ、第一、子供達の前で言うことではないでしょう！」

顔を赤くしてそんなことを言う2人。……これはこれでかわいい。けどさ、そんなに過敏に反応しなくても大丈夫だって。実の所、その展開は『あつたらいいな』くらいにしか思ってたんだから。ラッキースケベ的な？

後ろから近づいた本来の目的は、ちゃんと別にある。

「ふえ？　そうなの？」

意外そうな顔をする桃香。そうそう、後ろから近づいたのは、

「ドサクサ紛れに桃香にそんなラッキースケベをやらかす奴が誰なのか暴いて、ちよつとぼてくり回……もとい、世の厳しさを思い知らせてあげようってだけだからさ」

「ちょ！　ダメだよご主人様！？　危ないよその発言！？」

子供とはいえ異端者、危険因子の芽は小さいうちに積んでおかね

ば。

けどまあ、桃香が嫌がりそうだし、やめとか。命拾いしたな……
…幼い異端者よ。

君のその精神が、成長していくまでにきっちりと更正することを、
先輩として祈らせていただこう。

「一番更正が必要なのはあなたではないでしょうか……」

「ん？ 愛紗何か言った？」

「いえ、何でも……」

さて、プチ異端審問（未遂）はこのへんにして……と、
桃香が大変そうだから、ちょっと手伝ってあげようかな。このく
らいの小さい子達の相手は……結構得意だからね。

☆

「『かんけり』……？」

「みつかいさまー、何それー？」

どうやら遊びたがってた様子だったので……ここで僕は1つ、天
の世界……もとい、現実世界の遊びを提供することにした。

ご存知『缶蹴り』だ。

ただまあ……この世界、缶とかないから……空竹で代用するって
ことで。

廃材置き場に行って、ちょうどいい大きさの竹片を持ってきて使

うことにした。うん、円筒形だし、重さも軽いし……ちようどいい代用品だな。

さて、

ゝルール説明中ゝ

「「やるー!!」」

うん、子供らしい元気な返事だね。

じゃあ……始めようか。まずはジャンケンで鬼を決めて……と、その時、

「ちよおおおと待った——っ!!」

「「!」」

突如として、広場にそんな声が響き渡り……って、あれ？

広場の入り口に立ってる、あのちっこい影は……

「あれ、鈴々ちゃん？」

「桃香おねーちゃん! お兄ちゃんも、ずるいのだー! こんな楽しそうなおとしてー! 鈴々も混ぜるのだー!」

「いや、それはいいけど……鈴々、仕事は？」

確か今日、警邏当番だった気が……サボると愛紗が怖いよ？

「もうお昼休みなのだ！ だから今、ご飯食べてきたところなのだ！」

「あ、もうそんな時間か」

時計見ると……確かに。まだ、昼休み入ってそんなに経ってないけど。

すると、広場に集まっていた子の一人が、鈴々を見て、

「あれー？ ちょーひしょーぐん、さっき持ってた肉まんもう全部食べちゃったの？」

「え？ うん、もう鈴々のお腹の中なのだ」

「すごい、早いねー！」

……まあ、これはもう驚かないけど。

だって、鈴々の『食べる』事に関してのすごさは、今までの生活でよく知ってるし。

何せ、バケツより大きな器に盛りつけた、フードファイターでも無理そうなラーメン、軽々完食するんだもん……しかもおかわりしてたし。

他にも、杏仁豆腐バケツ1杯分とか、人の頭より大きい巨大おにぎりとか……おそらく今回の肉まんも、10個や20個じゃあるまい。

ああ、流琉たちの小屋に一緒に泊まったときなんか、季衣と2人で熊1頭たいらげてたっけ。あれはマジでびびった。

あんだだけ豪快にたいらげてもらえたんなら、熊も本望だろう。

とまあ、そんなわけで……鈴々も腹ごなしに参戦決定。これは、
とんでもない身体能力のが加入したな……。

護衛だから見張りをします、ってことで参加を辞退した愛紗を除
く全員で行ったジャンケンの結果、鬼は桃香に決まりました。

さて、ここで缶蹴りのルール説明。
守るべきルールは、以下の通り。

- ・最初に誰かが缶を蹴り、鬼以外は、その間にどこかに隠れる。
- ・鬼は、蹴飛ばされた缶を探して元の位置に戻してから、隠れた者
を探す。
- ・隠れられる範囲は、広場の中のみとする。広場から出たら失格。
捕獲扱い。
- ・隠れた者は、鬼に見つからないように動き、缶を蹴飛ばすことが
目的。蹴飛ばせば同時に、それまで捕まった者達も開放できる。
- ・制限時間の15分が経過するか、全員が鬼に捕まったら、鬼交代。

とまあ、こんな感じ。細かいところ以外は、普通の缶蹴りと同じ。

さて、というわけで……始めますか！

では、記念すべき一回目のキックは……ジャンケンにより、鈴々
に決定！

さて……では、キックオフ！

「よおーっし！ 思いつき蹴っ飛ばすのだー！」

「ちょーひしょーぐん、がんばれー！」

「町の外まで蹴っ飛ばしちゃえー！」

「あ、あんまり遠くまで飛ばさないでね、鈴々ちゃん……」

そんな声援を受けながら、鈴々は助走をつけて缶（に見立てた竹筒）に駆け寄り、足を後ろに振り上げ……渾身の力で蹴りを放ち、

「とりゃあああ——っ！！！」

バキヤア！！

……竹筒を粉々に粉碎した。

「「「……………」」」

「……………にゃ？」

いや、『にゃ？』じゃないから。やりすぎ。

結局、力加減はできそうに無いので、他の人が蹴りました。

☆

それからしばらく、缶蹴りは続いた。

最初は、なれない遊びに困惑気味だった子供達だけど……少し体験してみただけで、完璧にそのルールをマスターし、楽しく遊んでいた。

……ただ、変なところで必要以上に白熱してた気がしなくもないけど……。

具体的には、

例その1。

鈴々が鬼になって、他の子を見つけた後のこと

「にゃ、見つけたのだー！」

「わーっ、見つかったちゃった！」

「竹筒蹴らなきゃ……」

じゃきん！

↑ 鈴々、蛇矛を手仁王立ち。

「ここを通りたくば、この鈴々を倒してから行くのだ！」

「「「……………」」」

ここは戦場か。

鈴々、鬼が武装して威嚇しちやいけません。

例その2。

僕が鬼になって、鈴々を見つけたときのこと。

「鈴々見つけ！」

「にゃっ！ 見つかったのだ！？」

幸い僕は足が速いので、よりもさきに鈴々缶の所へ駆けていって、それを踏む。これで捕獲……

「うにゃああああっ！！！」

「え？ ちょ、鈴々、もう缶踏んぐほあああっ！？」

ボゴキヤア！！ ↑ 鈴々が僕ごと缶を蹴り飛ばす、ちよつと鈍い音

……したはずの鈴々の暴走キックに、缶と一緒にふっ飛んだ僕が深刻なダメージを受けたりとか。

しかも、また竹筒が壊れた。

例その3。

桃香が鬼になった時、

……誰一人捕まえられずに、ひたすら缶蹴られまくって終わり……とか。

いや、あれは別の意味での白熱だったか。目的がもう『どうやって蹴るか』じゃなくて『誰が蹴るか』になってたし。いかに制限時間内に、多く蹴っ飛ばすか、みたいな。

「ぐすっ……いーよいーよ、どうせ私は運動ダメだもん……」

……その後、桃香が半泣きになったので、さすがに反省したけど。あ、ちなみに1位は僕だった、15分間に16回。文句あるか。

……とまあ、そんなこんなで缶蹴りは続き……
それも終盤に差し掛かった、ある回のこと。

……1つの奇跡が、そこで起こっていた。

なんと、桃香が鬼になり……なおかつ、ほぼ全ての子供達を捕獲して、残るは1人……ってとこまで来ているのだ。それも、試合開始から1分くらいしか経ってない時間で。

ちなみにその『最後の1人』、僕だったりする。

何が起こったかというと、あまりに負けすぎた桃香が、内なるパワーを開放させてリミッターを振り切り、通常の50倍の身体能力を持ってして次々とライバルを捕獲………したわけではなく、

単に、僕以外の全部の子供が、同じ場所に隠れようとして戸惑って、

そこを桃香に見つかって、

桃香が竹筒のところに走るのを追いかけたものの、1人が転んだことで将棋倒し式に全員転んで、

……で、桃香に缶（竹筒）を踏まれて、全員アウト……ってわけだ。

マンガみたいだな……。

まあともかく、そのせいで……残るは僕だけ、ってわけだ。

ちなみに鈴々は、昼休みが終わってしまったので先に帰った。

当然『まだ続けたい』って駄々こねてただけど……愛紗が殺気50%くらいで威圧したら、小刻みに震えながらも持ち場に戻っていった。……かわいそうに。

そんな状況下で、僕は10分弱隠れ、逃げ回った。

鉄人や異端審問会の面々から、逃げ慣れている僕だ。ムツツリー二ほどじゃないけど、隠密行動もそれなりにできる。

さて、と……しかし、どうするかな……

残り時間は5分弱。隠れ場所を変えつつ戦えば、逃げきることも一応は可能。

それに、桃香の体力を考えれば……缶を蹴って全員を解放することも可能。疲れてきてるっぽいし。

まあ……ほぼ全員を捕獲できてる、っていう今の状況が、そもそも偶然……というか奇跡の産物だからなあ。

最初こそ『私の時代が来た！』とか何とか言って余裕っぽかった彼女だけでも……残り時間が少なくなるにつれ、余裕が無くなっていった。

このまま勝ってもいいんだけど……それじゃ、ちょっといつも通り過ぎて面白くないな……せっかくのいつにないシチュエーションなんだし、もっとこう………！

そうだ……いいこと思いついた。

どうせなら、ちょっと面白い作戦……もとい、賭けに出てみよう。

この賭け、桃香が勝てば、全員捕獲でハッピーエンド。

そして、僕が勝てば……爆笑オチだ。

☆

○Side 桃香

うゝ……見つからない……

最初、一気にほとんど全員見つけたときは『私の時代が来た！』
と思ったのに……まあ、あれ結局偶然だったもんね……。

けど、たった1人だけなのに、ここまで探しても見つからないなんて……さすがはご主人様だね……。

でも、こんな好機はもう二度とないはず。絶対に……絶対にご主人様を見つけて、捕まえて……優秀の美を飾ってやるんだからっ！
……や、まあ別に最後とかじゃないけどね。

でも……ここまで探して見つからないなんて……動いてるのかな？

と、ここで私は……あることに気づいた。

「くすくす……くすくす……」

「気づいてないね……」

「うん、りゅーびさま、全然気づいてない」

………???

何、その会話。

とまあ、捕獲して広場中央に整列させてる子供達が、そんな風に私を見て笑ってて……え？　どういうこと？　何がおかしいの？

っていうか、『気づいてない』って……？

……！　もしかして……この子たち、どこにご主人様が隠れてるか知ってるんじゃない？　でも、何で！？　隠れてる人を見つけるなんて、できるはず無いのに……

……そうか！　私が物陰を探してる間に、ご主人様が移動するのが見えてるんだ！　開けた視界が逆に吉と出てるんだね！

そうとわかれば……話は簡単！　物陰に入るフリをして……今だッ！

「ご主人様、見つけ……あれ、いない」

………違った？

どうやらそうみたい。子供達が思いつきり笑ってるもん。

うう……恥ずかしい……っていうか、残り時間は!?

と、その時、

「桃香様、制限時間です」

「えええ——っ!？」

と、見張り兼審判の愛紗ちゃんから残酷な宣告。

そ、そんなあ……ここまでの好機を、無駄にしちゃうなんて……

がっかりするあまり、膝をついてしまう。うう……世界は残酷だよお……

でも、一番納得いかないのは……

いまだに子供達がニヤニヤ笑ってることと、
なぜか愛紗ちゃんが呆れたような表情を浮かべてること……

もおっ! そんなに私が負けたのがおかしいの!?! しょうがないじゃない! ご主人様すっごくかくれるの上手くて、動くのもわかんなくて……

……っていうか、ほんとにどこに隠れてるのあの人!? 降参するから出てきてよ!

すると、愛紗ちゃんがため息混じりに……

「桃香様……ご主人様をお探しですか？」

「えっ？ うん」

「では……『回れ右』を」

？ 何それ？

言われたとおり、回れ右をして後ろを向いてみる。一体どうい

……

………え？

後ろを見たたん、私は固まった。

固まらざるを、えなかった。いや、だって、そこには……

……隠れるでもなんでもなく、普通に私の目の前に立っている……
…ご主人様がいたんだから。

………もしかして………

「あの、ご主人様、まさかずっと……？」

「うん、桃香の真後ろにいたよ？ 見つからないように注意して」

.....は？

つまり.....ご主人様を探してる私の真後ろで、私の視界に入らないように、器用につけ回してた.....ってこと.....？

それを見て、子供達は私を間抜けに思って、笑ってたってこと.....？

「劉備様、全然気付かないんだもんねー！」

「ずっと後ろにいたのにねー」

「面白かったよねー」

「.....愛紗、ちゃん.....？」

「.....お気の毒ですが、真実で.....ぷふっ」

笑った！？ 愛紗ちゃんが！？

っていうか、そんなの.....そんなの.....

「ずるいよおおおおお——————っ！！！！」

☆

○Side 明久

あっはっは、大成功。

結局その後、僕も桃香も、さらに警邏を終わらせてきた鈴々まで加わり、めいっぱい子供達と遊んだ所で、休日は終わったのでした。そして、結局桃香は一勝もできなかった。ちゃんちゃん。

第29話 桃香と子供と熱闘缶蹴り（後書き）

さて、

多分日常変はコレが最終です。

次回から……新章だと思います。

では、このへんで。

第30話 正義と懸念と連合軍（前書き）

今回から『反董卓連合軍』編スタートです。
名前は違いますが。

まあ、どうぞ。

第30話 正義と懸念と連合軍

○Side 明久

その日、朝から『玉座の間』に集まった僕らは……朱里から『至急でしゅ!』と報告された、ある事柄を聞いた。

それは……

「「『反董卓連合軍』……?」」

「はい。袁紹さんから、そのような檄文が届きました。これです」

そう言って、朱里は手元にあった紙を広げ、僕らに見せる。

が、読めない僕。……疎外感がハンパじゃない。

それを悟ってか、はたまたもともとそのつもりだったのか……雛里が口に出して、内容を説明してくれた。

それによると……

少し前、勘王朝の霊帝が死んで、超TEI……じゃなかった、朝廷。朝廷がその……権力争いで、アレな事になって……で、そこに割り込んできた銅鐸じゃなくて、董卓がその、えっと……暴走を? 何、違う? 暴政?

……だめだ、雛里の説明を言葉にしようとする、余計僕には荷が重い。

それを、さらに姫路さんに噛み砕いて説明してもらった感じだと……

なんか、『靈帝』とかいう、この大陸の偉い人が死んだらしい。

そのポストをめぐって、他の政治家っぽい人達が、昼ドラ顔負けの骨肉の争いを繰り広げて……ああ、なんかありがちな展開。

で、そこに『董卓』とか言う奴がつけこんで、朝廷……政府みたいなやつかな？ を全部乗っとして、悪い感じの政治を敷いてるらしい。

それを、諸侯が力を結集して退治しよう……っていうのが、その手紙に書かれている内容らしい。

「なるほど……だから『反董卓連合軍』ってわけか……」

「その、悪いことをしてる『董卓』って人を、皆で懲らしめちゃう、っていうことなんだね」

ようやく理解できた僕と桃香のそんな反応。

その間……姫路さんの説明が終わる間に、朱里や雛里も色々と考えをまとめていたらしい。

「あれ？ なんか、今の説明の感じだと……手紙の文章の長さの割に、随分簡潔にまとまったね？」

「ああ……手紙の中に、袁紹さんのお家自慢の内容が多分に含まれていましたので……」

なんじゃそりゃ？

ともかく、この緊急会議の議題は、その『連合軍』に参加するかどうか、ってことなのは、わかったんだけど……。

正直……何から話したらいいんだろ……？

「普通に考えれば、参加するべきだと思います。暴政に苦しむ民を救う、という理由は、天下に異を唱えるものがないそれでしょうか……」

……？ 『普通に考えれば』？

何だろう、今の雛里のセリフ、何かちょっとひっかかったな……？
すると、姫路さんも、何か考えるところがあるようで……顎に手を当てて思案顔になっている。

……が、

そういう考える系の反応の人もいれば、必然、考えない系の反応の人もいるわけで……

「とおーぜん参加だよっ！ そんな悪い人が洛陽の皆さんを苦しめてるのに、ほっとくわけには行かないじゃない！」

「桃香様の言うとおりだ。そのような悪しき輩には、我らが正義の鉄槌を下してやるほかあるまい」

「悪い奴は鈴々がぶっ飛ばしてやるのだ！」

うん、こうなるよね。わかった。

いつもはお気楽天楽なムードをかもし出す桃香だけど、自分も平民出身だからだろう、民衆のことが絡むととたんに燃える。愛紗、鈴々も然り。

なんかこう、デイス○ーションフィールドでも展開してそんな感じだ。あの3人がいるとこだけ、熱気が違う。

が、それに水を差すように、制止の声をかける者が1人。

「さてさて、落ち着け愛紗」

「何だ星、何ゆえ止める？ お前は反対だと言うのか？ 連合に参加するなというのか？ 民を見捨てると言うのか？ 貴様それでも武人か？ 酒でも入っているのか？」

「落ち着け、そしてムキになるな。というか、いっぺんに1つ以上のことを話すな。主の頭が処理しきれなくなって思考停止を起こすだろうが」

ごめん、今すごく僕に対して失礼なこと言わなかった？

まあ、今は最優先で話すべきことがあるから、聞かなかったことにするけど。

「あ、愛紗さん落ち着いて……星さんも何か考えるところがあったって言ったことだと思えますし……ね？」

「むう……わかった。すまん姫路殿。星も……私も熱くなりすぎていたようだ、すまん」

「わかればよい、気にするな」

「次からは1つずつ、わかりやすく話すことにしよう」

「「「そっち!？」」「」」

なぜだろう、目の前の景色がゆがむ。

愛紗たちの間で僕の評価がどうなってるのか激しく気になるけど、とにかく……今は連合軍の参加不参加のことについて、集中して話し合わなくちゃね！

……誰だ、今、話題逸らしただろ、って言ったの？ 大正解だよバカ。

……で、どこまで話したっけ？

「……………星が連合軍参加について渋る理由を聞くとところ」
「ああ、そうだそうだ。で、星、何で？」

ムツツリーニのおかげで思い出せたので、星に聞いてみる。
すると、

「いやなに……この檄文の内容が、気になりました……」
「？ このお手紙がどうかしたの？ わかりやすくっていいと思うけど……」

「……………わかり安すぎるのが、気になるんだと思います……」

すると、ここで割り込んできたのが、雛里。……っていうと？

「……………この檄文……………『董卓さんは悪いことをしてるから、皆でやつつけましょう』っていう内容なんですが……………この裏には、間違いなく……………他の思惑が隠されている気がするんです」

「それは……………手紙全体の7割を占める、袁紹のお家自慢のことか？」
「あ、いえ、それは別に見るに耐えないので、そもそもなかったことにして……」

頭が痛くなる会話である。というか雛里、何気に毒舌混じるね、今気付いたけど。

ったのは内緒。」

星がそれとなく差し出してくれた手ぬぐいで、目から零れ落ちたしょっぱい液体を拭きつつ、話を聴く。

「まあ、他に言うとするば……目先の利益しか考えず、己が目立ちたいという欲望のままに行動する暗君……とても言いましょうか。とても尊敬に値する者では」

「最初からそう言えばよかったんじゃない？」

「何をおっしゃいます？　それでは面白くないでしょう？」

言い切ったね？　今完全に『面白くない』って言い切ったね？

……まあ、いいか……僕がまともに君主として見られてないのは、いつものことだし……彼女達には桃香がいればそれで……ぶつぶつ……

「ふむ……おいお前達、そろそろ話を続けんか？　沈黙と驚愕が主の精神力を削りきる前に」

「誰のせいだ、誰の」

「さて……時に朱里、雛里、お前達は他に……この檄文に対して思うことはあるか？」

無視か。

ま、いいや……というわけで朱里と雛里の返答を待つと、ようやく立ち直ったらしい2人が、一応僕にわびつつ意見を述べる。

「この檄文……いえ、この『連合軍』自体が、おそらく……大規模な権力争いを示すものだと思うんです……」

「はい……おそらくこれと同じものは、各地の有力な諸侯に届いているはず……となると、この檄文の裏には……抜け駆けして巨大な権力を手にした、董卓さんへの嫉妬とか、そういうのが見え隠れしている気がします……」

「ふむ……つまり、悪政をはたらく暴君がどうこうよりも、単に諸侯が抜け駆けをした董卓をとっちめたがつているだけ……というところか」

「はい、おそらく、そういう思惑があると思われ……」

……？ んー……なんかこう、難しい話だな……

と、桃香も同じことを思ったらしく、

「ねえ、なんか難しいんだけど……ただ、董卓さんが悪いことをしてるから、懲らしめに行こう、っていうんじゃないかな？ それは変わらないでしょ？」

「………そうとも限らない」

「え？」

？ 珍しいな、ムツツリーニが発言？

「康太お兄ちゃん、それってどういうことなのだ？」

「………今、星が言ったセリフを前提にすると………そもそも『董卓の暴政』というのが嘘、という可能性が出てくる」

「え………あ、そっか……」

そうか………そりゃそうだ。

この戦いに諸侯の権力争いが便乗してるわけじゃなく………そもそもこの戦いそのものが、董卓をねたんだ袁紹による『権力争い』の一端かもしれない考えると………確かに、それを考慮に入れる必要性が出てくる。

星の話だと、その袁紹ってのも結構、評判が悪い人みたいだし……
……どういう例え方されたかは考えないことにして。

ともかく……それ考えると、この戦い……おいそれと参加するの
も考えものなんじゃ……？

「ん……でも、実際に暴政が敷かれてる可能性もあるんだよね？」

「まあ、それも否定はできませんが……」

「だったら……私、このまま放つとくのは嫌だなあ……」

桃香がそう思うのももつともだろう。

何せ彼女が立ち上がったのは、『この大陸の争いや圧政に苦しむ
人たちを救いたい』っていう信念があればこそ。権力争いなんか、
彼女にとっては……あろうとなかろうと関係ないことだ。

桃香としてはむしろ、本当にその董卓ってのが暴政を強いていた
場合、自分はその被害を受けてる民を助けなきゃいけない……って、
思うからこそなんだろう。

その点は、僕らが桃香の元に結集する動機になった理論でもある
し……僕としても、彼女のその主張に何か言う気はさらさらない。
むしろ大賛成。

けど、もしそれも嘘だった場合は……って考えると、どうしても
ためらわれちゃうんだよなあ……。何せ、諸侯の権力争いに巻き込
まれるだけなんだもん。面倒。

っていうか、もしそうなら……その董卓って人かわいそうだし……
……ん？

……まてよ？

そうか、そう考えれば……………

「桃香ちゃんの気持ちもわかりますけど……………ここは慎重になった方がいいと思います。土屋君、たしか、斥候部隊の管理は土屋君がしていましたよね？」

「洛陽に関して、何か情報などは入っているか、土屋殿？」

「……………役に立ちそうなものは、何も」

「むう……………しかしだからといって、我らの戦いの本分を本文を見失うわけには……………」

「ですが、これは政治的な思惑がからんでいますので……………」

と、姫路さんや星、ムツツリーニや愛紗や朱里が話してる間……………

僕は……………別の視点からそれを考えていた。

いや、別にそんな込み入った複雑なこと考えてるわけじゃなくてね？　ただ……………

……………うん、それなら……………そうだ、理由になるぞ！

そこまで考えがまとまった僕は……………ちょっとおそろるおそろるだけど、手を上げた。

「あのさ、皆……………この誘いなんだけど……………」

☆

さて……と、

場所は……華琳の城。

の、中の……玉座の間。

おそらくここだけじゃなく、明久たちのところにも届いてるんであろう、この檄文、

うちの大将は、参加するつもりらしいな……『連合軍』とやらに。

玉座の間には、俺と華琳の他に……春蘭&秋蘭、桂花、季衣、流琉、三羽鳥……とまあ、この陣営のオールスターがそろっていやがる。

……俺が言うのもなんだが、まあ、壮観ってやつだろうな。

「華琳様、この誘い、やはり乗るのが吉でしょう」

「でしようね……この戦いは、私が天下に覇を唱えるに際しての、第一歩となるわ」

ま、そりゃ……こんだけ大々的に収集かけて、大陸全土に共通に『悪者』認定されてる奴を倒しに行くんだ。今後への影響力もそりやでかいだろう。

黄巾の乱で『太平要術の書』を手に入れたことになった華琳としては、ここで勢いを付けておきたい算段なんだろうな。

……その『書』を燃やしたのは俺なんだがな。

というか、そんなもなくなたって……はつきり言ってるうちの戦力はどうかいぞ？ 若干の開きはあるが……袁紹、袁術に継ぐくらいの

規模はあるはずだ。

その『袁紹』の話をしようとする、華琳の機嫌が悪くなるんだが……何か嫌な思い出でもあるのかもしれない。昔なじみ……って話だし……

まあ、そんなことは置いといて……この連合に参加する、って話だが、

ちと気になることが1つ……

俺が言うより先に、季衣がそれを訪ねた。

「でも華琳様、洛陽にそんな、暴政とか……そういう動き、ない、って言ってませんでした？」

「ええ、言ったわ。最後に言った時の印象だけ……そんな雰囲気は全くね。董卓、などという名前も聞いたことは無いし……」

「それって、この手紙の内容が嘘かもしれない、ってことですよね？」

季衣の言うとおりだ。

というか、ほぼ十中八九嘘だと俺は思う。

ある程度漢文を読める俺だからわかるが……この檄文、あからさまに連合参加への先導しか書かれていない。わかり安すぎて……ほかの思惑が丸わかりだ。

大方、その袁紹ってのが、董卓が権力を握ったのが面白くなくて、今回のコレ企てたんだろうな……確証はないが、暴政のあるなし含めて。

こんなのにだまされるとしたら……ああ、身近に1人いた。

まあ、今は……似たようなタイプのやつと双璧の県令サマやってくるらしいが……あいつも参加するんだろかな、これに。

するならするで、こっちで指示出して動かせるんだが……

さて、すると華琳は

「そうね……でも、こういう風評が立ってしまうほどに、世の中が乱れちること……そして董卓自身、身の上の情報管理ができていないというのも事実でしょう？ 檄文通りの暴君なら何も言うことはないし……仮に嘘でも、これは身から出たさびでもあるわ」

「おーおー、こりゃ厳しいねえ」

「乱世に生きるものとしては当然よ。もっとしつかり身の上や情報の管理をしておけば、このような事態は防げたはずだもの」

「それにこの戦いの後……間違いなく朝廷は力を失い、乱世となる……それにむけて、華琳様が天下に名を轟かせるには、この連合は絶好の機会よ」

「なるほど……な。時代の流れに飲まれないために、あえて荒波に乗っていく道を選ぶ、か」

「当然よ。それが私が……この曹猛徳が歩むべき道なのだもの」

あんまりない胸をはり、えっへん、と言わんばかりの華琳。おお、今日も今日とて自信たっぷりだな。

ま……若干理不尽と言うか、きつめに聞こえるが……こいつこうなると考え曲げないからな……。参加で決定、か。

わが軍のネコ耳百合軍師の推測だと……董卓が暴政を敷いているかどうかはわからないが、上手いこと騙されて祭り神輿にされてる

可能性が高いらしい。裏で黒幕が甘い汁をすすってる……っていう構造になってるわけだ。

その場合、普通に董卓がかわいそうなんだがな……。

「なんや、もしそやったら不憫やな……その董卓とかいう奴……」
「うん。ただホントに悪い人に利用されてるだけなら、かわいそうなの……」

「ええ……むしろ、その董卓こそが被害者、といってもいいかもしれない……」

三羽鳥、ため息混じりに……ほろり人情を見せる。

そして……華琳の隣にいる、季衣と流琉もだ。季衣はわかりやすく。流琉は……露骨につてわけじゃないが、明るい顔はできてない。

華琳や桂花に比べると、こいつらは……やっぱり優しさというか甘さというか、感覚が庶民的で人情家な面があるな……。まあ5人とも、もともと村を守る義勇兵だったわけだから、それも当然だが……。

俺としては……こういう考えの方が好感が持てる。普通の日本人だからな、俺。

が……やはりというか、我が軍の総大将と、それを狂愛する軍師殿は……

「さつき華琳様がおっしゃったでしょう？ 仮に董卓が被害者だったとしても……それまでの存在だったということよ。その程度の迷惑を見抜けずに騙されてしまった者が、この先の乱世を戦い抜けるはずもない……遅かれ早かれ、似たようなことになっていたわ」

「桂花の言うとおりの。不憫と思うな、とは言わないけれど……我々が手を貸して助ける義理も、余裕もない。……わかるわね？」

「「はい……」」

3人共、しぶしぶながら……って感じの返事だが……気持ちはいかるんだろう、華琳はそれ以上深く追求することはなかった。

沈黙を肯定と取ると、華琳はあらためて正面に向き直った。

「これより出陣の準備に移る！ 出発は明日の正午！ 皆、直ちに取り掛かりなさい！」

「「御意！」」

「おうよっ」

返事に明らかな温度差があったが……気にしていないらしいな。その方が俺も助かるが。

さて……そんならそれで、戦いに勝つのはあいつらに任せて……俺は独自に、この先の展開を見据えて、色々と考えることを考えようかね……。

必要なら、他の軍勢だけでなく……こいつらも出し抜かないといけねーし……

……いざって時には……明久にも手伝ってもらわねーと難しいかもな……。

第31話 集結と軍議とバカ誘導（前書き）

第31話、やっと書けました……

ついにあのバカが光臨……いや、別に何も待ってませんか。

ともあく、どうぞ。

第31話 集結と軍議とバカ誘導

「長旅お疲れ様でした！ 代表者の氏名をお教えいただけますでしょうか？」

「平原の相、劉備です。袁紹さんの檄文に賛同し、参上しました」
「はっ！ お話は聞いております、こちらへどうぞ。部隊の皆様も、お疲れをお癒しく下さい」

とまあ、手続き……というか挨拶を終え、僕らは連合軍の陣地入り。

そういうこと。僕らは……この『連合軍』に参加することにした。
理由は3つ。

1つ目……もし、董卓が本当に暴政を敷いてるなら……それをぶっ潰すため。

これはまあ、僕らが団結してるもともとの信念の根幹だから、別に何も議論する余地とかはない。

2つ目……これは朱里と雛里の思惑。

この戦いの後、間違いなく現在の『漢王朝』……だったわけ？
その権威が衰退するだろうから、その後に来るであろう乱世に備えて……だそうだ。

ここで戦って武勲を上げれば、後々有利だとか何とか……まあ、そのへんは軍師コンビに任せとけばいいけど。

で、3つ目……

董卓がもし、利用されてたり、騙されて、脅されてたり……って感じの境遇だったら……

その時は、意地でも助け出す、ってことで。

だって、困ってる人を……罪も無いのに苦しんでる人を助ける……
……っていうのが、僕らの目的だもんね。

そのために僕らは力を持ったんだから……そうするのに、何の迷いも要らないはずだ。

そんなわけで、連合参加を決めた僕らは……こうして連合軍の集合場所に來たのでした。

「いやゝ、やっとついたね……」

「うん。長かったなあ……けっこう遠かったもんね、ここまで」

ずっと馬に揺られてたから痛む腰をさすりながら、僕は桃香にそう返す。

まあ……洛陽に行く前に諸侯が集まるにはベストな位置だって言うし、文句は言わないけどさ……。

それはそうと、ここが連合軍の陣地ってことは……皆もういるのかな？

前に会った曹操はもちろん、この世界で有名な……『袁紹』とか、『孫策』とか……あ、白蓮もいるかも？　もしいたら会いたいな、

さて……これからどうしよう？

「朱里、僕ら……これから何すればいいのかな？」

「そうですね……諸侯の皆さんに挨拶しておきたいところですが……どうやら私達が最後だったみたいなので、これから軍議が始まると思います」

「なので、まずはそれに参加してから……って感じになると思います……」

と、雛里が続けたその時、

「ああ、その軍議……もう始まってるぞ？」

聞き覚えのある声で……そう聞こえた。

って、今の声は……

「あーっ！ 白蓮ちゃん！」

「生きてたんだ！」

「よう桃香、吉井……って勝手に殺すな、勝手に」

若干呆れ顔の白蓮さんが到着。おおっ、そんなに久しぶりじゃないけど久しぶり！

場所的に思いつきアウェーだからちょっと緊張してた僕らの中に、ほんのりと安心感が広がる。ああ、よかった……知り合いがいるって、すごく安心できる……。

……ってあれ？ 今、もう軍議始まって……

「ああ、なんかもう……わっ、ちょ、桃香抱きつく……結構前からさ、早いうちから大方針は決めといった方がいいからって、大筋だけの軍議が始まってるんだよ」

「あ、そうなんだ？」

まあ、曹操や孫策なんかのメインメンバーがそろってれば、そのくらいはできるだろうし……初動は早いほうがいいから、正しい判断だろう。

……でも、僕らはまだその『メイン』の中に入っていないんだと思うと、なんかちょっと悔しいな……うん。

まあ、後々がなければいいか……うん、がんばろう。

「でも、じゃあ……もう大方のことは決まってるのかな？」

「ん？ ああ、まあな。最初、総大将を誰にするかでひと悶着あったんだがな。そこは……曹操んこの『天の御使い』が口先三寸で何とかしてくれたから、どうにかなった」

……雄二か。

ひと悶着、つてのがどういことかはわかんないけど……まあ、あいつなら大抵の揉め事は丸め込むだけの話術があるし……別に気にしなくても大丈夫だろう。

……と、それよりも……途中参加だけど、僕らも参加したほうがいいよね？

「ああ……それはもちろんだな。案内するが……今すぐ出れるか？」

「朱里、雛里、大丈夫？」

「もちろんですご主人様！ えっと、白蓮さん、武官の同席は……」「一応禁止だ。まあ、私んところには……もう特にいないから、関係ない話だがな……」

ジト目で星を見る白蓮。何か言いたそう。

あ、そっか……星って、白蓮さん見限って僕らのことに来たんだもんね……白蓮さんがいくら物事を引きずらない正確だって言っても、気にはなるか。

その星は……にやり笑って、どこ吹く風。まるで気にしてないな。

「まあいいさ、こんな世の中だしな。桃香、お前達の陣営からは、誰が出る？」

「そうだなー……私とご主人様でいいんじゃない？ 一応、私達……2人とも、この陣営の指導者って立場だし」

「はは……2人で一人前だしね」

「あう……それは言いっこなしだよお……」

僕の自虐に、ちょっとしょぼんとしつつも、笑いを浮かべたままの桃香。うん、まあ……それが妥当かもね。

でも……

「あのさ……朱里ちゃんと雛里ちゃんも一緒にこれないかな？」

「？ どうしてなのだ？」

「ほら、軍議っていうからには……作戦とか話し合うんでしょ？ そういう時、私達じゃ……あんまりいい作戦出せそうにないから……ね？」

うん、それは僕も考えた。

それに、交渉事とかなら……朱里や雛里のほうが頭が回るし気がきくし……。

「それはそうですが……あまり大所帯で軍議に出るのは、得策ではありません……」

「自分では何もできない君主だ、と軽く思われてしまう可能性もありますし……」

実際に何もできませんが何か？

うーん……でも、朱里たちのいうこともっともだ。今後の評判とか印象とかを考えると、そのへんも注意しなくちゃいけないだろうし……

すると、

「……………明久、いい手がある」

「？　どうしたの、ムツツリーニ？」

ぼん、と僕の肩に手を置き、ムツツリーニが親指を立てる。……いい手、って？

何も言わず、ムツツリーニは懷に手を入れ……何かを取り出して、僕に見せた。

桃香達全員、それを目にしても、それが何かわからなくて困惑したままだった。

けど、僕と姫路さんは……

「「あ、なるほど……」」

☆

その数分後、

「平原の相、劉備です。お待たせしてすいませんでした」

「同じく吉井明久ですいませんでした!」

「落착着けバカ、日本語変だぞ」

誰だっ! 到着したばかりで初対面の奴をバカ呼ばわりする礼儀知らずな奴は……って、1人しかないか。

しかも、顔見知りだし。思いっきり。

なんだかんだで緊張していたので、己の存在を謝罪すると言うボケをかましてしまった僕を、相変わらずの呆れ顔で見る雄二。

……うん、ブサイクの顔を見ると緊張が取れるな。理由はわからないけど。

まあ、いい感じに緊張が取れたので、そのまま陣営を見回す……前に、

「おーっほっほっほっほっ!!」

……………?

なんかこう……すごくおめでたい感じの、理由もなく不快な笑い声が真正面から聞こえた。

……何だ、今の……。

見ると、入り口に立っている僕らの真正面……つまりは上座に……すさまじい見た目のインパクトを誇る女性が立っていた。

「あらあら……遅いご到着ですわね、劉備さんに……吉井さん？
まあ、私は慈悲深いですから、この海よりも深く寛大な心で、許して差し上げますわ」

そらども。

そう高らかに言うその人は……鮮やかな金髪を長く伸ばし、水道管か、って具合の豪快な縦ロールを作っているという、マンガでも見ないような髪形だった。

顔は美人だし、スタイルもいのように見えるけど……その他の要素が強烈過ぎる。

今言った縦ロール（直径10cmオーバー）に加え、輝く金ピカの鎧、高飛車なお嬢様口調とまあ……人はここまで……濃い見た目になれるんだろうか。

……ひょっとして、この人が『袁紹』？ うわ……噂どりの人だ……。

見た目とかじゃなく……中身が。

「麗羽姉さま、こんな奴らはいから早く進めるのじゃ！ 妾はもう疲れたのじゃ！」
わらわ

その隣には……同じような金髪の、しかしこっちは、鈴々くらいの年齢と背丈の女の子が立っていた。

柔らかそうな長い金髪に……やわらかめにふわりとロールがかかっている。きている着物は上等なそれだとわかるけど……鎧は付けてないな。

言い草はちょっと悪い感じだけど……高飛車っていうよりは、わ

がままな女の子……っていう感じかな？　それさえ目を瞑れば、普通にかわいい美少女……いや美少女だ。

でもって、おそらくその補佐と思われる、青い髪の女性。

なんか……バスガイドみたいな服（軍服か？）に身を包み、ほほえましいとでも言いたげな目で、わがままを言う金髪の子を見つめている。……他の人は呆れの視線しか送ってこないのに。

腰に剣をさげてるけど……ここに出てるってことは、武官じゃないんだろう。副官？

袁紹と話す態度からして……この2人が、『袁術』と『張勳』？
2人とも……結構普通にかわいいかも。見た目は。

「そうそう、お嬢様の言うとおりですよ袁紹様。早く軍議をすまして、ちゃちゃっと董卓さんを片付けちゃいましょうよ」

「七乃の言うとおりなのじゃ姉さま！」

「はいはい、わかりましたわよ。劉備さんに吉井さん、適当に楽しんでくださいな」

「あ、はい！」

入り口から移動し……僕は、ちょうど曹操の陣営が立ってる真正面に来た。

目の前には……曹操に、荀？。そして……わが悪友、雄二。

顔見知りが目の前にいた方が緊張が少ないかなと思ったんだけど……やっぱり、というか余計に緊張するかも……具体的には、曹操のオーラが……

すると雄二、僕らを見るなり……僕と桃香が装備している『ある

もの』に気付いたらしい。僕と桃香の耳のところを、そして胸元を見て、なるほど、とにやりと笑う。

……まあ、こいつなら気付いて当然か……ムツツリーニの『盗聴・盗撮セット』に。

僕らは陣地を出る前に……ムツツリーニが用意してくれた、そのセットを身につけていたのだ。理由はもちろん、僕らだけじゃ心もとないから。

耳には、通信用のイヤホン。胸元には、盗聴マイクと隠しカメラ。

それを……僕らの本陣で待機してるムツツリーニが、親機で受信して……本陣にいる愛紗たちも、軍議の様子を見れるし聞ける、というわけ。

同時に、イヤホンを通して、朱里たちから助言をもらったりもできる。うん、最強の装備だ。

実質……僕らは全員で軍議に参加してるわけだからね。

『ところで土屋君、なんでこんな便利な道具を持ってたんですか？』
『……………偶然』

それは嘘。

まあ、突っ込むべきところでもないから……というか、突っ込まないといけないところだから……流そうね、姫路さん。

そうこうしている間に、軍議が始まるみたいだ。

「さて……みなさん、これから我々連合軍は、生意気にも洛陽にて暴政を敷いている田舎者の董卓さんを懲らしめるために、一致団結して向かうわけですけど……それは理解していらっしゃいますかね？」

『ふん……よく回る口だな、己が嫉妬が主な動機であるくせに』

イヤホンから聞こえる星の声。……まあ、そうなんだろうけどね。

「それでは、これより先……先ほど連合軍の『総大将』に決まった私が、名門・袁家の当主であるこのわ・た・く・しが司会進行を務めますわ、よろしくて？」

……なんていうか、ホントに予想を裏切らない人だな、この人。すんごい露骨に家柄を鼻にかけているこの人なら……まあ、あのお家自慢7割の檄文もうなずける、ってもんだろうか。

「はあ……いいんじゃない？ 勝手にすれば」

おお、あの曹操までも呆れ顔……やるな袁紹、ダメな意味で。

「おーっほっほっほっ！ それではみなさん、我々はまず、この先にある関門『汜水関』の攻略にかかるわけですが……ご安心なさい、私に既に策がありますわ！」

「「「？」」」」

僕や桃香、曹操たち含め……軍議参加者の目が全部点になる。

ほお……意外と考えてるんだな。前もって策を用意するとは……これなら、軍議がそこそスムーズに進むか納税が無きにしもあらずだ。

袁紹か……彼女に対しての認識を改める必要があるかもしれないな……。

ただの天然ボケなお嬢様かと思ってたけど、これは……

「作戦は……『雄雄しく、勇ましく、華麗に前進して汜水関を撃破ですわ!』」

天然ボケどころか天然記念物級のバカ女だ。

「「「……………」」」

一同、絶句。

いや、あの……今何て言いました？ 要塞相手に……突っ込むだけ？

あの……本気？ いやむしろ正気？

「おーほっほっほっ！ 皆さん、私のこの素晴らしい作戦にぐうの音も出ないほどびっくりしていらっしやいますわね！」

それを作戦と呼んだら広辞苑にケンカを売る気がするのはいではない。いいではあるまい。

「……朱里、雛里」

『……………はい……………ご主人様……………』

「あのさ……………僕、この先がすつごく不安なんだけど」

「奇遇だねご主人様……………私もだよ……………」

隣でそう、僕らにしか聞こえないような声でつぶやく桃香は……………泣きそうな顔になっていた。

……………どうしよう、この連合……………予想以上に残念な方向に突っ走る気配がする。

ふと見ると……………雄二もおなじような感じで頭を抱えていた。曹操と荀?も。わかる……………わかるよ、その気持ち。痛いほど。

……………痛いのは袁紹の方だけだね。

別に軍略に詳しくない僕でもわかる……………っていうかそもそもそういうの関係ない所で脱線してるこの作戦。そしてそれを考え出し、この場で平然と言える袁紹。

……………素で恐ろしい。

『と、ともかくご主人様……………こ、この作戦……………あ、いやこれは、むしろ作戦ではないんですが……………なんとかしないといけません!』
「う、うん……………朱里。雛里も……………いい作戦考えてくれない? そしたらこっちで提案してどうにか……………」

「では皆さん、コレにて軍議は終了ですわ!」

「「嘘だっ!?!」」

何言ったこの女!?! 軍議終わり!?!

ちよ……………待て待て待て待て! ホントにそんな作戦……………じゃなくて『作戦もどき』で要塞につっこんだら、被害が洒落にならんこと

にっ！？

他の諸侯も、それはさすがにまずいと思ったのか……どうにか袁紹を説得にかかる。正面から作戦を否定するとげが立つから、なんとか遠まわしに。

が、袁紹……聞く耳持たず。アウトオブ眼中。

「なんです皆さん、総大将である私の決定に不満がありますの？」

不満しかありません。

「それ以前に、私のこの完璧な作戦に……」

もう突っ込むのやめた。

ともかく……袁紹、とことんまで聞く耳持っていない。くっ……このままだと、この『作戦もどき』で決まっちゃう……それは何としても避けないと……。

イヤホンの向こうでも、さすがにパニックになってるけど、今のところ何も策がない。

この戦いに関する策じゃない。袁紹に聞く耳を持たせる策が、だ。ある意味一番厄介。

……………すると、

「……………おい、華琳」

「何、雄二？ 今私は、酷く気分が悪いのだけど」

「そうよバカ男！ 華琳様がご気分を悪くされるから話しかけないで。っていうかむしろ消えて」

なんか、曹操陣営からそんな会話が聞こえた。

会話と言っても……音量は相当小さいから、僕やムツツリーくらいしか聞き取れないだろうそれだ。ましてや、袁紹の説得に忙しいほかの諸侯には全く、だろう。

そして、雄二……何を言うかと思うと……

「……この状況をどうにかする。俺がちょっとばかり弄くるから……話をあわせて煽ってくれ」

「……？ あの袁紹^{バカ}を止められると？」

「ああ」

……？

何だ、聞き捨てならない会話が……

「本当なの？ 私、一時袁紹の陣営にいたことがあるんだけど……あいつ、一度決めたら、それが良策であっても他人の意見を聞かないわよ？」

と、荀？。あれ、そうなんだ？

そうになると……見限って曹操のところに来たのかな？ ……無理ないな。

でも、雄二の作戦って……？

……と、そのまま僕が雄二たちの方を見ていると……雄二がこち

らの視線に気付き、今度は僕にアイコンタクトを送ってくる。

……なるほど、なるほどなるほど。

一瞬で、テレパシー並みに正確な情報のやり取りを終えた僕。いつも一緒にいるからこそ可能な特技だ。こういうとき便利。ホントに。

そして僕も、桃香にしか聞こえない小さい声で、

「桃香、僕と雄二でなんとかするから……手を貸して」

「ふえっ!?!? そ……そんなことできるの主人様? だって袁紹さん、完全にアレだよ?」

形容する言葉すら見つからないと見た。

「アレでもコレでも、やらなきゃ大変なことになるから。……僕と雄二が火種を作ったら、全力でそれを煽ってくれない?」

「う、うん……わかった。よくわかんないけど、煽ればいいんだね?」

「……上手く行くの?」

「保障は……残念ながら、ない。だが、上手くはまれば……袁紹も何も言えなくなるはずだ。そのためには、お前らにも煽ってもらって……というか、煽り手が多いほうがいい。それも、口が達者な奴が」
「……あの袁紹を持ち上げるのは死ぬほど気分が悪いけど……わかったわ、それが華琳様のためになるなら」

「サンキュ。さて、あとは明久と劉備と……5人で足りればいいが

な……」

「心配ないと思うわよ？　それが本当に良策なら……勝手に乗ってきてくれそうな面子もいるわ」

「……そか」

曹操陣営も、そんな感じのことを話してる。……話がまとまったか。

最後に曹操が行った『勝手に乗ってきそうなの』ってのは誰かはわかんないけど……まあいいや。

そして、袁紹のほうを向くと……助言してくる諸侯をいい加減うつとしそうにして、鶴の一声で決定を下そうとしていた。

「ええい、いいですか皆さん！　これで決定ですわよ！　わたくしの戦いに、攻める振りをして後退などありませんわっ！」

瞬間、

僕と雄二の目がキラーン、と光る。

……よし、今だっ！！

「いいですか皆さん！　我々連合軍は、全力を持って汜水関に突撃

……」

「「からのゝお？」」

「後退ですわ！　………あ、あら？」

よし成功！ 僕らの誘導セリフに加えて、直前まで自分が言ったことに引きずられていらんこと言った！

すかさずその隙を狙って、曹操が背中を押す。

「あら、さすがは麗羽ね？ 全軍で突撃する……と見せかけて、一当てした後に後退なんて、いい策だわ」

「え？ か、華琳さん？ あ、いや、わたくしは……」

「見直してしまったわ。あなた、軍略の才能もあったのね？」

言い直そうとする袁紹、だがしかし、曹操がそれをさせない。そこにさらに、桃香と荀？が加わる。

「そうですね華琳様！ 上手い策です！ これなら勝利がより一層確実なものになるでしょう！」

「やっぱり家柄がいい人は何でもわかつちゃうんですね、こんないい作戦を隠してたなんて……尊敬しちゃいます！ ね、白蓮ちゃん！」

「え？ お、お……おう、そうだな……すごいぞ、麗羽」

「……あ、あら？ そ……そうですねかしら？」

桃香、白蓮を巻き込んで後押し。ナイス！！

そこにさらに、

「ふむ……確かにそうだな。やはり三公を輩出した袁家の当主というだけのことはある。まさか、これほど瞬時に良策を叩き出せるとはな。やはり、格が違う」

曹操の向こうから……聞き覚えのない声が援護に回った。？
誰だ？

見ると……褐色の肌に黒い長髪、そしてメガネが特徴的な……すごいアダルトイーな感じの美人さんが、にやりと妖艶に笑ってこっちを見ていた。

おおおう、何だろこの感じ……ぞくってした。

もしかして、この人が……曹操が言ってた『勝手に乗ってくる人？』

そうこうしているうちに

「いいですねその作戦！ それで行きましょう！」

「う……うむ、それなら勝てる！」

「さすがですな袁紹様！ 総大将！」

「よっ、軍師泣かせ！」

あちこちから飛んでくる、いいぞいいぞコール。

さすがにここまで言われると……袁紹も前言を撤回するわけには行かなくなってくる。

というか……もう何か、そっちの方が気分いいな、って感じの顔になってる。

そして最後には

「ん……よくわからんが、すごいぞえ麗羽姉さま！ さすが妾の従姉妹じゃ！」

「よっ、完全に流されてるのにそれすらも都合よく自分の主張にしちゃうところも素敵ですよ、お嬢様！ あとついでに袁紹様！」
「うははははー、もっと褒めてたもれー！」

妙なテンションで、袁術と張勳も袁紹を推し（てる……のか？）、
どうやらそれがトドメになって……袁紹も、もう訂正する気がなくなったらしい。

まあ、実際自分は今褒められてるし、これでも別にいいか、思っただろう。……沿う思ってくれて、こちらも大助かりだ。

「え……ええ、まあ、私にかかればこの程度の策、簡単に思いつきますわ！ お、おーっほっほっほっ！ 皆さん、突撃と見せかけて後退した後は……上手いこと立ち回って勝ちますわよ！」

（（よしっ！！））

その瞬間、軍議参加者の心の声が一つになったような気がした。
ふう……ひとまずクリア……。

……これからもコレが続くんだろうか？ 先は……長いな……。

ふと目が合った雄二と一緒に、僕は最初から前途多難なこの連合

に、一抹どころでない不安を抱きつつ……軍議が終わるのを待って
帰還した。

第32話 孫家と共闘とFクラス（前書き）

……えー……

論文が終わって余裕ができるとか、甘過ぎました。

普通に考えたら、進級論文の後には卒業論文だし。

公務員試験の勉強って、秋から本格化するし。

おまけに、キャラもオリジナル展開も多いから、ネタ中々出ないし。

……こんな情けない作者ですが、がんばって書きますのでどうぞよろしくです。

今回、ついに……

ではどうぞ、第32話です。

第32話 孫家と共闘とFクラス

さて……。

頭が痛くなる軍議から帰って、ムツツリーニの記録媒体に記録した軍議の様子を再度聞いている僕ら。

……と言っても……記録されてるのなんて、各自の自己紹介と、最後のミニコント。

……あとは、延々袁紹のお家自慢と、無駄な演説が9割方何だけど……。正直……ここまで役に立たない音声データは、聞いているだけで脱力を誘う。

これを参考に作戦立てるはずだった朱里たちも、暗い顔で脱力してる。

……『軍議』じゃないもんなあ……コレ……。

「しかし……予想以上の暗君ですね、この、袁紹という輩は……」

「こんなのが総大将って……大丈夫なんですか……？」

や、これで大丈夫だって言う奴は、人として大事なものを見失っていると思う。

「あわわ……ご主人様と坂本さんが一計を案じてくれなければ、大変なことになるところでした……」

「うむ……要塞相手に突撃など、10までしか数えられん子供でも、愚作とわかる手ですから……。主も坂本殿も、さすがと言わざるを得ませんな……」

「ま、まあ……ともかく、手を打てる可能性が残ったんですから、今はそれについて考えましょう！」

うん、そうだ。

袁紹がバカッてのは後でいくらでも議論できる……というか、議論するまでも無くて、むしろ勝手に沸いて出てくるんだけど……それはほっとこう。

今は、この先のことについて話し合う必要がある。

あの後、曹操の取り仕切りで再度、仕切りなおされた軍議の場で……僕らが今後どういう行動をとるかが確認された。

レコーダーに録音されてた、数少ない有用な部分だ。

これから洛陽に向かう中で、えーと……『汜水関』と『虎牢関』っていう2つの関所を通過しなきゃダメで、そして……そこで董卓軍とバトるだろう、って見立てだ。

そこを2つ抜ければ……ま、途中途中でちまちま小部隊の攻撃を受ける可能性はあるけど、難関はクリア、ってことになるらしい。

まずは汜水関。いきなり正念場なんだけど……

……問題が一つ。

「まさか、我らが前曲に回されるとは……」

「うう……規模的にちょっと、いやちょっとどころじゃなく厳しいです……」

愛紗と朱里がうなるのも無理ない。

何せ……前曲を担当するいくつかの部隊の中に、僕らが含まれちゃってんだもん。

僕ら、この連合の中でも、下から数えた方が早いくらいの弱小勢力なのに、だよ？

つまり、これって……

「ご主人様……我々は完全に、捨て石として見られている……ということでしょう」

「あわわ……まあ、連合の総大将さんは袁紹さんですし……」

「消えてもダメージのない勢力に、犠牲になってもらう、ってことですか……」

ぬぐぐぐ……舐めたマネしてくれやがって……

けど、悲しきかな、その通りなんだよなあ……僕ら、有名になってきたとはいえ、まだまだちっちゃいから……大きい連中のいいように使われるのも、ある程度仕方ない……って所もある。

……無論、いい気はしないけど。

「んー……よくわかんないけど、けっこーまずい状況ってことはわかるのだ」

「とまあ、鈴々にさえわかってしまうこの状況、どうにかして打開せねばな……朱里、雛里、何か策など……」

と、その時、

「申し上げます！ 只今、本陣入り口に、孫策軍を名乗る者達が尋ねてまいりました！ 劉備様方とのご面会を希望しておりますが？」

「「「え!?!」」」

☆

数分後、

面会を承諾した僕らの目の前に……今聞いた、孫策軍の使者と思しき人たちがいた。

伝令さんに頼んで、つれてきてもらったのだ。

僕らの方から行こうかなとも思ったんだけど……まあ、せっかく向こうから来てくれてるんだし、ってことで、ここで待つことにした。

星いわく、『なめられても困りますでしょう』だそうだし。

そんで待ってて、本陣に来たのは……4人。

……なんとも個性的な人たちが。

一番先頭に立ってるのが……桃色の長髪を後ろでポニーテールにまとめた、褐色の肌の、背の高い女の人。歳は……多分僕らより上。

20代前半くらいかな？

鋭げな目に、つかみどころの無さそうな笑み。緊張はしてない、か
といって隙なんかは全然無さそうなたたずまい。

……そして、服の露出が多い。胸元がギリギリ隠れてる感じの……
動きやすいパーティドレスみたいな感じの服。しかも……巨乳。
姫路さんという勝負かも……。

……？ どこかで見覚えがあるような……

2人目。その隣に控えてる、黒い長髪の女の人。背や歳は、1人
目と同じくらい。

……って、あ、この人、軍議にいた人だ。真っ先に僕らの作戦に
気付いた、あの人。

褐色の肌に……お腹のところが大きく開いた、また露出が高い服。
四角いレンズのメガネをかけて……眼光も鋭く、知的な雰囲気。
妖艶、とか言えるかも。

ちなみに……ムツツリーニはちよつと野暮用で出てもらってるの
で、この光景を見ることはない。タイミング悪くて……ちよつとか
わいそうだけど。

まあ、見たら命が危険にさらされることを考えれば……いいか。

この人たちの写真は……隠しカメラで僕が取っておこう。

で、3人目と4人目が……って、あ、あれっ!？

「えー!? あれ!? 蓮華に……思春!？」

「ふっ、久しぶりだな、明久」

「……………」

とまあ、あの一件以来の邂逅となる、褐色美少女、蓮華と……その護衛のクールビューティー、思春（無言）だった。おお、ホント久しぶり、こんな所で会うとは。

……あ、そっか、さっきこの1人目の人を見たときに感じたの、蓮華に似てる、ってことだったんだ！ ああ、納得。

ん？ でもそうすると、この人はもしかして……

「ふう〜ん……ホントに蓮華、真名を預けてたのね、この『天の御使い』君に」

「ええ……って、嘘を言ってるんですか、雪蓮姉さま」

「あははは、ごめんごめん」

と、軽い感じの口調で蓮華と会話してるこの人は……
ああ、やっぱり。蓮華のお姉さんだったんだ。名前……孫策だっけ？

「さて、と……ごめんね、なんか内輪で話しちゃって。あらためて……私は孫策、この子の姉で、孫策軍の代表。よろしくね、吉井明久君……でよかった？」

「あ、はい、どうも……劉備軍の吉井です」

そう返すと、孫策さん、にっこり。

続いて、

「私は周瑜。孫策軍の軍師をしている。先の軍議での手腕……見事だったぞ、吉井殿」

と、黒髪の人……周瑜さんに褒められた。普通にうれしい。

「そうそう、聞いたわよ！ 思いもよらない誘導尋問で袁紹を上手いこと言いくるめて、軍の方針を『各自自由』にしちゃったんでしょ？　すごいわよねー！」

「あ、あはは……いや、そんなこと……大したことじゃないですよ」「いや、謙遜はいい。お前と……曹操軍の坂本雄二のアレのおかげで、連合軍の被害総数は半分ほどに減ったはずだ。皆、心の中ではお前達に感謝している」

い、いやその……現代高校生のノリでやったあれをそこまで褒められても……逆に戸惑うと言いますか……。

っていうか、そんなに違ったの！？　あのアホなやり取りの前後で！？　マジっすか！？

周瑜さんが『冗談だ』って言うのを少し待ってみたけど、撤回の気配はなし。……マジなんだ……今の……。

「ふふっ、赤くなっちゃって……かわいいわね、この子」

「ね、姉さま！」

「雪蓮、遊ぶな、他国の代表で」

「おっほん！」

「「「！」「」」」

と、愛紗の咳払いで皆が注目する。

「急かすようで申し訳ないのだが……孫策殿、用件をお聞きしてもよろしいだろうか？　お互いに……それほど時間に余裕があるわけでもないわけであるし」

「ああ、うん、ごめんなさいね。あんまり面白いもんだからつい……」

と、無邪気に笑う孫策さん。……なんか、自由奔放。
でも……代表としての堅苦しい感じがしないから、結構好きかも、この雰囲気。

「な、何だか、すごい人だね……」

「ふむ……確かに、自由奔放というか、つかみどころがないというか……」

「それでいて、隙も見せない……噂にたがわぬ英傑、と言ったところか……」

桃香、愛紗、星、思い思いに批評。……うーん、よくわかんないけど、やっぱり只者じゃないのかな、孫策さん。

「でも、どこの陣営にもいるのね……冥琳みたいなのが」

「何か言ったか？」

「なーんにも？ おー怖」

そして孫策さん、そのままのテンションで僕らに向き直った。

「さて、と……まずは……劉備、吉井明久、この前の一件では、妹達が随分とお世話になっちゃったみたいね。お礼を言わせてもらおうわ、ありがとう」

「あ、いえ、そんな……なんでもないです」

ああ、やっぱり、この前のことか。

僕と星が蓮華を盗賊から助けて、そのあと思春と明命に勘違いで

殺されそうになって、さらにその後、蓮華たちの部隊を援護する形で戦って……って感じだったんだっけ。

や、まあ……別に人として当然のことをやっただけだよ、何度も言うけど。

「いや……聞いたときはびっくりしたわ、そんな修羅場があったなんてさ。普段はそんなことない蓮華が、一度に2つも3つも借り作ってやっとな帰ってきたってんだから」

「う……め、面目ないです……」

「いや、そんな借りとか、そういうの別に、気にしないでいいんで……」

「え、ホント？」

おおー！？

言ったとたん、何故か孫策さんの顔がどアップに。ちょ、近い近い！ 離れて！

「ねー聞いた冥琳？ 明久、気にしないでいいってさー！ これで貸し借り考えなくてもいい……」

「いいわけないでしょ？ 吝嗇な君主だと思われてもいいの？」

「……ですよねー……」

本気で期待はしてなかったんだろうか、孫策さん、トホホと、しかしすんなり引き下がる。……ホントに別にいいんだけどなあ……。あ、でも『ここで借りを作っておくと、後々便利』って朱里も言ってたし……まあ、そのままにしようかな、それなら。

そしてその後、孫策さんは、

「今日来たのはね？ それともう1つ……ちょっと提案があっつき

たのよ。この軍の軍師さん、いる？」

「？ いますけど……朱里、雛里、ちょっと」

「「は、はひっ!？」」

びっくりしつつも、きちんと前に出てきてくれる、我が軍の軍師コンビ。うん、いつものことながらかわいい。

「え、ええええと、あの、その……何でしょうか……?」

「ああ、うん。冥琳、説明お願いできる？」

「心得た。……その前に、その手を離してやれ」

……と、2人を見て脊髄反射張りの速度で近づいて頭をなで始めた孫策さんに、呆れ顔で忠告する周瑜さん。朱里&雛里、絶賛困惑中。

……しかしこの人、マジで遠慮しないな。

……気持ちはわかるけどね。

でも、さすがに愛紗が怒りそうになって、それをとめてる桃香が涙目だから……そろそろ……

「あははは……ごめんごめん、あんまりにもかわいくって」

孫策さんが手を離すのを待って、周瑜さん、開口。

「……すまん、うちのバカが」

「ぶーぶー、冥琳ひどーい」

「うるさい。さて……よろしいか? 諸葛亮殿に……鳳統殿」

「は、はひ……」

「よ、よろしくでし……」

☆

孫策さん達から話されたのは、共闘の申し出。

何でも、孫策さん達もこの戦いで戦果を上げたいのと、もう1つ……何やらやりたいことがあるんだとか。

朱里いわく、それが何かは予想がつくらしいんだけど……

「えっと……つまり、手伝っていただけ、ってことでいいんですよね？」

すごく嬉しそうな桃香。

孫策さんは、今までと変わらないあっけらかんとした笑顔でそれに応える。

「ええ。もっちゃん♪」

「俗な話になるが……この戦いで武勲を立てたいのは、我らも同じだ。が、我々は前曲ではないのでな。あんなのでも総大将だ……指示にはうかつに背けん」

「でも、あなた達の援護をする……っていう名目でなら、一応でも理由が立つでしょ？ そっちも戦力は欲しいところでしょうし、それに……」

「……それに？」

すると孫策さん、いきなり蓮華の肩を抱いて引き寄せると、

「この子を助けてもらった借り、ちょっとは返しておきたいからね♪」

なるほど、そういうことね。

そういうことなら……信頼しても大丈夫だろう。孫策さん、態度もサバサバしてて、話しやすいし……その分、心の距離が近い。

それに蓮華の責任感の強さとかは、僕もよく知ってる。その蓮華が信頼してるお姉さんなんだから……多分、大丈夫だろう。

「……とまあ、我々からの申し出は、以上がその全容だ。そちらの返答を聞かせていただきたいのだが？」

「ああ、うん……どうかな、みんな？」

桃香は僕らに問いかけるけど、誰も反対意見を述べるものはいない。

実際、前曲にまわされて困ってたわけだしね……こちらとしても、願ってもない申し出だ。拒む理由がない。

その様子を見て、桃香はこくんとうなずくと、

「はい、その申し出……ありがたく受けさせていただきますね、孫策さん！」

「ふふっ、ありがと劉備。これで私達も……ふふっ……」

「ああ、そうだな……くくっ……」

「「「……………?」」」

……なんだ？

今、孫策さんと周瑜さんの顔に、一瞬だけ……すごく暗い、っていうかむしろ『黒い』影みたいなのがさしたような気がしたんだけど……。

ふと蓮華に目をやると……何やら、蓮華……『やっぱりか』とで

も言いたげな顔。

……どゆこと？

「ああ、まあ……気になるのはわかるが、その……できれば聞かないでくれ……。誓って、お前達に不利益になるようなことではないから……」

若干申し訳無さそうにしている蓮華。……なら、いいけど……

「ふふっ……ここでうまく、袁術の……」

「くっくっく……ええ、なすりつけて被害を……くくっ」

……やっぱり、ちょっとだけ心配になってもいいでしょうか？

……何かあるのかな？ 内輪に。

と、その時……その孫策さんが、ふと思いついたような顔をして、

「ああ、忘れてた！ ねえちょっと御使い君？」

「いや、あの、いくらなんでもその呼び方は……」

恥ずかしいなんてもんじゃないです。やめて。

「普通に呼び捨てでいいですから……」

「あ、ホント？ じゃ、明久」

ホントに遠慮ないな。ま、いいけど。

「実はさ……ちょっと会ってほしい子がいるの。2人」

「？ 会ってほしい人……ですか？」

？ 何だろ？ 僕に……他国の要人（自分でいうと違和感がハンパないな……）に、わざわざ会わせたい人って……
まあ、変な意図も無さそうだけど……

「えーと……いいですけど……？」
「ん、ありがと。もうすぐここに来ると思うから……ちょっと待ってて」

え、もう呼んでるの？

……今聞いた意味、あったんだろうか？ 事後承諾じゃん。

「でも……いきなり会ってほしいなんて……一体、どんな人なんですか？」

「うーん、どんな感じの人、っていうと……」

と、孫策さんが何かを言うより前に、

……声が、聞こえた。

「こんな感じの人じゃ、明久」

………えっ？

突如響いたその声に、僕と姫路さんが驚いて目を見開く。
い、今の声……まさか……！？

声がした方……陣営入り口の方を見ると、そこにいたのは……

「秀吉!!」

「木下君っ!!」

「うむ……久しいの、明久、姫路」

セミショートの髪、かわいらしい顔、そして……僕らと同じ、『文月学園』の制服。

その姿は、間違いなく……かつて、僕らと一緒に、Fクラスでバカをやった、大切な友達……そう、木下秀吉だ。

この世界に来て、まさか……また、君と会えるなんて……!

「秀吉……君もこの世界に!?!」

「木下君! 無事だったんですね!?!」

「あ、明久……姫路も、そのように慌てんでもいいわい。わしはどこにも逃げんぞ?」

秀吉だ……ホントに秀吉だ、夢じゃないっ!

「ご、ご主人様、瑞希ちゃん……この人、知り合いなの?」

「うん、向こうの世界にいた頃の、僕の友達だよ!」

「えーっ!? じゃあ、このおねーちゃんも天の御使いなのか?」

「……やはりワシは、この世界でもまずは性別の説明から始めねばならんのじゃな……」

「ふむ……なるほど、確かに……着ている服も、主のそれと似通っていますな」

と、まあ、若干カオスな空気ですけども、

僕ら3人が、再開を祝して、手を取り合って喜んで……さ

らにそこに、

「アキ————ッ!!」

「……っ!? この声は……!?!」

秀吉の後ろから、もう1つ……聞きなれた声が。
ま、まさか……君もなのか!

ちょっと悪いけど、秀吉の体をちよつと押しのけて——無論、
胸とかには触らないように細心の注意を払って——その向こう
を見ると、

「……今、何かひどく不要な配慮を感じたのじゃが……?」

秀吉の独り言はあんまり聞こえなかったけど、
その向こうに見えたのは、

やはり、僕らと同じく、文月学園の制服。

頭の後ろでまとめた、ポニーテール。

絶壁……もとい、スレンダーな胸。

気の強そうなつり目には……今はいっぱい涙をためている、
こちらに走ってくる、僕らのクラスメート……島田美波の姿があ
った。

「美波……っ!」

「あ、アキ……アキィ————ッ!!」

見るからに全速力でこっちに走ってくる、美波。あーあ……あれ、止まらないよ。僕が受け止めなきゃダメかな……ちよつと痛いかもだけど。

でも、そのくらい我慢しよう……なんたって……数ヶ月ぶりの再会だ。

友達の思いを、受け止めるくらい……してあげたい。

「アキィ————ッ!!」

涙でもうほとんど見えていないであろう、彼女の視界。

僕はそれを……ちよつと照れくさいし、あとで色々言われるかもだけど……両手を広げて待ち構える。美波の思いを……受け止めるために。

そして、減速せずに走ってくる美波を……僕はためらいなく、その胸で受け止め……

ドゴオッ!!!!

……ようとして、交通事故よろしくそのまま跳ね飛ばされた。

………あれ？

「何でええええええええええつ！！？」

「えええええええええつ!!?」

僕含め……てつきり感動の再会になるもんだと思っていたその場のメンバーは、全員驚きを隠せない。

あ……美波？

きりもみ回転で落下中の僕がお尋ねしますけど……今の仕打ちはちよつとあんまりじゃない？　ねえ、せつかくの再会だよ？　僕それなりに、っていうか超嬉しかったんだよ！？

その美波は、

「アキ、アキ、アキ——っ!!」
あ、会いたかった……あ……
っ!!」

「み、美波ちゃん！ 明久君は向こうですよっ！」

「アキ、ア……え？
……瑞希？」

……どうやら美波、涙で前が見えなかったらしい。ああ……今の
激突もそれか……。

……そうであってほしい。

すると、姫路さんの胸から離れた美波は、袖でごしごしと涙をぬぐうと、地面に倒れ付している僕を見つけた。

「……っ!？ あ、アキ……会いたかった……って!？ アキ!？」

そして、僕の惨状を把握すると、すぐさま駆け寄ってきて、僕の上
半身を抱き起こし、

「酷い……誰がこんなことを!？」

（（あんただよ、あんた））

みんなの心の声が聞こえたのは気のせいじゃないと思う。

けどまあ、自作自演（無自覚）とはいえ、こうして本気で心配し
てくれてるのは嬉しいな、純粹に。

……このケースで言うべきなのかどうかかわかんないけど、とりあ
えず……ありがとう。

……言ってよかった……かな？ 割とまじめに。

「ねえ、そのー……取り込み中、悪いんだけど……」

「む、何じゃ、雪蓮？」

「あのさ……アレ、ほっというていいの？」

と、何やら孫策さんと秀吉の会話が。……っというか秀吉、孫策
さんの真名許されてるんだ？

ともかく、孫策さんが指差した方向に全員が……僕は美波に抱え
られながらのまま、どうにか……首を向けると、

そこに……惨劇が。

「「きゃあああああ————っ!?!?」」

姫路さん、美波、蓮華、桃香の悲鳴。

悲鳴を上げていない女子勢も……その信じがたい光景に、一様に絶句していた。

その視線の先には……おびただしい量の血を流し、その血にまみれ、赤い水溜りの中に沈んで、ピクリとも動こうとしない……

……ムツツリーニが。

「ふむ……騒ぎの最中に、いつの間にか帰ってきていた様子ですな」
「なるほど……。そして、何か言う前に……雪蓮達のこの姿を見て……か」

……まあ、そりゃそうなるよね……。

だって、孫策さんの服の露出、蓮華以上だもん。それに加えて、周瑜さんに、蓮華や思春までいるし……こいつなら、視界に入った時点で致命傷だろう。

……死に顔は、すごく安らかなんだけど……。

「明久、勝手に殺さんでやれ」

「……………俺は……まだ……戦える……!!!」

何とだ。

ちなみに僕、美波が驚いたときに手を離したせいで、抱擁からすり抜けて地面に落下&後頭部を強打。現在、地味に痛みに耐えています。

その様子を、

「……おいおいおい……人が遊びに来てみりゃ……何だ、このカオス？」

偶然出会ったムツツリーニについてきて、いつの間にか陣地に入ってきていた雄二が、後ろの方から見ていた……ということに僕らが気付いたのは、もうちょっと後のこと。

「やれやれ……ま、なんにせよ……コレでFクラス、全員そろった……な」

第32話 孫家と共闘とFクラス（後書き）

Fクラス、ようやく集合……さて、これからどうすつか……
慎重に物語り考えたいです。……なるべく急いで、マジで。

第33話 敵と味方とそれぞれの思惑（前書き）

一週間とか……例外のぞいてこれまでで最長です。

遅くなってしまった……うう、最近忙しい、っていても言い訳に
しかりませんけど……。

ともかく以後も、できる限り早くUPしていきたいです。

ともかく、汜水関……の前に、ちょっとブレイク的に、バカ達の会
議（……に、なってるんでしょうかね？）が入ります。

どうぞ。

第33話 敵と味方とそれぞれの思惑

○Side 明久

「さて、と……まあ、なんだ、久しぶりだな……こんな風に集まるのも」

「そりゃそうだよ……今の今まで、別々の陣営に保護されてたんだもん、僕ら全員」

と、僕は、

雄二、ムッツリーニ、秀吉、美波、姫路さんの5人を目の前にした状態で一言。

まさか……またこの世界に来て、この6人が集結できる日が来るなんてなあ……！

ババアのミスでこんな物騒な、けど美少女満載の異世界に飛ばされてからは、一体この先どうなるんだろう、なんて毎夜毎晩考えてたわけだけど……こうして古巣の仲間が全員で集まると、理由もなく、けどすごく心強く思えるから不思議だ。

もつとも……そう思っているのは僕だけじゃないらしい。他の皆も、これまでになく、安心したような表情になっている。

そんな僕らが、なぜここに集まっているのかというと、

「まあ……ここにいる6人、3つの陣営に分かれて保護されたわけだが……共通点が一つあるな？」

「……………俺達が、『天の御使い』と呼ばれていること?。」

「正解だ、ムツツリーニ。どうやら俺達現代組は、この世界の連中に救世主的な役割を期待されているらしい」

……とまあ、今雄二が言ったとおり。

僕らは、『天の御使い』として、各陣営で祭り上げられている所……そこが共通点だ。

……でも、それでなんで集まるんだろ？

そう聞いたら、

「まったく……明久、お前は本当にバカだな」

「そういう雄二こそ、口の悪さは変わらないね。もっと他に言い方無いの？」

「まったく……バカ、お前は本当に明久だな」

「表出ろゴルァ！！」

「あんたらは……ホントに変わらないわね……」

「い、今まで別の陣営にいたとは思えませんね……」

そら見ろ！ 美波と姫路さんが呆れてる！ 恥ずかしくないのか

雄二！

「漫才はその辺でいいじゃろう。雄二、そろそろ話してくれんか？

このように急な会談を設けた理由を」

「ああ、すまん。俺としたことが、バカの相手に気にとられちゃった」

耐えろ僕……耐えろ……ここで言い返したらまた話が進まない……。

すると雄二は、こほん、と咳払いをして、まじめモードに。

「時間もねーから率直に言うか……俺ら6人、それぞれ魏、呉、蜀……まあ、各々まだ国名はないが……それぞれの勢力に在籍してるわけだろ？」

「うん、そうだね」

「つまり、これから先……勢力同士の対立で敵同士になる可能性もある……ってことだ」

「あ、それは私も考えましたけど……」

「正直、嫌よね……」

確かにまあ、可能性としては考慮すべきものがあるだろう……。

なんたって、『魏』『呉』『蜀』っていえば……三国志で天下統一をめぐってバトる三大陣営だもんなあ……モロに分割されちゃってる。

でも……正直、気が進まないどころじゃないよ、それ。

雄二は別にいいけど、下手したら……美波や秀吉のいる陣営と戦うことになるなんて……

「明久、今何か邪なことを考えなかったか？」

「？ 普通のことしか考えてないけど……？」

「気になる言い回しだが……まあ、いいだろう」

？ 何言ってるんだこいつは？ 相変わらずわけがわからないなあ。

「ま、コイツの思考を理解するのは常人の脳細胞には無理だからな……ともかく、だ。近い将来……下手すれば、この『連合軍』が解散した後にも、そういった展開が起こらないとも限らない。そうなるのは……さすがに困るだろ？」

「確かに……そうよね……」

「だから……ここは1つ、俺達でどうにかして、この問題の調整役を担う必要性があると思うんだが……どうだ？」

「それって……」

つまり、僕らが協力して、曹操陣営、孫策陣営、劉備陣営の仲をとりもつてこと？

「まあ、もつとも理想的なのはそれだが……あんまりガチでも厳しいだろうからな……とりあえず、国同士のいさかいが起らない程度に……もしくは、大事にならないように、俺達が水面下で動いて……って感じでいいんだ」

「何気に、すごく難しそうですけど……」

「……でも、そうしないと困ることになる」

たしかになあ……そうしないと、大変なことになりそうだし……冗談抜きに。

桃香は、別に積極的に相手の国をどうこうしようなんて考えるよ
うな人じゃないけど……よそは……特に曹操なんかは、すごい
野心むき出しな感じだったしな……。

すると雄二が、心でも読んだのかってタイミングで、

「……それとな、参考までになんだが、うちの華琳……曹操は、劉
備も孫策も、それに袁紹やら袁術やらその他全部、いずれは潰して
取り込む気まんまんだったぞ。今から息巻いてて、1年先までプラ
ンたててやがった」

「「「うわぁ……」」」

最悪過ぎる……そういう展開。

曹操さん……わかり安すぎるよ……嫌な意味で。

しかしそうなると……遅かれ早かれ、国同士の戦いになる……ってことだ……。

うう、三国志なんだから当然だけど、僕ら『Fクラス』のメンバーがばらけてるこの状況下だと、とてつもなく嫌な展開……。

「まあ、『俺達』が敵対したくない、っていう点だけ考えれば……俺達がどこか1箇所の陣営に集まるだけでいいんだが……そういうのは嫌だろ、お前ら？」

「そりゃまあ……もちろん」

「そうですね……桃香ちゃんたちと離れるのは、ちょっと……」
「……色々と、世話になってる」

「そうね……ウチも、雪蓮さん達には……すぐよくしてもらったし……。まあ、『天の御使い』の名前が目当て、っていう部分も、ちょっとはあったけど……」

「それも当然じゃろう。……ワシも同じじゃ、長い付き合いではないが、雪蓮や冥琳を裏切りたくはない」

「だろうな……俺も同じだ。華琳には、色々と世話になってる」

これが事情を一層ややこしくしてるとはわかっていても……困る……。

僕らと桃香は言うまでもなく……みんな、それぞれの陣営にはお世話になって……愛着も、立場もあるもんなあ……。

聞いた話じゃ、秀吉も美波も、見知らぬ土地に2人だけでいたところを助けてもらって……しかもその後、保護までしてもらったわけだし。

その当時には、周瑜さんに、天の御使いの風評と……もう1つ何か、別の目的があった……って聞いたんだけど、それは詳しくはわ

からなかった。

一方で雄二も、大体同じ感じで世話になって……しかも、文官として働いてた時期もあったっぽいから、この世界についての知識や経験を積むのに役立った感じもある。

無論僕も、桃香達にはすごく世話になってるし……というか、思いつき『ご主人様』なんて呼ばれてるんだから、今更別れるわけにもいかない。

そうなる……選択肢は1つ。

僕らで協力して、この先の3勢力の関係を……できる限り穏便（？）なものにとどめていく……とまあ、そんな感じ？

「まあ……それがいいんじゃないかな？」

「そう、ですね……」

僕や姫路さんに続き……その場にいた皆がうなづく。

まあ……当然だろう。友達同士……というか、クラスメート同士で戦うのとか、嫌過ぎる。

だったら、やれることをやろう……ってね。

「さて……そんなじゃ、これで決まりだな……これから先、色々あると思うが……何とかするぞ、お前ら！」

「「「応っ！」」」

この世界風に掛け声上げて挨拶した後、僕らは解散し……それぞれの陣地に戻ることにした。

……ホントは、もつといろいろバカ話したいところだけど……あくまでも他の勢力同士である以上、そんなに長いこと一緒にはいられないから。

孫策さん達と朱里たちの会談も終わる頃だろうし……雄二も、単独で出てきたみたいだから、あんまり長く陣営を空けるのはアウトだろう。

次の話し合いは、また次の機会……ってことになりそうだ。

……まあ、それに、

そのための秘密兵器(?)を、さっき話して、これからムツツリーニ用意してもらったことになったしね……。

☆

○Side 美波

ウチと木下が陣営に戻ると、

「あ、おかえり冥琳! どうだった?」

「……やあ、会談を私に任せて一人さっさと帰ってしまった我が主」

「あ、あはは……いつもながら棘があるわね」

「はっはっは! まあよいではないか策殿! 綺麗な女には棘がある、ともよく言うわけじゃなしな!」

「祭殿……用法が違う気がするのじゃが?」

「というか冥琳様、ここのところむしろ棘が主成分ですよー!」

……なんか、この陣営はこの陣営で特殊よね……アキの所ほどじゃないけど……。

トップの雪蓮さんは自由奔放だし、その片腕である軍師の冥琳さんは、呆れつつもしっかりフォローして……何気に楽しそうにしてる。

蓮華さんは苦勞人、思春さんはクール、祭さんは豪快、穩さんはのほほん……とまあ、バリエーションに富んでるというか……なんというか……。

……おまけに、その皆さんのほとんどが、体のいらんパーツが異常なまでに発達して……っっ！！ 私も木下も、肩身が狭いっただら！！

「……なぜワシまでも巻き込んで、そのように言われるのじやろうか……？」

「いいのよ木下、そんなに遠慮しなくても。……あなたの苦しみは、ウチもわかるから」

「いや、苦しみ以前に、性別に重点をおくべき問題なのじゃが」

木下の力の抜けた返事。くっ……木下にまで、こんな苦しみを……っ！！

「それより冥琳、話し合いは上手くいったの？」

「無論だ。劉備軍ともいい協定を結ぶことができた……この戦いで
の共闘における戦果も含め、孫呉再興の、大きな前進となるだろう」

と、冥琳さん。あ、これ周瑜さんの真名ね。

どうやら、アキの所の軍師さん……諸葛亮さんだった？ その人との話し合いが上手くいったみたい。友好な関係と、いい作戦、どちらも手に入った……ってことね。

「ではお姉さま、以降……我々は劉備軍と強力して動いていく……ということになるのですか？」

「ま、簡単に言っちゃえばそうね。その途中で、適宜……こっちの目的をちょいちょい遂行していく……って感じかしら」

「目的……っていうと……？」

ウチはそこで首をかしげる。

目的……雪蓮さん達がこの戦いで、戦いに勝つこと以外に目標に掲げてることっていったら……ああ、あれだ。

「もっしろん、袁術ちゃん達に一泡吹かせる……ってことよ」

「ああ、こういう大規模な戦は、そのためには格好の機会だからな……」

そして冥琳さん、にやり。うわあ……悪い顔……。

今話に出てきた『袁術』っていうのは……現在、雪蓮さん達が客将として使ってる、（一応）名門・袁家の女の子。葉月と同じくらいの年齢で……すっごくわがままで生意気で世間知らずらしい。

……ウチ、会ったこと無いんだけどね。そう聞いているだけ。

その袁術ちゃんなんだけど……どうも、雪蓮さん達が代々治めてきた土地を、横からかつ攫って横取りしちゃったらしい。ちょうど、雪蓮さんのお母さん……孫堅さんが亡くなった時に。

別に武力で奪ったとかじゃなくて、『孫堅さんが亡くなったからあんた代わりに治めてちょうだい』って、正式に朝廷から任命されたりしいんだけど……その影で、権力を拡大しようとして袁家のお偉方が色々画策してたらしい。多分、賄賂とかコネとか。

事実上……孫堅さんの死を利用して、孫家の土地を袁家が掻っ攫った形。

おまけに、そこにとどまるため、公に『家』とその『名』を守るため、孫家は『客将』って立場をとることになって……しかも、勢力分散のために3姉妹それぞれ別々の土地に飛ばされて、散々……ってわけ。

「まあでも、孫呉の土地を取り戻す……っていう悲願にも、着々と近づいてきてるわけだけどね……」

「ああ、先の『黄巾の乱』に乗じ、戦力の確保という名目で蓮華様達、散り散りになっていた孫家の勢力を呼び寄せ、終結することに成功した。さらに……この戦いで、袁家になるべく多くの損害を負わせることができれば……大願へと一気に加速できる」

とまあ、今聞いたとおり……散り散りになってた雪蓮さんの一族、どさくさにまぎれて再集結することに成功したってわけ。

……しかも、袁術ちゃん公認で。

……武力を抑えるために散り散りにしてたはずなのに……もしかしてバカなの？

「それに……こっちには何ていったって、『天の御使い』が2人もついているものね!」

と、雪蓮さん、そう言ってウチたちの方を向き、ぱちっ、とウイ

ンク。

「い、いや……そんな風に言われても……」

「ワシらにできることなぞないじゃろう？　せいぜいが、名前で風評を呼び込み、世論の一部を味方につけるくらいのものじゃ」

「それで十分なのだ。現に、お前達が協力し始めてから……我々の陣営は徐々にだが、勢力を増してきている。前まで以上の速度でな」

そう言われても……ウチも木下も、別に自覚無いのよね……何を
してるわけでもないし。

たまにお仕事手伝ったりはするけど……ウチら、字読めないから、
雑用くらいしかできないもんね……。

ていうか……何なのよあのわけのわかんない文書の山は！？　ひ
らがな1つも無いじゃない！　全っ然、かけらも意味わかんなかっ
た！

大体、日本語の漢字でもまだウチ怪しいのに……こっちは異世界
来てんだから言語ぐらいサービスしてよね！？

「島田よ、やり場のない苛立ちはそのあたりにしておけ、気疲れす
るだけじゃ」

「そうだけど……木下はよく平気ね？　こんな、わけのわかんない
世界に飛ばされて……自慢じゃないけど、ウチ、まだ結構動揺して
るのよ？」

まあ、今日……アキ達や瑞希達と会えて、みんな無事だった……
ってわかったから、ちよっとは大丈夫になったけど……

「ワシとて動揺しとる。じゃがまあ……演劇でこの手の話を耳にす
る機会が多いからの。いっそのこと……その手の話の主人公のよう

に、うじうじせずに前だけ見ていくようにしとるだけじゃ。不安なのはおぬしと変わらん」

「はぁ……やっぱり本読む子は違うわね……」

「ねーねーお二人さん、そろそろ話続けていい？」

と、雪蓮さんからそんな言葉。……あ、いつけない、話の途中だっけ。

ウチと木下の首肯を確認して、冥琳さん、再び口を開く。

「まあそういうわけだから……今後のためにも、ここでする限り大きい戦果を上げることが必要だ」

「そのために桃香……劉備の軍との協力関係を築き上げた……ということですね、お姉さま？」

「そうそう……って、あら？ ああ……蓮華って劉備と真名を交換してたんだっけ」

今の『桃香』ってのが劉備さんの真名らしい。……そういえば、アキも呼んでたっけ。

その時、アキのことを劉備さん達が『ご主人様』とか『お兄ちゃん』とか呼んでただけど、まあ……ウチらを同じような理由で祭り上げられてるだけ、って感じだった。

まったくもう……驚かせないでよねアキ！ ……思わず殺……抹殺するところだったじゃないの！

「島田よ、いささか理不尽……というか、言い直した意味がない気がするのじゃが？」

「え？ 何で？」

うーん……ウチ、まだ日本語が完璧じゃないのかしら？

「いや、ある意味完璧じゃ。というか、言語ではなく思考の問題……」

「はいはいそこまで」

あ、雪蓮さん、強引に打ち切った。

「ともかくそういうわけだから。まあ……劉備軍を利用するにおいて、向こうの頭目と蓮華が知り合いで仲良かった……っていうのは、大きな利点だったわね」

「え？ 利用？ 協力じゃなくて？」

「意味は一緒よ？ ただまあ、私達は私達の利益のために結んだ同盟だから、そういったほうがどちらかと言えばしつくりくるのよ」

んー……そういうもんなのかしら？ 聞こえ、若干悪いけど……

すると冥琳さん、なぜかちょっとだけ眉をひそめた。

「？ どうしたの、冥琳？」

「……ああ、雪蓮。……そう、上手く行けばいいが、と思ってな……」

「む？ 冥琳よ、何か不安要素でもあるのか？」

と、気になったらしい祭さん、冥琳さんに質問。あ、今のうちも気になった。

「何？ 冥琳、上手く劉備軍に作戦を伝えて、こっちに都合のいいように動かせることになったんじゃないの？」

「……半分、な」

「「「半分？」」」

「……ああ……」

「……どうということじゃ？」

気になったらしい祭さんがそうたずねると、冥琳さんはちよつとだけ眉をひそめ、

「こちらが誘導できたわけではない。向こうも……同じことを考えていたのだ。寸分たがわず……こちらと相手方、両方の利益を最大限引き出せる策を……」

「……！？　こちらの考えが読まれておったのか？」

「……もしくは……相手も本当に全く同じことを考えていた、かのどちらかでしょうな。……そのどちらでも、厄介なことにかわりはないですが……」

やれやれ……なんか前途多難みたいね。

まあ、『相手』っていつても、アキのところなんだけどさ。なら別に大丈夫じゃない？　あのアキが……こっち相手に何かするとは思えないけど……

「厄介はともかく、冥琳レベルの頭脳が向こうにもいる、ということになるのう……明久のところの軍師は……諸葛亮と鳳統、といったか？」

「長期の目で見れば、確かにまあ、いい印象はないかもしれんな……この先も味方でいられるとは限らんわけじゃからな……」

「むう……それはあまり考えたくはない可能性じゃな……まあ、向こうには明久たちがいるわけじゃし、その懸念については大丈夫じゃとは思うが……」

「お主らの仲間じゃったか？　信用……できるのかの？」

「まあ、短い付き合いでもないからの。仮にもあやつが指導者として君臨しとるわけじゃから、看過できん危険性があるわけでもない

はずじゃ」

「ふむ……ならそれにこしたことはないがのう……」

「まあ、そのあたりは、必要があれば後でいくらでも話すゆえ、今は眼前の問題を見据えておくのが得策じゃろう」

「「「……………」」」

「「……………む？　どうかしたか、お主ら？」」

と、ここで祭さん＆木下が、じーっ……………と見据えるウチ、蓮華さん、雪蓮さんの視線に気付いたらしい。

……………前々から思ってたんだけど……………

「……………秀吉と祭ってさ……………口調同じだから紛らわしいわよね……………」

「「「……………は？」」」

ぽかん、とする2人。

「いや……………しかし、そう言われてものう……………？」

「口調はそうかもしれないが……………そもそも声が違うわけじゃから、何も紛らわしくないじゃろう？」

「いや、声っていうか、その……………」

何だろ……………その、こう……………そこ説明しようとするの難しいっていか……………色々と異次元的な会話が必要になる気がするっていうか……………。

「おかしなことを言うのう……ワシらの声は全く違うのじゃから、聞き間違える方が難しいじゃろうに……」

「全くじゃ。わしらには何が言いたいのかさっぱりわからんのう……」

いや、『聞く』っていうか、その……

すると、これ以上は不毛だと思ったのか、冥琳さんが口を開き、

「……ともかく、劉備軍の底知れなさに関しては……まあ、置いておきましょう。今すぐに問題になることでもなさそうだし……」

「あ、そういえば……蓮華って、劉備軍の双璧の『吉井明久』と知り合いなのよね？ 真名も許してたし」

「え？ あ、はい……」

ああ……そういえば、そんなことになってたんだっけ。

蓮華さん、アキに会った時……普通に真名で呼んでたっけ。

口調こそ、いつも民の皆さんにやるときみたいな王様口調だったけど……すごく親しそう、っていうか……楽しそうっていうか……落ち着いてるっていうか……

……あれ？ まさか……

「そっか……真名まで許してる仲なら、あなたに聞いた方がいいかもね……ねえ、蓮華の目から見て、あの『吉井明久』ってどうだった？」

「どう、だった……というと……」

ちょっと悩む蓮華さんだけど……

……その最中、

ほんの少しだけ……蓮華さんの顔に、笑み……のようなものがさしたのを、ウチは……見逃さなかった。
いやむしろ、見逃せなかった。

……まさか……

「そう……ですね……。甘いというか、不器用というか……裏表がないというか……」

「うんうん」

「……まあ、まだまだわかりませんが……私としては、好意的な印象をもてたような気がします、ね……。悪い奴ではない……という程度ですが」

「へえー！ 初対面で蓮華にそこまで認められるなんてね……惚れちゃった？」

「なっ……ち、違います！ そう意味ではなく……あくまで同じ、人の上に立つものとして……」

……まさか……

アキのバカ……この世界でまで……！？

何なのコレ……すごく……すごく嫌な予感がする……っ！？

☆

○Side 雄二

さて……と……

今、俺は華琳の陣地に戻ってる最中なわけだが……

とりあえず……まあ、断られることは考えてなかったが……これで、あいつらの協力は取り付けられた……ってわけだ。

今後、それぞれの陣営でやっていくうちに……色々と奴らの手を借りる必要性も出てくるだろうしな……。

さて、まずは……この『反董卓連合軍』だな……。

なんか、胡散臭い思惑が色々見え隠れする戦争だが……まあ、なんとかして上手い具合に終結させないとな……

華琳は当然、でかい戦果を求めるだろう。

まあ、世話になってることだし……無論俺も、主に戦略面なんかで、華琳に対して有利な結果を出せるよう、ある程度尽力するつもりではいるが……まあ、あまりでかすぎても……って奴だな。

大局を見るに……史実どおりに進むとすれば、諸侯の中でも筆頭になってくる……もとい、必要があるのは……『劉備』『孫策』『曹操』の3勢力。『袁家』と『公孫賛』は……今現在でもそれにでかい勢力だし、後々フェードアウトするはずだから、まず考えなくていいだろう。……あまり史実に頼りすぎるのも危険だが……。

そして……この戦いで、生き残るであろう勢力もある程度絞り込める。

この戦いが虚偽の檄文によるもので、董卓には何の罪も無いのはおそらくその予想通りだろう。……だとしても、おそらく世論までも先導したこの動乱は止まらん。

それを知って、抑えられなかった董卓にも責任はある……と割り切って、華琳の奴は攻め込むだろうし……俺の進言なんぞ聞くはずもない。

そのへんの対処は……後で考えるとして……だ。

「……となると、俺が考えるべきは……いかにしてこの戦いの戦果を、バランスよく振り分けるか……だな……」

劉備ら3勢力に力を分配し、偏りが無いようにする……ただでさえうちの戦力が頭一つ抜け出てでかいからな……。

それと同時に、袁家の力をそぎ落とすことを考えて……まあ、これは桂花や、孫呉の連中も同じことをやる気だろう。任せておいても、それなりに大丈夫のはず……だ。

……明久たちの協力が得られたとしても、簡単なことじゃねえな……。くそっ、どうしたもんか……。

「む、遅かったな坂本？」

「ん？ 何だ春蘭か」

と、いつの間にか俺は……陣地に戻ってきていたらしい。目の前に、曹操軍最強の戦士にして最強のバカキャラ、春蘭こと夏侯惇がいた。

「おい、貴様今何か失礼なことを考えなかったか？」

説明を追加しよう。野生の勘も鋭い。

「考えてないから安心しろ。それよりお前、華琳のそばを離れてるってことは……仕事じゃないのか？」

こいつはとにかく華琳のそばに居たがる。……なんというか、こう……そういう系……清水と同じタイプの人間らしい。妹ともども公私問わず華琳にメロメロの状態で、そばを離れたがることなど……こと戦場や陣地においては、ほとんどないと言っているのだ。

そのこいつが華琳のそばにいないってことは……仕事か、あるいは……

「うるさい！ 別に私は桂花が華琳様と閨に行ってしまったから不機嫌だとか、機能も一昨日も桂花だったからちよつと寂しいとか、そういうことは何も思っていないぞ！」

「聞かれる前から何自爆してんだこのバカ」
「うるさい！」

……なるほどな、もう1つの可能性のほうだったか。

ったく、あの金髪ツイン娘……いくら仕事も軍議も終わったからって……昼間っから寢床に女連れ込むなっつの……

……自分も女だしよ……

だがまあ、そうなる……この陣営の次の軍議は、おそらく夜……もしくは明日の朝だろうな……。ふむ、予想外に時間ができたわけだ。

なら俺は、今後の展開をどう進めるかの……作戦でも練るとする

か。

いかに上手く、バランスを保って戦いを進められるか……の計画を、な……

使える手札^{カード}は……『劉備軍』『孫策軍』『曹操軍』の3種類に大別できる……。

劉備軍は、明久が劉備と並んでトップに立ってるからな……連絡さえ取れば、向こうの戦略と矛盾させない限り……軍単位で掌握して動かせる。

孫策軍は……向こうにも利益が出るような作戦で誘導すれば何とかなるだろう。あまりあからさま過ぎなければ……周瑜あたりが勝手に食らいつくはずだ。

必要なら、秀吉や島田を動かす。一応『御使い』だし……多少の発言力はあるはずだ。

さて、問題はこの軍だが……華琳に心酔してる奴らが多いこの軍では、思っているより俺が自由に動ける範囲は少ない……。慎重さが求められる。

だがまあ、俺の直轄である、凧・沙和・真桜の『三羽鳥』なら……明久との面識もあるし、他国がらみの作戦で上手くやれるかもしれないな。

……それに……

「おい坂本!?! 聞いているのか貴様!?!」

「はいはい聞いてるって。んで、何だ?」

「だからだな! 華琳様はもうこの世に並ぶものがないと言って

もいくらいに最高の方でだな……美しく、強く、そして気高く……」

……このバカも、うまく煽導すればなんとか……なるといいな……

さて、ともあれ……まずは汜水関、か。

明久たちが前曲に回されちゃったみたいだし……ちよっくら作戦でも考えてやるか。

第34話 要塞と挑発とカカロット（前書き）

第34話を更新します。

……また随分空いちゃいましたけど……

今回、あの猪さん初登場。あと、ストッパー（？）さんも。

どうぞ。

第34話 要塞と挑発とカカロット

○Side 明久

えー、ただいま私、汜水関というところでもなくでつかい要塞を前にしております。

……レポーター風に言っても何も気分転換にならないので、今のなしで。

今言ったとおり……僕らは今、ついにその『汜水関』ってところにきてます。

洛陽に行くには、まずここを通らなきゃいけないんだけど……そうは問屋がおろさないって感じなのでして……

当然のごとく、董卓軍の皆さんが居座って防衛線張ってるわけで……まずその人たちに勝って進まなきゃ、って話。

しかも、それがまた大変なんだよね……。

何せ、相手は『要塞』。つまり僕らは『城攻め』をしなくちゃいけないんだけど……ゲームとかでもそうなように、城っていうのは防御力がハンパじゃないんだよね……。

朱里&雛里の話だと、城に立てこもってる奴らに勝つには、その3倍の兵力が必要になる……とかなんとか言われるくらいに。……手ごわすぎ。

おまけに、今度の相手は、黄巾党みたいな寄せ集めの盗賊じゃない……訓練された正規の軍だ。

そして、それを率いてるのは……『華雄』っていったかな？ 敵の武将。

……武将だよ武将。愛紗とかと同じ……。強いんだろうな……。

「……というか、それ以前に……汜水関から出てきてもらえないと、こっちとしては困るよね……朱里ちゃん、雛里ちゃん、何か作戦とかある？」

「あ、はい、桃香様」

「考えてありましゅ」

と、桃香の問いに首肯で答える軍師コンビ。うん、やっぱり頼れる。

ちなみにここは、劉備軍の本陣。僕と桃香、姫路さん、軍師コンビ、そして護衛に鈴々が残ってます。ムツツリーニは伝令で出てる。僕ら、はつきり言って戦いじゃ役に立てないもんね。

「まあ、これは周瑜さんの考案の作戦で……というか、作戦と言うほど巧妙なものでもないんですが……挑発してみるらしいです」

「へ？ 挑発？」

ああ……確かに、『作戦』ってほどのものじゃないけど……それだけ？

挑発って言うからには……それで腹立たせて、汜水関（防御力MAX）から出てきてもらおう、っていうのが目的だろうけど……そんなに上手く行く？

ちよつとやそつとじゃ、防御力よりプライド優先なんかしてくれないと思うけど……

「あ、いえ、おそらく大丈夫だと思います。聞いた話では、その……華雄さんは……」

「???」

どうしたんだろ? 朱里……何か言いづらそうにして、

「ええと……り、鈴々ちゃんと同じような感じというか……感情に忠実と言うか……」

「そ、その……勢いに任せた猪武者という分類に入ると思いましたゆ……」

……あ、そうなんだ?

なるほど……それなら、挑発でも十分効果があるかもしれない。鈴々もそういうの弱いし……って、そこで納得しちゃちょっと鈴々に失礼だろうか。

「にゃ? 鈴々がどうかしたのか?」

「い、いやいやいや、なんでもないよ、何でも。ははは……鈴々は素直でいい子だね、って話」

「そう? えへへ……お兄ちゃん、ありがとなのだ」

……嘘は言っていない……はず。

無邪気に喜ぶ鈴々にちょっとだけ罪悪感を覚えつつ、向き直ると……お、愛紗が軍の先頭に出てきてる。いよいよ挑発始めるのかな?

……じゃあ、こっちも『準備』しますか……。

僕と姫路さんは、陣営に置かれた1つのテーブルの、その上に乗っている……ラジオのような機械に向き直った。

コレ、実は……ムツツリーニが持ってきていた、設置型トランシーバーなのだ。

これが親機の役割を果たし、直径数kmの広範囲で通信が可能になるらしい。

まあ……ノイズ入りまくりで、音質は悪いんだけどね……。

そして、通信用の小型のものは……僕、姫路さん、雄二、ムッツリーニ、美波、秀吉の6人……つまりは文月メンバーが持っている。コレさえあれば……少なくとも、この『連合軍』で軍同士が近くにいる間、自由に会話できるってわけだ。

連携とか情報共有が重要になるこういう場面では、すごく役に立つアイテムである。

そして、もう1つ……設置型トランシーバーの隣には、一回り小さい黒い箱が置かれている。コレは……盗聴器の受信機。同じく、ムッツリーニ提供。

……なんでこんなものを持ってるのかっていう質問は受け付けません。

そして、愛紗と星が、盗聴器の役割を果たす小型マイクを服に付けてるから、一方的にだけど……僕らは向こうの様子を知ることができる。

愛紗たちにも、『何かあったら襟元にささやいてくれたら僕らにも聞こえるから』って教えてある。原理はまあ……後で説明しよう。

……その時、この道具が主に使われる用途には触れないように注意しないと……。

でないと……ムッツリーニの社会的信用がまた一つ失われることになる。

……今一瞬『他人事?』って天の声が聞こえたんだけど、聞かな

かったことに。

と、

『報告しますご主人様、これより、孫策殿と連携の上、汜水関への挑発に入ります』

と、愛紗の報告。お、始まるみたいだ。

さて……作戦だと、まずは軽く定石から、って感じで行くらしいけど……

☆

○Side 三人称

「ん？ 何だアレは？」

こちらは汜水関内部。

敵軍の中から、1人……将と思しき女性が出てきたのを見つけた、董卓軍の……こちらでも将である銀髪の女性は、いぶかしげにそれを視界に捕えた。

その後ろから、前にいる彼女をよけて、覗き込むように……藤色の、法被のようなものを着た、同じく将である女性が、

「ん？ あー……アレやと多分、戦の前の口上……ちゃんな、ウチらはここにこもつとるわけやから……挑発か何かやろな」

一瞬でそれを見抜き、何のこともないかのように構える。
そばに控えていた兵の1人が、

「応戦しますか、張遼將軍？ それとも、舌戦に応じるなどは？」

「んなもんせんでええ。まー、ボロクソ言われるんはちよつと不快やけど……うちの本分はこの防衛や。いちいち挑発に乗ったってたらキリあらへんさかいな」

「し、しかし……」

「気持ちわかるけど、こらえや。ここで挑発に乗ったら、元も子もあらへん」

「い、いえ、そうではなく……」

「？」

「か、華雄將軍が……」

振り向いた、張遼の目に……武器を携えて完全武装、意気揚々と階下に降りていこうとする華雄の姿が映——

「何しとんねんゴルァ!？」

「あがつ!？ な、何をする張遼!？」

——と同時に見事なとび蹴りが炸裂。華雄、転倒。

「何今から出て行こうとしてんねんお前は!？ 籠城やゆーとるやろ!！」

「何を言う、あれは一騎打ちの申し出だろう？ ならば武人としてそれに応じねばらんだろうが!」

自分の話をまるで聴かれていなかったことに嘆息する暇もない、張遼、と呼ばれた藤色の髪的女性。

「ちやう！ あれ一騎打ちやのーて挑発やただの！　せやからほつとけ！」

「挑発ならそれに応じんわけにはいかんだろうが！　　というかむしろ挑発される前に打って出る！」

「それやったら思うつぼやしむしろ相手にとって都合よすぎやしどっちでも結果同じんなつてもーとるしそもそも挑発の意味あらへんようになるしっちゅうーか何のためにうちらはここに立て籠とるっちゅうー話になるやないかい！」

「何だ張遼、凄まじい肺活量だな？」

「どこに目エつけとんのじゃワレ！？」

戦が始まってもないのに息切れしている張遼を、全く状況がわかっていない華雄はきよとした顔で見返し、

その後しばらく続いた張遼の説得が効を奏し、どうにかこうにか華雄は収まった。

………が、

☆

○Side　明久

『……おほん。虎牢関の将・華雄に告ぐ！　　そのような所で甲羅に引きこもる亀のようにしていて、恥ずかしくないのか！　　武人なら正々堂々と戦場に出てこい！』

なるほど……まあ、マンガとかで見る限りの知識だけど、オーソドックスな内容だ。

まあ、さすがにこの程度じゃ出てこようとはしないだろうから、ここから徐々に加速させて挑発を続けて、猪武者の華雄さんを……

——ドンドンドンドンドン！！！！

「「「……………！？」「」」

……何だ？　今、汜水関の門の向こうから、何か音がしたような……？

☆

○Side　三人称

汜水関、内部。

「でえええい放さんか張遼！　私はあの者を叩き斬りに行かねばならんのだ！」

「アホ！　あないな安い挑発乗ってどないすんねん！　さっきもゆーたけど、ウチらの任務はこの関で連合軍を迎え撃つつちゅーことやろがい！」

「そんなもの知らん！　あのように散々に言われて腹が立たんのか貴様は！？」

「いやまだそんなに言われてへんやろ！ 何で華雄ちゃん挑発の一言目で出陣準備すんねん！？ ちったあ我慢っちゅーもん覚えんかいこの猪！」

そこには……挑発開始早々に出て行こうとする華雄をどうにか止めようと奮闘する張遼の姿があった。

……結局同じことになる予感是一直はしていたとはいえ、張遼の理不尽な疲労は加速していく。

一言目だと言うのに、後ろから羽交い締めになければならぬくらいの事態になっているこの状況だった。

☆

○Side 明久

……何だろう……？ さっきから、何か汜水関の中が騒がしいような……

いや、まさか今の愛紗のセリフだけで、その華雄さんがキレそうになったわけじゃあるまいし……あはは、どんだけ気が短いってのねえ？

鈴々でもそんなことにはならない……とは言いきれないけど、おそらく違いうだろう。

そうこう言ってる間に……おっ、おさまったか。何だったんだらう？

『世に轟くその武勇は全て偽りだったようだな！ 我が刃に恐れを
なしたか、この臆病者めが！』

そして、愛紗の挑発が続……

——ドンドンドンドンドン！！！！

……まただ。何だろ？

☆

○Side 三人称

「話せ張遼！ 私はもう我慢の限界だ！」

「そないすぐにキレるなっちゅーねんこのドアホー！！ まだ始まっ
てから30秒くらいしかたっとらんやろ！ そんなんでこの先どな
いするっちゅーんじゃ！」

「心配するな！ 外へ出てあれら全員斬り捨ててしまえば『この先』
などない！」

「それやとむしろ華雄ちんの『この先』がなくなるっちゅーねん！
何でそないな風に思考回路が動くんじゃあんたはア！？」

「ふっ……張遼、褒めても私しか出んぞ？」

「褒めとらん！ そんで出んな！ 籠城戦やゆーとるやろ！！」

☆

○Side 明久

……またおさまった。……ホント何？

なんだか……どこかで、すごく不毛な争いが繰り広げられてる気がしなくもないんだけど……。

ともかく、そんな感じで……愛紗の挑発と『ドンドンドンドンドン！！』が何度か繰り返されて……しばらく経った。

けど……うん、やっぱり……さすがにこのくらいじゃ出てこないか。

……そう思いつつ、なぜか結構ギリギリな感じが汜水関から伝わってくるのは何でだろう？

具体的には、そう……バカと苦勞人のコンビが出すような、妙なオーラが……

さて、この次は……？

「あれ、今度は……孫策さんが挑発するの？」

「はい。孫策さんの『孫家』なんですが……どうも、過去に華雄さんと因縁があるらしいんです」

「性格には、因縁があるのは……孫策さんのお母さんの、孫堅さんになんですけど……そのあたりをつつこんで挑発につなげるのではないかと」

へー、そうなんだ？

なるほど……それなら、効果的な挑発になるかもね。孫策さん、口も達者みたいだったし……もしかしたら、すぐにでも出てくるかも？

だとしたら……それに備えて、出陣準備させとかないと……

「あ、ご主人様、それならもうできてるから大丈夫ですよ？」
「あらそう」

つくづく有能だな、うちの軍師達は……

さて……なら聞いてみましょうかね、孫策さんの挑発とやらを……

『……おほん……聞けいっ！ 連合軍の怖ーいお姉さん達が怖くなっちゃって汜水関に引きこもってぶるぶる震えちゃってる弱虫華雄……！』

……いろんな意味で期待を裏切ってくれる人でした。

え……そういうノリなの？ ていうかあなたホントに蓮華のお姉さん？

最前線で……よく見るとすごくいい笑顔で、挑発（というより単なる悪口）を続けている孫策さん。……気のせいじゃない、すごく楽しそうだ。

……そして、その背後の周瑜さんが抱えてる酒瓶（3つ）は……
おそらく没収品だろう。

『お前のようなピ——でピ——なチンチクリンなど私は全く怖くはない！ 哀れだな華雄、仇の娘に、学院のしょぼいじめっ子といじめられっ子のようなのしられ方をしてもなお出て来れないか！？ まあ、危機管理能力だけは一人前だと褒めて……』

……よくもまあ、どんどん出てくるな……

☆

○Side 三人称

「うがあああああああ——っ！！ 孫さkちtなぎや斬r
rrrrイイ————ッ！！」

「ちよ、張遼將軍っ！ 華雄將軍が人の言語を失って暴れています
！！」

「だあああああもう何やねんこの状況！？ どないせえっちゅー
んじゃあああ！！！！」

連合軍の予想も希望もはるかに超えてカオスに陥っている氾水関内部である。

そんな中、一般兵では抑えきれない強さを持っている華雄を、どうにか後ろから羽交い絞めにしてとめている、健気な張遼であるが、

「落ち着け華雄ちゃん！ いやこの際落ち着かんでもええからせめて人間の領域に戻ってきい！ 兵士達が泣きそうになっとるさかい！」
「孫さQooooo！！」

「どこの言語や!? そんなで何で巻き舌!?!」

アクセントは語尾だったとかそうでないとか。

『悔しかったら出てきてみる華雄! その度胸があるならな! 強さも家柄も過去の戦績も顔も頭も胸の大きさも名前の文字数も毎月のお小遣いも何一つ私に勝てない負け犬め! ……ああ、胴回りだけは勝っているか、あーはっはっはっはっ!』

(ほんで何や、あの、大して中身無いのに別な意味で妙にムカつく挑発は!? ……っていうか、むっちゃ楽しそうやし……っちゅーか、今の華雄ちゃんにあんな聞かせたら……)

「孫さk……k……カ……カカロットオオオオオ——ッ!?!?!」
「カカロットて誰や——っ!?!」

怒りが限界を突破し、血の涙を流しそうな勢いの華雄。

髪は金色……にはなかったものの、その勢いをついに抑えきれなくなり、張遼は押しのけられ、跳ね飛ばされた。

そして華雄は、愛用の戦斧を手にとると、兵士達を引き連れ、まさに猪のごとき勢いで門へとかけていくのだった。

「カカロtt斬rしゃがバ孫Q○○連ゴ倒オけえええええ——っ!?!?!」

「「応ッッ!!」」

「な、なんで……通じ……とんねん……」

後に董卓軍の兵士は語る。

華雄の言いたいことが全て、直に頭の中に入ってきた、と。

そしてあの時の華雄は、その凄まじい怒気で周囲の空間をゆがませていた、と。

そして、息も絶え絶えな張遼は……兵士達を率いて扉の外に出て行く華雄の背中を見送りながら……

「あ、あかん……や、やっぱり……華雄……止められ、へん、かった……がくっ」

「ちょ、張遼將軍！　しっかりして下さい！」

「お、お気を確かに！」

「口で『がくっ』とか言わないで下さい！」

兵士達の手を借りて立ち上がりながら、張遼は、

「ぜえ……ぜえ……こ、こないなってしもたら、もう汜水関は、もたへん……ウチもやけど……張遼隊、軍まとめエ！　虎牢関まで下がるで！」

「「お……応ッッ!!」」

「くっ……すまん……賈馱っち、呂布ちん、陳宮、董卓ちゃん……それに……」

○Side 明久

『む、出てきたか……』

『あら、もう？ なーんだ残念、まだ言うネタいっぱい用意してきたのに』

『……左様か』

そんな会話が、愛紗の付けてる小型マイクの向こうから聞こえてきて……って、出てきたって？

孫策さんの、色々とツツコミ所ありそうな勤務態度はひとまずほっといて、汜水関の、ドデカい門のところに目をやると……あ、ホントだ。

ちょうど門が開いて、中から……灰色の鎧に身を包んだ軍団が出てくるところだった。掲げている旗は……『華』の一字。

その先頭に、どうやらその軍の大將と思しき、武将の女性が駆けていて……

「カカロットオオオオオオ————ッ！！」

……いかん、疲れてるみたいだ。この世界でありえないセリフが聞こえた。

落ち着いて……もう一度、その人を見る。

銀色の短めの髪に、鋭い目つき。美人と言っているいい整った顔だけど……その表情には、獰猛なものが見て取れる。まさに、猛将……って感じなのかも。

紺色の、露出多めの服に身を包み、手には槍のごとき長さの柄の戦斧。

……間違いない、この人が華雄だ。汜水関を守る……董卓軍の猛将。

うむ、聞いてた以上に……

「孫さQOOOO!! 覚悟オオアアアあらっしやあああ——
っ!!」

……聞いてた以上に、よくわからない人だね。
まあ、猪武者ってのは、確かみたいだけど……

えっと、あのー……今、僕の中で、華雄さんのキャラが変な風に固定されつつあるんですけど……これでいいのかな？

と、

……ザザ……ザザザ……

『あー、もしもし？ アキ、聞こえる？』

「ん？ その声……美波？」

トランシーバーの向こうから美波の声が。どうしたんだろう？
というか、無事にトランシーバー使えるみたいだ。事前にテスト
する時間が無かったから不安だったんだけど、よかったよかった。

で、何？

「えっとね、冥琳さんから伝言」

ほうほう、周瑜さんから？

その内容に、僕を含め……陣営に待機している全員が耳を傾ける。
して、その内容とは……

『えっとね。挑発成功して、上手い具合に、汜水関の將軍の人が出
てきてくれたでしょ？ えーと、その……おかゆ、さん？』

「華雄ね。うん、それで？」

『そうその人。で、これから、いよいよ戦うことになるわけだけど
……』

「……うん」

『——あとは前曲の舞台が上手くやっていなくて終わらせるから、
陣営にいるウチ達は特に出番とかないから、普通にくつろいでい
いよ、だってさ』

……あ、そう。

……まあ、実際そうなんだけどね……やることって言ったら、伝令から連絡受け取ったりとか、戦後処理の指揮とか、そういうのだし……

戦いの熱気の中、僕らが、自分達はあるまで『戦力』ではない、というところに若干疎外感を感じた所で……汜水関の戦いが始まった。

第35話 軍議とオカンと虎牢関（前書き）

新しいキャラ登場。

ぽけっつ……としてる彼女と、心酔しちゃってるミニ学ランっぽい
幼女と、何だかんだで不幸プラス苦労人な彼女です。

そして、ちょっとお知らせがあります。
詳しくはあとがきで。

第35話 軍議とオカンと虎牢関

終わった。

何がつて？ バトルが。

いや、早いとは自分でも思うけどさ……ホントに特に何も言うことなく終わったんだよ。

華雄の部隊は、籠城すべき要塞を放棄して出てくるなんて言う愚作を犯したがために、当然のごとく戦線が瓦解。連合軍の総攻撃……とは言えないまでも、圧倒的な力の前に崩れ去った。

その時に活躍したのが、前線にいた僕らの軍と、孫策さん達の軍。まあ……戦いの功績は、どっちかっていうと向こうの方が大きいけど。

あと、盾役になってくれたのが……上手く引き寄せてきたところにいた、袁紹さん&袁術ちゃんの軍。こっちは、僕らの軍とは対照的に、結構洒落にならない規模で被害が出てたみたい。

愛紗と星が上手く華雄の舞台誘導して、その2つの軍にそれぞれ被害のほとんどを押し付けてたからな……。

まあでも、いい気味……もとい……アレだよほら。あそこは元々数が多いから。僕らより圧倒的に。大丈夫だよ。

……いやいや、決してその、いい気味だとかざまあみろだとか、もっとやれなんてことは考えてませんですよ？ ……多分。

……その時、すぐく上機嫌な孫策さんにえっらい感謝された。

それより、1つ気になってたんだけど……

「ムツツリーニ、華雄ってどうしたの？」

今言った感じのことを僕に報告してくれていたムツツリーニに、
気になっていたことを問いかけてみると、

「……………逃げたらしい」

「逃げた？」

あの乱戦の中から！？ うそお！？

いや、そういえば確かに……………愛紗の胸元のトランシーバーのマイクから、

『これで勝ったと思うなよ、孫策うううう—————！！』

……………なんて、去り際に定番過ぎるセリフが聞こえてきたりしたのは覚えてるけど。

いや、勝ってるますけど。普通に。

そのセリフがあったから、敗走したかな、とは思ってたんだけど……逃げ切れちゃったんだ？ この混戦の中を。マジスカ。

「……………部下の偵察兵たちが目撃してた。袁紹軍の隊列の隙間を突いて、少数の兵士達と共に逃げ出したらしい」

「へー、よく調べたね」

「……………一応これでも、情報系統の司令官だから」

と、ムツツリーニ。

やっぱり、こいつにこういう仕事任せてよかった。現代人とは、そして一般人とは思えない手際のよさとノウハウで、重要な情報を集め、処理してくれる。

そういう分野に限って言えば、人材の動かし方や戦略の立て方なんかも雄二以上に卓越してるから、頼れる。いつでも、欲しい情報をきっちりそろえてくれるもんね。

「……………ちなみに、パンツの色は白だったらしい」

「さよかい」

いらん情報も一緒に仕入れてくるけど。

というか、部下動かして何調べてんだ。全く……

「ごころうさま。最後のやつ以外は、朱里達に報告しとくよ。あ、でも一応後で報告書作ってくれる？」

「……………了解」

そういつて撤収するムツツリーニ。

しっかし……………華雄逃げたか……

や、まあ、死んでほしかったわけじゃないけど……………こっちで捕縛

でもできてれば、手柄って意味では都合よかったのかもなあ……
それに、色々話も聞けたかもしれないし……。

まあ、それは今考えても仕方ないから……今は、これから先のことを考えるべきだろう。

と、切り替えた所で……今度は、天幕の向こうから……美波が入ってきた。

「はろはろ。アキ、お疲れ様。調子どう？」

「ん……まあ、疲れてるけど、実際に戦場に出たわけでもないし……大丈夫だよ」

「そっか、ならいいんだけどね」

「心配してくれてありがとう。それで……何か用？」

ここは、僕の陣の天幕。

そこに、一応……立場上とはいえ、他国の人間である美波が入ってくるには、許可が要るはず。

それまでとって来たんだから……気まぐれ、ってわけでもないだろうし……。

「雪蓮さ……ああ、えつと……孫策さんからね、伝言。重要だから、紙とかには書き留めないでくれってさ。同じこと、諸葛亮ちゃんたちにも話していくくれる？」

「ん？ ああ、いいよ」

メモ禁止、ってことか……まあ、重要な情報には、よくあることだ。この世界じゃ、情報保管もデジタルじゃなくアナログだから、安全とはいえないし。

しっかり覚えなくちゃな……。気合入れて……。忘れないように……

「……って言っても、あんたの頭じゃ覚えられないだろうから、ちゃんと考えてあるわよ」

行き場を失った僕の気合をどうすればいいんだろう。

……って、それより……。『考えてある』？　どゆこと？

すると美波は、おもむろに携帯電話を取り出して、

「ほら、テキストデータに起こしたから。赤外線通信」

「あ、なるほど」

いい手だ。軽く落ち込んだのを忘れられるくらいには。

確かに……。この『携帯電話』というハイテク機器の使い方を知らないこの時代の人々なら……。いや、それ以前に表示言語日本語なんだから、『メモ』しといっても、漏れる心配はゼロだろう。

そう考えつつ……。僕はケータイを構え、美波からのデータを受け取る。……。よし、完了。

これ、メールが使えればもっと便利なんだけど……。あいにく、基地局も何もないこの世界では……。メールや電話といった、電波を使つての遠距離通信が使えないんだなコレが……。

ムツツリーニのトランシーバーは、それ自体の周波数の違いを利用した通信システムだから、距離さえ近ければ地下だろうと使えるけど。

それでも……電話は使えたほうがいいなあ……。

そんな事を考えつつ……僕は、仕事を終えた美波と、軽くお菓子でもつまみながら、残りの時間を談笑して過ごした。

☆

○Side 雄二

汜水関の戦いは、連合軍の圧勝……か。俺の考えた作戦は使うまでも無かったな。

まあ、この軍に直接の被害なんかはないし……華琳の機嫌もプラマイゼロ。

しかし、それだけに……今後、虎牢関や、洛陽での決戦では……相応の戦果を求めて、華琳も、春蘭たちも、本腰入れるだろうな……まったく、厄介な……。

黄巾の乱の時は、むしろラッキーだったんだよな……何せ、あのバカのおかげで、華琳に悟られずにあの、なんとかって書物が手に入って……そのまま処分できた。

しかし、今度同じような奇跡は起きないと考えた方がいい……そうなると、より考えて今後動いていかなきゃならないことになるが……

いかんせん、俺の頭脳じゃな……

自分を無能だとは思っちゃいないが……さすがに、桂花や秋蘭、華琳なんかをだまくらかしたり、だしぬいたりするのは……足り

ないだろう。元々、この世界の人間ですらねーんだからな……。

そうなる、この世界の人間のホームグラウンドとも言える『戦場』で、俺の思い通りに事態を運ぶのは至難の業……か。

戦果の分配に情報の集約、そしてそれら全部、華琳達に悟られないようにやらなきゃならねえ……くそっ、それには手札が足りなすぎる……

明久達・文月メンバーや、そこが所属する陣営動かしても、どうにかなるかどうか……せめて、もう少し手駒が……いや、手駒とはいかないまでも、協力者がいれば……

☆

○Side 三人称

場所は……洛陽に至る最後の関門として知られる関所、『虎牢関』。

そこには……洛陽を目指す連合軍を退けんと、董卓軍の兵士達が大挙して陣営を構え、決戦の時を待っていた。

その兵士達を統率する立場にある者たちが、関の奥の部屋で……顔を連ねていた。

「そうか……華雄は、行方不明……」

「ああ……すまん、賈馱っち。止めれへんかった……」

紫色の髪に、法被を羽織っている女将軍・張遼。

数時間前にここに退却してきた彼女の報告を、緑髪の軍師・賈馱は、目をつぶってゆっくりと聞いていた。

テーブルを挟んで張遼の向かい側には、更に2人、少女が座っている。

1人は……赤い髪に、小麦路の肌。半開きの目と体中の刺青が特徴的な少女。

もう1人は……その少女に付き従うようにしている、小柄で薄い緑色の髪の少女。

虎牢関を守る、飛将軍・呂布りよふと、その補佐・陳宮ちんきゆう……それが、この2人の名前である。

「生死はわからないにしても、華雄に抜けられたのは痛いわね……」

ため息混じりに言う賈馱に、陳宮が猛然とした勢いで、

「何を言われます賈馱殿！ 呂布殿がいれば、連合軍などおそるるに足らず、なのです！ 単騎で黄巾党30000を屠った呂布殿の勇姿をお忘れか！」

「いや、別に呂布ちんのこと頼りにしてへんのとちゃうねんけど……」

「数が違いすぎるのよ。兵士の練度もね……あの時とはわけが違うわ」

黄巾党は、ほとんどが農民上がりの、生きるために略奪を行おうと、盗賊に成り下がったものたちであり……武装していても、兵士

としての実力は低かった。

しかし、今度の相手は……鍛え上げられた各国の正規の兵士。わけが違ふのだ。

そのくらい、子供でもわかることなのだが……そこで引かないのが、この陳宮だったりする。

「何を言われる！ 賊だろうと兵士だろうと、呂布殿の前ではザコ同然なのです！ 張遼が酒一樽飲み干すくらい簡単なのです！」

「何やその例えは！ いや、飲みきる自信あるけど……ってちゃうちゃう！ いくら呂布ちんが強うても、將軍含めてどえらい数おるあの連合軍には勝てへんっちゅーねん！」

「何を言われる！？ それでも將軍ですかー！」

「お前こそそれでも軍師か！ 何お前まで華雄みたいなことゆーとんねん！ これ以上ツツコミ役負担いらんっちゅーねん！」

呂布に心酔しており、何かにつけて呂布を頼りにして……それでいて彼女こそ最強、という信念(?)を持つ陳宮と真っ向から張遼が対立。

それを見て……賈馮は頭を抱えた。

「ともかく……どうにかして虎牢関で連合軍を迎え撃つ必要がある、その事実是不変わらないわ……基本は籠城の策で行くけど……それでも、勝てるかどうかは……言葉を濁さざるを得ないわね……」

「ですから、籠城などせずとも、呂布殿が……」

「ええから黙っとけイ！」

すばぁん、と、

どこから取り出したかわからないハリセンを一閃させて、快音と

共に強烈な一撃を陳宮の脳天に食らわせる。陳宮、涙目。

「な、何をするのですか！」

「お前どーせ『呂布』『突撃』『勝利』の超短文で要約できるようなことしか言わへんやろ！ それよりよっぽど建設的な方針賈馱っちが話してんねやから黙って聞いとけ！」

「何を言われます！ そんな弱気なことなぞせずとも、この陳宮めの頭脳と呂布殿の力があれば、連合軍など……」

「ほら見イ！ っていうかさりげなく自分のことも褒めとるけど、お前別に何もせえへんやろ！」

「ちゃんとしているのです！ 見くびるなのです！」

「ほな何しとんのかゆーてみい！」

「ええと……呂布殿のお財布の管理と、呂布殿の家の家族達の管理と、呂布殿の予定の管理と、呂布殿の……」

「呂布ちんの世話10割やないかい！ お前はオカンか！」

「何を失礼な、誰が母親ですか！ きちんと毎朝呂布殿を起こしてるし、着替えも手伝ってるし、荷物を用意もしているのです！」

「いやそれむしろまんまオカンやないかい！ むしろやりすぎやそれ！ 甘やかしすぎると自主性無くなるで呂布ちん！？」

「というかむしろ私は呂布殿の妹とかそのへんでありたいのです！」

「聞いてへんそないなこと！」

「いい加減にしなさい！！」

と、ここでとうとう賈馱の雷が落ち、しゅんとして黙る両名。

賈馱、息が荒いまま……無理やり脱線を治し、話の続きをする。

「まったくもう……陳宮、悪いけどその案は却下よ。こっちの方針はあくまで籠城……そこに変更は無いわ。確かに呂布とその部隊は攻撃力はあるけど、こっちの目的は……今回はあくまで『防衛』だもの。兵の数をムダに減らすわけにはいかない」

「うう……残念なのです……」

「それに……どっちの策をとったとしても、勝利できるとも限らないもの……」

「……弱気になるな、って言いたいところやけど、そこんところはどうにもな……賈馱っち、もしそうなった時は、やっぱり……？」

「……そうね、最悪の場合は……」

そこで、賈馱は一息置いて……

「……あの2人の考えた作戦に、乗るしかないわね……月の命を……守るためにも」

そう、静かに言った。

その言葉に、続けようとする者はいない。

……しばらく間を置いて、

「……それで、賈馱っち。その『2人』……どこにおんの？ 一応……ここにいてもろた方がええんとちゃう？」

「用事というか、その策の下準備があるみたい」

「さよか」

張遼、一息ついてから……何とも言えなそうな顔で続ける。

「……せやけど、あいつらがゆーとったその作戦、ホンマに上手く行くんか？」

「この陳宮も、未だに信じ難いのです……よもやそんな方法で、董卓殿を助けられるなど……」

「……そうだけど……今は、わらにもすがる思い、ってやつかしらね……。一応、そのための環境というか、条件が……『連合軍側に』

そろってる、っていう調査結果が入って、それを確認したうえで、あの2人が提案してきたわけだし……」

はあ、と、ため息をつく賈馱。

その後、何か話を進めようとするものの……満足行くだけの情報なども無い現時点では、作戦の確認くらいしかすることもなかった。

そして、ほとんど平行線をたどる会議のまま、時間だけが過ぎ……窓から差し込む日の光が、正午を回ったことを……すなわち、会議終了時刻の到来を告げる。

それを見て、

「……………ご飯」

と、たった一言だけつぶやいて、会議室を後にした。

呂布、今日の会議で最初で最後の発言である。

そしてその後に、まるで磁石に引き寄せられるかのように、陳宮が続く。

結局その日の軍議は、方針確認と、陳宮と張遼の漫才、それに今後の呂布の教育方針を軽く話し合った程度で終わったのだった。

……聞き捨てならない、何らかの『提案』を上げていたという『2人』が、加わるのを待たずして……。

その数日後、

連合軍が……虎牢関に到着する。

☆

○Side 雄二

今現在、俺達連合軍は……虎牢関が見える位置で、野営を張っている。

桂花いわく、奇襲対策とか、そういうの下準備のために……実際に攻めるのはまだ2、3日あとになりそうだ、とのことだ。

……あの袁紹^{バカ}がかんしゃく起こして、『早く攻めなさい!』とか言い出さなければ、だが。

しかし、

今、俺は……夜の闇の中で、食後の散歩がてら、ぼーっと……遠くに見える『虎牢関』を見ている

……なんつか、物々しい雰囲気というか……重厚な感じだな。

たしか別名が『難攻不落極悪非道七転八倒虎牢関』だった気がする。……長い。

しかし、そんなゴテゴテした名前付けくらいに、防御力がある関所……ってことなんだろうな。

土壁やレンガでできた、耐震強度低そうな要塞だが……ミサイルも何もねえこの時代では、その防御力は強固この上ないもんなんだろう。真正面から行けば……尋常じゃない被害になるな……

明日また軍議があるから、そこでまたとんでもねえ方針立てられねえようにだけ注意しねえと……

どうすっかな……『からのゝお?』はもう使っちゃったし……

と、その時、

「……………ん?」

虎牢関の方に……俺は、何かを見た気がした。
何だ……? 今、何か……

と、次の瞬間……今度は、はっきり見えた。

「おい……虎牢関の方で、何か光ってないか?」
「普通の照明か何かの光だろう?」

「いや、それにしても大きいような……しかも、位置から見て、あれ屋外だぞ?」

そんな声が、周りの兵士達から聞こえてくる。

が……俺はそんな話には耳を貸さず……その、そいつらが話す……『光』に、俺自身、目を向けていた。

遠くからではあるが、それを凝視していた。

……あれは……まさか………！

でも、なぜ……？

仮に……だとすれば……知ってて……

つまり、その目的は……

……なるほど。

……自分で名乗ってる『天の御使い』なんつー胡散臭い名前にさえ、あんまりよくは思ってたねえし、信じてもいいねえ俺だが……
もし仮に、この世にホントに『天』だの神だの、そういうのがいるんだとすれば……

どうやら……それは俺の味方らしいな……

兵士達がざわつく中で……俺は、こみ上げる笑いをこらえ切れなかった。

無理もないだろ……何せ、思わぬ助け舟が入りそうなんだから……

……今が夜で、俺の顔がよく見えなくてホントによかった。

もし昼だったら……確実に何かたくらんでる感じの俺の顔、誰かに見られたかも知れねえから、な……。

第35話 軍議とオカンと虎牢関（後書き）

では、お知らせ。

ちょっと卒論の関係でリアルが忙しくなりそうなので、次の更新、少し送れそうです。

いつぐらいか……ってのは正直わかりません。最近は、まともにパソコンで作業する時間すらも減ってきてるくらいなので……。

長くとも、下旬に入る前後くらいには復活できると思います。がんばります。

長い目で待っていただければと。

今後ともよろしくです。

和尚でした。

第36話 手紙と再会と水面下の策略（前書き）

よ、ようやく更新できました……どうぞ。

第36話 手紙と再会と水面下の策略

○Side 明久

連合軍が虎牢関についてから数日。

今日からいよいよ、僕ら連合軍は虎牢関の攻略にかかる。

今回、虎牢関攻めの先方は……意外なことに、袁紹が引き受けていた。

まあ……汜水関での戦いで、華雄が猪武者だったせいがあるとしても……使い捨てにするつもりだった僕らと孫策軍が大活躍しちゃったのが気に入らないんだろう。

今度は自分が、ってわけだ。

そして、それにくつついて……袁術軍も、今回は前に出るとか。孫策さんが、小躍りして喜びそうなくらいに嬉しそうだったのは……気のせいじゃあるまい。……そんなに嫌いなのか、袁術ちゃんのこと。

今度……詳しく事情とか聞いてみようかな？

そんなわけで、僕らは今回、後曲……つまり、後ろの方の防衛に回っている。

まあ、この配置は、僕らの軍の規模を考えたら、当然のものなんだけど……今回も活躍する気満々だった愛紗と鈴々は、ちよつと不満げ。まあ……仕方ないよ。

そんな2人も交えつつ、僕らは天幕に集まって……一応、軍議やってる。

「朱里、雛里、今回の戦いは……全面的にあいつらが引き受けてくれるんだよね？」

「そうですね。袁紹さんは手柄を立てて名を上げることに躍起になってますから……前衛・中衛の両方とも引き受けてくれると思います」

「袁術さんの軍もいますし……左翼・右翼の最前線以外は、戦に加わることもないのではないかと……」

「うゝ……ものたりないのだ」

「鈴々ちゃん、いいじゃないですか。皆無事でいられるんですからね？」

「そうは言っても姫路殿、戦わなければ武勲が手に入らないのも事実だ」

「でも愛紗ちゃん、この前の戦いで、汜水関一番乗りの武勲は手に入ったんだし……」

うーん……戦わなくていいんだから、最低限の防御策の思案でよさそうなものなのに……武人ってのは、好戦的……じゃないにしても、やたら戦って名を上げたがるな……。

僕や姫路さんの現代人組、それに桃香達非戦闘員は……こういう時ちよっと困る。

ちなみに星は幾分冷静なので、どっちでもよくて……ムツツリーニは、ちよっと野暮用でここにはいない。もうすぐ来るけど。

「でも、愛紗さんの言うことにも一理ありますね……この先のことを考えると、我が軍に向く風評はもうちよっと欲しいです」

「そうなの、朱里ちゃん？」

と、桃香。

「はい……この戦いの後、この大陸は間違いなく乱世に陥りますから……どうにかして、そこを乗り切るだけの、いえ、勝ち残るだけの力をつけないと……」

「そのためにも、桃香様には……この戦いで、1つでも多く武勲を立てて……大陸全体の民にとって魅力的な統治者であることを知らしめる必要があるんでしゅ……」

朱里、雛里のわかりやすい説明。

なるほどね……この先、大変そうだもんなあ……。

自分達に追い風になるようなお手柄は、1つでも多く欲しい、ってことか……。

「でも、そうになると……虎牢関の攻略にも、どうにかして私達が関与らなきゃ、ってことになるよね？　どうにかなるかな？」

「難しいですね……我らは寡兵の上、虎牢関には……神速と名高い將軍・張遼や、天下の飛將軍・呂布さんがいますから……」

そう……それが一番の問題。

三国志を知らない人でも、ともすれば知ってるんじゃないか、ってくらいに有名な將軍……飛將軍・呂布。いわずと知れた、三国無双・最強の將軍。

なんか風の噂じゃ……黄巾の乱の時に、1人で3万人の敵兵を斬り倒した、とか噂になってるくらい。

いや、ホントだとしたら……何、そのリアル無双？　ゲームでも、1000人斬りでも結構アレ大変なんですけど？

……それ知ってて袁紹は先方買って出てるんだから、なんだかな

――……。まあ、助かるっちゃあ助かるんだけど。

……まあ……そのへんは、後で考えるしかないだろうなあ……。

……と、ふと思い出したように……桃香が言った。

「あのさ、朱里ちゃん、雛里ちゃん。その……戦う前からずっと気になってた……アレ、どうなった？ わかった？」

「ふえ？ アレ……といえますと？」

「ほら、その……董卓さんが、本当に暴政とかしてるのかな……つてやつ」

そうそう……そういえば、そんな話もあった。

あれからずっと調査続けてるけど……一向に、そういう話は入ってこないんだよなあ……これはやっぱり……悪い予感の方が当たったかも……。

朱里＆雛里は言葉を濁すけど……それでもう、答えも同じだろう。状況といい、事実といい……

……董卓は暴政はしてなくて……この戦いへの招待状になった、あの袁紹の檄文は……董卓の権力に嫉妬した袁紹の虚言だ、つてこと……か。

それを理解した天幕の中は……一気に、空気が悪くなる。

無理もないよね……この戦い、僕らの参加動機は主に、『洛陽で苦しんでる人を助ける』ってことだったんだから。

そんな人いなくて、あまつさえ……僕らがやることが、董卓さんへの弱いものいじめ（いや弱くはないけど）の片棒担いでる、

ってことなんだから。

……そりゃ、空気も悪くなる。

はあ……戦いは勝ってる方だし、この戦いには僕ら参加してなくて被害も出てないのに……なんでこんな、前途多難かなあ……。

と、その時、

「軍議中失礼いたします。よろしいでしょうか！」

「？　どうかしたか？」

外からの、伝令兵らしき人の呼び声に……愛紗が返す。

「はっ！　たった今、曹操軍より、吉井明久様、土屋康太様あてに、使いの者がいらしております。お目通り願いたいとのことですが？」
「え？　僕とムツツリーニ？」

☆

「凧、ひさしぶりだね」

「はい！　隊長の方こそ、お変わりないようで何よりです！」

軍議も終わったし——あのまま続いても空気悪いだけなので——僕为天幕に戻って、曹操軍から来たっていう使者……っていうか、凧と会っていた。

「ムツツリーニはもうすぐ帰ってくるから、まあゆっくりしててよ？」

「むっつ……ああ、土屋殿ですか。心得ました」

「椅子出すから座って……あ、よかったらこれ食べない？」

とりあえず、椅子を出して凧にも座ってもらって……ムツツリーニが帰ってくるのを待つことにした。

手持ち無沙汰だから、とりあえず作り置きしておいた肉まんを出しておく。さめても美味しい世に味付けしてあるから、問題ないはずだ。

凧は喜んで、行儀よく、いただきます、と手を合わせると……肉まんの1つを手にとった。

うんうん、いつもの凧々しい、きりっと締まった表情もいいけど……やっぱ笑った顔もかわいいな。女の子はやっぱ笑顔が似合うよ。

……そこまではまともだったんだけど……

……凧が懷から、粉唐辛子のビンを出して肉まんにどさっと振りかけたあたりで、ちよつとずっこけかけた。

……この娘は……いつも携帯してるのか、それ……？

「もぐ……うん、美味しいです隊長！」

「そ……そう……？ 辛くない？」

「いえいえ。むしろこの甘めの味付けが、コクが深くて……あ、もしかして冷めても美味しいようにですか？ すごい……」

いや、君がすごい。

あんだけの唐辛子かけといて、そんな味付けの度合いまでしっかりわかるのね……っていうか、よく『甘い』を感じられたなと思う。多分、風以外じゃ、あれを食べた感想は『痛い』で固定だろうに……水もなしに平然と食べ続ける風。……もう、何て言ったらいいか……。

そして意外なことに、けっこう食べるの早い。もう1個目完食だ。

「ふう……しかし、美味しいですね……流琉様の料理にも勝るとも劣らない……隊長のところには、よほど腕のいい料理人がいるのですね」

「ん？ ああいや、違う。それ作ったの、僕」

「はあ、僕……って、はい！？ え！？ こ、これ、隊長が！？」

あり、なんでそんなに驚く？

一昔前のバラエティ番組よろしくのけぞる風の背後に『ガン！』って文字が見える。

「こ、これを隊長が……？ た、隊長って……料理の腕も達者だったのですか……！？」

「達者……かどうかはわかんないけど、まあ、人並み以上にはできる自信はあるよ」

「い、いや……これは、人並みで済ませていい腕ではないと……」

なんせ、毎日家で作ってたからね。……母親のおかしすぎる教育方針のせいだ。

「そ、そういえば……隊長は流琉様に料理の指南もされていたので

したね……なんというか、その……ちょっと落ちこみます……」
「？ 何でまた？」

どうしてそこで凧が落ち込むんだろう……？

……ああ、そういえば……前に僕がパエリア作った時にも、姫路さんと美波が似たようなリアクションとってたっけ……女の子って、そういう分野で男の子に負けるのが、ちょっとプライド的にあれなのかな？

そんなに気にすることないと思うんだけど……凧にせよ姫路さんたちにせよ、もっといいとこいっぱいあるんだから。

「うう……あ、明らかに私なんかより全然……せっかく今度、お料理作らせていただこうと思って特訓してるのに……こんなんじゃないめだ……」

「そんなに気に……っていうかそうなの？ いいじゃない、食べてみたいな、凧の料理」

と、言う……凧の顔がぱつと輝いた。……そんなに嬉しかった？
だって、前に凧が味付けした鍋食べさせてもらった時も、すごく美味しかったし。その凧が料理の修業してるっていうんだから、期待するなって方が無理でしょ？

……まあでも……

「ほ、本当ですか！？」

「うん。むしろ楽しみだよ」

「よ、よかった……じゃあ今度ぜひ、私の一番の得意料理の激辛辣^{ラーズ}子鶏^{チキン}を……」

「いや、できれば回肉鍋とかで」

「は、はあ……」

辛い以外のなら、っていう条件付で。

風辛い料理作らせると世紀末なことになるのは、最初にあった村で、鈴々の尊い犠牲によって学習済みだ。……いや、死んでないけど。

それに、辣子鶏ラーズチーって確か……大量の唐辛子と一緒に鶏肉をから揚げにした、ただでさえ辛い激辛料理のはず。……そんなのにさらに、しかも風が激辛なんてつけるほどのもんを作った日にゃ……悪いけど、人間が食べられるものができるかどうか不安だ。

「回肉鍋ですか……でしたら隊長、辛口、中辛、激辛、超激辛、神辛の5種類から選べますけど……」

「ごめん、風、選択肢が選択肢としての役割を果たしていない気がするんだ」

全部にもれなく辛味がつくという徹底さに唖然。しかも風基準だから、辛口も辛口じゃないと見て間違いあるまい。

……ていうか、『神辛』って何!?!? 聞いたことないし、聞いた感じからしてやばいんだけど!?!?

「はあ……何、と聞かれると……以前真桜にせがまれて、私が作って食べていた、『神辛』の麻婆豆腐を食べさせたんですが……」

「ですが?」

「……あんなことになるなんて……」

「あ、もういいです」

聞いてはいけない領域だ。間違いない。

そんなことよりも、真桜が今日を生きられていることに祝福を送るべきだろう。

風の辛党根性の前に僕が戦慄していると……ちょうど、ムツツリーニが帰ってきた。

☆

と、いうわけで……雑談もその辺にして、風の用事を聞くことに。

なんか、手紙預かってきたらしい。

渡されたそれを開いてみると……ん？ 日本語で、しかも全部ひらがなで書いてある。何で？

しかもコレ、内容が……！！？

「……ムツツリーニ、これって……」

「……なるほど……」

……ひらがなで書いたのは……この手紙の内容を、誰にも見られないようにするためか……これを読めるのは、現代人組だけだからな……。

そして、姫路さんあてにはしていなかったのは……姫路さん、何

だかんだで、ちょっと隠し事が苦手な節があるから。

別に、ばれないように隠しておくくらいはできる彼女だけ……
内容が内容だし……正直コレは、ちょっと僕らでも動揺するレベル
のそれだ。……相応の配慮であると言えるだろう。

……けど、

この手紙の内容が本当なら………いろんな問題が一気に解決する
ことになる……！

「……あの、隊長？　どうかしましたか？」

「んー……まあ、なんでもなし。ちょっとびっくりしただけ」

「そうですか……ちなみに、お手紙には何と？」

「えっと……まあ、他愛もないことかな」

「はあ……」

ちよつと不振がつてる節があるけど………風はそれ以上聞いてこな
かった。

そして、その後………僕が同じようにして返事をしたためて………風
に持たせると、風はそのまま帰っていった。

僕はそれを確認すると………画像データをムッツリーニのデジカメ
に残し、その手紙は燃やした。……よし、コレで証拠隠滅完了。

さて、そうなる………僕らがやるべきことは2つ。

まず、この内容を………呉にいる秀吉に回すこと。美波でもいいけ
ど………できれば、ポーカーフェイスの秀吉に絞っておいたほうがい

い気もする。

……そして、もう1つは……この内容を組み込んだ上で、至急プランを立て直すべき……ってことだ。

……ちょっと不安だけど、軍師である朱里と雛里……あとはそうだな、星あたりなら、隠し事も得意そうだし……頭も回るから、相談してもいいかもしれない。

何せ……これ、とんでもない大芝居だからな……。

でも、成功させる価値はある芝居だ……というか、僕らの目的を考えれば……なんとしても成功させないと、と言っても過言じゃない！

僕らの今後と……桃香の信念のためにも……！

「ムツツリーニ、呉の陣営に行って、秀吉にこの内容を伝えて。言葉に出すのは聞き耳が怖いから……画像データをケータイに移して、赤外線通信」

「……………了解。明久は？」

「僕は……これからのプランを練らないと。取り合えず、星かな」
「……………武運を」

たったそれだけ言葉を交わすと……僕らは動き始めた。
この……大一番の成功のために。

☆

○Side 雄二

今頃……明久のところに、俺からの手紙が届いてるだろう。
あのバカに知らせるのは若干不安ではあるが……ここぞと言うときにはきっちりやる奴でもある。まあ……信じさせてもらおう。

現在、前線では……袁紹・袁術軍（孫策軍含まない）が、虎牢関を攻め立てている最中だ。……真正面からバカ正直にだから、見た感じ……被害がシャレになってないが。

そして、相手の出方は防衛そのもの。華雄じゃないから、挑発もムダ。

……挙句の果てに、袁紹の『挑発』ってのが、9割方自家自慢だから……呆れはしても、怒って出てくるなんて事は万に一つもないだろう。

結果……戦線は延びても、前曲止まり……俺達の軍が巻き込まれることは、今日はまずない。

つまり俺達曹操軍には出番がねーもんで……うちの大將・曹操と華琳は……昼間っから桂花の奴を閨に連れ込んで、やることやってやがる。

……ったく、どこ行っても緊張も何もしねえ奴だな……。

春蘭と秋蘭、以下武將達は……一応、それぞれの部隊のところにいる。

例外は、俺の護衛のためについてる真桜だが……その真桜は、今俺がさっきそれとなく渡した『からくり夏侯惇』に夢中だ。

なんだか、どこぞのカラクリ技師が、春蘭をまねて作ったものらしい。ネジ回すと歩いて腕を振るフィギュアみたいなもんだった。

……春蘭には全然似てないが。

以前真桜はこれを買って、警邏中にサボっていじってたのを尻に見つかり……粉々に破壊されて落ち込んでいた。だから……俺がこれを見せた時は飛びついてきた。

ふっ、こんなこともあるのかと、骨董市で見つけたのを買つてよかったぜ……。

なので真桜は今、自分の天幕でカラクリいじりに夢中。自分の都合を優先して、護衛対象の俺に『ここ居って動かんでや!』とか言っ
て、俺も天幕に居させてる始末だが……たぶんこれ、打ち込みすぎ
てて……黙っていなくなっても気付かんだろうな。

だがまあ、一応『廁行ってくる』と断って抜け出し……俺は……

……廁ではなく、戦線から外れた……森の中へ入った。

さて……と。

時間的にはちょうどだが……さて、待ち合わせ相手はいるかねえ
……?

……いてももらわないと、困るけどな……何せ、この戦いの結末を
左右する密談をしなきゃいけねえんだから……。

待ち合わせの目印は……お、あったあった。

木の枝に、緑色の布が巻きつけてある。

俺が、その木の下に走っていかうとした……その時、

……ぞくり

「……………っ!？」

俺は背後から……強い殺気を感じ……後ろを振り返る。

しかし、まさにその瞬間、

——ドスッ!!

人体に鋭い何かが突き立てられる、濁った音と共に……俺の視界が……暗転した。

くそっ、や……やられた……

まさか、こんな、いきなり……

不覚だった……こうなることも、当……然……

想定……しておく、べき、だっ……た……か……

……かもしれないけどよ、

「……雄二、久しぶり」

「久しぶりに会っていきなり背後から目潰しって何だオイ翔子ォ！
！？」

おそらく指を突き立てられたのであろう、痛む目を押さえながら……俺は、声を頼りに（今の一撃で目が見えん）幼馴染のいる方向に向かって怒鳴りつけた。

……それでも、密談であることを考慮して『小声で怒鳴る』という配慮を忘れなかった俺は、褒められてもいいはずだ。

「……雄二が女の子に囲まれてる気がしたからいけない」

「日本語おかしいだろ！ 『気がした』ってお前完璧に個人的な推測じゃねーか！」

「……じゃあ、違うの？」

「いや、その……違う、ってこともないが、別に変な意味いだだだだだだだ！！ やめろ翔子バカお前！！ こんなことしに会いに来たわけじゃねーだろ！？」

「……予定変更。まず雄二を躱ける」

「ふざけんなバカ！ さっさと用事を済ませろ用事を！ 俺だってそんな時間あるわけじゃねーんだっつの！」

アイアンクローに耐えながら、ようやく回復してきた視界で、目の前にいるバカを見据える。

長い黒髪に整った顔。一応出るところ出た体に、落ち着いた雰囲気。

中身の異常性以外は美少女と言っているいい俺の幼馴染・霧島翔子は……背後に、何名かの董卓軍兵士を従えて、そこに立っていた。

第37話 内通と急転と出来レース（前書き）

ども、メリークリスマスです。

いつもより早くかけたので更新します。
第37話、どうぞ。

第37話 内通と急転と出来レース

○Side 明久

虎牢関攻略戦開始から、すでに数日が経過。

……めばしい戦果、なし。

だって、前衛張ってる袁紹と袁術が突撃しかないんだもん。

賢く要塞にこもって、矢とか投石とかで攻撃してくるあの人達に、勝てるわけない……っていうのは、あのバカ2人以外に全員の認識だろう。

それなのに、回りの進言を聞こうともしないあの2人は……ひたすら、洒落にならない被害を出しながら突撃を続けさせて、『まだ落とせませんの!』ってそればっか。

……あんた、状況見て物言えよ……。

先の見えない無謀な戦に付き合わされる、袁紹&袁術軍の兵士達がかわいそうで仕方ない。

このままだと、籠城に徹してる分の董卓軍が粘り勝ちするんじゃないか、っていう雰囲気すら漂い始めてるけど……みんな、毎朝行われる軍議の席において、誰も袁紹にまともな作戦を提示したりしようとしなない。

ムダに戦が長引いてるのに……だ。

……そこには、各諸侯の思惑があるんだろう、ってのは、ありありとわかる。

実際、多少なり（役に立たないものばかりだけど）作戦を進言してるのは、無名の、袁家に取り入ろうとか画策してそうな皆さんだし。

有名どころ……僕ら劉備軍や、曹操軍、孫策軍、あとは……涼州軍とか公孫賛軍とか……そのへんはシカト中だ。

……『涼州』ってのがどこかは、また後で説明させてもらお
か。

——そして、

実は、そのうちの実に3つもの勢力……劉備軍、曹操軍、孫策軍において……更にその中で考えが二分され、水面下である事態が進行していると言うことを……まだ、知る者はほとんどいない。

……そして、さらに数日の膠着状態が続き、

いい加減に待ってられない、って感じの雰囲気が出て……ついに
は、兵糧不足で一時、近くの村に一旦退却する軍まで出始めた頃、
ついに……袁紹&袁術軍が折れた。

☆

夜、

「ムツツリーニ、どう？」

「……………問題ない。予定通り。サインも確認した」

「そっか…………こっちも、雄二と秀吉から連絡があったよ」

月明かりすらもろくに届かない、天幕の中。

僕とムツツリーニは…………誰にも聞かれないように気を配りつつ、そんな会話をしていた。

この密談に参加しているのは、僕ら2人と、軍師である2人。そして星の、計5人。

当初の予定通り…………この手の計画に反対したがらず、そしてなおかつ、口が堅そうな皆を選んで相談することにしたわけだ。

さすがに、僕が桃香と並んでこの軍のトップとはいえ、僕の一存だけで、軍全体の作戦を大幅に変えるわけにもいかないしね…………。

そうになると、軍師である二人を味方にするってのは…………いろんな意味で必要なわけだ。

僕らでは気付けない、計画のほつれを見つけてくれる可能性もあるし。

そして、実際に現場で、この『裏の』作戦にのっとって指揮を取る将軍も必要…………ということ、星。

この5人で…………これから、虎牢関攻略の作戦を練る。

……まあ、
実際……作戦とかでも、もう、ないんだけどね……。

☆

○Side 孫策

「ふうん……劉備軍と曹操軍では、そんな風に考えてるのね……」
「しかも、発案者が曹操軍の『天の御使い』か……まさか、このようなことを……」

天幕の中で、誰にも聞こえないような音量で密談をかわす、私と冥琳、そして……秀吉。

今、彼から……この『虎牢関』攻略に際しての、とんでもない情報聞いたところだ。

「……少々信じがたくはあるが……見過ごせん情報でもあるな……」
「確かにね。もし本当なら……私達の軍にも、相応の利益があるわけだし……」

「まあ、うまくすれば……そして何より、冥琳、雪蓮、お主らの協力が不可欠じゃがの」

いつもどおりの、内面が中々読みとれない顔で言う秀吉。

興味津々、しかしあくまでも慎重に、といった感じの雰囲気で、冥琳が身を乗り出す。

「……木下、その坂本と言う男……信用できるのか？」

「うむ。仮にも級友じゃからの……やつのことはわかっておるつもりじゃ」

「そうなの……でも、お人よし過ぎるんじゃない？ その作戦だと、手柄全部劉備軍とうちに持ってかれちゃうじゃない。曹操軍に益がなさ過ぎると思うんだけど？」

そう、私と冥琳が懸念してるのはそこ。

この作戦、確かによくできてる。

前提条件がそもそも信じがたいんだけど……それを含めて、今聞いたことが全部本当なら、虎牢関が……本当に楽に、それこそ盗賊とかを相手取るよりも楽に手に入る。

何せ……全部仕組んだ上でやろう、って言ってるようなもんなんだから。

ただ、気になるのは……それを行う実行部隊が、私達孫策軍と……劉備軍の2つだ、っていうこと。

この作戦の発案者である、曹操軍の坂本っていうのは……自軍の利益を一切考えずに、手柄を全部こっちに譲り渡す形をとるようになる。

虎牢関突入1番乗りも、完全制圧も……私達でもらうことになるんだから……。

……それを考えると……疑わざるを得ないわよね……。一見、善意でこちらに手柄を渡す振りをして、その実何か別の所でたくらんでる……って。

それを踏まえて、

「……まあ、雄二を疑うのは最もじゃろう。仮にも他の軍のやつじやからな……じゃが、やつのことじゃ……まず、こちらに不利益になるようなことは考えておるまい」

「あくまで、この戦いを円滑に終わらせるための策だ？」

「うむ。そこまでして雄二がワシらにケンカを売る理由もないし……もしそうなら、いくら曹操軍でも単独では無理じゃ」

「確かにね。そうすると、この作戦を理解したうえで協力できるのは、私達を除けば、劉備軍だけ、ってことになるけど……」

「そのトップ……頭目は、劉備と明久じゃ。こやつらこそ、そういう策に加担するようなこともないぞい」

なるほど……懸念しているような事態は、そもそも坂本雄二には起こせないと？

まずまず筋道は通ってるけど……万が一、ってこともあるしね……

「どうする冥琳？」

「……魅力的な条件だが……やはり懸念もある。木下、その坂本という男に連絡を取れるか？」

「まあ、可能じゃが……何か話すのかの？」

「交渉をしたい。少々……この作戦を実行するに置いて、保険をかけておきたいからな」

「「保険？」」

そう言う冥琳の瞳には、軍師としてのギラギラとした輝きが宿っていた。

……なんだ、乗り気なのね。珍しい。

けど……冥琳がこういう反応・対応に出るのであれば……大丈夫かもね、この作戦。

ふふっ、冥琳がこの策をどう改良するのかわからないけど……
明日が楽しみだわ。

☆

○Side 雄二

明久と秀吉の陣営から、連絡が届いた。

明久の方は……そのままの作戦で問題なし。

秀吉の方は……周瑜の奴が口出して、ちょっとばかり手が加わった。

……まあ、大局には影響しねーし、問題ないな。

さて……ここまできたら、明日が勝負だ。

上手くいきますように……だな。

そんなことを頭の中で考えながら、俺は……手元にある、黒い箱を手に取った。

……とはいっても、これがただの『黒い箱』に見えるのは、この世界の人間だけ。

俺達『天の御使い』には……この箱が一体何なのか、おそらく一目でわかるだろう。

……トランシーバーという名の、ハイテク機器であると。

中継地点である基地局やアンテナを必要としない通信手段であるそれは……音質が悪く、通信可能な範囲が限定されはするものの、この時代でも使える通信手段だ。

俺はその、通話口を……とんとん、とんとん……と、一定のペースで叩く。

一見すると貧乏ゆすりにしか見えないそれであるが……これは……立派な通信手段だ。

……『モールス信号』という名の。

そして、それを送っている相手は……

☆

○Side 三人称

——とん、しゅっ、とん、とんとんとん、しゅっ……

「……連絡が来た。問題なし」

「では明日、実行なさるのですね、霧島様」

「……うん。愛子達に伝える。すぐ帰る」

「はっ！」

曹操軍の陣地から、それほど離れていない……しかし、密偵の気配を感じられるようなエリアからはしっかり離れている位置。

そこで……霧島翔子率いる、董卓軍の隠密部隊は、トランシーバ

―を介して送られる、坂本雄二からの連絡を受け取っていた。

内容は……作戦は問題なし。明日、予定通りに、というもの。

「……急がなきゃ」

「「御意!」」

小さな声で発せられた、霧島翔子の号令で……董卓軍の兵士達は……霧島と共に、虎牢関へと引き返していった。

☆

一方その頃、虎牢関では、

「……悔しいけど……あんた達の作戦にすぎるしかないわね、工藤愛子」

「あははは……なんか嫌われてるんだね、ボク」

少しだけ気まずそうな、しかし……さして気にしてもいなさそうな顔で、その少女は……目の前でジト目の視線を投げかけてくる少女を見る。

「あ、いや、そういう意味じゃなく……」

「え?」

「……ふがないだけよ……月を助けられない、ボク自身が、ね……」

と、賈馱は……いつもの強気な雰囲気か嘘のようにしゅんとして

いる。

その様子を見て……会議室で同席している、賈馱と工藤愛子以外の面々……張遼、陳宮、そして……いつも無表情な呂布すらも、表情を曇らせる。

「しゃーないやろ、賈馱っち……うちらの場合最初のうちとはいえ、ただでさえ片手間に戦やらなかあかんかったわけやしな……」

「十常侍は何かしたとはいえ、朝廷のバカ共が、董卓殿にいらんことをしないように気を配りながらでは、これが精一杯だったのです……」

悔しさのにじみ出るセリフの数々。しかし、だれも掘り下げようとはしない。

皆一様に考えるのは……これからどうするか、なのだから。

「……今でこそ何とか保ってるけど……それも、考えなしの袁紹軍・袁術軍だからこそ、なのよね……。ここで、曹操とか孫策とか、そういう連中に本腰入れられたら、いくら虎牢関があって、あんた達がいっても……正直厳しいわ」

「ウチらやったらいつでも討ち死に覚悟で戦う覚悟ぐらいあるけど……その後が問題やしな……董卓ちゃんを守る以上、生きなあかんか」

「そして、袁紹軍が先方を諦めた、という情報が入ってきた以上、もう後はないのです……袁紹が来なければ、曹操か孫策、もしくはその両方が出てくるのは自明の理……」

「ええ、だから……」

そして、賈馱は一拍置いて……

……正面の位置に座っている、工藤愛子に視線を送る。

「……あんたの策に賭けさせてもらうわ、工藤愛子……それに、霧島翔子の」

「……了解」

「うん、まかせといて!」

ちょうど今帰ってきた、霧島翔子とともに、工藤愛子はうなずいた。

「…………大丈夫なの?」

呂布、初めて口を開く。

きょんとした感じの口調ではあるものの、その質問は真剣である。

その疑問に、聞かれた工藤愛子は笑って、

「大丈夫! 吉井君、坂本君、木下君、その他色々……しっかり根回しは住んでるからね、きっちり逃げられるようになってるはずだよ」

「……まさか、連合軍を味方につけて逃げる、なんてね……」

賈馱は呆れたような、しかし感心したような言い方で、工藤愛子案に嘆息した。

——そして、朝。

事態は、動き出す。

☆

翌朝のこと。

連合軍本営にて、何もせずに報告だけ待っている袁紹のもとに……
驚愕の報告が飛び込んできた。

最初、袁紹……および、側近であり、袁紹軍2枚看板の顔良・文
醜は、苦戦している……という類の報告だろう、と思っていた。
虎牢関の防御力は、昨日まで戦ってきた自分達が思い知らされて
いる。

様子見、必要なら捨て石のつもりで送り込んだ劉備軍——軍議
の席で反対しなかった——は、自分達よりも寡兵で、さらに門地
も低い（これは袁紹の主観）のだから当然だ、と。

そもそも袁紹は、他の諸侯を動かして董卓軍を弱らせた所で、自
分達が一気に攻め落とすつもりでいたのだから。

……が、

その予想は、見事に覆されることになる。

「報告いたします！ 董卓軍は籠城を止めて突出、現在、劉備軍・

孫策軍・曹操軍と交戦中！ 劉備軍らが有利であり、董卓軍の敗走、虎牢関の制圧は時間の問題かと！」

.....

「「「.....えっ!!?」」」

☆

○Side 明久

おー、うまくいったうまくいった。

「愛紗、どんな感じ？」

「.....まだ、使い方を覚えられてないから」

と、僕はトランシーバーの向こうの愛紗に呼びかける。

ムツツリーニの改良により、相互の通信が可能になってるから……こっちから逐一指示を出すことが可能だ。まあ、簡単な通話程度だけだ。

『こちら愛紗。ご主人様、董卓軍ですが……続々と前線に出てきます！ これは一体……』

『こちら星。ふむ……これは異なこと。昨日までは籠城していたと

いうのにな』

事情を知らない愛紗と、知っている星からのそんな返答。
うん、上手くいつてるみたいだ……今回のこの作戦。

内容は簡単。

まず、袁紹&袁術が、董卓軍の籠城に飽きて、僕らに『倒してこい！』って命令が飛んでくるまで待つ。

それが……その翌日に、僕らの作戦を執行する合図だ。

その日、董卓軍は……籠城せずに出てくる。

何でか？ もうこれ以上戦うつもりがないからだ。

今日1日、しかもごく僅かな時間だけ戦って……そして、さっさと退却する。それが、董卓軍が今日、とることになっている行動。

そして……その他の軍の役割も、決まっている。

劉備軍は、適当に敵勢の攻撃をいなしつつ……敵が敗走（戦略的撤退だけど）に転じた時を狙って、一気に虎牢関に攻め入る。

で、一番乗りをゲット。

曹操軍はその後、邪魔者を蹴散らしながら上がってきて……虎牢関『完全制圧』の手柄をゲット。

コレはさすがに、規模とかそういうのがものをいうし……まあ、体面も考えて、僕らは一番乗りだけにして、曹操達に譲ることにした。

曹操軍の指令系統には別に何も相談とかしてないんだけど、あの人は手柄の気配を感じたら勝手に動くから大丈夫だろう。邪魔がないとなればなおさら。

そして孫策軍だけ……僕らと同様、最前線で敵の攻撃をいなしつつ、退却していく敵を追撃する（ふり）の役割。これだと一見、労力を払うだけに見えるけど……

☆

○Side 雪蓮

「なんじゃとおっ!? 孫策! 虎牢関が落ちそうなのかえ!?!」
「あらら……昨日まで難攻不落だったのに、いきなりですねえ」

と、袁術ちゃん&張勳。
どっちも、多少なり驚いてる驚いてる。

ま、昨日まで自分達が散々攻めてたのに攻め落とせなかった要塞を、私達（劉備・曹操・孫策連合軍）があっさり落とせそうになってるんだから、無理ないかな。

そしてそれとなく、このままじゃ手柄全部持っていかれちゃうわねー、なんていってみると、

……反応は、予想してたそのまんま。

「ななななんじゃとおっ！ そんなの嫌なのじゃあ！ 手柄は妾達のものなのじゃあ！ 孫策！ 七乃！ 何とかするのじゃあああ！」

「……だそうですよー？ 孫策さん、何とかしちゃってくれますか？」

……ただの駄々っ子ね、ホントに……。

そして張勳も張勳で、何も注意することもないし……全くもう、アンタは別に無能じゃないんだから、他に言うこととかあるでしように。

さて、まあ……こうくすることは予想済み。

むしろ……私たち孫策軍が『この作戦』に加担するのは、ここからが本番なのよね……。

「無茶言わないでよ……私達の軍がいるところからじゃ、色々邪魔が多くて虎牢関にはたどりつけないってば。それよりだったら……袁術ちゃんの本体が行けばいいじゃない」

「なぬ？ それはどういふことかえ！？」

私は、軍議の場で広げられている地図を出して……おのある場所を指差してみせる。

「ほら、ここに私達、ここに董卓軍。このへんに色々いるから、私達は前に進めないの。さすがに同じ連合軍を攻撃するわけには行かないしね」

ちなみに、『このへん』には劉備軍と、その他大勢の諸侯さん達が。

そして、

「ほら、ココ空いてるでしょ？ 袁術ちゃんの軍が動けば、ちょっと遠回りだけど……上手くすればそのまま回り込んで……」

「あらら、虎牢関になだれこめちゃいますねー」

「あ、でも遠回りだし、やめておいたほうが……」

「何じゃと、それはよいではないか！ よし七乃！ 妾たちで虎牢関を落とすのじゃ！ 出撃準備じゃあっ！」

「はいはい♪ じゃあ孫策さん、情報ありがとうございます♪」

「ホントに行くの？ もしものことがあってもアレだし、袁術ちゃんの軍がどいてくれれば私達が行ってもいいわよ？」

ここでちょっとだけ引いてみせて……と。

「そんなこと言っちゃってー、手柄をもらおうとしてもダメですよー？」

「そうじゃそうじゃ！ 虎牢関は妾たちが落とすのじゃ！」

「あなたは引き続き、董卓軍の皆さんの足止めと私達の盾役、お願いしますね？」

「はいはい、わかったわよ、がんばってね」

やる気なさげに返しておくけど……

……だめよ、まだよ……まだ笑うな、私……！

待つよ……袁術ちゃんが行くのをまってから……まだまだ……！

「よし七乃ー！ 虎牢関を落とすのじゃー！」

「はいはい。うふふっ、お嬢様相変わらず口だけは勇ましいですねー、使えもしない剣なんか持ちちゃってー！」

「う？ う、うはははは！ もっと褒めてたもー！」

……褒めてないし。

そう、バカ丸出しで叫びながら……袁術ちゃん達の軍は、虎牢関を制圧するつもりで、私が示した道筋へ向かうべく、早足で行軍していた。

………そこが……董卓軍の撤退する部隊のうち、呂布やら張遼やらがいる、最強に分類される連中が通る道だとも知らないで……。

さて……と、

「……これでよかったのよね、秀吉？」

『うむ、上出来じゃ』

『ああ、これで……我らの目的も達成だな』

肩口の、なんかよくわからない……天の世界の、小さな通信用のカラクリから、秀吉と冥琳のそんな声が届き……私は作戦の成功を知った。

よし、これで……この作戦の、私達の利益もきっちり確保できた……と。

数刻後、

董卓軍の撤退経路のど真ん中に陣取った袁術ちゃんの軍が、全体の5割近くが戦闘不能になる大損害をこうむったあげく、董卓軍に逃げられた、っていう報告が入ってきた。

あーあ、だから言ったのに。危ないかも、って。

ま、全部こっちで仕組んだんだけど。

ともかく、これでこっちの作戦は完全に成功、と。

劉備軍は『1番乗り』、曹操軍は『完全制圧』、私達は『袁術軍への大損害』っていう目的を、各々きっちり達成して、ね。

第38話 逃走と再会とナレーション（前書き）

あけましておめでとうございます！

今年もまたガキ使を見ながら年越しした和尚です。

今年も真・バカ恋をどうぞよろしくです。

新年一回目、第38話です。どうぞ。

第38話 逃走と再会とナレーション

○Side 明久

軍議の場では、そりゃもう、目視できるくらいの温度差がそこに。
いや、原因僕らなんだけどね、思いつきり。

袁紹&袁術は……機嫌が悪いのと落ち込んでるのとで半々、って感じ。

まあ、2人とも、今回の虎牢関攻略戦で大損害をこうむってる上、その虎牢関を最終日、交代したとたんに僕らがあっさり攻略しちゃったわけだから、それもまあ、無理がないといえは無理がないのかもだけでも。

大して、劉備・孫策両陣営はホクホク顔。

理由は簡単、虎牢関攻略戦でもって、それぞれ『虎牢関一番乗り』と『袁術軍に大打撃』という、最高に嬉しいギフトをゲットできたから。

最後に、曹操陣営……の曹操は、この戦いの裏に隠された『密約』を知らないのです、何かこう……胡散臭いものを見るような視線をあちこちに向けている。

どうも都合がよすぎる感じで事態が動いたことを、直感的に悟ってるのかもしれない……おーこわ。さすが霸王。

ちなみに、この軍議参加メンバーのうちで、『密約』側でただ1人何も知らされてない桃香は、単に運がよかったんだと思って素直に喜んでいます。

……事情を知ってる……というか、この状況を作った側としては、何だか申し訳ない気分になる。……ごめん、桃香。何か知らないうちに色々決めちゃって。

でもね、君隠し事苦手だから、何か話したら100%顔に出ると思うんだ。

「さて……各々方、色々と心中に思いもあろうが……軍議を始めようか」

と、ここで周瑜さんの鶴の一声。

続く形で、雄二も、

「だな。せっかく快勝できたんだし、この勢いのまま行くのが吉だろ」

「……そうね、洛陽攻略のための軍議……早々に始めましょうか」

曹操も、少しまだ懸念があるようではあったけど……周瑜さんも雄二も、言ってることは間違っていないので、普通に肯定していた。

……が、その空気にやはりと言うか乗れないバカはいた。

「ぬわぁ〜にが快勝ですの!？」 この私の軍勢がムダに損なわれたばかりか、あなた方が運よく手柄を搔っ攫っていただけではありませんの! 不愉快この上ないですわ!!」

……まあ、予想通り。

というか、運悪くじゃなくて、まさにあんたが手を引くタイミングを、敵味方どっちもが狙ってのあの出来レースだったんだけどね……それ考えると、余計タチ悪いか。

ともかく、それを知らなくても袁紹は相当ご機嫌斜めの様子。

ここでごねて何か僕らに無理難題を押し付ける……なんてことはさすがにない……と思いたいんだけど……いやちょっとこいつ相手だと自信ない気がする……。

なので、雄二&秀吉と素早くアイコンタクトの後、

「いやはや、それは真じゃな……わしらは運がよかった。……もつとも、それも全て、袁本初殿のお陰というものであろうかの」

「はい？　そ、それは……どういう意味ですか？」

よし、食いついた。

「そうであろう？　本初殿があそこまで見事な采配の戦運びでもって、董卓軍を完膚なきまでに弱らせてくれたからこそ、わしらは寡兵でもって虎牢関を落とせたのじゃから」

「そ、そうなの……ですか？　斗詩さん？」

「い、いえ、それはどうかと……」

「そもそも！」

斗詩、と呼ばれた、黒髪ボブカットの女の子——たしか『顔良』とか言ったっけな——の発言をさえぎって、容赦なく続ける秀吉。

「異名を『難攻不落極悪非道七転八倒虎牢関』とまで称されるかの関所……そこを相手取ってなお、一切弱音をこぼすことなく数日間になわたって戦い続けた袁紹軍のその勇姿！　他の諸侯の目には神々しさすら覚えられておった……」

嘘です。

皆して『何してんのこいつら』って感じの白眼視向けてました。

「しかもその軍略がまた『雄雄しく勇ましく華麗に前進』という：
：なんとも潔い！ そのような名君に率いられる袁紹軍の兵士達が
うらやましいと、皆こぼしておった」

嘘です。

無謀な突撃を強要される袁紹・袁術軍の皆さんがそりやもうかわ
いそうでした。いそいでたまりませんでした。

「そのような華麗な戦運びをもってすれば、虎牢関の愚兵どもなど
疲弊してしかるべき！ もっとも袁本初殿においては、その慈愛に
満ち溢れた精神で持って、戦に疲れた兵士達の慰労を考えて、今し
ばしの戦いにおいて勝てると知りながら、その慈愛に満ち溢れた精
神で持って、彼らのために休息をとった」

嘘です。

あんたらがどんだけバカ正直に攻めよーが、虎牢関はあと楽勝で
半月は持ちこたえられました……ってのは雄二情報。

……と、この辺で、いい加減に限界近くなってきた諸侯の皆
さんが笑いをこらえているのが目の端に目立ってきた。必死で。

がんばって皆さん！ 気持ち超わかるけど笑っちゃだめ！ 今

いいとこだから！ 自分の腹筋を信じて！

「我らにおいては、その袁紹殿が切り開いていただけた道を横取りしたようでもなんとも申し訳ない気持ちで一杯と言うほかない……しかしながら、此度の戦勝、その功は全て袁紹殿よりいづるといっても過言ではないもの。必ずや大陸各所にて、兵をねぎらい、部下達を立てた慈愛と美念の将としてその名をささやかれることになるであらう」

大嘘です！

劉備・孫策陣営で結託して、『袁紹ってさー、散々バカみたいに関所真正面から攻めてハンパない被害出した挙句に、何もできずに連合のほかの奴らに手柄もってかれちゃったらしーよ？ あはは♪』って 噂を各地に流す手はずが整ってます！ 結構前から！

しかしまあ秀吉、顔色一つ変えずによくここまですらすと嘘八百並べられるもんだな……こいつのポーカーフェイスはあいかわらず恐ろしい。

と、ここで……さすがにこらえきれなくなったらしい諸侯の何人かが『『ぶはっ！』『』』と噴いちゃってたけど、

「お……おーっほっほっほっ！ と、当然ですわそのようなこと！ 私のはかの袁家の当主なのですからね！ 美談とはいえ皆さんに感涙までしていただけるなんて、私も罪な女ですわ、おーっほっほっほっ！」

「「「……………」」」

予想の斜め上に行くこの女の脳内修正能力に（勝手に）助けられてしまった。

……今のを涙をこらえた嗚咽と勘違いするとは……どこまで自分に都合がいいことしか考えられない頭になってるんだろう、この人。いやまあ、助かったけど。

……こんな感じで、袁紹はうまく、それまでの不機嫌だった心中を、きれいさっぱり都合よく忘れてくれました。いやー……バカっ
てのは扱いやすいからいいね。

「お前がそれを言うのか」

「何か言った雄二？」

「んにゃ、何でも」

……ま、いいか。

ちなみに、袁術ちゃんの方も……部下の張勳さんが

『のう七乃？ 麗羽姉さまの評判が上がるということは、一緒に戦っていた妾の名も上がるかえ？』

『そりゃそうですよお美羽様、よっ、大して何もしてないのに偉くなっちゃうなんてすごいぞー、このこのー♪』

『う、うはははー♪ もっとほめてたもー♪』

……という説得（？）をしてくれましたとさ。

「……まあ、総大将殿の気も済んだようであるから、始めようか。
洛陽攻略の軍議を」

再び周瑜さんが切り出して、話は最終決戦……洛陽での戦いに移
ることとなった。

まあ、これで、袁紹の不満やら何やら、っていう不安要素も潰せ
たことだし……今後の展開も何とかなるでしょ。

……と、思っていたのは……甘かった。

☆

……で、やってきました洛陽。

そんでもって、まして都合よく、袁紹の命令で、使い捨て目
的での偵察として洛陽内に先行『させられる』僕ら。
けど……問題なし。

……だって、戦いとか……そんなないから。

董卓軍は、洛陽で最終決戦を行うために、おそらくは平原に軍を

強いて待ち構えているだろう……っていうのが、連合軍の見立てだった。

なので、今回は単純に、連合軍の総力をもってそいつらを倒せばいい、っていう方針で特に問題なく話をついた。

しかし、実際の状態を目の前にした連合軍は……そりゃもう焦っていた。

何せ、陣敷いてるところか……董卓軍の陰も形もないんだから。

僕らの作戦はこうだ。

実は董卓軍は、連合軍が着くころには……それぞれの將軍についてすぐに逃げている。陣敷いてるところか、その影も形もないだろう。戦いもヘツタクレもない。連合軍は、盛大に肩透かしを食らうことになるはずだ。

そもそも董卓さん——どんな人かはまだ僕も知らないけど——は戦いなんか望んでないわけだから、別に問題ないけど。

そんなわけで、僕らはただ、董卓軍がいなくなって空っぽになった洛陽を、普通に連合軍で制圧してはいおしまい。っていうことになるはず。

………だったんだけど、

バカ総大将の指図どおり、実は安全が保障されている洛陽に入ろうと、準備を始めた……その瞬間に、

トランシーバーで雄二からの連絡を受け取ったムッツリーニからの一報が入った。

☆

「だーもう！ 何でここまで来て、またこいつらが出張ってくるのさっ！」

「本当に……こやつらは最後まで我々の邪魔をしてくれますな！」

言いながら、また1人、頭に黄色い布を巻いた盗賊を星が斬り倒す。

……そう、黄巾党……の、残党である。

曹操さんが完全滅殺した……と思ってたんだけど……まあ、そりゃ残党くらいいるよね。盗賊だもんね。数、多いもんね。

その黄巾党の皆さんが、手薄になった洛陽で、色々と狼藉を働いてらっしゃったんだな、これが。

もともとのプランでは、董卓さんは……軍を解散したように見せかけて、どこかに逃げおおせるつもりでいたらしい。故郷の……西涼とか、そのへんに。

その際、まとまって行軍すると『逃げた！』ってばれて追いか

られる。

主に、手柄目当ての袁紹や……曹操とかに。前者はともかく、後者に追っかけられたらそりゃもう厄介なことこの上ないだろう。

なので、軍や将軍……呂布とか張遼とかは、一旦独断で退却して去っていった、見たいに見せて……機会があったらまた合流できたらいいね、ってな感じだった。

その際、軍は引っ張っていくから……董卓さんが商人とかに変装して逃げ出す際、目立ったりはしない。何せ、軍ないんだし。

……が、それがまずかった。

考えてみれば……まあ、その時点で、僅かな間とはいえ、洛陽を守る『軍事力』がなくなるわけで……そうになると、とっても盗賊の残党さん達に都合がいいわけで……

そんなわけで、黄巾党が暴れ始めてしまった洛陽に、先鋒に決まった僕ら劉備軍が大急ぎで乗り込んで、黄巾の皆さんを一掃し始めてる……というわけです。

ちなみに、愛紗と鈴々は今、別行動。朱里、同行。

僕と一緒にいるのは……『作戦』についてきちんとしている星と雛里である。

……一応、愛紗たちとは姫路さんが一緒に、トランシーバーで連絡は取れるけども。

「あーもう、ホントならこのままちゃっちゃと洛陽制圧してはい終わり、だったのに……計画狂っちゃった……よっ!」

「ぐほあ!？」

言いながら、僕も召喚獣で黄巾党のオッサンを一撃。

「もお……ねえ星、雛里、こいつら、少し前に集まってきた、とか聞いたけど……董卓さん達、無事に逃げられたのかな？」

「わ、わかりません……董卓さんが逃げ出す手はずだった時期と、彼らが入ってきたとされる時期がほぼ同じですから、何とも……」

「情報が少な過ぎて推測もできませんが……もし、兵達を連れて逃げる前にこやつらの襲撃が始まっていたとすれば……混乱に巻き込まれて、逃げられていない可能性もありますな……坂本殿に連絡を取れませぬか？ 新鮮な情報が常に欲しいところです」

「そうしたいんだけど……これ（トランシーバー）、あんまり距離が離れすぎると使えないんだよ、愛紗たちとは連絡取れるけど、雄二にはちよつと遠すぎてつながらない」

「むう……いたし方ありませんか………む！？」

と、星が何か見つけたらしい。

何だろう、と思ってその視線の先を見ると……

☆

○Side ???

十数名にも満たない、わずかばかりの兵士。

それだけをつれて……少女たちは、洛陽の裏路地をひたすら走っていた。

……後ろを、黄巾党の残党達に追われながら……

「はぁ……はぁ……」

「止まっちゃダメ、ゆえ月！ あいつらに追いつかれちゃうから！」
「わかつ、てる……けど……」

息を荒くする1人を、同じくらいに疲弊しつつも……必死で彼女を支えようとしているもう1人の少女の方が、背中を押して休ませない。

意地悪ではない。……走らなければ殺される、と知っているからだ……おそらく。

「ご……めん……詠、ちゃん……」

「月？」

「私が……勝手に、戻ったり……しなかったら……」

「しゃべらないで！ そんなこともういい！ いいから！ 走って月！」

涙までこぼし、嗚咽を漏らしながら……華奢な体に鞭打って走り続ける少女。

それを励まし続け、自分も苦しいだろうに、それを欠片も見せようとしないう1人。

そしてさらに、その前方で……彼女達よりは体力があるのだろうか、涼しい……とは言えないまでも、幾分余裕のある顔で走っている、3人の少女達もいる。

「2人とも！ 早く早く！」

「さっさとしないと追いつかれちゃうわよ！ あいつらもう完全に、ただの略奪集団になっちゃってるんだから！」

「そうね……今更、誰がなに言っても聞こうとしないだろうし……」

逃げるしかないわ」

姉妹だろうか、仲のよさそうな……しかし、状況が状況だけに慌
てているらしい3人は、自身も走りながら、懸命に後ろを走る2人
を励ましている。

しかし、その更に後ろでは……1人、また1人、といった具合に
……黄巾党に数で押されて、2人の少女の護衛だった兵士達が倒れ
ていく。

そして最後の護衛が倒れ……最早、逃げて先頭を走る5人だけに
なってしまった所で……とうとう、先ほど『月』と呼ばれていた少
女の体力が底を尽いたらしい。

足取りがおぼつかなくなり……虚仮の一念で保っていたその速さ
も失われ……とうとう、その場に倒れこんでしまった。

「月っ!？」

「「「月ちゃん!？」」」

「も……私は、いい、から……逃げ、て……」

「嫌だよ月、そんなこと言わないで! 立って! 走って! でな
いと殺されちゃ……っ!」

その、メガネの少女の視界に……剣を構えて、路地の向こうから
走ってくる、盗賊の一団が見えたためだろう……彼女は絶句した。
前を走っていたもう3人も同様である。

距離がぐんぐん縮まる。もう5つも数えないうちに、止まってい
る自分たちは追いつかれる。

そうなれば……命はない。そんなことは、火を見るよりも明らか

だった。

死などという、不確かな、しかし逃れられないものの気配……それが、わかりやすく視覚化されて、5人の無力な少女達に迫っている。

恐怖、絶望、失意……それら。様々な感情が入り混じり、彼女の口から悲鳴になって飛び出そうとした……

……その時、

「――あいや待たれいイツ!!」

……『私』は、さっそうとその路地に舞い降り……少女と盗賊達の間には立ちはだかった。

「――ってナレーション君だったんかい星イイイ!!?」

あと、主も。

《あらためまして、○Side 星 でした》

「む、何ですか、今のは？」
「気にしちゃだめだよ星、天の声だから」
「？　まあ……主がそう言うのであれば」

☆

○Side　明久

全くもう！　ホントにもう！　この人はもう！！

いやまあ、先に言っておくと……さっきまでナレーションという名の天の声を担当していた星は、別に兵士の皆さんがやられるのを黙って見てたわけじゃないです。

そこまで薄情じゃないし、もしそうだったら僕が怒ります。

現場まで走りながら、実況解説のごとくナレーションしてたんです。……それはそれで変？　まあ、否定しないよ、うん。

と、いうわけで……兵士達に守られながら——もういなくなっちゃったけど——盗賊に追われてた女の子達をかばうように、僕と星はその間に降り立った。

同時に、僕らが連れてきた劉備軍兵士達も。盗賊……やっぱりというか黄巾党だったその人達を包囲する形で配置。

ま、間に合ってよかった……星が、路地の向こうで誰かが追われてたのに気付かなかったら、って思うと、肝が冷えるね……。

そんなわけで、その彼女達を助けるために、僕らはこうして駆けつけて「はぁぁぁぁ——っ!」「」「うぎゃぁぁぁっ!?!」「」
こうして助けたわけだ。

そして星、相変わらず早い。一蹴だ。

「むう……強さを信頼していただけるのは嬉しいですが、もう少し私の戦闘描写を書いていただけると嬉しいのですが……」

「星、メタ発言しない」

「は?」

「いや、こっちの話」

てか、今回なんかこんな感じのやりとり多いな。

ともかく、今は……どうにか助けられた、この女の子達のことをどうにかしないと。

振り返ると、5人とも……啞然としていた。

まあ、無理もないけど……急転直下過ぎて、頭がついていってないに見える。

「助かった、の……?」

啞然としながら、へたりこんでる2人のうちの1人……メガネの娘がぼつり。

背はちょっと小さめな、緑色の髪を三つ編みにしてて、目は釣り目っぽい女の子。利発そうな顔つきで……普段は凛々しいんだろうけど、状況が状況であるために啞然としてる。ま、無理もないけど。

もう1人は……プラチナブロンドっぽい髪色の、やわらかな髪の子。こちら背は低めで……おっとりというか、はかなげな雰囲気纏ってる。すごくかわいい顔だけど……相当無理して走ったのか、まだ息切らしてる。苦しそうだ。

共通するのは……どちらも、かなり高級そうな服に身を包んでる、ってことくらいだろうか。……貴族か何かかな？

で、その先を走ってたあとの3人はというと……んん？

よく見たら……あれっ!？

「ああーっ! 明久あー!？」

「え!？ あ、ホントだっ!」

「……! まさか、そんな偶然……」

「……! やっぱり……天和、地和、人和!？」

黄巾の乱の時……僕の頭に本の角が飛来するという不幸な偶然（？）をきっかけに知り合った、旅芸人の女の子3人組が、そこに立っていた。

え、何、洛陽にいたの!？ うわー、久しぶりー!

セレブっぽい女の子2人と同様、突然の出来事に啞然としてた3姉妹だけど……その長女・天和は……相手が僕だとわかると途端に警戒を解き、嬉しそうに走ってくる。

で、そのまま……

「よかったぁー！ 明久だー！」

「っわわっ！？ ちょ、て、天和！？」

そのまま抱きついてきて……って、ちょっと！？

当たってる！ 思いっきり胸に飛び込まれたせいで、姫路さんク
ラスのそのけしからん母性の象徴が当たってるから！

あ、ちなみに前に出会ったときに、既に真名もらってます。

「ちょ、待……天和、落ち着いて……」

「よかったー……助かったぁー……」

「話聞いてよ！！」

僕がそんな嬉し恥ずかしハプニングを堪能……できません。突然
だし、状況が状況。

そんな間に、緑の髪の女の子と、ようやく粋が落ち着いてきたら
しいおっとり系の女の子は、ぽかんと口を開けて『何コレ』とでも
言いたそうにこっちを見返してきて、

星はというと……何やら意味ありげな視線で、まずセレブ少女（
？）2人を、

次に、彼女達が通ってきた通り道——黄巾たちが死屍累々——
——を、

交互に見て……『ふむ……』と、何やら考え込む。

「……黄巾はともかく、護衛と思しき兵士の、あの鎧……もしや、
この2人……」

何だろ、独り言かな？　まあ、いいけど……

ともかく……彼女達はこのまま保護、ってことでいいな……。一般人を守るのも、僕らの勤めではあるんだし。うん。

……さてと……やることはまだまだ山積みだ。

黄巾党の掃討に、情報の収集……もちろん、どうにかして董卓さん達に関しての情報も欲しいな……。どうにかならぬもんかね……。

星と一緒に、天和たちも保護対象として護衛しつつ……僕らは、愛紗たちからトランシーバーで『表通りの黄巾党はあらかた片付いた』っていう報告があったので、陣営まで戻ることにした。

……それにしても……

「しっかし……董卓さん達……無事に脱出できたのかなあ……？　（ぼそっ）」

「へくちっ」

「え？　月、どうしたの？　大丈夫？」

「う、うん、大丈夫……」

？

……風邪でもひいてたのかな？

第39話 正体と保護と謎の違和感（前書き）

一応ここで、半董卓連合軍編終了……じゃありませんけど、とりあえず一区切りです。
どうぞ。

第39話 正体と保護と謎の違和感

洛陽内部に侵入してた黄巾党の連中を一掃して、

……んで、その後……しびれ切らして乗り込んできた袁紹軍が、ドサクサ紛れに略奪とかしそうになってたのを半ギレしながら止めて、

……ってか何てことしようとしてんだあその兵隊さん達は。バカは主君だけじゃなかったのか全く……はあ……。

っていうか、んなことになったら連合軍の評判が落ちるところの話じゃなくなるので、こればかりは曹操陣営や孫策陣営まで加わって本気で止めてた。

……まあ、そんなこんなで……今、着々と洛陽の制圧作業が進んでいる最中です。

そんな中……僕は、担当区域の制圧とかその他もろもろの作業が一段落したので、僕为天幕で休んでただけど……

……夜もふけた頃……

☆

……そこは、僕の陣営の……限られた人物以外の出入りの一切を

禁止した、完全封鎖区域。星や朱里、ムッツリーニの監修のもと、鉄壁の監視体制が敷かれており……兵士達はおろか間諜の1人すら、愛紗や桃香すらも立ち入ること許されない禁断の領域。

その最深部にある天幕の外に……ふつ、と、何人分かの影が差し
た。

僕は、入り口のところの布壁にそつと近寄り……小声で、

「……『鉄人』」

「……『クロス』」

「OK、入ってくれ」

ムッツリーニを中に招き入れる僕。

……合言葉に関しての苦情は聞かないのでよろしく。

そして、ムッツリーニに続いて入ってきたのはというと……2人
の女の子。

1人は、長い黒髪に、きりりとした凛々しい目が特徴の美少女。
落ち着いた、清廉かつ知的な雰囲気で、肌は色白。

もう1人は黄緑色のベリーショートの髪に、こちらも美少女と言
つていい顔。身にまとうのは奔放……というよりも、オープン、と
いっていい雰囲気。

そして何より、彼女達において特徴としてあげるべきは……

……姫路さんや美波と同じ……文月学園の女子の制服。

「な、なんだか物騒な合言葉だね、吉井君……」

「そうかな？ ……まあ、ともかく……久しぶり、工藤さん、霧島さん」

「……久しぶり、吉井」

そう……文月学園Aクラス所属、霧島翔子さんと工藤愛子さん。

学年最高学力のクラスであり、学力その他の認識において、あらゆる意味でFクラスとは対極に位置する『Aクラス』所属でありながら、今ではすっかり僕らの遊び友達となっている彼女達であった。

まあ、霧島さんに関しては、雄二がらみで色々その他の解釈が入ってきたりするんだけど……それについてはまた今度。

そして、何でこの2人がここにきているのかというと……理由は簡単。

この2人こそが……今回、董卓陣営の中にいて……僕らに様々な情報を流し、さらに色々と作戦の手はずを整えたり何だりした……いわゆる『内通者』だからである。

そもそも、何で『あの時』、教室にいなかったはずの、Aクラスの彼女達2人が、この世界に来ているのか、というと……話は、思ったより簡単だった。

いつものように、霧島さんが、雄二と一緒に帰ろうと、Fクラスまで迎えに来て、

工藤さんは、部活も終わって暇だったのと、からかい目的でそれについてきて。

……で、Fクラスの扉を開けたちようどその瞬間……あの『バシ
イイイイッ!!』に巻き込まれたらしい。

気がついたら、異世界。

それで、その後何やかんやあって、董卓軍に拾われて……今に至る、と。

「しかし、雄二から聞いた時はびっくりしたなあ……まさか、2人が董卓軍にいたなんて」

「ははは、そうだろうね。まあでもボクは、吉井君が1つの陣営を率いるくらいに偉くなっちゃってる、ってどこにびっくりしたよ」

「……私も」

ああ、うん、それはわかる。

まさか僕も、あの『三国志』の劉備と肩を並べて戦っていく（なんて大層な活躍しちやいないけど）ことになるなんて思ってたかったし……。

けどまあ、それはこの際置いといて……

「それより工藤さん、霧島さん、確か……話があるんだよね？」

「うん。折り入って……ね。おーい、月ちゃん、詠ちゃん、入って

」？
」

と、その声にこたえて……さっきから影は見えてたけど、天幕の中に入ってこようとしなかった2人が……暖簾状の入り口から中に入ってきた。

……って、あれ？ 誰かと思えば……

「あ、昼間保護した2人じゃない」

入ってきたのは……1人はおっとり、もう1人はきりつとした雰囲気、貴人と思しき2人の民間人。昼間、黄巾党の皆さんをぶっ飛ばした時に保護した。

天和たちと一緒にいたから、友達か何か……少なくとも、怪しい人じゃないだろう、ってことで……保護したんだっけ。

そういえば……まだ名前も聞いてなかったな。

すると、僕の意味か何かを読み取ったかのように、工藤さんが、

「あ、えっとね……吉井君。この2人の名前なんだけど……」

「ん？ 何、工藤さん？」

「……驚かないで聞いてね？」

……？ 何なんだろう？ 驚かないで、って……そんなに変な名前なんだろうか？

いや、別に……そんな、人の名前に対して僕はそんな文句言ったりとかはしないよ。名前だって、その人の立派な個性だもんね。

……強いて言うなら、『坂本雄二』という名のアイツと同姓同名になってしまったような人がいたら、まあ、同情のひとつもするところだけど。

で……その2人の名前っていうのは……？

「えっとね……真名じゃない方の名前で紹介するね？　こちら……董卓ちゃんと、賈馱ちゃん」

ごめん、超びっくりしました。

☆

すぐさま会議。

朱里、雛里、星に……秀吉を孫呉陣営から、雄二を曹操陣営から呼び寄せた。

いや、しかしまさか……

「まさか……君達が『董卓』と『賈馱』だったとは……」

「……黙っていて……ごめんなさい……」

曲者完全遮断状態の安全エリア圏内にある天幕内で、未だに驚き

がおさまりません。

……だってほら、まさか……逃げてなかったどころか、董卓がこんなにかわいい女の子だとか、誰も思わないじゃん。

聞くに、計画通りに洛陽を脱出する前に、盗賊の騒乱に巻き込まれて脱出し損ねて、

そこに連合軍が来て、僕らも来て、保護されて、

……で、事情を知った霧島さん達が、ここに尋ねてきて……ムツツリーニの協力でこの陣に入れて、合流できた。大まかにはこんな感じか。

つまりまあ、董卓ちゃん……本当なら今頃西涼に向かう馬車の中とかだったけど……思わぬアクシデントで逃げ損ねちゃったわけだ。

「しかし……噂とは真逆の人物だな……こいつ連れて行って『董卓』とか言っても、信じる奴の方が少ねーんじゃないか？」

「……否定はできない（パシャパシャパシャ）」

「それはいいがムツツリーニ、一旦撮影をやめんか？」

うん、それは僕も思った。さっきからパシャパシャとフラッシュがまぶしい。

董卓ちゃんも、何してるんだろう、ってな感じで……興味半分、不安半分のまなざしでこっち見てるし。

それでもって賈馱ちゃんは、その董卓ちゃんを守るみたいに、僕らとの間に少し身を乗り出して……超睨んでる。超警戒されてる。

「……ねえ……霧島、工藤……ホントにこいつら信用できるの？」
「あ、あはは……大丈夫大丈夫。ちよっと……いや、かなり……いや、相当変わってる人達だったのは認めるけど……まあ、皆優しいから、うん」

「不安で一杯なんだけど……」

くっ……言い訳できないのがつらい……。

「とりあえずムツツリーニ、カメラしまおう。董卓ちゃん不安がってるし」

「……………仕方ない」

しぶしぶながらムツツリーニはカメラをしまい……

……さらにレフ版を回収し、天幕内の各所に設置していた簡易照明機材を片付け、董卓ちゃん達の背後の壁に貼ってあった背景合成用の青い壁紙シートを折りたたむ。

「どんだけ気合入れて撮影してたんだよお前は……」

「……………いい被写体を撮るのに妥協は許されない」

「ムツツリーニ、後でいいの見繕って5枚ほど」

「……………まいど」

「平然と商売をするでない」

「……………吉井、そろそろ話を進めたい」

と、ここで霧島さんからストップコール。ああ、危ない危ない、このまま延々と続けるとこだった。割と本気で。

さて、本題。

「ま、議題は……この2人の身柄をどうするか、ってこったろ、翔子？」

「……そういうこと。雄二は物分りが早くて助かる」

「いや、この状況、普通にそんなくらい誰でもわか……」

ちらっ ↑ 僕に視線

「……一部例外を除いて誰でもわかる」

どういう意味だコラ。

「まあまあ。坂本君が言ったとおりだよ、ボクらが言いたいのは。この2人を……どこかの陣営で保護してもらいたいんだ」

工藤さん、それにつけて説明することには、

やはりというか、洛陽での暴政とかそんな事実はなく……全部袁紹の口からでまかせだったらしい。

袁紹の檄文だ、ってことで懸念はあったんだけど……やっぱりそうだったか。

……うん、いくら世の中の流れに取り残されなかったとはいえ、コレに関してはホントに悪かったと思う。

とりあえず、そこんところは誠心誠意謝っておく。すいませんでした。

非難されるかとも思ったんだけど……どうやら董卓ちゃん自身、自分の手綱の取り方が甘かったせいであんなにうろたえているらしく、何も言わなかった。

土下座ぐらいならするつもりでいたんだけど、こりや意外。

代わりに賈馱ちゃんの方がその分も怒ってたけど。

「全くもう……こんな連合のせいで、何の罪もない月が巻き込まれて……」

「あー、うん……そのへんはホントにごめん……」

「そんなですんだら……!」

「え、詠ちゃん、いいから……それに、私の方こそ、足元をしっかり固めてなかったせいで利用されちゃったんだし……」

「ゆ、月……月はいつも優しすぎるよ……」

賈馱ちゃん、困ってる。

「それに、俺達の方も……まあ、名声目当てだった部分も否定はできないが……連合に参加しなかったら、その後『不忠だ!』って感じで逆切れされて攻め込まれかねなかったから……保身考えると参加するしかなかったんだよ」

「それはごもつともな考えです……ですから皆さん、気になさらないで下さい」

董卓ちゃん、あくまで僕らに対して何か恨み言を言う気はないらしい。

……まるで聖人君子だ……その分、僕らの罪悪感がハンパない。

「……反省は悪いけど後で……ここからが本題」

「うん……董卓ちゃんと賈馱ちゃんを助けるんだよね?」

そう、この秘密会議の議題、どうやって……この子達を助けるか。それを待っていたかのように、朱里が口を開く。

「……定石どおりに考えれば……連合軍総司令部に報告して、しかるべき処断を……っていうことになるんですが」

「「却下」」

「……です……よね……？」

予想してたんだろう、朱里、苦笑していた。

当たり前。最初から僕らの中に、彼女達を見捨てるなんて選択肢はありません。

……というか、こうなること予想してた時点で……あるんでしょ？
どうするべきか、っていう……プランくらいは。

「まあな、作ってあるよ、一応」

「そっか、じゃあ雄二、聞かせてくれる？」

さて、その作戦とは……。

☆

1時間後。

雄二の作戦を聞いた僕らは……まず手始めに、

「えええっ！？　こ……この2人が、董卓さんと賈馱さんのお！？」

「に、にわかには信じられませんね……」

「にゃー……まだ小さい女の子なのだ……」

とりあえず、桃香にバラした。

理由は簡単、この陣営で2人とも保護するから。

続けて、洛陽での暴政なんてホントはなかったこと、董卓ちゃんたちは権力争いに巻き込まれただけの、れっきとした被害者だつてことを説明。

ちなみに、余計な詮索されないために……雄二と秀吉は先に帰してある。

……しかし、僕らがこの戦いで、内通者を通じて色々と情報を得たり、盛大な出来レースをした、っていうのは……内緒にしておく。

桃香は純粹すぎるし、愛紗は生真面目だし、色々面倒そうだ。

2人の素性に関しては……尋問の中で明らかになった、ってことにしておいた。

その段階で、予想はしてたけど……桃香の顔が何か……悲しそうなものになっていく。

——で、当然、

「よし……それならみんな、私達で董卓ちゃんと賈馱ちゃんを助けてあげようよ!」

だよね、言うと思った。

「と、桃香様、ご主人様……しかし、その……この者達を助けると

いうのは……いささか危険すぎませんか？ 境遇には同情しますが……仮にも、敵の総大将ですよ？」

と、愛紗。まあ……当然の懸念だろう。

この状況下で、董卓ちゃんの立ち居地は……捉えて処刑すべき『敵の総大将』。それをかくまうってのは、バレれば、連合軍が丸ごと敵に回ると同じだ。

けど……そんなことは、ぼくと桃香が許さない。

だって、董卓ちゃん……思いっきり被害者じゃないか。その上更に酷いことするなんてのは、お天道様が許してもこの吉井明久の桜の代紋が許しません。

「あの、明久君……いつからお巡りさんになったんですか？」
「細かいこと言わないの、姫路さん。ともかく、2人は保護しよう、この陣営で」

もともと、懸念はあったんだし……もし董卓がいい人だったら、僕らで助ける、っていう方針だったはず。

だから、問題ない。あってもない。ないったらない。

……何、言ってることメチャクチャだって？ 自覚してるさ、何とでも言え。

それでも、僕と桃香の言い分は変わらないし……愛紗も、説得したらきちんと納得してくれた。『桃香様達がそこまでおっしゃるのでしたら、私に否はありません』とさ。

董卓ちゃん&賈馱ちゃんに関しても……事前に霧島さん&工藤さんが話つけてたこともあって、納得してもらえていた。

そんな感じで……董卓ちゃんは、僕らの陣営で保護することに決まりました。略しすぎで御免。

詳しいことは、おいおい話していくことにしよう。

……ただ……

それはよかったんだけど……

……何だろう……話してる最中、何かずっと、違和感みたいなのがあったんだけど……

誰かに盗聴されてるとか、そういう類じゃない。会話の端々に、『あれ、何かおかしい』って感じで引かかる部分があった。

……いや、具体的に何なのかは……わかんないんだけど……。

そんな風に、僕が脳内でなんとも取り留めのないことを考えてると……

「でも、よかったよ……董卓ちゃん、いい人なのに、かわいそうだもん」

「そうですね……桃香様の言うとおりです」

「悪いことしてないのに、酷い目にあうのはだめなのだ!」

そんな会話が交わされている。武将ガールズトーク?

「すみません……危険を冒してまで、かくまっていただけなんて……本当にいいんですか?」

「いいのいいの! 私だって、董卓ちゃんたちが酷い目にあうのはいやだもん。何にも悪いことしてないのにさ」

……ん?

あれ、また違和感が……。

「だったら、そんな酷い目にあってる董卓ちゃんを助けてあげるのは……私達の役目だよ! ね、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん!」

「そうですね……そもその桃香様の方針ですから」

「悪い奴はやつつけて、いい奴は助けるのだ!」

……まただ……何だろうコレ……?

ムツツリーニや姫路さん……は、特に何も感じてないっぽいな……。

「……劉備さんの、方針……ですか?」

「うん! 私、この世界が……強い人が弱い人を力づくで虐げるような世の中が嫌なんです。皆平和に、話し合いで解決できるような世の中を目指してるんです!」

「立派な志だと思います……劉備さん、すごいんですね」

「えへへ……照れちゃうな……そんなことないですよ。私ただ、こ

の大陸の平和を望んでる、今苦しんでる人を助けたい、ってだけですから」

……うーん……まあ、いいか……気になるけど……わかんない以上、気にしても仕方ないし……

「それに、困ってる人を助けるのは、当たり前でしょ？」

と、そんな感じで話してる桃香を、賈馱ちゃんが不満ありげな目で見ているのが目に入った。

……ははは、まあ……言わんとしてることは大体わかる。

そりゃジト目にもなるよね……何せ、困ってるも何も、こうなったのは……

……僕ら、が……

「……………あ」

瞬間、

頭が……冴えた。

同時に、さっきまで……頭の隅っこにずっと引っかかってた……

あの『違和感』の正体も、なんとなくわかった。

……そして、

……おそらく……前に雄二から聞いた、『思想が危うい』っていう……理由も。

きっかけは……桃香の、今の会話から。

違和感を感じたのは……事前に、僕が考えて、ちょっと反省してた部分を……あまりに桃香がキレイにスルーしてしまっていたから。

僕らが反省すべき点であり、賈馱ちゃんのジト目の理由であり……

そして、

桃香は気付いてない……ことはないかもだけど、注意して見てはいないだろう……という点。

……気付いてしまえばすぐわかりやすい、桃香の『危うさ』……

それは、多分……

第39話 正体と保護と謎の違和感（後書き）

何か中途半端なところで終わってすいませんが……まあ、ある種伏線
と云うことで……

まあ、恋姫ユーザーの方はお分かりかと思いますが……
ともかく、コレに関しての話はまた近いうちに書きますので……

ではこのへんで。和尚でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487t/>

バカとキセキと真・恋姫†無双

2012年1月7日22時47分発行